三戸岡道夫 …… 1
柴田富佐子 …… 22
森本俊正 …… 38
柴田保 …… 45
大和禎人 …… 58
岸田幸雄 …… 60
山口健二 …… 65
山本儀一 …… 74
金子正義 …… 102

表紙・カット 岸田幸雄

セールスマンA&B

三戸岡　道夫

〔一〕

朝のラッシュは忙しい。

背のひくい、コロコロした豆川一郎が会社に入り、タイムカードを押すと、廊下の壁に大きい貼紙があって、人目をひいていた。

人だかりなので、チビの豆川には背のびをしても貼紙の下まではよく見えない。人垣を押しわけて前へ進んだ。

『本日、人事の特別発令があります。
営業課員をA班とB班に分けますので、全員、出発前に人事部人事課で発令を受けてください。
東西自動車販売株式会社
人事部長　』

『全員発令を受けて下さい、か。予防注射の掲示のようだな』

と豆川は思った。

営業課員とはいわゆる車のセールスマンである。セールスに出て行く前に人事部に寄って、A班に入るのか、B班に入るのか、その指示を受けろということらしい。

「何だろう、いったい」

「A班、B班って、なんだい」

貼紙を前にして人々は心配げだった。

「とにかく行ってみれば、わかるさ」

そのままの足で人事部を訪れる人もあって、人事部の前の廊下にはたちまちセールスマンの行列ができた。豆川もあわててその後に並んだ。

簡単にいえば、A班とは車の売上成績のよい者、反対にB班は悪い者で、いわばセールスマンを成績のよい者と、悪い者に分けて管理しようという会社の意図らしい。

やがて人事部の部屋から出てくる者を見ると、意気揚揚としている者もあるし、そうかと思うとがっくりして

出てくる者もある。胸を張った者はA班であることまちがいなく、肩を落した者はB班である。
そんな光景を行列の中で眺めながら、豆川は始めからあきらめていた。
「おれがもしもA班になったら、天と地がひっくり返るさ」
豆川の成績は最悪というほどではないが、まあ後から数えた方が早い。立風営業本部長からダメ・セールスマンのレッテルを貼られている一人である。覚悟はできている。だから予想通りB班の辞令を受けても、さほどショックは感じなかった。しかし少しは心淋しい。
間もなくA班の男たちは声高に話しあい、元気よく販売活動に飛び出していったが、B班と烙印を押されたセールスマンはさすがに気勢が上らない。外出の仕度にのろのろと手間どり、そうかと思うと部屋の隅に集って
「A班、B班って分けりゃあ、車は売れるのかね」
「車はハートで売るんだよ。本部長のやつ、ちっともわかっちゃいねえ」
愚痴をこぼしあっていたが、そこへ大変な噂が流れてきた。
というのは、A班、B班は、車の成績もさることながら、実は、セールスマン達が下半身にぶら下げている男性自身の大小によってそれを決めたのだ、というニュースであった。
「そんな馬鹿な……！」
男たちは驚くと同時に、あきれかえり、そして怒った。
「車の成績と、息子の大小と、そんなもの、まったく関係ねえじゃないか」
と怒り出す者もいれば
「息子のサイズをいったい、どうやって測ったんだよう、ふざけるな」
「大きい、小さいって、生れつきのもの…、そんなもので分類するなんて人権蹂躙だ」
だがなかでも最もショックを受けたのは、当の豆川一郎であった。
「やっぱり、そうか…。だが、いったい、おれの大事なものを誰が見たんだ！」
それが問題であった。

〔二〕

だが、シンボルの大小によって、A班、B班が決ったというのは、まんざら根も葉もない噂ではなかった。それを発案したのは、今回新しく営業本部長に昇格した立風兵衛だった。
立風本部長は昔から一つの哲学を持っていた。その哲学を、東西自動車販売株式会社の本社営業部を統括する、営業本部長というポストに昇進した、その最初の晴れの施策に打ち出したのであった。

「息子の小さいやつに、ろくなやつは居らん」
それが立風の持論、すなわち哲学であった。そして、それは満更根拠がないものではなかった。
「統計的に立証してみて、そうなんだ。たとえば豆川一郎ってのがいるだろう、あのチビで、コロコロしたやつさ。あれが小さいんだ。身体も子供みたいだが、あっちも子供で、ほんのポチッとしかない。だから成績の方も駄目だろう。おれがゴルフ場の風呂場で見たのだから、まちがいない」
「なるほど」
「それに引きかえ、息子の大きいやつは、度胸がある、肝っ玉が太い、馬力がある。そのいい証拠が君たちだ」
立風本部長は眼の前に坐った十人のセールスマンを指さした。今夜の立風は、A班のセールスマンの中から、ベスト10を選んで、小料理屋の二階で酒をふるまっているのであった。十人のたくましい男たちは、自尊心をくすぐられて目尻を下げた。
「すると本部長はわれわれの息子を、全部、ゴルフ場の風呂場で見たというわけですか」
かなり酔いのまわった一人が聞いた。
「いや、べつに全部を観察したわけではないが……」
「じゃ、どうして…」
「それには秘訣がある」
「秘訣」
「そうだ」
「教えてください」
「そんなこと、たやすいことだ。鼻だ、鼻だよ、鼻を見ればわかるんじゃ。鼻の立派なやつは、あっちも立派なんじゃ。これはまちがいない」
一同はいっせいに顔を見合わせて、お互いの鼻を見た。そう言われてみれば、たしかにそこに集っているベスト10の男たちの鼻は、獅子鼻や、大あぐら、あるいは盛りあがった団子鼻、それがさらに鰓を張っていたりして、いずれ劣らぬ大きな鼻ばかりだった。立風本部長の言うことは、あるいは本当かもしれない。
そう言えば立風本部長の鼻もデカかった。鉤鼻が盛りあがり、鷲が両翼を張ったように左右にせり上っている。そして同時に立風がゴルフ場の風呂場で、前をおおいもせず、のしのしと、下半身のシンボルを誇示して歩いているのも、これまた社内で有名なことだった。
だが、しかし、その鼻も、大きいばかりで品がないのはちょっと残念だった。それははからずも、立風本部長の品格を象徴しているようにもみえる。だが考えてみれば品格のないのは当然で、車の販売に品格は不要である。車は品格で売るのではない。
「自分がデッカいので、誰でもただデッカければいいと思っている」
というのが立風本部長に対する社内の風当りであった。

〔三〕

こんなことがあってからというもの、豆川一郎は、シンボルだけでなく、鼻の大きさの方も気にかかって仕方がなかった。

豆川は久しぶりに鏡に顔を近づけて、しげしげと見た。高校生の頃、ニキビを気にして鏡とにらめっこをして以来久しぶりのことである。なるほど、今まで気がつかなかったが、我ながらあまり上等の鼻ではない。自分の鼻なのに、うかつな話だ。

だから会社に出勤して、女子社員などに顔をまじまじと見られると

「豆川さん、小さいのね」

そう言われているようで、ただでさえ小さいものが、ますますズボンの中でちぢこまっていくように思えてくる。

そんなことから最近の豆川は、A班の人間と、B班の人間とを、できるだけ注意して観察することにしている。B班にくらべてA班の方に、大きな鼻が多いことはたしかである。とくに今期のセールス・ナンバー・ワンを誇っている町村圭一の鼻なんて、そのまま彫刻にしたいくらいだった。

だが気をつけてみればA班にだってあまり上等でない鼻もあるし、逆にB班の方にだって立派な鼻はある。必ずしも全部が全部一致するというわけでもなさそうだ。

そのいい例が豆川の親友の羽淵だった。

羽淵は社内でも有名な巨根なのに、どうしたわけかB班だった。そのすばらしさを豆川はまだ見たことはないのだが、羽淵としばらく独身寮でいっしょに生活したことのある人間の言うことだったから、まちがいはなかった。寮の風呂は五、六人が一度に入れる共同風呂なのだが、その風呂に入るとき、羽淵はわざと手拭も当てずに湯ぶねに腰をかけ、その巨大さを湯につかっている連中の鼻先に見せびらかすようにしたというのであった。背はあまり大きい方ではないが、筋肉の引きしまった浅黒い肌の身体つきには、さもありなんと思わせるところがある。

だが、その羽淵の鼻をよく観察すると、実はあまり立派ではないのである。この一事からしても、鼻とシンボルの相関関係は、そう完全なものではないことがわかる。しかし豆川が理解に苦しむのは、その羽淵がA班に入っていないことだった。シンボルの基準からいえば合格以上の合格だ。それに車の売り上げだってランクは上の方だし、現に羽淵よりも成績が下で、A班に入っている者もある。考えられるのは、羽淵はシンボルを観察されずに、鼻だけで分類されてしまったのではないか。もしそうならば、この誤りは至急訂正されなくてはならない。

「羽淵、どうしてお前、A班に入らないんだ。おかしいよ、お前がB班だなんて」

すると羽淵は

「おれなんて、入る筈ない」

すこし憮然と言った。

「だって、君には十分資格が……」

すると羽淵は突然豆川の顔を軽蔑するように見て

「馬鹿、そんなんじゃ、ないんだ」

吐きすてるように言った。

〔四〕

A班は社内で肩で風を切って歩き、まるで新撰組のようだった。それに引きかえB班はしょぼっとしている。その差がそのまま、ぶら下げているものの差を象徴しているように見える。B班よ、しっかりしろ！

だがB班だって、全部が全部あきらめてしまっているわけではない。

B班の中でもシンボルに自信のあるやつは立風本部長に認められようと、ゴルフ場にわざわざ出掛け、立風が風呂に入る時間を狙って自分も入り、その自信のあるものを披露するのだった。しかし勢いこんでは行ったものの、いざ立風本部長の前に立つと、肝心のものの方がちぢんでしまって、威力を発揮しない場合が多いようだった。

また、短小組の方とても、努力を怠っているわけではなかった。彼等は彼等で、時にはホストクラブのホストよろしく、男性自身を冷したり、叩いたり、引っぱったりして、その鍛錬にはげむのであった。あるいは特製のズイキでぐるぐる巻きにして夜寝るとか、どこで聞いてきたのか、毒キノコと唐辛子をすりつぶして、塗りたくったりする者もいた。涙ぐましい。だがこの問題だけは、医学界にもまだ完全に有効な方法は発見されていないようであった。

そこで気の短いやつは整形外科に行ってシリコンを注入したり、ヤーさまよろしく真珠の玉を埋めこんだりする。すると、ふくれ上ったり、ゴツゴツしたりして、多少は目的を達成するものの、残念なことに長さというものは、決して思いのままにならないということを、思い知るのであった。

〔五〕

さて東西自動車販売株式会社にはコンピューターを使った、人事情報ファイルというのがある。簡単にいえば社員の人事管理をコンピューターでやっているわけで、社員の個人的情報はすべてコンピューターの中に入っていて、いつでも即座にとり出すことができる。

コンピューターが据えつけられている事務センターは、本社とは別の、品川のビルの中にあった。

もちろんコンピューターの目的は人事管理にあるので

はなくて、東西自動車販売から車を買った厖大な数にのぼる顧客の管理と、セールスマンの売上管理、それに割賦販売代金の回収管理などの、営業用のものであることは言うまでもない。これらの厖大で複雑多岐にわたる数字の管理は、コンピューターの手を借りなくてはとても出来ないからである。

だから人事情報管理はあくまでもそのついでなのであるが、品川の事務センターには全社員のあらゆる人事情報が集中されており、本社営業所ばかりでなく全国に散在する三百以上の支店、営業所のすべてが、品川の事務センターとオンラインで直結されていたから、どの支店、営業所からでもオペレーターが端末器を操作すれば、ほしい人事情報が瞬時に支店、営業所のデイスプレイに映し出されて、見られる仕組みになっていた。

本社の人事部にも、もちろんそのディスプレイは置いてある。オペレーターは杉山留代といって、すでに五十才をすぎた、がっしりしたおばさんである。

たとえば杉山のおばさんが豆川一郎の人事情報を呼び出したとしよう。するとたちどころに豆川一郎の、生年月日、身長、体重、視力、血液型、住所、本籍地、出身校、出身地、入社年月日、社内経歴、車の売上成績、趣味、特技……など、など、ありとあらゆる情報が、ディスプレイの上に湧水のように出てくるのであった。驚異である。

ところがさらに驚異なことには、その驚異の人事情報ファイルに、今回、セールスマン達の大事なシンボルがすべて記録されたというではないか。

それを聞いたとき、A班もB班も、男たちはいっせいに

「ギョッ」

「キャー…」

「脅威だ！」

「嘘！」

「死ぬ！」

あらん限りの単語を並べて、驚き、うろたえ、そして叫び

「そんなもの、許せない」

「何たる人権蹂躙！」

「ぶっつぶせ」

「ハンターイ」

あらん限りの叫び声をあげて、怒ったのである。もっともである。

〔六〕

しかしその興奮もやがておさまると

「だが、いったい、我々の大切なものは、コンピューターにどんなふうに登録されているんだ」

内容が心配になってきた。

いつもはズボンの奥深くにひたと隠して、ぜったい他人には見せない秘密が、コンピューターという近代兵器のために、いまや晴天白日の下にさらされてしまったのである。それも、事もあろうに、本人にはまったくの無断で！

豆川一郎とても思いは同じで

「直径何センチ、長さ何センチなんて、寸法が出るのかなあ…？」

羽淵に相談してみると、この物識りの親友は

「バカだな、お前、形が出るんだよ」

「えーっ！　形…？」

豆川は卒倒しそうになった。

「それも実物大」

「ウソ、信じられない」

「信じなくたって、事実は事実だ。まちがいない。君が知らないだけさ」

「コンピューターから、どうして形が出るんだよう」

「パターン認識だ」

「パターン認識？」

「知らないのか」

「知らない」

「お前、何にも知らないんだな。そんなの常識だよ」

「教えてくれよ、そのパターン認識ってのの。おれ、心配なんだ。おれの大切なものが、どうやってパターン認識されているのか、心配で気が落着かない」

豆川は哀願するようにそう言った。

「今までのコンピューターは、数字と、それに限られた文字しか認識できなかった。限られた文字とは、カナ文字とABCアルファベット。だからコンピューターから出てくるものは、数字とカタカナ、それにABCの組合せで、非常に読みにくい」

「それは知っている……」

「ところが最近の技術開発で、コンピューターはそれだけではない、パターン認識も出来るようになったのさ。パターンとは、すなわち、ものの『形』。物の形をインプットしても、それを認識、処理することができ、それをディスプレイの上に映し出したり、紙に印刷することもできるのさ」

「ふーん、驚いた。そうすると図形とか、記号とか、地図とか、そうしたものもコンピューターでやれるのかい」

「そうだ。現に警視庁では指紋のリストをコンピューターに入れておいて、犯人の指紋の照合をやり、人間なら三日も四日もかかるところをわずか十数分でやってしまうというし、進んでいる銀行では客の印鑑届をコンピューターに入れて、預金払い出しの印鑑照合は自動的にやっている」

「そうすると、人間の顔形なんかもコンピューターに

入れることも出来るわけだ」
「いい所へ気がついた。人間の顔を入れることが出来るのだから、人間の体形なんかも入れることも出来るし、時にはその一部分だけを入れることもできるのさ……」
「なーるほど」
「わかったかい」
「体形の一番大事な部分だけを記録しておくなんて、まるで魚拓みたいだな」
「魚拓ならぬ、チン拓さ」
豆川はそんなコンピューターの中味を想像すると、なんとなく、たのしくなった。いかめしくガードされたコンピューターの中に、何千というチン拓がひしめきあっているさまを思うと、まるでクレーやミロの壁画のなかに迷いこんだような、奇妙な錯覚に陥るのだった。
そんな図形がオペレーションのたびに、ピョンコ、ピョンコ、飛び出してきたのでは、いくらしっかり者の杉山のおばさんとはいえ、平静な気持でいられないのではあるまいか。それに本社のディスプレイは、支店とちがって、最新のカラー・ディスプレイだと聞く。天然色あざやかな実物大の図形が、朝から晩までディスプレイの上に出没しては、さすがのおばさんも卒倒するのではあるまいか。そう同情すると豆川には、杉山のおばさんのいる神聖な人事情報管理の部屋が、急に、輸入のカラー・ボルノ雑誌の修正作業所のように思えてきた。

〔七〕

「でも人事部はどうやって何千という図形を集めたのかな」
その辺が豆川の一番知りたいところであった。
「ゴルフ場の風呂場だけでは調査しきれないだろう」
すると羽淵は
「それにはこんな噂がある。春、秋と、二回、定例身体検査があるだろう」
「ある、ある」
「その時だ」
「だって、身体検査は丸裸じゃないぜ」
「それがレントゲンのとき、衣類や下着も透視してしまう新鋭のY線装置を人事部は購入したらしい」
「そんな機械、聞いたことない」
「それが、どうやら、あるらしい」
「畜生、おれ、今度から、レントゲンのときは、金属製パンツをはいてきてやろう」
「それから、まだ、まだ、あるんだな」
羽淵はつづけて、
「おれたちはトイレでも撮されているらしいんだ」
「冗談言うなよ」
「便器の中央に隠しレンズがはめこんである。一見それとはわからないのだが…。それで撮している。放水する正面のタイルに埋めてあるから、バッチリらしいんだ」
「だがレンズが濡れてしまうよ」
「防水レンズが工夫されているにきまっているさ」
「とすると、おれたち、この会社ではトイレでおちおち、小用も足していられないんだなあ」

〔八〕

だが豆川にとっての脅威は人事情報ファイルばかりではなかった。
社員食堂もそうだった。
食堂は四階にあり、広い縦長の部屋だったから、壁の一面はかなり長い。その端から端まで、セールスマンの売上成績のグラフが万里の長城のように貼り出されているのである。
一番左の端が売上げナンバー・ワンのセールスマンで、右に行くにしたがって悪い。それが成績の順に並んでいる。グラフを遠くから眺めると、頂上から麓にむかってなだらかに裾野をひろげた山肌の曲線を思わせる。
棒グラフである。
左端の一番成績のいいセールスマンの棒は、はるか上まで長く、それが右にいくにしたがって低くなり、右端の成績の悪いセールスマンの棒ともなると、ほんのチョビッとしかないのである。
だから、その棒グラフは、誰が見てもセールスマン達のシンボルのグラフにしか見えない。そして棒の下にはそれぞれの名前が書いてあるのだから、リアリティは満点である。
一番、成績ナンバー・ワンの町村君、二十一センチ…、二番、勝目君、二十センチ三ミリ…、そしてぐっと下って豆川一郎君、情なくも一センチ二ミリメートル……
どこからか幻のアナウンスが聞えてくるような気がする。豆川は思わず耳をふさいだ。その棒グラフを食事の終った女子社員たちが、時間つぶしに眺めて歩くのである。
「あら、舟越君って、案外長いんじゃない、ほら」
「頑張っているのよ、今月は。それとも勃起してるのかな」
「そうかもよ」
「あら、根本さんもよ、大きい…」
「いいじゃないの、あなたのお目当てだもの、うれしいでしょ」
「だったら、わたし、根本さんに一度抱かれてみたい」
その女子社員が本当に根本を誘ってホテルに行ったら、実際はそれほどでなかったという噂が流れて、食堂雀をよろこばせたのは、それからしばらくたってからであった。
この意地悪な女子社員たちの眼が豆川には恐ろしいの

である。豆川の棒グラフは尻から数えて数番目のところにある。長さはほんのチョビッと。つくしが地面に頭を出したぐらいしかない。

「ねえ、見てよ、豆川君。やっぱり小っちゃいのね、身体もコロコロ小さいから、あっちの方もねえ……」

指先で棒の長さを測りながら

「これじゃ、一センチ二ミリぐらいしかないわ。きっとお腹のなかにめりこんでしまっているのよ」

「まさか」

「わたし、甥のおチンチン思い出すわ。家でときどき、おしめ、かえてやるの。それがとってもカワユイの。ちょぼんとなっててて、柔らかいのね。おしめ替えながら、つまんで引っぱってやるの。とっても、かーわゆい」

「豆川君、カーワユイ」

とうとう豆川一郎は赤ちゃんにされてしまった。だが神の試練はそれでは終らなかった。なんとそこへ、食堂へはめったに顔を出したことのない人事情報ファイルの杉山のおばさんが、どうした風の吹きまわしか、やってきたではないか。

ドキッ！

そして、カーワユイを連発している女子社員の群に首を突っこんだのである。

ますます、ドキッ！

杉山のおばさんはなにか一生懸命に喋っている。

「うそオ！」

「ほんとう？」

女子社員はさらに、キャッ、キャッ、の連発。きっとおばさんは豆川の人事情報ファイルのことを話しているにちがいない。豆川の顔は赤くなり、やがて全身も火のように熱くなった。

その時、女子社員たちがいっせいに笑い、そして豆川の方を見たような気がした。もうこれ以上たえられない。豆川は半分泣きべそをかいて、食堂を逃げだした。

〔九〕

人事情報ファイルは、どうも気になる存在だった。寝ても覚めても豆川の頭から離れない。セールスに出掛けても身が入らないし、アパートに帰ってテレビを見ていても、気が散って、ほとんど内容が記憶に残らない。最近ではテレビの前に坐ると、その画面が人事情報デイスプレイの画面に見えてくる始末だ。

人事情報ファイルってどこまで本当なのだろうか…、本当だとしたら、自分の大切なものはどんな工合に記録されているのだろう…、豆川はとても知りたくなった。いや、知らなければならない。知る権利と義務がある。もし誤ったデーターが入っていれば当然訂正しなければならないし、また、豆川の秘密がどのように管理されているのかも知っておく必要がある。いわゆるプライバシ

イの保護というやつだ。

杉山のおばさんに聞いてみよう。だが、あのこわいおばさんが果して簡単に教えてくれるだろうか。なぜ五十をすぎたおばさんが人事情報ファイルの担当なのか、最近の豆川にはわかるような気がする。

豆川はある日一大決心して、人事部の部屋へと出掛けていった。

人事部の周辺はあまり人が歩いていない。ひっそりしている。こんなところを誰かに見つかっては困るなと思いながら、豆川は廊下をおそるおそる進み、ここらあたりと見当をつけてドアを押すと、スッと開いた。中をのぞく。

部屋の突き当りにガラスで囲まれた小さな部屋があった。それが人事情報センターらしい。豆川がはじめて見る部屋だった。ガラス張りの内部は外から丸見えであるが、そのかわり中へは誰も入れない。もし入って人事情報ファイルを悪用してでもいようものなら、直ちに見つかってしまう。秘密の部屋はそのためにわざと透明にしてある。アメリカ式管理方式とか聞いた。

肝心のデイスプレイは向うむきに置いてあるから、その画面は見えないが、その前に杉山のおばさんはこちら向きに坐っていた。すなわち顔だけが見える。

化粧もしてない顔は意志が強そうで、制服の短かい袖からむき出しになった二の腕の太さには、仕事への忠実さと、生きることへの意欲にあふれている。まるで映画に出てくるドイツの職業婦人のようだ。とてもチビの豆川などが

「ぼくのファイルを見せてくれませんか」

などと言って近ずけた雰囲気ではない。たくましいその手でセールスマン全員の股間を、ギューッと握って、制覇している感じなのである。これではとても仕事中に近寄れたものではないと、残念ながら豆川はあきらめた。

それではせめて昼休みの食堂などでアプローチできないかと考えてもみたのだが、おばさんはほとんど弁当持参でデイスプレイの前で食べているので、食堂へはめったに姿を現わさない。一刻も職場を離れず、四六時中、自分の要塞を守っている感じなので、これもあまり可能性がない。

その杉山のおばさんは未亡人だという。それで顔とスタイルに自信もないくせに、ある日会社の帰りに流し目をくれて誘おうとしたら

「フン……」

鼻もひっかけられなかった。ギャフン。意志堅固なのである。結局杉山のおばさんから人事情報ファイルを聞き出すのは失敗に終った。

〔十〕

ある日豆川が帰ろうとすると

「おい、ちょっと一杯やっていこうや」
羽淵にさそわれた。豆川も嫌いではない。二つ返事で後にしたがい、横丁の大衆割烹に入った。「松風」と、のれんに書いてある。
ここは羽淵のなじみらしく、ひと言、ふた言、言っただけで、酒と料理が手際よく運ばれ、
「ここは安くて、うまいんだ」
九州生れの羽淵は、酒を愛惜するように、そしてひっきりなしに飲んだ。
「羽淵、いつもここで飲むのかい」
「まあな、そら、豆川、お前も飲めよ」
羽淵が器用な手つきで酒を注ぐ。
「飲んでいる時だけは会社のいやなことを忘れるね」
色の白い豆川が、あっという間に顔を赤くしてそう言うと
「そうでもないだろう」
羽淵は少しひっかかる言い方をした。羽淵の悪いくせだ。
その時豆川ははじめて気がついたのだが、ここに来ているのは自分たち二人だけだと思っていたのに、実は同じ職場のセールスマンが、他にも大勢来ているのだった。テーブルを二つおいた向う側に坐っているのもたしかにそうで
「うちの会社の連中、たくさん来ているね」
「うん」
だが羽淵にはそれが最初からわかっているようだった。
豆川は広い店の内をあらためて見廻してみた。大勢のなかには豆川の親しい者も何人かいて、びっくりした。飲みながら、食べながら、なにか必死に喋っている。いったい、あんなに喋ることがどうしてあるのだろう。豆川にはちょっと異様な感じだった。そのとき
「…らっしゃい！」
威勢のいい声に迎えられて入ってきた二人連れも、東西自動車販売のセールスマンで、すばやくそれを見つけた羽淵は手を大きく上げて
「おーい、ここだ」
その二人を自分と豆川の横に坐らせた。
こんな所に東西自動車販売の夜の溜り場があるとは知らなかった。だが豆川は、この松風に実は羽淵がセールスマン達をひそかに呼び集めているのではないかと、ふっと思った。集っているのがB班のセールスマンばかりだったからである。
何のための集合？　だがそれは、わからない。

〔十〕

だが、二、三回、そんなふうにして通っているうちに、この松風のなかに、職場の延長を思わせるような雰囲気がたちこめているのを豆川はいやでも肌に感じた。

そんなある夜。その夜は東西自動車販売の客が非常に多くて、まるで松風を、東西自動車販売セールスマンB班が借り切ったような感じだった。
機が熟したのだ。
いきなり羽淵が立ち上ると
「A班だ、B班だ、大きいの、小さいのと、いつまでこんなこと続けていたって仕方がない」
ドスのきいた声でそう言った。
「そうだとも」
「賛成！」
職場大会の雰囲気だった。誰もが、このことを、いつ言いだすのかと、待っていたのだ。
「A班が肩で風切り……」
「その風でB班がちぢみ上り……」
「そんなものから我々は早く脱出しなくてはならない……」
男たちが酒くさい息を吐きながら口々に叫ぶと、それに答えるように羽淵が
「それには、わめいていただけではダメなんだ。まずB班の売り上げをのばして、実績で示すことだ。売り上げをのばさないから、ちぢこまってしまうのだ」
すると隅の方で、誰かが作り声で
「ずっと、ちぢんでしまって、もう伸びないわよ」
「伸びなきや、あなた、もう、退化してしまったのよ……」
オスギとピー子のような声を出した。羽淵はその方をにらみつけて
「ふざけるな、まじめに聞け」
と怒った。
「ふざけているから短小組だなんて馬鹿にされるんだ。そこで一つ、提案がある…」
店内は一瞬、静まった。
「B班は一人一人ではA班にかなわないが、二人一組でセールスしたらどうだろう。三人寄れば文殊の智慧という。たかが車のセールスだ。三人も寄る必要はないだろう。二人で組めば相手の弱点を補いあって、きっとA班を打倒できる」
いっせいに拍手が湧いた。
「サンセーイ」
「おい、やろうぜ…」
「A班なんかに負けてたまるか」
豆川の身体もわくわくしてきた。羽淵が輝やかしい英雄のように見えてきた。
翌日からB班の男たちはお互いに相手を選び、二人三脚でセールスに出掛けた。
気の弱い男と、気の強い男……
お喋りな男と、無口な男……

客にとり入るのがうまい男と、最後のツメがうまい男…
陰気な男と、陽気な男…
理性的な男と、感情的な男……
……

足どりも軽く、浮き浮きと出ていった。まるで子供が親友とつれだって、ハイキングに出発していくようだ。それは昨日までのB班の人間のようではなかった。

「見ろよ、あいつら二人でやっと一人前だ！」

A班の人間が侮蔑の声を投げつけても、彼等は意に介さなかった。

〔十二〕

だが豆川はせっかくの羽淵の提案にもかかわらず、二人三脚セールスに参加しなかった。悪いとは思ったが、仕方がない。豆川には別にやることがあったのである。

人事情報ファイルのことである。杉山のおばさんから聞きだすのには失敗したが、しかしそのまま諦めてしまうわけにはいかなかった。

「なんとか自分でやる方法を考えよう」

豆川はコンピューターの学校に通い出したのである。

「三カ月速成コース」に入った。コンピューターは技術的に難かしい分野だが、しかし一生懸命やれば基礎的なことぐらい、三カ月も必死に勉強すれば十分である。

豆川は毎朝会社に出勤すると、タイム・カードを押し、朝礼をすますと、客を訪問するふりをして学校へでかけた。時には、朝、アパートから会社に電話して

「今日は直接お客さんを訪問するから会社へは出ない」

と嘘をついて、そのまま学校へ行くこともあった。

こうした点セールスマンは便利だった。昼間は客の所を飛びまわっているのだから、どこに居ようとわかりはしない。豆川が二人三脚セールスに加わらなかった理由は、この辺にある。

もちろんこんなことをしていては、車は一台も売れない。だが車が売れればどうしたっていうんだ、どうせB班のセールスマンじゃないかと、豆川はいささか居直っていた。

しかし車は売れなくても、毎日の営業日報だけは出さなくてはならない。そのデッチ上げが大変だった。

××様　訪問するも留守
××様　引つづき奥さまに面談する。
　　だいぶ気は動いてきた様子だが、決定権は主人が持つ。
××様　新規訪問。現在はツゴイネルワイゼンⅡの76年型を所有。当社への切かえをすすめる。

などと、夕方会社に寄っては適当な報告を書いて出すのだが、毎日、毎日、偽の報告書を書きつづけるのもシンドイものだった。いつか見破られしまいかと、廊下で立風本部長と顔が合ったときなどは、ドキリとした。

〔十三〕

三カ月たった。

コンピューターの知識はまあまあのところまで到達した。技術も上達した。豆川にははっきりとした目的があったから、勉強にも身が入り、学校のテキスト以外のことも自発的に勉強したから、クリスタル大学生の一年分以上の知識は身についたはずだった。

いよいよ仕事だ。

豆川はある日、秋葉原の電気街へ行って必要な器具類を買い集めると、翌日、アパートに閉ぢこもり、朝から仕事にとりかかった。音が外にもれないように警戒しながら、電話器をとり外すと、壁の中の電話回線を探り出す作業にとりかかった。

人事情報システムのオンラインは簡単にいえば電々公社の電話回線を使って接続され、データーはその回線を流れているのである。だから、うまく都内の電話回線をたどっていけば、このアパートから品川の事務センターまで辿りつけるわけである。

二時間ばかりの作業で回線接続は成功した。

「やったぜ！」

豆川はほくそ笑んだ。

送信用のプログラムはもちろん事前に出来上っている豆川は用心深く、プログラムにしたがって最初のデーターを入れてみた。

……

たしかな手応えがある。

豆川の意図したデーターが、着々と事務センターのコンピューターに届いていることは、まちがいない。

データーはコンピューターの中の豆川のファイルを見つけて、その中へ入っていく。そして豆川の人事情報ファイルの記録を修正するのだ。それはちょうど、男性自身の増強手術に医師がゆっくりシリコンを注入しているのに似ている。

「さて、どの程度でやめておこうか」

送信が最后の段階になったとき、ふと豆川は迷った。豆川に欲が出てきたからである。

最初プログラムを組むときは、せめて人並みのサイズに修正できればと、標準サイズにプログラムを組んでおいたのだが、こうも順調にいくのをみると、標準サイズで止めてしまうのが惜しくなってきたのである。

「せめて十七センチ…、いや十八センチかな…」

豆川は頭の中で、いつか文献で調べた、日本人サイズ一覧表を思い出した。

「やはり、そのくらいは欲しいな」

豆川はさらに追加データーを送りつづけた。
ついに十八センチまでいったようだ。
「これで、よし」
だが、それでもまだ未練が残るのだった。
「せっかくのチャンスだ。もっと大きくたっていいじゃないか」
太長願望という言葉が豆川の頭に浮かんできた。
「かまうものか、やってやれ！」
豆川はさらにデータを送りつづけた。オペレーションする豆川の身体は次第に熱くなり、ぼっとふくれて、浮きあがった気分になった。まるで豆川がその太長自身になったみたいだった。
送信は終った。
豆川はデーターをバックさせて、ファイルの中味を検証してみた。
平常時　十五センチメートル
異常時　二十一センチメートル
コンピューターの中に豆川の太長願望は結実したのである。
豆川はアパートの中を片付けると、熱いコーヒーを飲んだ。熱い液体といっしょに満足感がゆっくりと胃の中へ落ちていく。久しぶりの快適な気分だった。そしてこの修正データーが、いつ杉山のおばさんの眼にふれるだろうか…と、それを想像することはたのしかった。いつも、小ちゃいと豆川を馬鹿にしていたデイスプレイに、突然巨大なものが現われて
「キャーッ、すごい膨張！」
卒倒する杉山のおばさんの姿が目に見えるようだった。ざまを見ろ。
「これで晴れのA班入りもまちがいないだろう」

〔十四〕

一方、羽淵が提案した二人三脚セールスの方も、着々とその成果をあげていた。
成績が上れば、社員食堂のグラフの棒も伸びる。セールスマンの毎日、毎日の売上げは、コンピューターのオンライン・システムですぐ集計されて、グラフが修正されていく。すると自分のシンボルもまるで伸びたかのように錯覚して、セールスマンたちはますます自信を持つのだった。
B班の売り上げはぢりぢりとA班を追いあげ、最近では完全にA班を追いぬいていた。これまではグラフの左が山頂で、右の裾野へとダウンしていた曲線が、最近では右側の棒がどんどん伸びて、曲線の角度が右上りに変ってきた。これは東西自動車販売の一大事件といってよかった。
そうした傾向をいち早く感じとっているのはもちろん女子社員たちで、グラフの前で

「B班、ガンバレ！」
声援を送るかと思えば、にわかに成績が伸びてニョキニョキと頭を突出しだした特定の棒グラフを見て、叫ぶ女子社員もいた。
「キャーッ、伸びてきた！」

〔十五〕

人事情報ファイルの修正は成功した。だが豆川が期待したA班編入の発令が、いつまでたっても出ないのが不思議だった。
「おかしいな」
だが、まさか、そのことを杉山のおばさんに聞くわけにもいかない。自分で確めるほかないだろう。そのためにはデイスプレイが必要になる。前回はデイスプレイを買う金を節約して、データ処理のみで終らせたのがいけなかったのだ。
豆川は貯金をおろし、ふたたび秋葉原に出掛けて小型のデイスプレイを買った。アパートに帰り、デイスプレイの画面に形を映し出してみて
「あっ……！」
自分ながらも驚いた。
たしかに二十一センチはある。
だが、それが、いびつなのだ。
なんともいえない変な形。
中太で、細い先端がごつごつしていて、これでは、いも虫のお化けである。デイスプレイなしの手さぐりでデーターを送ったために、ちょうど暗闇のなかで粘土細工をしたように、たしかに二十一センチにはなったけれど、あらぬ所にデーターがひっついて、奇妙な形になってしまったのだった。いくら太長願望とはいえ、こんなみっともない形がデイスプレイに映し出されていたのかと思うと、豆川の顔は赤くなった。
「まず理想的な形を探さなくちゃ」
何がいいだろう。豆川は本箱の奥からポルノ雑誌を引っぱり出してみたが、実際の写真の中にはこれといった形がない。
「やはり、あれだな」
豆川は秘蔵の浮世絵を引っぱり出した。北斉である。田舎へ帰ったとき、親父のつづらの中から失敬してきたものである。
それは見事なものだった。
豆川は北斉をお手本に、一生懸命データーを送りつづけた。
今度はデイスプレイに修正の進行状況が、写し出されて、一瞬、一瞬、手にとるようにわかる。
やがて見事にふくれ上った北斉が完成し
「ふーむ」
豆川はまるで鏡に映った自分の下半身を見るような眼

つきで、デイスプレイの北斉を見た。満足した。今度こそ杉山のおばさんは仰天するだろう。そして豆川のA班入りもまちがいあるまい。

自分の満足が充足されると、豆川の心に親友のことを考えるゆとりが出てきた。

「そうだ、羽淵のサイズもついでに調べてみよう」

もしまちがっていたら訂正してやらなくてはならない。友情だ。だがそのためには羽淵の暗証番号が必要になる。だが暗証番号は秘密で外部に発表されていない。うまくそれを知る方法はないか。

豆川はこころみに自分の暗証番号の構成を研究してみた。すると簡単な原理が発見された。どうやら社員番号と、生年月日とを、ある一つの法則にしたがって組合わせてあるらしい。

翌日、会社で羽淵の社員番号と生年月日を調べると、それを法則にしたがって合成してみた。すると、１２０８１５５６という数字ができた。

「うまくいきますように…」

豆川は祈るような気持でデイスプレイにその数字を打ちこんでみた。すると暗い画面に鮮やかなグリーンの数字が

１２０８１５５６

と走って、すぐ下に、チカチカと

ハネブチツナオ

という文字が現れたではないか。

「成功だ、成功！」

やがてデイスプレイの中央に、もくもくと、原爆キノコが現れたかと思うと、オペレーションの速度にあわせて図形はみるみる太長にのび、かつ、ふくれていった。

「やっぱり、スゲエや！」

それは噂通りの立派さだった。

「北斉どころか、国貞だ」

羽淵がA班に入っていないのは、やはり杉山のおばさんのミス・オペレーションだったのだ、今度こそ羽淵もA班入りはまちがいないと豆川は確信した。

〔十六〕

豆川の予想はまちがっていなかった。

やがて人事の定期発令があって、豆川も羽淵もA班入りの辞令を手にした。

「やあ、おめでとう」

そう言ってくれる仲間もいたが

「成績が上ったのでもないのに、どうしてだ」

と皮肉を言う者もいた。そうかと思うと

「せがれが急にデッカクなったわけでもあるまいに…」

投げやりに言う同僚もいた。

昨日まで仲のよかった仲間が、いっせいに豆川に背を向けた感じだった。しかし人事情報ファイルの秘密を喋

るわけにはいかない。せっかく念願のA班入りを果したというのに…、少ししらけた気持で歩いていると、向うから羽淵がやってきた。

「おい、羽淵、おめでとう。ついに、やったなあ」

だが彼は表情のない顔で

「おれ、A班なんかに行かないよ」

そう言った。

「なぜ」

「おれ、最初から立風本部長とはあわないんだ。いまさら来いと言われたって、行くはずないだろう」

「ふーん」

豆川の中から急になにかが抜けていくような気がした。

「大きいの、小さいのって、結局そんなもの、どうだってよかったんだ。要は立風のやつ、自分の好きな人間だけをA班に入れたんだ」

「……」

豆川の心から、自分だけがA班へ行く気持が、急速にしぼんでいった。

〔十七〕

それから一カ月ほどして、東西自動車販売株式会社に、世間を仰天させる事件が起きたのであった。

その朝、なぜかセールスマンの出勤が芳しくなかった。いつもならタイムカードの前を人が川のように流れ、時にせきとめられて人だかりが出来るくらいなのに、今朝はまばらにしか人が通らない。定刻の八時半になっても、三分の一にもみたないのだった。

「おかしいな」

立風本部長は首をかしげた。今日から秋のセールス特別強化週間が始まる。その初日だというのに、どうしたのだろうと、いらいらして朝礼の会場を見渡した。だが気を落着けてよく見ると、出勤しているのはA班ばかりで、B班のセールスマンは一人もいないのである。

「はてな？」

立風本部長の心に動揺が起った。

するとそこへ人事部長が駈けつけてきた。

「大変ですよ、ストライキが始った！」

「ストライキ？　B班の野郎どもか…」

「そうです」

「リーダーは羽淵か？」

「そうです。坂下のもみじ公園に集って気勢をあげています。

だがB班はストライキを起したのではなかった。それは人事部長の後を追うようにして駈けこんできた人事課長の、第二の報告によって真相が明らかになった。

「ストライキではありません。集団脱走です」

「集団脱走！　そんな馬鹿な…」

立風本部長はあわてた。

「そんなことは、この俺が許さん」
「許さんといったって、本部長、集団脱走はもう始っているのです。現に私がこの眼で見てきたのですから、まちがいありません。わが社のライバルである南北自動車セールス株式会社へと、やつらは鞍がえしてしまったのです」
「ヒエーッ、南北自動車へ…！　そんなことされたら、わが東西自動車販売はつぶれてしまう…」
立風本部長は眼の前がまっ暗になった。東西自動車販売と南北自動車セールスとは、日本を代表する車の二大販売会社である。売上高は拮抗し、常にわずかの差で売上高のトップ争いをしている。B班のセールスマンが集団で引き抜かれたら、それこそ東西自動車販売は壊滅状態に陥ることまちがいない。

その頃、もみじ公園の広場では、B班のセールスマンが興奮の極にあった。ついにB班の怒りが爆発したのであった。
「おい、こんなバッヂ、もう要らねえや」
一人が東西自動車のつばめマークのバッヂを胸からむしり取ると
「そうだ、要らない」
「おれも、だ！」
それを合図のように広場を埋めたセールスマン達は、いっせいに洋服の襟からバッヂをはずして、空中に抛りなげた。無数のバッヂはまるで金ブンブンの集団のように、宙に舞って、いっせいに落ちた。その地面に散ったバッヂの数々をセールスマン達は
「こん畜生！」
「死んでしまえ」
「立風のバカモン！」
口々に叫びながら、靴のかかとで踏みにじって、はしゃいだ。
その時一台のライトバンが群衆のなかへ入ってきた。南北自動車セールスの車だった。中に人事部長が乗っていた。ライトバンにはダンボールの箱がぎっしり積まれている。
「さあ、みなさんは全員、今日から栄(はえ)ある南北自動車のセールスマンです。どうぞ、このバッヂをその誇り高き胸につけてください」
赤と金でデザインした、まぶしいバッヂを、ダンボール箱からとり出して手渡していった。
全員がバッヂをつけ終ると、男たちは四列縦隊になり、南北自動車セールスの本社に向って街頭行進を始めた。先頭に立つ羽淵が
「お、お、おいらはB班セールスマン！」
おいらは少年探偵団のメロディで、大声に歌うと、後につづく全員が

「お、お、おいらはB班セールスマン」
と唱和した。
もちろん行列の中で豆川一郎も歌っていた。歌うと全身に力がみなぎってくるようだった。デイスプレイの中の太長の幻影などは、もう、どこかにすっ飛んでしまっていた。あんなもの、なくたって、生きていける。歌の文句じゃないけど、おいらはB班セールスマン。
その行列を近所の人々や、通行人たちが、何事かと人垣を作って眺めていた。
そのとき、二人の男が、後から必死に追いかけてくるのを豆川は見た。立風本部長と人事部長の二人だった。
「おーい、待ってくれ！」
立風本部長はよろめくように走りながら、行進にむかって哀願した。
「たのむ、行かないでくれ……」
だが、誰もふりむかない。
立風本部長は行列のなかにコロコロ歩いている豆川を見つけると
「豆川君、せめて君だけでも残ってくれ」
両手で豆川を抱かんばかりにした。しかし、ドッコイその手には乗らないぞ。豆川は口許に両手でラッパを作ると
「お、お、おいらはB班セールスマン」
立風本部長にむかって歌うように叫んだ。

もう何を言ったってかまわない。別の会社の人間なのだ。豆川はトイレに行った後のようにスーッとした。
今はもう、誰も立風本部長の言うことなど聞こうとする者はいない。その方を見ようとする者さえ、いない。
「待ってくれ…」
その立風の前を四列縦隊のセールスマン達はまるで軍隊の行進のように立風の前を通りすぎていった。
「行かないでくれ……」
立風は歩道の上にしゃがみこみ、自慢の鷲鼻から鼻水をたらしながら、行進が次第に小さくなっていくのを呆然と眺めていたが、やがて
「ああ、とうとう、行ってしまった」
コトンと言って、その場に尻もちをついた。

（終）

浅草育ち

柴田富佐子

節は妓名を桃代とつけた。といって、愛らしく咲く桃の花の風情は、節の容姿とは全く縁遠いものであった。五尺四寸という背丈は、女としては図抜けて大きかったし、目鼻立ちのかっきりした顔立ちは、桃というより向日葵の逞しさと鮮かさを、逢う者に印象づけた。

桃代という名は、節が勝手女中から店に立つようになった時、たまたま空いていた名に過ぎない。先代の桃代は、田舎の金持ちに落籍されて幸福に暮しているとかいうので

「縁起のいい名前なんだからね。お前もしっかり稼いであやからなくっちゃ」

御内所でかあさんが言った。

朝から降り続いている肌寒い晩であった。

妓夫の信吉の背に立って節は張店をしていた。

黒く濡れた舗道に、向いの店のネオンが逆さに写っている。雨脚が強くなると、道に降った雨は勢よく凹んだ中央部へ流れ込み、マンホールに吸いこまれていく。その轟々とした音だけが、人通りのない道を這っていた。

「あたんなよ。寒いだろう」

身をずらせて信吉は抱え火鉢を後ろへ押してよこした。

「暇だねえ」

「こう降っちゃねえ」

二人は言い合わせたように、目を外の雨に向けた。

節はとうから信吉と二人きりになる機会を待っていた。信吉は小男で色が黒く、その上外っ歯という垢抜けしない男だったが、やさしさがあった。

「信さん、お前莫やらないのかい」

「ああ」

「酒は」

「そんな贅沢のできる身分じゃねえよ」

「どうしてさ」

「どうしてって、御覧の通りさね」

「いい人に搾りとられちゃうのかい」

「そんなもの、いる訳がねえ」

「ほんとかい。お前ほんとに一人身なのかい」

「くどいよ」

「じゃお前、あたしと世帯もつ気はないかい」

「なんだって」

信吉が急に体を動かしたので、狭い張台から抱火鉢がずり落ちそうになった。

「やだよ。そんなに驚くこたあないじゃないか。ただきいただけだよ。もう借金は抜けてんだから、いつだって自由になれるんだ。ただ一人じゃねえ、なかなかふんぎりがつかなくって」

娼妓はしてても、節は外の妓が映画だ、飲み食いだと出歩く時間に針を握っているような女だった。御内所を通すと、反物にも仕立てにも手数料がかかるからと、公園裏の呉服屋を廻って掘出し物を買って来ては、客の物でも自分の物でも上手に仕立てた。かあさんの目がなかったら、洗い張りまでやりかねないまめさだった。客の奢り以外は店屋物を食べず、映画一つ見に出かけない所から「恪の桃チャン」と陰口を叩かれてはいたが、それだけにかなり溜め込んでいるという噂であった。

いずれいい相手を見つけて足を洗い、小商いでも始める積りだろうと思っていた信吉は、そのいい相手が自分だと言われても即座に返事はできなかった。

節は前々から考えておいた段取りを信吉に話した。なるべく早く借家を見つける。家が決ったら一足先に節が店を出る。それから信吉が店を辞めて来るまでの間に、節は馴染みのおでん屋に通って、味つけや仕入れのコツを教わっておく。初めから一軒店を持つのは無理だから、屋台のおでん屋から始めよう。

場所は角町の門の外がいい。江戸町・角町・京町と三つの通りのそれぞれ両端の口に立って出入りする客の数を算えたら、角町の千束寄りの口が一番多かった。いい酒を吟味して味つけをよくして売ったら、客の機嫌をとるには慣れてる信さんの事だから、きっと巧くいく。仲へ繰り込む客と帰る客が相手なのだから、仲の事情に詳しい信さんには、それが一つの武器にもなるだろう。それに夜の遅い商売の方が、信さんの体にはうってつけじゃないか、と節は言った。一々尤もな事を聞かされて、信吉はただ頷くばかりであった。

しばらくすると、節は屋台を注文して来たと知らせた。

「三重丸の的に矢が当ってる図柄が看板で、当り屋っていうんだよ。いい名前だろう」

節の嬉しそうな顔を見ている中に、信吉の心にも一丁やってやれといった弾みが生まれた。

朝昼を兼ねた食事の後、家中の灯がつき店に活気が漲るまでの時間は、妓達にとって比較的自由な時間である。

節は買物を口実に店を出ては借家を探して歩いた。仲の客を相手の商売だから仲に近いほどいい。

千束・日本堤・竜泉寺・山谷・馬道・象潟と、近い所を歩いてみたが、思うような長屋にはぶつからなかった。いよいよなければ間借りでもいいが、屋台の置場を考えねばならず、一軒建の家は借りる金はあっても生まれてからずっと狭い家ばかりに住みつけて来たので、勿体ないが先に立った。それに節は、信吉との新世帯そのものに期待をかけている訳ではなかった。生活はどんなにつましくても、世帯を張ってお内儀さんと呼ばれる位置に坐りさえすればよかった。

節は丸髷が結いたかったのである。

年があけた日から、節は丸髷を結うために必要な亭主を探した。勤め人のきっかり定った生活は窮屈で我慢できそうにないし、商人には煩わしい家族がくっついている。職人は遊び好きで、工員の内儀さんに丸髷は似合わない。いつでも結えるように髪は三年前から伸しているが、肝心の相手が見つからないままに、日中事変が起り、少しずつ戦時色が濃くなってくると節は慌てた。難しい事は解らないながら、結うにも手入れにも手間暇のかかる日本髪を結い続けていられない時代になりそうだという漠然とした懼れだけは、節にも肌で感じとれた。誰れでもいい。節が丸髷を結っても文句を言わず、真面目に働いて丸髷を結っていられるだけの金を稼いでくれる男なら……

客のだれかれを篩にかけた後に残ったのが、信吉だった。余り身近かすぎて気付かなかったが、気付いてみると信吉ほどぴったりの男はいなかった。何より信吉なら「女郎上り」が引け目にならない。

信吉との約束ができた次は、腕のいい日本髪の結い手を探す事だった。当時でも日本髪を結ってる女は殆んどといっていいほど見当らない。髪結いは洋髪屋へとごく自然に鞍替えし、短い客の髪をコテやパーマで縮らしていた。客の需要がなくなれば、相対的に結い手の手は落ちる。日本髪への意欲も愛情も失ってしまったような結い手に、無理に頼んでまで結っては欲しくなかった。この七年間、節の命を支えて来た丸髷への執念が、そんな軽々しい結い手の手によって果されてはならないのである。

初見世の前日、台所仕事をしていた節は御内所に呼ばれた。長火鉢を挟んで向い合った主人夫婦の目は、座敷に拡げられた夥しい写真に注がれていた。女優髷に造花を挿した振袖姿の女、両足を前に組んでマンドリンを弾く洋装の女、ピアノに凭れて立つドレスの女、高島田に白無垢の裲襠姿の女、あたり一杯に拡げられた四つ切りの写真は、張り店用のものである。

「お前どれがいい」

かあさんに言われて節は一枚ずつ手に取って眺めた。台所仕事で手の甲が赤く膨れ、指先に赤切膏が黒くへばりついている自分のものとして飾るには、気恥しいほどどれも美しい女ばかりであった。重ねてどれがいいかと促され、節は手にしている一枚を差出した。

それは丸髷を結った女の立姿であった。品良く抜いた衿に沿って折返った羽織の衿の線と、背縫いの線が描く背のふくらみ、俯き加減に顔だけ正面を向いたその女の清々しい美しさは、最初から節の目を捉えて離さなかった。節はその写真一枚だけを、ずっと見ていたのだと思った。一度でいい、こんな髪を結ってみたい、こんな姿をしてみたい、主人夫婦の前を忘れて、節はその写真に見入っていた。

「駄目だよ、そんなの。売物の写真じゃないよ」

節の手の写真を一瞥しただけで、かあさんは外の写真に目を移した。

「でも、あたしはこれがいい。これにして下さい」

「なんだって、こんな素人っぽいのを選ぶんだい。第一お前のにしちゃ、老けすぎているよ」

主人夫婦に駄目だ、駄目だと言われている中に、却って節はどうでもその写真でなければならない気になった。

「お前の強情にゃ負けたよ」

匙を投げたかあさんに

「こういう家庭的なのも、案外いいかもしれねえよ」

と旦那は言い、その写真をかざして節の顔と見較べていた。

「まあいいやな、やってみてつかないようだったら、すぐ取っ替えりゃ、なあ」

「はい」

どうして丸髷の女がそんなに気に入ったのか、節は自分にも解らなかった。

かあさんに

「来月から店に出て貰うよ。そういう約束なんだから」

と長襦袢から着物までをそっくり揃えて出された時、初めて節は男の裏切りを知った。

祖母に死なれて孤児になった節を引取って十八の年まで育ててくれた男であった。そして節を女にした男であった。一日とて恋しいと思わない日はない男であった。恋しさが一途なものであっただけに、騙されたと知った後の口惜しさ悲しさに節は生きていられない気がしたが、死ぬにも死ねず、ずるずると初見世を翌日に控える所まで来てしまっていた。

明日から始まる生活への恐怖と嫌悪、追いつめられた人間の絶望感、男への憎悪がめまぐるしく渦巻き荒れて疲れ果てた節の心に、丸髷の女はやさしく語りかけてくれた。

「我慢なさい」

「辛抱なさい」

「待ちなさい」
一日でも早く足を抜こうと、節は稼いだ。

又聞きの又聞きだが、と断って行きつけの糸屋の内儀さんが節にまさの家を教えてくれた。千束通りと土手が垂直にぶつかる角に、水道局下水課の赤練瓦の建物がある。その裏門に面した横丁の六軒長屋が、まさの住居であった。向って左から二軒目の格子戸を開けると、顕顳にハッカ膏を貼った首の細い女が出て来た。下町の女によくある初対面づらの悪い女である。

「パーマばやりの御時世に、丸髷を結いたいなんて、変った人だね。まあお上り」

まさは火鉢の前に座蒲団をすすめた。

「流行ってたっていうじゃありませんか。折角のお店、どうしてたたんじゃったんです」

「わたしら何十年と日本髪ばかり結い続けて来たんでね。コテだのパーマだのって、大事な髪を縮らす事ばかりしてんのが、つくづく嫌になってさ。息子も働くようになったし、無理にわたしが働くこたあないと思って。お蔭でのんびりしてますよ」

まさは莨盆を引寄せようとした。その前に、節の手が莨盆をまさの前に押しだしていた。

「おや、どうも」

「いいえ」

節は笑いかけながら言った。

「やっぱり御商売柄、いい髪をしていらっしゃる」

手入れのいいまさの髪は、白いものを一筋も混じえてはいなかった。

「栄養がみんな髪の方へ行っちゃうんじゃないかって、よく言われるんだけど、本当かもしれない」

笑いが二人から初対面のぎこちなさを取り去った。いい人を見つけたという喜びが節の口を軽くし、節は七年間だれにも語らず温め続けて来た夢を一気に吐き出した。

だから自分の髪は、どうでもまさの手で結って貰わねばならないのだと節は言った。話の間に次々とピンを外された髪は、節の肩から背に扇形に拡がっていた。久しく目にしなかった艶やかな髪の拡がりが、まさに捨てた筈の櫛への未練を呼ぶであろうことを、節は十分計算していた。

帰り際にまさは

「家は決ったのかい」

と尋ねた。まだだと答えると

「ここが空くといいね」

と言った。

まさの長屋は前に狭いながら空地があって、住む人によって木を植えたり犬小屋を置いたり、植木棚を作ったりしていた。屋台をしまうのに手頃な広さなのである。空き次第移って来るにしても、それまで待ってもいられないので、節は馬道に二階借りをした。階下では夫婦が一日中鼻緒を作っている。

それから一年と経たない中に、まさの左隣りが空いた。長患いの爺さんが死んで、一人残った婆さんは田舎へ引上げる事になった。植木棚のあった空地にトタン板の屋根を張り屋台の置場をこしらえた。荷を片付け近所へ挨拶を済ました翌々日を、丸髷の結い初めの日と決めた。

その朝、節は五時に起き、神棚に榊を飾りお燈明をあげた。洗い髪は結いにくいと言われていたので、前以って洗っておいた髪に丹念に油を馴染ませておいた。玄関口の脇に張出した四帖半に、まさの鏡台は窓を右手に据えられてあった。その前に緋縮緬の座蒲団と道具箱が、まさの心意気そのままにきちんと置かれてある。節の肩にさらの手拭をかけ、髪を梳き始めたまさは、一梳きごとに、いい毛だ、いい毛だ、と呟いた。毛は多いばかりがいいのではない。少な過ぎるのはいけないが、多過ぎても扱いにくい。生え際だけが濃く、あとは多くも少くもなくて、生え替りのいい毛が、一年毛と言って最も日本髪向きの毛なのだとまさは言った。

「それにあんた、いい富士額してるねえ。あんたは日本髪を結うために生れて来たような人だ」

久し振りで手にするしっとり長い髪の感触に、まさは気を昂ぶらせていた。

丸髷を結い、めっきり世話女房臭くなった節との暮しは、信吉に人並みな幸福感を与えてくれた。商売も順調に伸び、節の蓄えに手をつけずに済む暮しができた。節も又、生活するという事の意味を信吉と二人同じ事に笑い、感動し、悄気て過ぎていく一日一日の繰り返しを通して知った。慌しく仕度を整え切火を切って信吉を送り出した後、長火鉢の前でゆっくり一服やる時の充足感は、かって味合った事のないものであった。はっきりそれと判別できなかった形が次第に焦点を絞られ、その形本来の像に結実するように、節には丸髷を結う事を生甲斐にしていた日々の心が、はっきり摑みとれた。それは丸髷によって象徴される安息の生活への願望に外ならなかったのである。

時代は急速に緊迫していた。

マッチ一日五本、砂糖が月に半斤と切符制になったのを皮切りに、米も酒も炭もみな配給制になった。信吉の商売も目に見えて材料が集まらなくなった。が、それだけに食べ物でさえあれば売れた。おでんばかりでなく飯物も売るようにした。牛や豚の雑肉に野菜を刻み込み味噌味で煮込んだものを丼飯の上にかけて作った煮込丼が六十銭でよく売れた。手に入りにくいおでん種を工面して揃えても一皿五十銭にしか売れないのに較べ、集っただけの材料を適当に按配して作ればいい煮込丼は利幅も

大きかった。
赤坂辺の芸者ですら元祿袖の黒紋付きにモンペを穿いて座敷へ出ていると新聞で読んだ朝、隣組の回覧板で女は必ずモンペを着用するように言われた。早速節は自己流にモンペと上張りを仕立てた。その形がいいというので隣近所の女に仕立てを頼まれて思わぬ稼ぎをしたのはいいが、上張りにモンペという姿が、どうにも丸髷にうつらないのに閉口した。その上防空演習が頻繁に行われるようになって、それまで姉さん被りで誤魔化していた頭巾を、どうでも被らねばならなくなった。
厚く綿を入れ、肩まですっぽり覆ってしまう型の防空頭巾は、学童までが日常肩から下げているものであった。まさが箪笥の奥からお高祖頭巾を探し出してくれた。手拭よりはましだろうと被ってみたが、下半身のモンペがいけなかった。地下足袋がいけなかった。手にした火叩きがいけなかった。柔かい布は髷にまといつき、紫の間に僅かに覗く白い皮膚と目尻の吊った目は、それだけを鏡に写して見ている分には、節自身が見惚れるほどなまめいていた。
「駄目だねえ」
まさは情無い声を出した。考えた末に節は太い針金で髷の形に枠を組み頭巾の内側に縫いつけた。丁度、剣道のお面を後ろ前にしたようなものが出来上った。それでなくても並より大きい節が、その頭巾を被ると頭巾の分だけ廻りの人間より抜きん出た。人が笑っても気にしなかった。バケツリレーで馳け出す時、模擬焼夷弾を火叩きで叩く時、頭巾は節の首をガクンガクン揺った。
演習が終って家へ馳け戻ると、節は玄関の鍵をかけ頭巾も上張りもモンペも毟り取った。着物に着替え押し潰された髷をなぜつける節は、不当に傷めつけられていた子供を労わる母親の気持ちであった。

言問橋や日本橋を初め大方の橋の欄干は軍艦やタンクに献納され、伝法院の裏通りに立並んでいた街燈の鋳物製の柱までが引抜かれていた。上野の動物園では、空襲時の万一を考えて猛獣は毒殺されたという。空襲がいよいよ現実のものとなって身近かに迫って来たという感じが強くなった。田舎のある者は早く帰った方がいいと町会から再三言われ、町の電柱にも疎開を促す貼紙がしてあったが、節のように帰る田舎はなし、家を買って移り住むだけの金もなく、第一東京を離れたら食っていけない人間は、怯えながらも同じ場所に留る外はなかった。
信吉は相変らず前日に集められただけの材料で商売に出ていた。肉などまるっきり手に入らなくなって、内臓ばかりの煮込みだったが、それでも信吉の来るのを待ってて馳けつける妓達で、暗くなる前に店仕舞になる日が多かった。昼遊びは禁止、夜も十時消燈という営業制限の上に、腹を空かして仲通いする酔狂な男は少なかった。

遊びを必要とする年代の男は、兵隊や徴用で狩出され残っていなかったのかもしれない。
その年の九月に新しい徴用令が出て、四十才までの男は兵器工場に徴用される事になった。三十九才だった信吉も区役所で簡単な身体検査を受けた結果、軍が買上げた大森辺のアパートに住込んで鮫州の工場へ通う事になった。
信吉がいなくなると、二つ世帯は不経済と、どちらからともなく言い出して、まさは節の家へ移って来た。息子を出征させて一人になっていたまさは、娘夫婦の誘いを断って節の所へ出入りする闇屋に品物を廻して貰い、結構一人分の食い扶持位は稼いでいた。月の半分はうどんか小麦粉の代用食で、きゅうり一本、さつまいも半本が一日分という配給は、世情に疎い二人にも戦争がよくない状態に追込まれていることを悟らせた。
「どうなるんだろうねえ」
二人は丸髷の行末を想った。頑固に丸髷を結い続けている節に近所の人々は白い目を向け始めていた。人々の心に節の物好きを嘲笑する余裕のある間は節がそれに耐えさえすればよかったが、日増しに悪化する戦況に人々があせりを感じ始めてくると、節の丸髷が急に目障りになって来たのである。まるでその為に、山本長官が戦死し、アッツ島が玉砕したかのように言う者さえいた。
「あたしらがいくら頑張ったって、ああいう非国民が同じ町内にいたんじゃ、勝てっこないよ」
そんな陰口が頻々と節やまさの耳に入って来た。中にはまさを摑えて
「あんたが結ってやるからいけないんだよ。結うのよさないと、配給とめちゃうよ」
と言う配給所の女もいた。それまで寅年の節の所には、頼まれた千人針がいつも裁ち板の端に載っていたが、気がついたら何も来なくなっていた。
「あんな非国民に縫って貰うと、鉄砲の弾に当っちまうって言うんだろう。きっと」
八つ当りみたいなもんだとは思っても、露骨に憎悪の目を向けられるのは、いい気持ちのものではない。残り少なくなった油を気遣いながら人目を避けて結うまさにも、又節自身にも、後めたい気持ちが少しずつ強くなっていた。
だが、「もうこれきり」「これきりにしょう」と言いながら、ほつれた節の髷を見ると放っておけずに、つい手を出してしまうまさと同じ屋根の下にいたのでは、節の頭から丸髷が消える日は来ないのである。
何らかのきっかけが必要であった。そのきっかけは、間もなくまさの娘によってもたらされた。疎開するについて、どうでもまさも一緒に連れていくと言う。本土決戦が当然のように叫ばれていたし、大空襲が近いという

流言が飛んでいる東京に、老母一人を残して行く訳にはいかないと、娘夫婦は或る朝やって来て、忽ち荷物を纏めまさを促して発っていった。

一人っきりになった節は、よろめきながら担ぎ続けて来た荷を、やっと地面に放り出した後のような長い疲れを感じた。

丸髷のない頭では鏡に向う気も起きず、うっかりすると三日も四日も髪をとかすのを忘れた。長い毛を二つに分けて三つ編みし、編んだ毛を項の所で交叉させ、耳の後ろから生え際に沿って留めあげた。編んだ毛の環を被ったように見えるその髪型は、以前に電車の中で見かけたものを真似たものであったが、きつく編んでピンで留めつけてあるので、張合いがないほど何日経っても乱れなかった。小枕をやめて使い出した蕎麦殻の坊主枕は、寝起きの頭痛を忘れさせてくれた。

丸髷への遠慮がなくなって、節は買出しに出掛けるようにもなった。背負えるだけの芋を詰込んだリュックサックで人を押しのけて汽車に乗り込む事も、窓から出入りする事も、髷のない頭なら平気で出来た。あれほど苦痛だった防空頭巾が、寒い間は一日も欠かさず節の頭にあった。疎遠にされていた婦人会や隣組の寄合いにも誘われ、傷痍軍人の慰問だ、慰問袋作りだ、配給だと、結構忙しい毎日であった。

ようやく新緑の爽かな風が吹き始めた日の午後、節は久し振りに観音様へ足を向けた。花屋敷の辺が取毀しになったという話を耳にしたからである。千束通りの電柱には、疎開を勧めるビラがまだ何枚も張ってあったが、東京も浅草近辺しか知らない節には、疎開の文字さえ苛々しく感じられた。

（死ぬ時はその時で、どうしようもないじゃないか）

通りに面したパーマ屋のドアに

「無電パーマいたします　炭お持ち下さい」

と書いたビラが下っていた。身軽るになりついでに、短かく切って縮らしたら、信吉やまさはどんなに驚くだろう。縮れた毛が額に垂れ耳を覆った自分の顔を想い描こうとしたが、浮ぶのは丸髷を結った自分の顔ばかりである。軽い思いつきは、節の意識の下で芽生えていた丸髷への未練を、ぐいと摑んで引出したようであった。

銀杏の大木が本堂を庇うように枝を拡げている境内裏から入った。銅像や鐘まで献納されたと聞いていたが、団十郎の「暫」の像はまだ無事だった。だが、本堂へ廻ると、階段の両脇にあった水鉢も仁王門の傍に立っていた燈籠も姿を消して、コンクリートの台石だけが残っている。鳩狩りが行われたとかで、境内に鳩の姿はなく参詣人の姿もない。こんな静かなうら寂しい観音様を節は知らない。

子供の頃から節はよくここへ来た。豆売りの婆さんから一皿豆を買って鳩のついばむのをじっと見つめる事で、淋しさも辛さも紛らわしたものであった。

公園へ抜けようとするあたり、小料理屋や写真館などが小さな軒を連ねていた一帯から花屋敷までの建物がすっかり取払われている。

公園外の西側は倒壊した家が累々と続き、取残されたように国際劇場がその果てに灰色の汚れた肌を曝していた。三月に発令された決戦非常措置要項で、都内の主な劇場は閉鎖されたが、公園にも「休業仕候」の札を出して入口を閉している劇場や映画館が目立った。幟も看板も取去られた公園は、最早公園と呼べるものではなかった。店を開けている食べ物屋の前にだけ人が群がり、ほんの僅かな空地や庭にも溝水や台所ゴミを肥料に野菜が植えられている。町中が薄汚なく悪臭に満ちている。

節は佗しい想いだけを得て帰って来た。浅草らしさを失った町に、髷を失った自分が生きていなければならない理由は何も見出せなかった。信吉とは離れ、守らねばならない子供も財産も家もなく、逃げていく田舎もない。何をするのも億劫で空しかった。節は又周囲と交渉を持たない生活に戻り始めた。

サイパンが玉砕してから、懼れていた空襲が相次いだが、節は表通りの歩道に掘られた町会の防空壕には誘われても入ろうとしなかった。玄関口の畳を上げて、床下を人一人が坐っていられる分だけ掘り下げただけの防空壕に蹲っている節からは、以前のきびきびした動きは失われていた。

月に一度の休みで帰って来る度に、信吉は節が元気を失くしているのに気がついた。食べずにとっておいた配給の菓子を洗濯物の包みに隠して持ち帰っても、節は自分から手を出して食べようとはしない。

「どっか悪いんじゃないのかい」

聞いても首を振るばかりである。口ではせいせいしたような事を言っていても、矢張り丸髷を失くした事が、節から生きる張合いを奪ってしまったのではないか。夜中の空襲に備えて、着たまま寝るのが当り前の御時世なのだから、それは節の我儘だと思う反面、そういう御時世だからこそ、もう一度節に丸髷を結わしてやりたいと信吉は思った。

節に内緒で、信吉はまさに手紙を書いた。

信吉に言われるまでもなく、まさには節の気持ちは推測できた。四十年余りの長い間に数え切れない髪を手掛けて来たが、節ほど丸髷の似合う女はいなかったし、節ほど丸髷に執着した女はいなかった。戦争がこのまま続けば、ますます丸髷どころではない時代になるだろう。連日の空襲で、いつ焼き殺されるか知れない運命なら、今の中にもう一度だけ結ってやりたい、結ってみたい。余りにさばさばと別れて来てしまった日の記憶が、日が

経つにつれまさには心残りに思えてならなかった。娘に話せば叱られるのは解っていたので、まさは知合いの駅員にこっそり東京までの切符を頼んだ。切符が手に入り次第、何とか口実を作って上京する積りであった。

二月二十六日の夜汽車にまさはやっと乗る事が出来た。車中、二十五日の空襲で神田・日本橋区が大被害を受けたという話を聞いた。

（この分じゃ、東京中が灰になるのもじきかもしれない）

せめてその前に出て来てよかったとまさは思った。

春を想わす柔かい陽が、一昨夜の雪を融し始めていた。それでも日陰には、一尺近い雪が吹溜っている。降り積ったままの雪を被った長屋が近付くにつれ、まさの足は早くなった。

節は火のない火鉢の前で繕い物をしていた。見覚えのある上被りの衿元から男物らしいセーターが覗いている。髪をひっつめているせいか、顔ばかりがいやに大きく見える。

「やっと出て来られたよ。元気でよかったね。どんな髪をしてるかと、思わない日はなかった」

まさが話しかけても、節は不意のまさの出現をどう受けとめていいか解らず、ただ涙の溢れる目でまさを見つめていた。こんな気の弱い女ではなかった。そう思うにつけ、まさは節が不憫でならなかった。

家の中がどことなくざらついた感じで、まさはゆっくり見廻した。ガラス戸の格子も、台所の板の間も、部屋の閾も、節はいつも光らせておかねばいられない性分だったが、今見るガラス戸の桟には埃が溜り、ガラスは泥の撥ね返りで汚れている。板の間の閾も、濡れ雑布で拭くための芯から艶をなくした乾き方をしている。丸髷を失ってからの節の生活が、改めてまさには思いやられた。

「信吉さんから手紙を貰ってね。矢も盾もたまらず出て来たんだよ」

「手紙って」

「あら、知らなかったの。あんた」

「何の事」

「へえ、いいとこあるんだね。あの人も」

笑いながらまさは手提から信吉の手紙を取出して節に手渡した。

まささんが疎開してからもう一年が経ちましたね。田舎は食べ物が豊富でいいでしょう。東京は相変らずの食糧難で、この正月はとうとう餅なしでした。その上空襲や警報の出ない日はなく、この分じゃ浅草が焼野原になるのも間もない気がします。どうせ焼かれて死ぬのなら、その前にまささんに是非きいてもらいたいお願いがあるのです。虫のいい頼みで言いにくいのですが、これは外の人じゃ駄目で、是

非是非まささんにきいてもらわなきゃならないのです。

此の頃では、わたしが工場から帰るたびに節の元気がなくなっているのです。ひねた女学生みたいな頭をしている節を見ると哀れで、もう一度だけ、どうにかして丸髷を結ってやりたいと思うのです。

無理がきいたら、どうぞ一度出て来てやって下さい。一生のお願いです。

信吉がそれほど節の気持ちを気遣ってくれていたことを、節は知らなかった。四十になっての慣れない工場勤めで、どれほど信吉が辛い生活をしているかしれないのに、節は一度も信吉を労ろうとはしなかった。自分で自分の心を閉し、狭い殻の中だけで時世をはかなみ続けていた。まさとの再会で解き放された心に、信吉の思い遣りは素直に快く滲み通った。節は又涙ぐんだ。

まさは娘との約束で、次の日には帰らねばならない。暗くならない中に結ってしまうには、すぐにも髪を洗って乾かさねばならなかった。編み続けていた髪は、パーマをかけたように波打っていたから。

洗い髪に油をすり込んで、節はタオルで何度も拭いた。とっておきの炭を起し、その火で乾かした。警報の鳴るのを何より恐れながら、二人はいそいそと四帖半に鏡台を持出した。上被を脱ぎ、セーターを脱ぎ、節は着物に着替えた。

「こんなもの着てると、後で脱げなくなっちゃう」

脱いだセーターを汚れ物でも扱うように二本の指でつまみあげ、押入れに投込んだ。

「もうこれで思い残すことはない。明日死んだっていいんだ」

結い上っていく鏡の中の髪を、節は一瞬も見逃すまいとしていた。

「この髪のこわれるまで空襲がないといいね。まさか、この頭で外の防空壕へも行かれないだろう」

「もう死んだっていいんだから、逃げないでここにいるさ」

「そんな事しちゃ駄目だよ。どんな時だって逃げられるだけ逃げなくちゃ、生きてさえいりゃ、また結える日が来ないとも限らないんだから、いいね」

「そうだね」

「いっそ、あたしんとこへ来ないかい」

「まさか」

「行きゃ何とかなるよ。百姓仕事手伝ったって、食う位の事は」

「その気持ちだけで沢山。有難くって、ほら涙が出て来た」

「バカだね」

肩の手拭で涙を拭う時、それまで気安く口にしていた

「死」の観念が、ずっしり重い手応えで節の胸に迫った。
結い上っても、幸いその日は警報も出なかった。まさに貰った米で何か月ぶりに白米の飯を炊き、海苔と玉子で夕飯を食べた。炭が勿体ないからと、二人は八時には床に入った。夜汽車の疲れでまさはすぐに寝息をたて始めた。屋根の雪が時折鈍い音をたてて落ちるのを聞きながら、節もじき眠りに落ちた。

三月九日は金曜日だったが、鮫州の工場では四、五日前から材料が全く入荷せず、信吉達はする事もなく何人かずつがかたまっては食べ物の話ばかりしていた。節からの手紙で信吉はまさが上京してくれた事を知っていたので、見納めになるかもしれない節の丸髷を何とか見たいものだと思っていた。するといい具合に、家に用事のある者は一日交替で帰ってもいいという通達があり、信吉も申込んで許可を貰った。

「もうぐずぐずになっちゃってどう仕様もないからこわそうと思ってたんだよ。でも、信さんに見せないでこわすのは済まないし、どうにかかきつけてもたして来たんだけど、よかったよ。こわさないで」

明るく弾んだ節の声であった。この十日間というもの買出しは勿論配給物もとりに行かれないので、まさが持って来てくれた物と家まで届けてくれた物だけで食い繋いで来た。野菜はとうに底をついて、そのせいでか便秘をして気分が悪いと節は言った。干物と漬物だけの肴でも、元気を取戻した節の丸髷を前にして飲む酒はうまかった。

「まささんには来て貰ったし、信さんには見て貰ったし、もう思い残す事は何にもない。いつ死んだっていいんだ」

節は涙ぐんで言った。

折角の酔いが醒めない中にと、十時を合図に二人は床についた。節は初めて丸髷を結った日に仕立下した長襦袢を出して着た。

「もう死んだっていいんだから、恐いものなんかないんだ」

着たまま寝てる信吉を起して、無理に糊のきいた浴衣を着せた。

「空襲になったって、爆弾が落ちたって、離れないでよ。離れないでよ」

今この時世に、これ以上の幸福はあるまいと節は思った。全身に漲り溢れる熱い喜びが節に総てを忘れさせた。信吉の手が節の口をふさいだ。

その時、警報が鳴りすぐ空襲に変った。信吉は枕許のラジオのスイッチを入れたが、ジージーいうばかりであった。

「起きよう」

警報のサイレンと同時に、信吉は萎えてしまっていた。節を押しやって身を起すと、手早く身支度を整え始めた。

「起きなよ、早く、着替えなよ、早く」

生まれて初めて味合った装いものでない真実の歓びの余波に、節はいつまでも身を漂わせていたかった。そそくさと離れてしまった信吉に、自分にとってこの初めての衝撃が、どんなに貴重なものかを大声で喚きたかった。

今の節には「明日からの生」よりも「今このひとときの歓び」の方が大事なのだと、信吉はどうして解ってくれないのだろう。女とはそういうものなのに……。

「何ぐずぐずしてるんだよ。早く着なきゃ」

いつまでも起き上らない節を信吉は抱き起して、長襦袢の上に上被りを着せモンペを穿かせた。

地の底から響いてくるような爆音が次第に大きくなり、信吉はいつもと様子が違うぞという不安に襲われた。信吉は節を引摺って防空壕に入れた。されるままになっていた節が防空頭巾を被せようとした時だけ激しく抵抗した。

「どうせこわしちゃう髪なんだから、いいじゃないか」

うっかり言った信吉の言葉に

「いくらぐずぐずになったって、こわすまでは大事な大事な丸髷なんだ。あたしの命なんだ」

節はむきになって怒った。

「生きていりゃ又結える。死んじまったら、これっきりじゃないか」

「いいんだってば、もう死んだっていいんだってば」

泣き喚きながら節は頭巾を投げつけた。信吉は腹を立てた。

「勝手にしろ」

「ああ勝手にするとも」

高射砲の炸烈する音が急に激しくなり、聞き慣れない「カラカラカラ」という金属の擦れ合う音が、空を圧する爆音に混って聞えた。

何か怒鳴りながら走り抜けていく人々の足音が入り乱れ、信吉の不安を掻き立てた。

「表の防空壕へ行こう」

有りったけの力で信吉は節を壕から引上げた。こんな非常の場合なら節の丸髷に目を留める人間もいないだろうと、信吉は判断した。

北西の強い風が吹きまくっている。近い所で火の手が上ったらしく、空がどことなく明るい。B29の編隊はいつもよりぐっと低空で飛び、いつもの三倍の大きさに見えた。飛び去った後に無数の光の球をばらまいていく。その球が落ちる時に「カラカラ」という音がするのだった。

節に尚も頭巾を被せようとする信吉と、そうさせまいと逆う節は、耳元で

「なにぐずぐずしてる。早く入れ」

と一喝され背をどんと押されて町会の防空壕へ転がり込んだ。不安におののく人々の目には、節の丸髷も見過

された。それでも信吉はなるべく人の目から隠そうと節の前に立ちはだかっていた。
「あ、橋場が燃え出した。山谷も燃える。この風じゃなあ」
見張り役の男の声が終らない中に、一人の男が立って外へ出ようとした。
「俺は逃げる。こんな所に入っていたんじゃ、蒸焼きになる。どいてくれ」
男は引留めようとする見張り役の男と争った揚句、飛出していった。続いて何人かが出ていった。不安ながら身を寄せ合い、何とか落着こうとしていた人々の間に、俄に波紋が拡がった。
「逃げる方がいい」と言う者。
「入ってた方が安全だ」と言う者。
初めての経験でだれにも的確な判断は下せなかった。
信吉も迷った末、向島の公園へ逃げようと決心した。もし川向うがまだ燃えていないとしたら、間にあれだけの川があれば、例えこちら側は火の海になろうと、助かるのではないか。
「おい、逃げよう。早くしないと橋が渡れなくなるぞ」
立とうとしない節を引摺って信吉は外へ出た。松屋に通じる広い道はすでに目の届く限り人の列であった。
風が火を強め、火が風を呼んで渦巻く北西の強風は、人々の頭上に火の粉を撒き散らした。人々は防空頭巾を脱ぎ急いで道端の防火用水桶に漬けて被り直した。
持出しては来たが運びきれなくて捨てていった自転車だの、リヤカーだの布団の山に躓き足をひっかけ、人々の列は風に追立てられる落葉のように、次第にかたまり言問橋を目指して黙々と集っていた。早く辿りつこうとあせる人々は、弱い者や幼い者をはじき出し踏み倒して流れていく。幾つもの町筋から流れ寄った人々の列が、言問橋の袂で合流して一本の流れになるまでに、木の枠を渡しただけの橋の手摺りから人々がはみ出しこぼれ落ちた。連れを失って泣き喚く人々の声も、じき後から後から押寄せる人の波に呑まれて消え去り又別の叫喚が起る。その間も橋に真直ぐ繋がる大通りを吹き抜けて来る風が雪を降らすように火の粉を降らす。気ばかりあせっても足は前へ進まず、じりじりしている人々の間に、新たな恐怖が襲って来た。雪ほどであった火の粉が、火の塊になっていたのである。
それは火の手がおいおい川端に近付いた事を暗示していた。風に巻かれて降りかかって来る燃えさかった塊はB29の落とす焼夷弾とさして違いはなかった。身をかわす事も出来ない人にとって、それは避け難い不運だった。絶叫を残して犠牲者が倒れると、その時だけその周りに僅かな空間ができるが、人々の波は又すぐその空間をも呑み込んでしまう。
長い橋だった。

やっと半分を過ぎ、人々は叫ぶ元気もなくただ流れからこぼれまいと前の人の背に胸を併せ、流れに合った速さで足を運ぶだけだった。自分だけ、自分だけの気持ちの中にも、前後左右の人々に互に通じ合う何かが流れ始めていた。
橋の袂の混乱で、信吉は摑んでいた節の手首を離してしまったが、降って来る火の粉を避けるために、できるだけ肩をすくめ首を縮めている人々の間で、傲然と丸髷を振り立てている節の存在はすぐ知れた。できる事なら馳けていって後から防空頭巾をひっかぶせてやりたいと信吉は思った。橋の上の流れに乗ってしまってからの信吉には、節を顧みるゆとりはなかった。割り込めさえすれば、ただ突立っていても、流れに運ばれて向う岸まで行きつく筈であった。橋を渡り切り、流れが割れる場所で待っていれば、後から節は来る筈であった。
だが、待っても待っても、信吉の視野に節の丸髷は現れなかった。

維持会員を募る（社告）

奇特のお申出があり、維持会員制を設けることにいたしました。要するに君たちの同人雑誌の営みを少しでも助けてあげたいという善意からのご発言で、ありがたく、ただ拝謝の外ありません。そういう訳で今号から振替用紙を挿入いたしました。一ケ月五百円として、三ケ月を前納した方に月報を送り、合評会その他へのご案内をさしあげ誌友としての交流をお願いいたします。

既に維持会員となられた方

〒一七五　板橋区赤塚一－二九－一五
稲垣正信さま

続いてのお申込みをお待ち申しあげます。

筆だより

森本俊正

大正九年春、上京し、筆職人の道にはいり二年、いまはもう十一年春、二年間のご無沙汰お許しください。

自作の毛筆で手紙が書けるようになるまでは、故郷へ便りはすまいと心に決めていました。この下手くそな字、お笑いくださいますな。自分の手で仕上げた筆に墨を含ませ、胸をときめかしながらしたためております。書き終りますと、ゆっくり時間をかけて、筆の出来栄えなど点検して投函いたします。

夜更けに静かに墨をすっていますと、父上の口からふと洩れたことば、「いい筆が欲しいなあ、といって、どんな筆がいい筆なのかきかれても困るが、なにか、竹なんかをさっと描いてみるとわかるような気がするが、……」地方では少しは名の通った書家であり、趣味の墨絵にも秀れた作品を残している父上の、嘆きとも願望とも聞えるあの呟きがいまでも鮮明に想起されます。

あの頃の私は、毛筆には全く無関心で、習字も好きではありませんでした。「これは何んの毛でできているの」という私の素朴な問いにも、「さあ、何んの毛だろう」と心細い、自信のない父上の返事。然し、いい筆にめぐりあいたいという父上の心の奥の願いは、何故か私の胸を強く打ったのです。私はあの日、ひとりで留守番の機会があり、ひそかに何本かの筆を調べたり、和紙に字らしきもの、絵らしきものを描いてみました。結果はなにもわかりませんでした。ただ使い古した穂先のちびた筆は具合が悪いなあと感じたぐらいです。

筆匠によっては弟子が毛筆で字の稽古をすることを厳しく禁じ、ただ精魂こめて作るだけでよい、評価は使う方がしてくれると教えているそうです。私の師匠は格別禁じてはおりませんが、私のこのおぼつかない手習いをみて、なんと思っているのでしょうか。口の重い師匠の表情からは、それを読みとることはできません。なるべく師匠に見られないようにしています。

世の中には名筆とうたわれ珍重される筆、そんな筆を作る名人といわれる筆匠がいると聞きます。普通の人には入手困難で、ねだんもあるような、ないような、工芸品として所蔵されている筆も古来多いと聞きます。そのうち気持に余裕ができたら師匠の部屋から筆の歴史書でも借りて勉強しましょう。

生来の学問嫌いと、少しばかりの手先の器用さとで、父上に奨められ、この道にはいりましたが、指先の器用さへの自信などはとっくの昔に雲散霧消、今はもう奥の深い闇の中へ迷いこんだ心境です。

今日、師匠は横山大観邸へ伺うのに初めて私に供を命じました。神田の筆仙堂から上野池の端の大観邸までの道程、緊張し通しで時の移るのを忘れていました。上野公園の桜は二分か三分咲きで、一升徳利を提げた人の姿が遠く見えがくれするのんびりした池の端の風景だけは印象に残っています。

大観先生は二階で仕事中とかで、師匠は画室への挨拶は遠慮し、炉の切ってある暖い客間で、夫人のいれたお茶を馳走になりました。私も許されて師匠のうしろに控えお茶をいただきました。

師匠と夫人の話は私の知らないことが多いのですが、話の中から大観先生と師匠のつきあいの永いのが推察できます。夫人の応対や言葉遣いは優しく、ていねいで、暖さが伝ってまいります。通りいっぺんではありません。師匠が大観邸で日頃いかに遇せられているかわかりました。師匠は小柄で肩巾広く、風采は上りませんが、夫人と話している後姿は極めて頼もしく、一つの道に徹した人の威風が感じられます。

話題になっている日本美術院のことは、耳学問で私もうすうす聞きかじっております。夫人は茨城海岸、五浦へ先住者の岡倉覚三のあとを追うように、下村観山、菱田春草、木村武山と共に都落ち同然に移り住んで過した美術院最大の苦闘時代を憶い出していられます。衣食の道さえ絶たれんという苦境の中で、肉身の死、居宅の焼失などご難続きであったと聞いています。

筆仙堂はいま二代目ですが、先代からこの五浦時代に、この画家たちとどう関ったのか、くわしくは知る由もありませんが、分に応じ、分をわきまえた後援を惜まなかったことが、会話から推察できます。

「二代目、来てくれ、頼みがある」

画室から大観先生の声がかかり、師匠は静かに立ちあがりました。

師匠が席を立ったあと、夫人は私に声をかけてくださいました。郷里や家族のことなどたずねられました。そのあとに筆仙堂の近況などきかれましたが、夫人はなんでもよくご承知で、改めて師匠と大観先生の間柄がほうふつとしてまいります。

小半時ほどで客間に戻った師匠は、夫人に挨拶して大

観邸を辞去しました。大観先生の改っての頼みとはなんだったのか、師匠は語ろうとしません。客間へ戻ったときの表情は堅く、緊張のせいか赫みを浴びていました。

広小路の、師匠なじみのそばやで、お銚子とざるそばで腹ごしらえをすると、日本美術院第八回、試作展覧会をみるため日本橋三越へ向いました。師匠は連日三越へ足を運んで出品作をていねいに見ていますが、この日は特に私にも見ろという師匠の心遣いでした。

会場の中での師匠は、日本画を鑑賞するのでなく、筆の跡の研究が目的です。特に大観先生の作品の前にはじっと立って時の移るのも、私が傍にいることも忘れています。

昨年秋、院の第八回展覧会が上野公園の竹の台陳列館で開かれたときは、連日足を運んでいました。その結果をそれからの筆作りに活かすのです。どう活かされたか、私などには判るはずもありませんが……。

この日、三越からの帰途、珍しく師匠は横山大観のことを話してくれました。

「大観という画家は哲学者であり、宗教家だよ。水戸の侍の総領だそうだが、気のせいか古武士の風格さえ感じるね。はじめは怖い人で、ことばを交すのさえ遠慮していたものだ。しかし礼儀さえ失しなければ何んでもないし、優しい心遣いさえ示してくださる。心の広い暖い人だ。芸術に対する厳しい考え、激しい信念は随一で、あの方の右に出る人は今の日本にはいないだろうね……」

日本橋から神田のお店へ戻りましたが、どこをどう歩いたのか憶えがないほど緊張していました。師匠のいうことをひとことも聞き洩すまいと必死でした。

夜もだいぶ更けてきました。こんどは少し筆作りのことを書かせてもらいます。

久しくご無沙汰しました。

大観先生は比較的数すくない筆でお仕事をなさる方と聞いていますが、今回はどうも大量の筆を納めるようです。それも大きな構想に立つ墨絵の大作にとりくまれる由。納める筆の数は百数十本とか。今までは三十本前後で納めていました。師匠はこの仕事にかかるまえ、心身を浄めるために、あちらこちらの神社仏閣にお参りをいたしました。私も一度だけお伴しました。

師匠の動きも活発になり、外出が多くなりました。ひとりで池の端の大観邸を訪れ、主として墨で画かれた下図やスケッチのたぐいをみせてもらっているようです。公園内の帝室博物館などへも足しげく通っております。絹本の墨絵をみつけては筆の跡の研究を根気よく続けているのです。

――横山大観にいい絵を描かせたい。おれの精魂こめて作った筆で。

たったこれだけのことですが、師匠にとっては、筆作りに、もうこれでよいという限界はなく、筆はよい使い手にめぐり会って生命をふきこまれるという信念の人です。

すべての材料を吟味して仕上げた筆は工芸品です。立派な芸術作品だといえます。しかし外観のみ美しくても使って駄目なら棒切れと同じ、使って磨耗して、使いものにならなくなっても同じという筆の宿命をよく考えてしまいます。師匠はこの辺のところをどう感じているのでしょうか。師匠は秀れた日本画、墨絵などを蔭で支える裏方に徹しようとしています。使い捨てられるのを覚悟しているふしが感じとれます。世間での名声とか資産などとは縁を切っている筆職人の生きざまがそこにあります。

師匠は書や日本画など墨の跡を仔細に調べると、その使われた筆の穂先の毛質や、獣毛の配合と作者の技量までよくわかるといいます。しかし、それは筆の良し悪しとは無関係であって、筆の良否は使ってくれる方が、その使い心地で感じとってくださることで、筆作者が云々することではないといいます。

「これは何んの毛でできているのかなあ」

と呟かれた父上のことばが昨日のことのように想い起されます。

どんな動物の毛でも筆の穂先にすることはできます。よく使われるのは兎、狸、鹿、羊、馬などでしょう。鳥類やねずみなどの小動物の毛を使うこともあります。毛そのものの質、長さ、剛さなど千差万別です。しかも墨の含み工合も違ってきます。弾力や耐久力、柔軟さが重要な要素です。獣の背、腹、尾と部位が違えば毛の質も別物です。羊の毛などは生えている部分によって三十二の名称があるといいます。棲息地の気温の変化や、季節や獣の年齢が毛質に微妙な変化を生みだします。

良質の毛を選び出して入手することが、良い筆を作るための第一条件です。良質の獣毛を見分けるのは永年鍛え抜かれた勘に頼るしかありません。師匠にことばで説明してほしいと頼んでも黙って苦笑されるだけでしょう。

良質の毛が入手できれば良い筆が出来るかというと、筆作りはそんな簡単な仕事ではありません。

原毛を熱湯に浸けてから干して、籾殻の灰で揉み脱脂します。それを手板で静かに打って命毛を引き出すのですが、その手板を叩く音で師匠は弟子の腕がどの位あがったか判るといいます。中心になる命毛、それをとりまく腰の部分、その上にかぶさる上毛部にそれぞれ適した長さ、剛さなどを考え配合していくのです。この毛のとり合せに筆匠は己の持てる力を発揮します。これによって同じに見える筆でも画かれた作品に微妙な差が表われてくるのです。

師匠から製筆三法として、一、心柱固く、二、覆毛薄く、三、締めかたきつく、と教えられました。心柱の上

に畑毛をそえて真立てが済んだ毛に上毛をかけます。軸にいれる前に、師匠が、「どれ、どれ」と手にとって墨を含ませる瞬間がもっとも恐しい時です。師匠のどんなこまかい表情の変化も見逃すまいと、じっと見守って待つのですが、「うん……」と一声うなる位で、良いとも悪いともいってくれません。ただかすかながら毎度こちらに伝ってくるものがあります。

墨絵用には少し太めで腰の強い付立筆、細い線や髪の毛、鳥の羽根などを描く面相筆などの種類があります。

師匠は近頃、その筆の主な用途に従って紙本や絹本に墨点打ち、じぐざぐ描き、屈折描き、まわし描き、らせん描きなど、墨絵のための筆馴らしに時間をかけるようになりました。仕上った筆の一本一本についての厳しい吟味を執拗に繰返しています。

深夜一人で筆を眺め考えこんでいるのを傍でみている私に、「もう遅い、やすみなさい」と優しく声をかけてくれる師匠は全く別人のようです。私はこの人のためにもいい筆を作らねばと思いました。

師匠は穂先の中心部の弾力を試すため時間をかけます。直筆法で筆を立てていっきにサッと筆を運びます。なにやら線がたくさん描かれますが、物の形はしていません。そして少し離して眺めます。また手にとって真近かに点検します。また、筆を斜めにし、腹の部分に墨を含ませ横にはらいます。墨に濃淡をつけてこれを繰り返します。穂先の水分を抜いてかすれ描きも試みます。

やがて次の仕事にかかり、新たな工夫を穂先の毛の配合に加えていきます。

大正十一年九月二日、美術院創立二十五年の記念祝賀会が精養軒で開かれ、師匠も出掛けました。五日からは再興第九回展覧会が竹の台陳列館で開会されました。この展覧会より全会場に一千二百枚の備後表の薄べりを敷きつめ、入場者全員、下駄草履靴を脱いで入場するようになりました。外人にも靴を脱がせました。純日本風の雰囲気をかもし出すのだという大観先生などのお考えが実現したのです。

二十八日まで開かれていましたが、その前日の二十七日、皇太子殿下行啓台覧、秩父宮、朝香宮などの殿下、妃殿下の台臨をたまわりました。

師匠は会場の隅から、大観先生が宮さまがたに、美術院二十五年の歴史と、第九回展覧会の概況を言上した模様を遠くみることができたそうです。たいへん感動的な場面で思わず涙が出たと語っていました。

夜も更けました。今夜はこれで筆をおきます。

この便り、無事につくかどうか、つくとしたらいつ頃になるかと懸念しながら筆をとりました。

大正十二年九月一日、関東大震災の日、美術院第十回展覧会の開会日でした。第一日目は招待日です。早朝より師匠のお伴で、会場準備のお手伝いということで竹の台陳列館に出向いておりました。

展覧会は予定通り午前九時に開場しました。大観先生の百三十八尺に及ぶ大長巻、絹本水墨画、「生々流転」が開会前より大評判で、当日開会と同時に来観者が殺到する有様でした。

大観先生の「生々流転」が会場を圧倒し、誰もがその規模の雄大さに驚嘆しているようでした。絵に素人の私ですら、その長い長い墨絵の前では思わず着物の襟を正した程です。

百三十六尺の絹に墨で描かれたこの一大絵巻物は、移りゆく自然のなかに人生の流転の姿を暗示しているのでしょう。人影のない山と渓流、その流れの水をあつめて大河となり、大洋にそそいでいく水の姿。その水がやがて激して龍巻となって天に昇っていく、雄渾な景観が描き切ってあるのです。

師匠はといいますと、余りの感動にものもいえずという態で、「生々流転」の前に立ち、遠く、近く眺めては動こうとしませんでした。参観者の「ほお！」という嘆声に我がことのように喜び、「どうぞ」といって、みやすい場所をゆずっている姿はまるで子供じみています。

大観先生の筆を若い者たちに任せず、自ら精魂こめ、もてる技術をすべて注ぎ、作った筆で展覧会随一の大作を描き上げてくれたのだという誇りと感激をからだいっぱいに表わしています。

会場の時計が正午を指そうとしていた時、会場が大きくゆれ始めました。すぐ止むかと身構えて待ちましたが、ゆれは激しくなるばかり。師匠の傍へ寄り、どうしますかというつもりで顔をのぞきこんだ時、遠くから「二代目、頼むぞ！」と大観先生のさけび声。木の葉のように壁面に展示した額がゆれ、床に落ちはじめる。師匠は私や院の若手に手伝わせ、作品を避難させようとしました。来観者は口々にあらぬことを口走りながら出口へ殺到しましたが、途中何回もころがって思うようには走れません。私たちはとにかく諸作品の無事を願って備後表の上をはいずりながら、命がけで絵画、彫刻を会場の一隅に集めました。「生々流転」もむきずでした。大観先生はあとで師匠に「有難う」と一言いわれました。

神田のお店がどうなったか考える余裕もありませんでした。やがて市中の各方面から火の手があがり、竹の台陳列館には続々と人々がつめかけ始めました。千二百畳の場内に荷物をかかえた被災者が、命からがらの状態でころがりこんできました。師匠や私たちはその人々の世話をするはめになってしまいました。逃げてきた人の中には神田からの人もいて、神田方面はもう火の海で近づくことはできないとのこと。

場内は人いきれでむせかえるような熱気で病人が出る始末。誰かがたくさん氷柱を運びこみ、各室毎におきま

したが、温度が高くたちまちとけてしまいます。夜にはいり被災者の数はふえるばかりで、三千人近くの人で陳列館は埋め尽されました。

神田のお店は焼けましたが、家族の人々は谷中の親類の家に難をのがれ無事であることが夜遅く判りました。師匠の顔見知りの人の話です。市中の人々は上野公園、宮城前、日比谷公園などの広場へ分れて、僅かな荷物をさげ、泣きさけびながら、家族の名を呼び合いながら、火の手をさけて逃げ廻ったようです。

私たちは会場の隅で被災者と共に悪夢のような一夜を過しました。片隅に寄せられた展覧会の出品作品は、この大群衆と大混乱のさ中にもかかわらず、一点のきずも受けず完全な状態で朝を迎えました。

この展覧会は東京での再開のめどが立たず、大阪の新聞社からの懇請で間もなく、大阪商品陳列館で開かれました。東海道線が止っていましたので、品川から奥羽線廻り郡山、北陸経由という特別な輸送路で作品が運ばれたのです。入場者四万五千人、大阪では例をみない盛況だった由。

東京での開催は十二月になって、震災をまぬがれた麴町新見附の法政大学で開催されました。久邇宮殿下の台臨、フランス大使の二度の来観という名誉を受け、東京の文化の復興のさきがけとなった意義は大きかったときます。

新聞の美術評はどれも「生々流転」を大きくとりあげています。

「……雄渾な大長巻で、世人に改めて墨のもつ美しさを認めさせた功績は偉大だ。墨をもちいて、荘重に幽婉に、あるいは閑寂に、あらゆる画風を展開し、なに人も彼を追随することは許さないであろう。名実ともに日本美術院の盟主といえよう……。筆使いは精妙細緻を極め、いかにも弾力のある、穂先のよく利いた筆の跡をみても、作家と良質の筆が一体になった力強さを感じさせる…」

師匠は、「ほれ、ごらん」といってこの記事を私に読ませました。おわりの筆のことにふれた部分の師匠の読後感はどうだったのでしょうか。師匠は一言、「うん」とうなると天井を仰ぎました。

震災後の東京もだいぶ落着いてきました。

大観先生からいただいたお見舞金、金五百円也で、なんとか住める家と仕事場を建てることができました。私がいまこうして手紙が書けるのもお見舞金のおかげといえましょう。

明日は大観邸に招待されています。今まで使われた筆をある大きなお寺に納め、筆供養をしたあと、先生の屋敷でご馳走してくださるのです。

あしたがとても楽しみです。

（了）

臨界期

柴田保

東京オリンピックの二年前で、東京はオリンピック会場や、付帯設備の突貫工事で、人手はいくらでも欲しい時だった。一方、隣県の横浜では、米軍関係の仕事もめっきり減って、朝鮮戦争の時のように、沖にまで何十隻ものリバティやビクトリー型の貨物船が荷おろしの順番を待ち、荷役業者の総力をあげての、連日に亘る昼夜兼行の作業は、今では港湾労務者たちの語り草になってしまった。

近頃は入船の数も少くなり、がらんとした上屋から、岸壁に沿った長い通路の向うには、かもめが飛ぶ青い海と沖の灯台が見えた。

私が三ちゃんを知ったのはその頃で、8月も中ばの、むし暑い午後の野毛山プールだった。

当時私が働いていた「子供の家幼稚園」が野毛山の下にあって、歩いて五分もかからないので、夏のプール公開中は、毎日ここに来て泳いでいた。このプールも夏の盛りなど入場者が多い時は、準備した衣類入れの籠が無くなり、入場制限が行われた。こんな時、炎天下に列を作って、籠が空くまで待つことになる。私が入った時も私の後ろの人たちがストップになった。その中に、頭の毛を赤く染めた若い日本人と背の高い三人の白人のGIがいて、ガムをかみながら、しきりに〝ガッデム〟と奴鳴っては、足許の小石をけっとばしていた。

更衣室で籠を預け、籠につけた番号と同じプラスチックの番号札を、腕に巻きつけながらシャワーで体をぬらしていると、さきほどの三人組が服を抱え、靴をぶら下げながら、入って来たが、そのまま出て行った。おそらく籠が無いというのを、強引に入ったのだろう。怒った口調でなにやらわめきながら、プールの脇を通り、海の見える側の、スタンドの最上段に登ると、服と靴を置き駆足でおりてくるや、水に飛び込んだ。プールは湘南の海のような華やかさは無いが、若い男女の裸でムンムン

していた。
赤毛と三人のGIは、しばらく泳いだり、ふざけたりしていたが、やがて水から上がると鬼ゴッコを始めた。
子供と違って、おとなの鬼ゴッコは傍目には喧嘩のようにさえ見える。太陽で肌を焼いている人の上を飛び越え、水から上り、休んでいる人たちの間を、暴走車のような勢いで走り廻わり、鬼がちかくに来ると、人の頭越しに水に飛込み、龍のような水しぶきを浴せた。初めの間は、まわりの人々も、笑いながら見ていたが、遊びがだんだんエスカレートしていくうちに、他人の迷惑なぞなんとも思わぬ、傍若無人ぶりに眉をひそめ、特に赤毛の日本人に、反感が集まり、まるで虎の威を借る狐だ、と口に出して言う者さえ出始めた。
そのうちに、鬼に追われて逃げ場を失ったGIのひとりが、ちょうど水から出て来た若い女の子を盾にして、逃げようとした。二人は女の子の周りを、ぐるぐる廻わりだした。女の子は逃げるに逃げられず、今にも泣きそうになって、その場にしゃがんでしまった。
その時である。
「おい、君、君」
と走ってくる赤毛を呼び止めた老人がいた。お孫さんにでも付添って来たのだろう。ひとりベンチに腰を掛け、傍に子どものバックと、派手なバスタオルが置いてあった。
「あの三人は君の知り合いだろう。娘さんがあんなに嫌がっているのだ。止めるように言い給え」
よほど腹に据えかねたのだろう。声は語尾が少し上ずり、膝に置いたこぶしが、怒りにふるえていた。
この間、鬼ゴッコは中断し、さきほどの女の子は、友だちの中に逃げ帰り、GIたちは、赤毛の傍に集って来た。この異様な雰囲気に、周囲の人々の視線は、いっせいにこの五人に集中した。ところが、ここで意外な事が起った。赤毛がなにやらGIたちに説明すると、今まで元気いっぱい飛びはねていた彼らは、急に神妙になり、ひとりは水に飛込み、他の二人と赤毛はプールの反対側に廻ると、水から上った仲間と一緒に、スタンドに置いた服と靴を持つと、シャワー室に消えて行った。ここで、ことの成行きを見守っていた人たちは、初めてほっとするとともに、この老人の毅然とした態度に、賞賛のまなざしをおくるとともに、一時は、虎の威を借る狐と軽蔑した赤毛の水際立った処置に、先入観念を根底から覆したのである。ではいったい、赤毛はGIたちになんと言ったのだろうか。これは私の臆測に過ぎないのだが、赤毛がしきりに「ジェネラル」と言っていたのを思い合わせると、恐らく、「この老人は日本の偉大な将軍であった。将軍が言われるには、私は勇敢にして規律を重んずる世界に冠たる米国軍人を心より尊敬している。こうした混雑せる状況下にあって、わが友邦国米国軍人にふさ

わしい行動をとられることを、切に希望するものである」とでも言ったのだろうか。さすがは米軍のGIだけあって物わかりが良い。友邦国日本の往年の将軍に敬意を表し、静かに、この場を去って行ったのであろう。
この赤毛の男が、三ちゃんであった。
三ちゃんとはその後何回も、このプールで顔を合わせたが、GIを連れて来たのは、最初の一回だけで、その次からは、日本人の友だちか、時には、ひとりで来たりした。そんな時でも、たちまち友人をつくった。また彼は我々のように、泳ぐだけでなく、水中バレーボール、水中ゴーゴー等多彩な水との遊びを創造した。私もその仲間の一人として、大いに行く夏を楽しんだのである。
京浜急行は横浜駅を出て、三分で野毛山公園の地下を貫通するトンネルに入り、出た所に日の出町駅がある。動物園やプールに行く人は、ここで下車する。電車はここから駅前の大通りの上を渡り、右に大きくカーブして、大岡川に沿う道路に平行して走る。この線路の下はガードになり、港湾労務者の宿泊所や廃品回収業者、看板屋、屑鉄業の店が、飲み屋やバーと隣り合って、ビッシリと建ち並び、その裏手は、場末の歓楽街といった所で、細い通路をはさんで、小さな飲み屋やバーが、ゴチャ、ゴチャと並んでいる。
この辺は、昔でいう青線地帯で、日中は、人影も少く静かだが、夕方になると、軒並みに、赤提灯の火がともり、にわかに活気を帯び、それが夜中まで続く。そして午前二時頃になって、ようやく赤提灯の火が消え、バーのカウンターに、うつ伏せに寝込んだ客が追い出され、店の前の暗い道を、行ったり来たりしていた女たちは、客をつかまえるかして、いなくなると、また静かな街に戻る。
三ちゃんは、この親不孝通りにある桝屋という飲屋の二階に、部屋を借りていた。店の隣りの入口から階段になり、二階は廊下を隔てて、左手に三部屋、右に二部屋と、洗濯機一台だけの台所のような部屋があり、左側の二部屋は店の女たち、台所の隣りが、彼の部屋になっていた。
桝屋の主人は、終戦後この店からはじめて、今ではトルコとキャバレーの持主になり、ここの防犯副会長になってはいるが、あまり桝屋にはいなかった。
三ちゃんが桝屋に来たのは彼がグリーン・ボーイの頃部屋が無くて困っていたのを、ジムの会長の口ききで、後援者である桝屋の主人が連れて来たのだった。
おかみも店の女たちも、彼の明るく、気のおけない、真直ぐな気性が、すっかり気に入ってしまった。それに酒、タバコはやらない。朝七時から夕方五時までの、港の仕事がおわると、夜七時から始まる、代宮町にあるT美容学院の夜間部に通い、十時頃帰って寝た。

私が勤めている「子供の家」は、日の出町駅から徒歩で約五分の所にあった。野毛山の低い崖を背に細長い運動場と二階建ての園舎が小じんまりと建ち、四才から六才までの子供を保育していた。土地柄とでも言おうか、保育所と思って、生後間もない赤ん坊を連れて来る親も多かった。

数日前、三ちゃんの家の近くから、一才五ヵ月になるという、かわいい女の子を連れた若い女が園長に会いたいと訪ねて来た。お天気が良いので、園長は運動場の隅にあるベンチで彼女の話を聞くことにした。彼女は

「昼間、なじみの客が来ると、この子は外で遊んでいても、すぐ二階の私の部屋に来て、ママのおっぱいを、客に取られると思って泣くのです。私がこっちはチーちゃんの、こっちはパパのと言い聞かせて、やっと泣きやみます。まだ口がきけないからいいが、そのうちに話せるようになったらと心配です。なんにも教えてくれなくても良いから、ぜひここに入れて下さい。」

と言うのだった。園長もさすがに、顔を赤らめたが、彼女は恥しがる様子もなかった。園長はこれまで、夫と別れ、母子二人で生活してきた人たちを見て来たが、どこか佗しいものを感じた。しかし彼女には、そういったかげは、全くなかったし、なんでも明けっ広げに話すので、こちらが当惑することさえあるが、半面、自分らの年代の者にはない、明るささえ感じた。これからは、こういう人たちが増えるだろうし、「子供の家」も、こうした母親の子供が多くなるか、それとも、年寄りの園長の教育方針より、幼児の隠れた才能の可能性を開発してくれる幼稚園を希望するようになるかもしれない。それでも、この園長は、人の愛を育てるために、神が幼児の心に植えた小さな愛の芽に、水を注ぐことこそ幼稚園の仕事であると、考えていた。

「女の人が母親になるということは、世界中から祝福された以上に、感激と生きがいを感じるといいます。母になり、生まれたわが子を初めて抱いた時の幸福感以上の宝は世界中さがしても得られないでしょう。あなたも心からそれを感じたことと思います。そしてどんな犠牲を払っても、赤ちゃんを幸福にしようと決心なさったでしょうし、あなたがここに来られたのも、そのためでしょう。」

彼女は大きく頷いた。

「人は三才以前のことは思い出せない、と言われています。この思い出せない0才から三才迄の期間がこの赤ちゃんが、将来、成人した時の性格の基礎を作る大切な時だと言います。赤ちゃんが生まれた時に、慣れない看護婦さんが、急に抱きあげたり、急いでお湯に入れたり、強い光を当てたりすると、ときには出生児ショックを起こします。これが成長してからの性格異常の原因になるそうです。

生まれたばかりの赤ちゃんは、お母さんがそれはやさしく取扱います。初めはお母さんのお腹の中と同じ状態にして、だんだんと周囲の環境に慣れさせていきます。こうした絶体の安心感の中で、赤ちゃんは不思議な力で成長に必要なものを、どんどん吸収していきます。これを内なる光といいます。一才五カ月はまだお母さんの傍におかなくてはなりません。この時期は赤ちゃんの模倣本能が目覚める時です。お母さんは赤ちゃんが不思議な力が出せるような良い環境に置かなくてはならないと思います」

いちょうの葉が黄ばんで雨のように降ってきた。部屋にいた子供たちはワッと運動場に出て来た。砂場で遊ぶグループ、ブランコをするグループ、鉄鬼をするグループ、女の子が、ベンチにいる園長先生を見付けると、かけて来て、

「園長先生、ナツ子ちゃんたち、ブランコに乗せてくれないの」

と訴えた。

「あなた、まぜてと言ったの？」

女の子はううん、と言って、顔を横にふった。

「まぜて、と言って、ごらんなさい。乗せてくれますよ」

女の子は元気よくかけて行った。子供たちを見て、チーちゃんは仲間に入ろうと、お母さんの手を引っぱった。

「チーちゃんは、まだ小さいからだめよ」

と、お母さんはベンチから立上って言うと、園長に、

「いろいろありがとうございました」

とお礼を言った。園長は、

「お話がありましたら、いつでもお出でください。チーちゃんも一緒にね。子供の家には遊ぶものがいっぱいあるから、よかったら遊んでいってください」

子供たちが部屋に入ると、ピアノの音に合わせて、子供たちの歌う声が聞こえてきた。彼女はチーちゃんをしばらくブランコに乗せて、帰って行った。

もし私が相談者の立場にあったら、園児の一人ぐらい入れてくれてもと思うだろう。しかし、それは不可能なことだった。もし一人でも入れたら、たちまち同じような境遇の子供の親たちが多勢来るだろうし、このことで子供の父親からおどされたこともあった。

園長が彼女に言った環境とは、今の仕事をやめ、もっと子供向きの部屋をということよりも、子供の自然の成長を妨げるものは何かを考えてほしい、という意味であろうか。

園児の異動も多かった。せっかく入園しても、ひと月で退園していく子供もいた。移転先を教えていく親は珍らしかった。在園児たちは、毎日、やめて行く園児だった友だちへ贈る絵を画いていた。

栄子ちゃんは、年長組の女の子だった。父親が最近、

刑務所から出て来てから、見違えるほど明るい子になった。お弁当が始まった。大好きなお弁当の蓋をとると栄子ちゃんは、「先生、これパパの匂いがするよ」
と言った。栄子ちゃんのパパは、また刑務所に行った。
栄子ちゃんは幼稚園をやめた。
月謝の遅滞も多かったし、一度も払わない子供の親もいた。家庭訪問の時は、きまって留守だった。母の会の会費だけは、皆さんの会計で、運動会の賞品やクリスマスのプレゼント代にしますから、ぜひご負担下さい、と子供に手紙を持たせても、結局むだだった。

船の荷役が午前五時に終ったので、三ちゃんは大岡川に沿った道を歩いていた。あたりは大分明るくなってきた。干潮時には、川の両岸の石垣に水位の汚れた跡が何本も残り、川底のヘドロまで現われ、汚臭を漂わせているが、今は満潮で、すべてが水の中に隠れて、川幅も広く朝もやで印象派の絵のように霞んで見えた。
いつもは朝七時から夕方六時交代の、昼の仕事だったが、本船の出帆の繰上げで、久しぶり昨日の朝から今朝までの、通しの明けだった。ともかく早く帰って眠りたかった。家に近くなると、川べりの人が隠れる程の高さに積上げた材木の間から、低く押し潰したような男の怒声と共に、パシッ　パシッ　と、人を叩く音がした。相手の声は聞こえなかった。この辺では、こういうことは珍らしくはなかった。女が客から泊まりの金を貰い、一回目の交渉がおわると、食事に行くとか、なんとか理由をつけて、外に出たきり、そのまま戻らないのが、普通になってしまった。しかし、疲れ切った女が、そのまま寝込んでしまうようなことがあると、ひもの男が、ヤキを入れた。
積重ねた材木と材木の間に、不健康な青白い顔をこちらに向けて、若い女が左手に白い小さなハンドバックを持って立っていた。それと向い合って、やせた、背の高い長髪の男が、こちらに背を向けて立っていた。その男の派手な色合いの薄手のシャツに、ウールの白いズボンと肉の厚い草履だけ見てもカタギとは見えない。男は振り向くと、
「てめえ、なんだ」
と例の低い、どすのきいた声で、にらみつけるように言った。男は三ちゃんを、朝帰りの街の若者とみたらしく、蛙の前の蛇のような、冷やかな目でにらみつけた。たいていの男ならば、これだけで、その場を立去るのだが、三ちゃんは、話には聞いても、実際に出会ったのは初めてだったので、腹の底から、つき上げてくる怒りを押さえるのがやっとだった。
「てめえは、どこの野郎だ。女を撲るなんて男のすることか。てめえみてえなチンピラが来るから、ここの評判が悪くなるんだ」

三ちゃんは拳の届く距離に近づくと、相手のあごに、思い切り、ぶち込みたいと思った。主客は一瞬に転倒した。男は唇に薄笑いを浮かべると、こんな若僧を相手にしても、始まらないというように、女の肩を右手で押すと、三ちゃんが来たと同じ方向に、のろのろと歩き出した。
「姉さん、こんなスケコマシといると、今に裸にされて、売られるよ。早く警察に行くか、この先の防犯協会の桝屋に来た方がいいよ」
三ちゃんは、立去って行く二人の背中に、浴せかけるように思い切り奴鳴った。
朝から実に後味が悪かった。家に着き、階段を登ると、
「三ちゃん、お茶を飲んでいきな」
と女の部屋から、おかみさんが声を掛けた。戸を開けると、二人の使用人と花札をしていた。彼はさき程の興奮がまだ残って、妙に頭が冴えていた。三人は花札がおわると、おかみは慣れた手付きで箱に収めている間に、四個のグラスとビールが運ばれた。
「さあ、ビールを飲んで寝よう」
ビールが四人のグラスに注がれ、三ちゃんは一気に飲みほすと、さきほどの話をした。
「へー　今でもそんな、おとなしい女がいるのかねー」
女中のひとりが言うと、
「三ちゃん、ぶっ飛ばしてやればよかったのに」
もうひとりが言った。
「やめな、ボクシングでやると、罪になるよ」
三ちゃんは部屋に戻ると、夕方の五時まで、ぐっすりと眠った。昨夜は、通しの仕事で学校を欠席した。今日は出席しなくてはならない。それに昨日、今日と実習なので、休むとそれだけ遅れることになる。
桜木町まで歩いて、東横線の渋谷行の急行に乗った。彼が通学しているT美容学院のある代官町駅には急行がとまらないので、中目黒から普通電車に乗換えた。三ちゃんは東横線が好きだった。それは、彼が小学生の頃、いつも乗った西武新宿線に似ていた。その頃、電車が高田馬場を出て沼袋を過ぎると、ブルーのワンピースに真白いエプロンの少女が藤籠を腕に掛けて、おすしにコーヒー、牛乳におせんべ、リンゴにミカンと車内販売に来た。彼は五十銭銀貨を握り、こんど来たら買おうと待っているが、いつも言い出せなかった。その少女が彼の座席の傍を通ると、さわやかな花の香りが漂った。電車が東伏見の無人駅に着き、少年が降り、電車が出て行くと、手のひらの中でしっかりと握られた銀貨は、今日も財布の中に戻された。
家は駅の近くにあった。朝起きると、朝もやにかすむ早大のグランドの森でカッコーが鳴いていた。九時になると、向いの二階の窓が開いて、バリトンの発声練習が始まり、十時を過ぎた頃、駅に着物姿の若い女の人が降

り、カタコトと駒下駄の音をさせて、家の前を通り、隣りのアトリエに入ると、やがて広い庭を隔てて、アトリエの曇ガラスに、黄色い裸像の影が映った。

少年が小学校四年生の冬、戦争が始まり、五年生の時、東京の上空に多発の黒い爆撃機が飛んで来た。初めての空襲だった。

その年、父は病気と栄養失調で病院で亡くなり、二〇年五月二十五日、東京の店で空襲を受け、母は防空壕の中で死んだ。

彼はようやく捜し当てた母の遺体を遺骨にし、父が眠る雑司ケ谷の墓地に葬ると、東伏見の家を持主に返し、僅かな家材道具を金に換えた。彼はたった一人になった。

十四才の時である。

行く宛は全く無かったので、とりあえず、自分のような境遇の少年たちが集る場所に行けば、国の偉い人が助けに来てくれると考えた。上野駅に行った。何日待っても助けは現われなかった代り、自分よりずっと小さな子供たちが逞しく生きていく姿を見た。

横浜に進駐軍の仕事があると聞き、横浜に行った。野毛で闇屋の仕事を手伝ったりした。その頃、Kボクシング・ジムが野毛にあった。彼は仕事が暇な時は、ジムに行って練習を見たり、はしり使いや掃除を手伝ったりした。ここで、シビリアンのデビス氏と出会い、彼のハウス・ボーイになるかたわら、ボクシング・ジムの練習生になり、四回戦に出場した。彼は筋が良いと、属望されたが、友人を撲るのが嫌で、ジムをやめ、デビス氏の帰国によって、ハウスボーイもやめた。デビス氏は帰国が決まると、彼のために、米軍港湾司令部に職を見つけてくれた。彼は日米講和条約まで六年間ここに勤めた。その後、F荷役会社の常傭労務者となり、将来の事業資金の預金もできたので、今春、K美容学院に入学した。

美容学院の入学式の翌日、三ちゃんは院長室に呼ばれた。そして、

「もしかしたら、あなたは田辺かずこさんのお子さんではありませんか？」

と尋ねられた。彼は田辺かずこは自分の母であり、父は戦争中、病気と栄養失調で病院で亡くなり、母は東京で終戦の年の空襲で死んだことなど聞かれるままに、この学校に入学するまでの経過を話した。彼女は、

「私はあなたのご両親をよく知っています。それは、たいへん誠実な方でした。あなたはお母さんにそっくりですわ。それに、たいへんご苦労なさって、でもあなたのお母さんは頭の切れる、意志が強い方でした。きっとお母さんは、あなたに良いものを総べて残してくれたのだと思います。あなたがお母さんと同じ職業を選び、私の学校に来られたのも、不思議な縁のような気がします。あなたはこれからの人です。どうか、ここで基礎をしっかり勉強して下さい。」

院長はこう言うとハンカチを出して、目頭をおさえた。

実習はロッド巻きだった。これまでのモデルウイッグの代りに、三人一組になり、一人の女性の髪を両サイドから巻いていくのだった。彼と組んだ相手は、サイドを三つに分けて、トップから紙をはさんで巻上げ、ロッドの西サイドをゴム輪を使って止めていくが、彼の場合は最後の輪止めの所で、せっかく巻上げた髪の毛が緩くなってしまう。これは練習量の違いだった。

夜間部の生徒は昼の生徒と違って、昼間はそれぞれ職業を持ち、その仕事を終えてから来るだけに真剣だった。しかし、合間の十分間の休憩時間は、若い人たちだけにファッションやおしゃれの話に花が咲いた。九時になると、掃除当番を残して、アッという間に教室は空になった。代官山駅に帰える坂道をくだり、渋谷発の電車の明りが見えると走った。改札を走り抜け、階段を駆け上り、構内を走り、階段を駆け降りるのと、電車の到着が同時で車内に飛込んだ。

家に帰ると、店にいた女中が部屋に入って来た。

「三ちゃん、今朝の女、来たよ」

「へエー　それで、どうしたの？」

「なんでも、話したいことがあるんだって、明日の五時頃、A喫茶で待っているって」

彼女は急いで、階段を降りていった。

翌日の朝、三ちゃんから夕方の五時に、A喫茶に来れないだろうか、と電話が掛って来た。日曜日なので、午后から有隣堂へでも行きたいと思っていたので、その帰りに寄ってみることにした。

四時に喫茶店に着くと、三ちゃんは、もう来ていた。夏のプール以来で、会うのは2カ月ぶりになる。彼は来てくれた礼をいうと、昨日迄のいきさつを話し、ぜひ自分と一緒に彼女に会って、話を聞いてほしいというのだった。

五時少し過ぎて、彼女が来た。彼を見ると

「遅くなって、すみませんでした」

と彼の前の椅子に腰を下した。室内の淡い照明の中にいる彼女の、円みのある広い額と形のよい鼻とひきしまったあごは、意志の強い知的な、むしろ冷たい感じさえ受けたが、大きな眼と愛らしい唇は、逆に情に弱い、ひたむきなもろさのようなものを感じた。誰の眼にも、昨日の娘とは想像もできなかった。

三ちゃんは私を彼女に紹介した。私がつい目と鼻の先にある〝子供の家〟の保父さんと知って、近親感を持ったのか、お互いの心の緊張がほぐれていったように感じた。それは彼女の表情にも現れていた。彼女は私たちと同じ紅茶を頼むと、テーブルの下に置いたハンドバックから一枚のはがきを取り出した。

「これは私の弟からのはがきなんです。弟は来週の土

曜日は東京見物、日曜日は面会日で、知合いの人と一緒の行動が許されるので、私にぜひ会いたいといって来たのです、私もなんとかして会いたいのですが、いろいろな事情があって、どうしても行けないのです。それで考えた末、たいへん勝手なお願いですが、もし出来ましたら、弟に会って頂きたいのですが、いかがでしょうか？」

彼女の言葉は、ぎりぎりに追いつめられた者の哀願だった。はがきの差出人は青森県下北郡むつ市、佐々木一郎、宛先は、東京都大田区大森西、佐々木泰子、になっていた。

「今はこちらにおられるのでしょうか？」

彼女はうなずいた。

「どういうふうにして、はがきが着いたのですか？」

「交番からです」

だんだんと彼女を取り巻いている霧のようなものが除かれていくような気がした。

「きのうの朝、一緒にいた男はなんですか。ひもですか？」

彼女はうなづいた。どうしてあんなヤクザと、と、三ちゃんは、きのうのことを、まざまざと思い出すと、怒りが戻ってくるようだった。

「どうして、ひもなんかに、からまれるのですか？」

「私は馬鹿だったのです。一時は好きだったこともあるのです。その時は本当に私を愛してくれたのだと思いました。そのやさしかった人が、こんなにひどいことをするとは、考えられないのです」

「それで別れられなく、なったのですか？」

三ちゃんは、彼らの巧妙な手口を知っていた。関係のない人から見れば、実に下品な、嫌な男に思うだろうが、一度、その男に近づき眼をつけられたとなると、そこはプロとアマの違い。狙われたが最後、嫌でも関係をつけられ、ほれたらおしまい、とことんまで金を絞られ、嫌われたら、嫌われたで、男の面子を潰した、償いをしろと、裸になるまで絞りとられる。彼らは強い者には、手も足も出ない代りに弱い者には、鬼畜のように残酷にさえなるのだ。

「しまいには顔を見るのさえ、嫌になりました。それで、どうしても別れるといったんです。男は言い聞かせても、暴力でも駄目だと思ったらしく、指をつめろ、つめたら別れてやる、と言い出したのです。」

「それで指を切ったのですか？」

二人は息を飲んで、彼女の顔をみつめた。

彼女はなにも言わず、細く白い左手をテーブル上に置いた。彼女の小指に白いほうたいが巻かれていた。

「彼の約束は口先だけでした。まさか本当に切るとは思わなかったのでしょう。ひどくあわてたようです。それで麻薬を打たれました。」

「なぜ、その前に警察に助けを求めなかったのですか？」

三ちゃんは吐き捨てるようにいった。

「親に知られたくなかったのです。それがあゝいう男たちの付け目だったのです」

「今でも麻薬を打っているのですか？」

彼女は顔を横にふると、麻薬を打たれているうちに自分から求めるようになり、中毒になった、と言った。

「禁断症状になると、からだじゅうに虫が這うような感じになり、言葉ではいえない不安と恐怖が続きました。それで強制的な入院させられ、ようやく治りました。今では、彼が打たせません。あの男も昔は恐い男と思っていました。だが実際は意志の弱い、明るい所では生きていけない、人間としたら最低の人間です」

「それでも、一緒にいるんでしょう？」

「あの男は社会に出たら、誰からも相手にされません。私がいかなかったら、一日も生きていけないでしょう」

「そんな馬鹿な」

三ちゃんは吐き出すように言うと、

「あんたは口惜しいと思わないのですか。あなたの人生をめちゃ、めちゃにした奴に、なぜ同情なんかするんですか」

三ちゃんは口惜しくて堪らなかった。あんな虫けらにも価しない奴に、どうして親、兄弟に守られて大切に育てられた娘が、こんなひどい目にあわされねばならないのか。

「あなたは、なんのために生れたかを考えたことがありますか。あなたは若いんだ。僕から見ても美しく、チャーミングです。これからいくらでも、やり直せます」

三人の間に沈黙が流れた。

「私はなんと言っていいか、わからないのです。薬のせいでしょうか、心臓がひどく悪くなって、坂道になると、苦しくて息が切れるのです」

「家の方はどうなっていますか？」

「家へは何年も手紙を出していません。ただ捜してくれるなと書いて出したことがあります。弟もはがきを出す時に、届くとは思っていなかったでしょう。万一と思って、最初の住所宛に出したのだと思います。私にはたった一人の弟です。ぜひ会いたいとは思いますが、会えば弟はどんなにか悲しむでしょう。お願いします。どうか行って弟に会って下さい。そうしたら弟も両親も、きっと安心してくれると思います」

私たちは、必ず会うと約束した。そして彼女は家へ帰り、私と三ちゃんは次の日曜日に落合う場所と時間を決めて、別れた。

私は三ちゃんと、国鉄の水道橋駅で落合った。彼の背広姿は、とてもよく似合った。自慢の赤い毛は、学校の美容室でブリーチし、黒に染めて貰った。黒のカラーは

自然の髪より艶があって、顔全体の輪郭を引立てた。
T館はすぐわかった。旅館の出入口に近く、黒板に白墨で〇〇小学校御宿と書いてあった。広い玄関に七、八人の中年の男女の面会の人たちが、生徒が出て来るのを待っていた。私たちは預ったはがきを見せて、少年の姉の代理の者ですが、と先生らしい人に言うと、既に連絡がついていたらしく、
「これはご苦労さまです。すぐ知らせますから」
と言うと、電話で生徒を呼び出してくれた。やがて少年が現われると、恥ずかしそうに、我々の前に立ってピョコンと頭を下げた。
「君が一郎君」
と三ちゃんが聞くと、
「ハイ」
と答えてから、申訳なさそうに、
「みんなが僕たち姉弟は似ていないと言います。姉はお父さん似、僕は母似です。」
と言うと、三人は声を立てゝ笑った。これが少年の初対面の緊張をほどいてくれた。少年はこれまで何回も、両親と東京に来たと言った。それはほとんど、姉に関係する用事で、私たちが知っていることは、ある程度、両親や弟も知っているようだった。私は少年の言葉のはしはしから、それを感じとると、さっきまで初めて会う少年に姉のことをどう話したものかと思いまどった心配が、一瞬に消えていくのを感じた。
私たちは上野公園に行くことにした。上野の西郷さんの銅像を見るのは二十年ぶりかも知れない。東京国立博物館、上野の森の美術館には芸術の秋にふさわしい催し物もあるはずだ。また、ここから歩いても、それほど時間はかからない。
道々、少年の口から、父は開業医で姉は〇〇医大の学生だと知った。それから先のことは先日の話から、大体の察しがついた。
「父は姉を医者にすることが夢でしたので幼稚園の時から家庭教師が来て勉強させたそうです。僕は生れつきからだが弱かったので、僕の分まで姉の負担になったんでしょう。姉はかわいそうです。」
「両親はさぞ、がっかりしたでしょうね」
「父も母もすっかり気が弱くなりました。姉のためにも、善いと信じてしたことが、反対に、不仕合わせにさせてしまったのですから、これから一生、重荷を背負って、いかねばなりません」
「ご両親には本当にお気の毒に思います。姉さんも、たまたま運が悪かったのかもしれませんね。でも、こういうことも、考えられないかな。子供の世界は、おとなとは全く違った世界だといいますね。それに人は一度は必ず通らねばならない世界です。だからおとなは、子供の持つ夢や考えを大切にしなくてはならない。それと、

四・五才の時は人が生きていくのに最も大切な基本を学ぶ唯一の時期なのです。その一は自分で考え、行動するということ。二は他人の身になって考えるということ。この努力をしないで、勉強だけを強いたりすると、いずれ親はその報いを受けねばならないと思います。」
上野駅が見えてくると、三ちゃんは懐かしそうに眺めると、地下道にいた頃、冬の夜になると燃料を集めて来てたき火をし、火にあたりに来た人たちから、十円ずつ貰った話をして笑わせた。石段を登ると西郷さんの銅像が見えた。
以前来た時より、まわりの樹が茂っていて銅像は小さく見えた。銅像の前で一郎君を真中にして三人で写真を撮った。
京都の清水寺にならって建てたという寛永寺清水堂に参拝し、左手の道を下ると国立博物館に続く広い舗道に出た。左側に紅葉した木々の間から銅像が見えると、三ちゃんは一郎君に
「あそこまで競走しょう」
と言うと二人は兄弟のように走って行った。

朱の珠数

大和禎人

私はその人の繊細な白い手指にいたく魅かれた。朱の珠数がそっと持ち添えられていて、強い印象を残すことになった。ひょっとしたら私はその珠数の朱の色に恋をしたのかも知れない。

比翼連理を誓うように墓石に刻まれた二行の戒名の一方はもちろん朱が入れてあった。

（――――貞貴信女）と読めた。この場合の（生きている信女）の悲しみの深さを察しながら、案内をうけ、香華を手向ける私にその人は楚々として、なぜか艶すら感じさせたのであった。白い項に、白い手指に、そしてあの朱の珠数に……。それは悲しみの深さだけ冴えかえる、と思えるものであった。

朱の珠数の信女はあれから三十余年を生きた。そして（生ける信女）の生涯をいま静かに閉じたという訃が伝えられていた。

信女の夫である中尾裘裘男一等兵は北支の荒漠たる平原の中、名もない小部落で戦死を遂げた。あの時、もし迫撃砲弾が炸裂していれば私も戦死を免れない運命であった。民家の壁が土埃をあげて崩れ落ち、気がついてみると濛々と煙るその埃の中に中尾は呻き声をあげていた。不発弾の多い迫撃砲弾の奇跡に私の方は救われたのだったが、信管が離れ飛んで中尾の右大腿部に重傷を負わせたのだ。信管は跳ねてさらにもう一名をこの時即死させている。小銃弾なら風にそよぐ高粱の穂波にすら弾道を変え、兵隊の生死を分けることはざらである。野戦重砲の砲口に迫撃砲弾が命中し、指揮官以下、射手、弾薬手の八名が百雷一時に落ち、天地も裂けるかと思われる音の中に散った稀有の例にも私は遭遇している。兵隊のそうした生き死についてようやく私たちは一々の感傷を抱くことに麻痺しかけていた時であったが、この中尾一等兵の戦死ほど私の心の奥を痛ましさで貫いた出来事はな

い。出血多量で彼は息絶えた。無念であったろうと思う。プラトニックを貫いた戦死であった。

まだ、慰問袋が前線に届けられ、それを受取った私たちが欣喜雀躍することを許されていた日華事変中のことだ。中尾はつねに冷静であり、そういうことではいつも表情を崩さなかった。むしろなぜか苦渋を泛べるのがつねであった。

ある日、彼はその苦渋が何であるかをはじめて私に打明けた。

（家内はいつも慰問袋にこんなものを入れてきます、班長これです、恥しいことです）中尾は呟くようにそう言い、塵紙に包まれた小さな袋をみせ、そっとそれを開いて私に指し示した。ゴム製品であった。もちろんそれはコンドームだった。中尾はそれを打明けると、恥らいに頬を染めたのである。いつも切々と訴える手紙が添えられていた。

（……、あなたの慰安婦に接する時は必ずこれを。そして子々孫々のため忌わしい病気をどうかお持ち帰りにならないように……）

という趣旨のものであった。彼はその都度、潔白であるわが身の故に苦悩が痛切に胸を嚙むのであった。妻恋うるからこそ彼は堅い意志を貫いてきている。彼の表情は仮面のように冷たくなる。冷たくならざるを得ない。中尾はそうした苦悩を抱きつつ戦死を遂げた。戦火無残の傷痕を私の胸に刻んで消えた。

私はいま新幹線に乗っている。岡山から鳥取へ抜けようと思っている。郷土に墓参をかね、あの人の回向にも参列するためだ。朱を拭われたあの人の墓碑を見とどけるまで、私の心は落着けそうにない。（生きている信女）の幻を追いつづけるだろう。戦死の状況を伝えた日から、生き残った者に与えられた妄念は払うほどに追ってきた。どこまでも追ってきた。遠くなった戦争の余燼はまだ燻りをつづけていた。焚刑者の苦悶のように……。

生身を包む業火は消えないのであった。

むうさん

岸田幸雄

ここは奥利根の一寒村。毎年春になると、一面に梅の花がきれいに咲く。だが都会からその梅を見に来る人は誰もいない。

この村の川上には小さな禅寺がぽつんと建っている。最近その寺領の畠で見慣れない若者が働いているのを村人はよく見かける。

彼は一心不乱に耕し且つ種を蒔く。そして時たま地面に腰をおろして休む。時には掌に土をのせてじっと見つめたり、時には天を仰いで雲雀の鳴く声に耳を澄したり時には渓流の音に聴き惚れていることもある。道行く人など見向きもしない。

河原の滝で見かけることもある。素裸で滝を浴びながら唱えるお経の声は決して滝音に負けない。滝音は木霊を生まないが、彼の唱える声は一々木霊になって返って来る。

色白で、長身、やや痩せぎすだが、骨組はしっかりしている。白皙のその貌は賤しからざるものを感じさせる。

一体この若者は何者なのだろう。

狭い村でのこと、誰もが興味を持つ。寺の和尚を摑えて、「あれは何者だ。」と聞いても和尚は頑として、その素性を明さない。歳や本名さえ教えない。和尚自身は「むうさん」と呼んでいるが、これは和尚が仮につけた名にすぎない。

いよいよ問い詰められると、

「あれは或る人から預かったんだ。」

と洩らし、また

「あれは大器の素質を持っている。」

と目を細める。

和尚は寺の中でむうさんを余程厳しく仕込んでいるらしく、めったに寺から外へ出さない。だが、読書好きなむうさんに、和尚はなけなしの金を惜しみなく与えて本

を買わせている模様だ。

時々むうさんは東京の神田まで本を買いに出かけ、帰りには必らず本の大風呂敷を担いで戻る。村人がお茶でも飲んで行かないかと声をかけても、彼は決して家に上がらない。

といっても、例外の家が一軒だけある。吉村兄妹の家だ。彼はこの家に限って、案内も乞わず、ずかずかと奥の間に入って行く。兄哲夫は和尚とは親しい間柄。もう四十近いがまだ独身。町の中学校の先生だ。妹芳江はそれよりずっと若く、美貌の持主。若くして嫁した相手が大変な女道楽で、出戻って兄の処に身を寄せている。子ども好きなので、村や町の子どもを集めて習字を教えている。共に村では珍らしいクリスチャン。

クリスチャンと禅坊主とは面白い取り合せだが、哲夫とむうさんは話がよく合うらしい。哲夫の話だと、むうさんは聖書にも凄く詳しいそうな。

桜の頃だった。村の橋のたもとの桜が今満開だ。その木に子ども達が登ってはしゃいでいる。

そこへ神田帰りのむうさんが通りかかる。見ると一人の小さな子がまだ木に登れないで泣いている。むうさんは何気なく近寄り、軽々とその子を抱き上げ、仲間の子どもたちの中に入れてやる。

一斉に「ばんざい」があがる。同時に知っている限りの歌を次々唱いだす。下ではむうさんが手拍手を打ちながら唱和する。

そのうちに子どもたちの中から、

「おじさん登らないか。」

という声があがる。むうさんは待ってましたとばかりするすると登る。そして又大合唱だ。

あいにくそのころ、意地悪婆さんが通りかかり、下から憎々しげに見上げて言う。

「餓鬼だちどうしてこんなに花を散らすんだ。あれ、むうさんも一緒か。あきれたあ。」

子どもたちに全く相手にされない婆さんはすごすごと立ち去る。

子どもたちとむうさんの歌はいつまでも続く。やがて降りたった子どもたちにむうさんは箒を持って来さして、一面に散った花をきれいに掃き取らせた。そして別れを告げた。子どもたちからまたも「ばんざい」があがる。

この一部始終を遠くから好もしげに眺め尽している女がいた。それは吉村の芳江だった。

最近村で信望の厚かった村長が亡った。その邸での通夜に珍しく和尚に跪いて、むうさんが来た。村人の中には始めて身近かに彼を見る人も多い。

さて仏前正面に座った和尚は猫背で小身。おつきのむうさんは背筋をピンと伸して長身。和尚の唱えるお経はぼそぼそ。むうさんの方は音吐朗々、その声は会場の隅

隅まで響き渡る。
儀式も一応すんで、二人は別室に通されて、お茶を供される。一族や世話人がこれをとり囲む。言葉少いその座で、どうしたことかむうさんだけはよく喋る。隣りに座った未亡人もそれに誘われて、しまいには微笑を浮べる仕末。
二人の帰った後、皆はむうさんの事でもちきり。
「むうさんのお蔭で邪気が一掃された感じだ。」
「でもああ明々とやられると、有難味がなくなる。」
「むうさんて、ざっくばらんだな。」
「でもお通夜に来て笑うなんて、不謹慎よ。」
最後に未亡人はこう呟いた。
「あの人は私だちを元気づけるために言ってくれたのよ。あの人はあたしの心を全部知っているみたい。」

近頃むうさんの姿を村で見かけないと思ったら、本山へ修業に出掛けたそうな。和尚とすればこれまで三年間自分が仕込んだむうさんを、本山の管長によくみて貰いたかったにちがいない。
村人にとっては、むうさんがこの村にいようがいまいがどうということはない。やがて予定の一年がたつと、むうさんは前にも増して活々と自信に満ちた足取りで帰って来た。和尚の話だと、管長に大変見込まれたそうな。そしてこれからは時折修業僧をむうさんと「問答」させに寄こすと手紙で言って来たそうな。
それからのむうさんはちよいちよい地方へ托鉢に出掛けるようになる。そして他山の僧とも「問答」を重ねている様子だ。その行き帰りには村の軒々も巡る。
むうさんのお経はそう長くはなく、そのお経とお経の間に、わけのわからないことを言う。
「裸人形もの落さず。」
「何処へ行くにも行き場がない。この世すべてがわしだから。」等々。
時には
「鳥に塒あり。されど人に枕する処なし。」
「空飛ぶ鳥を見よ。紡がず稼がざるなり。」
など聖書の言葉とよく似たことも口走る。
今では村人に家へ上がれと言われれば、何処でも構わず入って行く。そして誰とでも話し、身の上相談にもあずかっているらしい。どうやらむうさんは完全に村に融けこんでしまったようだ。
いずれにしても彼の立去った後には何ともいえない爽快な気が漂い、何かしら新らしい希望を湧かすらしい。

といっても、むうさん自身の生き方に対しての村人の見方は年代によってまちまちだ。村の物識りや男連中に言わせると、
「ああやって気儘に食を乞うて廻っていながら、村の

ために何か具体的なことをしてくれたことがあるだろうか。どうやらこの頃は寺の仕事も怠けているようだ。本山から若い僧が「問答」に来ても不在が多いそうだ。あれでは和尚がかわいそうだ。当然後継ぎとして手塩にかけて来たのに。」
女連中に言わせると、
「あたしたちはむうさんのお説教だけで結構。聴いていると有難くって、嬉しくて、食を乞われないでもこっちからどうしても上げたくなる。」
子どもたちは言う。
「あのおじさんはおれたちと遊んでくれるから大好きだ。それに泳ぎも教えてくれ、唄も、木登りも教えてくれる。いつか山で怪我した時、あのおじさんは着ているものを破いて繃帯してくれた。村の大人でおいらと本気で遊んでくれるのはむうさんだけだ。」
だがむうさんはこのような声とは反対のことを次々しでかして皆を驚ろかしてゆく。

ある年この地方に大嵐があった。夜になって益々ひどくなる。村の家々はあちこちやられ、土砂の流れ込んだ家もある。真夜中に大きな音がしたのは崖崩れだ。明くれば昨夜の嵐が嘘のような晴天。
若者たちが崖崩れの現場にかけつけみると、成程この村で一番大事な道路が完全に土砂で塞がっている。ところがすでに一人の男がせっせとそれをシャベルで取除き始めている。それがその頃村にいない筈のむうさんだった。一緒に加わった連中はむうさんのやり方を見て舌をまく。ふだん農作業で鍛えている自分たちより遙かに迅速で逞しい。そして第一、休もうともしない。
お陰で作業はその日のうちに片付いてしまう。この話を後で聞いて、これまでむうさんは村のために何一つしたことがないと言っていた連中は一ぺんに腰砕けである。
又この事とは別に、大方の村人はこう言って賞める。
「むうさんは気儘で変人だが、これまで浮いた噂を聞いたことがない。その点だけは感心だ。」
ところが最近、きれいな月夜に河原で真っ裸のむうさんがこれも真裸の女と抱き合っていたのを見た者があるという。
「相手は誰だ、誰だ。」
「遠くてよくわからなかったが、どうも吉村の芳江さんらしかった。」
そうな。こうしてむうさんはなけなしのとりえを惜気もなく返上してしまう。

相変らずむうさんは村にいると思うと地方へ行っていたり、地方にいると思うと村にいたりする。それにこの頃は寺を離れて奥山で寝泊りしていることも多いらしい。
一体むうさんは奥山で何を食い、どうやって寝ている

のだろうか。
村人はみな心配した。思いあまって吉村兄妹が和尚とかけ合うと、和尚は案外落ちついている。
「宇宙に己が瀰漫していると信じているむうさんをこんなちっぽけな寺に縛りつけておくのはかわいそうだ。むうさんはあれでいいんだ。」
更らに語を継いで、
「でもなあ、いくら頑丈なむうさんだってあれじゃ体を悪くしてしまう。むうさんはまだ三十二なのだ。」
これまで誰にも明かさなかったむうさんの歳をはしなくも和尚は洩らしてしまう。和尚だってよほど心配しているにちがいない。
村人は村人で相談の結果、せめて雨露しのぐ小屋を河原に建ててやる事に一決。中にはそうしてやっても、むうさんが素直に入るかどうかと言う者もいたが—。
小屋は一日足らずで出来てしまう。小屋といっても円錐形の藁小屋で、高さは大人の背ぐらい、底も長身のむうさんが体を曲げて、やっと寝られる程度のものだ。
さっそく皆でむうさんを摑まえて、小屋に棲め棲めとすすめる。その後どうするかと見ていると、意外にもむうさんはその小屋が気に入ったらしく、どうやら棲み込んだ模様だ。
或る日突然むうさんは村中を大声でふれ廻った。
「わしは明日小屋で死ぬ。見付けたら寺へでも運んでくれ。」
村人はみながびっくりする。だが本気にする者はいない。また人を出し抜いて、面白がるにきまっている。中には、人を騙すのも事によりけりだと怒る者さえいる。
翌日物好きなのが小屋を開けてみると、果して
「ばー。あっ、は、は。」とむうさんの元気な笑い声だ。
この事を聞きつけた和尚も和尚。その日のうちに小屋へ棺桶を届ける。むうさんは大喜び。そしてその日に再び村中をふれ廻った。
「わしは明日こそ棺桶の中で死ぬ。」
翌日今度は本気で村人は棺桶を開けた。だがまたしても「あっ、は、は。」である。
こうしてむうさんは次の日も次の日も出し抜いた。村人の足も自然に遠のいていった。
しかしむうさんは死んだ。
結局むうさんの棺桶を寺へ運んだのは和尚と吉村兄妹の三人だけだった。
やっとのことでむうさんを埋め終った時、和尚はひとり呟いた。
「やっぱり、むうさんはこれでいいんだ。」
三人はいつまでもいつまでもその場に佇ち尽していた。
すべては夢のようであった。
澄みきった空の一角から、むうさんの「あっ、は、は。」という笑い声が聞えて来るようだった。

つまみ食い

山口健二

その店はまちの外れではあるが、四ツ角で、L字形にガラス引戸越しに通りに面している。商店としては恰好な位置にある。商品は干物、漬物、魚介類、佃煮、罐詰、干そば、干うどん、豆腐、揚げ、納豆、ラムネ、サイダー、長持ちする野菜類まで種類は多いが余り豊富とは言えない並べ方がしてあって、品物が少し雑然と土間やガラス張りの用器におさめられている店から、二間（約二米弱）のガラス戸をへだてて、八畳の帳場兼用の囲炉裏のある居間、その奥が襖でしきられた寝室、居間から土間に降りてトタン屋根に板がこいだけの吹き通しの物置と便所に通じ、居間から土間に降りたガラス戸の入口寄りから階段を登ると商品のある土間の真うえの二階が六畳と八畳の部屋、八畳の方には半間の床の間と押入れがついている。
主人の角次は陸軍軍曹上りで、軍隊時代にはるえと一しょになり、そのまま専門の軍人になり、将校になるつもりであったが、頼みにしていた中隊長が大正の終りから昭和の初めにかけての軍備縮少のあおりを食って大尉でやめてしまったので、かれも先に見切りをつけて、炊事班長や酒保、将校集会所の班長時代の商品知識と包丁の技術を生かして、魚介類の佃煮製造を家業としていたはるえの父親の力で商人になった。毎朝早くから魚市場へかかさず買出しに行く程ではなかったが、結構注文によっては魚料理などもつくり、簡単な仕出屋風なこともできた。その店をひらくには、はるえの実家から金が出たし、高等小学校一年生までいった十三才の小僧の猪之吉もつけて貰った。
はるえは八才の男の子をかしらに五才の女の子、二才の女の子と三人の母親である。そこで行くゆくのために、空いている二階の八畳の方を二食付き月二十三円でまちの学生に貸し、角次も、もう一つ本腰を入れて商売に精を出すところであった。

はるえは魚臭い一日が終ると近くの鷺の湯へ子供たちのうちだれか一人をつれて行く。魚臭さをきらう奇麗ずきと言えそうであるが、かの女はちょっと垢抜けしている自分を知っていて、鷺の湯の番台に上る主人や、男衆に肌をみせる心よさも手伝っていた。鷺の湯の主人の弟は、はるえより一ツ年下だが、露骨にかの女に言い寄る素振りを示しさえした。近頃、はるえの気になることが二つある。ひとつは、結婚した相手がたちの悪い病気で行く先駄目だというので出戻って来た妹の七重が、実家の親の世間態のこともあって、姉のはるえ夫婦の店にほとぼりを覚すために来ていることが重荷であった。もう一つは、二階の八畳間を貸した学生が、どうもこの七重に引かれ初めているらしく、詩のような文句を七重に渡したり、二階の目のあらい廊下の板敷のすき間から七重の寝姿をのぞいているらしいことであった。七重は帳場兼用の囲炉裏のある居間に寝かせてある。それまでは、猪之吉を店をしめるまで囲炉裏ばたで店番をさせ、そのまゝその部屋に寝かせていたのだが、七重が来たため、猪之吉は、はるえ、角次、子供三人と奥の寝室に雑魚寝をせねばならぬ。猪之吉が十三才の子供でも他人であるから三十一才のはるえにとっては気憂つなことである。だから時々理由をつけて猪之吉を学生に貸してある部屋の隣の六畳に追いやることもある。七重は、結婚の失敗で此処のところぼんやりと心に締りをなくしており、男を知った二十八才の女盛りでは、だんだん学生の渡す詩のような文句に引かれ初めて、時には涙を少し溜めたりして二階へあがってゆくことが、はるえにはわかった。七重は子供が出来ないまま夫と別れたから、娘々している。その上平気で、学生のいる部屋つづきの物干し竿に自分の下着や、時には女特有の下帯など干したりする呑気さがはるえには気になった。まだ、はたちを一ツ出たぐらいの学生の気を引くことは充分出来そうに、はるえには思えてくるのである。

「赤山さぁ、洗濯もんあったらしたげるワ」

はるえはつとめて東京弁を使って学生の部屋に入ってゆくようになった。

「おばさん、押入れの中あんまり見ないで・・・はんずかしいじゃ」

学生は押入れをあけて行季の中をかきまわし初めているはるえに、わざとその土地の訛りを真似て甘えた。はるえにしてみれば、学生と七重の仲を探偵する気持ちもあったが、結婚当初、角次が軍隊の営内居住だから週一回ぐらいしか家によりつかないし、演習ともなれば一ケ月位は帰って来なくても、一向気にならなかったものだが、近頃、男に対する熱意のようなものが湧いてきている。「女」が熟したとでもいうのであろうか、七重と学生に対するうたがいに刺戟されたともいえようが、自分では、学生に対する母性的な気持だといいきかせていた。

日本本州中はもちろん、満州、朝鮮、台湾からも集ってくる学生たちはこの帝国と称する国の最盛期とも言える時期の若者たちであり、みなこの国の堅実な中流前後の家庭の子弟であり、みなきれいに響く東京弁や色つやのある関西弁をあやつるものが多く、親の元を遠くはなれて来ている若者たちであるから、顔のどこかに一様に何か一種の哀愁を漂わせ、やがては、この国にいくつとてない帝国大学というところに進むことになっているために自然に誇らしげな粗暴な動作もあり、まちの人たちも、それを許していたので、はるえには、そのような若者は、角次を通じて知った若者に比べると何か段のちがった高貴さを持っているかに思えた。その上かれらは、はるえたちの全くふれたこともない横文字だけの本など読んでいる。

ある夏の日、七重と学生の間に不安を感じていたはるえは、自分の思いつきに、"これは素敵だ"と浮き浮きした。"そんだ、七重と赤山さぁと三人で遠足ずべし。赤山さぁ行ってる学校の裏手は練兵場だし、林や沼もあるで、まちの人の目などねえし、二人の仲をとくとさぐることも出来んべ。七重の気も晴れるというもんだ"

角次には、妹の気晴しのために遠足すると前もってことわっておいたが、学生の方にはその日になってから角次に内緒で電話で"学校の前で待っていて呉れ"と遠足の計画を打明けた。学生にしてみれば、はるえは亭主持ちの三人の子持ち女、妹の七重は出戻った女だが、生れ故郷を遠く離れて来ている淋しさもあって、その上女の情には自然にひかれる年頃である、七重にそんな気分を詩のような文句にして渡したこともある。又はるえの婀娜ッぽい仕草に、ひとりでに身体があつくなることもあったのだ。そういう気分を発散する激しい練習をやらなければならない運動部をきらって、文学青年風な片寄り方をして、髪なども首のあたりまでのばしている。

その日、はるえは客の注文で角次が朝の四時から精出して作った仕出弁当の残りを重箱にまとめて、七重をさそって学生とおち合った。二才の女の子は止むを得ず背中にしょった。妹の気晴らしのためということと、二人の仲を探偵するんだという姉らしい大義名分があった。だから気も晴ればれと口数も多くなる。

「赤山さぁ、学校の方あんべえどおすか、くにのあっちゃ思い出すべよ。淋しかこともあっぺネス」はるえは浮きうきと金属性の声に乗せてつい方言がすべって出る。七重の方は、学生の東京弁の手前をつくろう風で、慎重になって「うんだな」とか「そうしたか」とか口数を出来るだけ少なくしてはるえの気をいらつかせた。学生は二人の年上の女にはさまれて、少し怯え気味になり、首をかしげたり、うつむいたり、長い髪を細い白い指でかき上げて遠くの風景に目を細めてみたりして、はるえの

浮き立った気持に乗って来ない。はるえは、初めの計画より時間をのばして夕方近くまで二人に働きかけてみたが、結局かの女が〝素敵だ〟と思った名案遠足は夏の草いきれの中で、久しぶりに家事からとき放された解放感を味わっただけで、七重と学生の仲を探偵することも、七重の気晴らしという名分もさして実を結ばずに終ったのである。そのことが少しずつはるえを苛立たせ、それからというものは日増しに七重がいることを憎む方へ心が傾むいて行った。

「あんたぁ、もう七重うちさけえらへた方がええわ、ここだってせめえし、店番に猪之吉をこの部屋さ寝かへにゃ駄目ですべ」

ある日はるえは角次に強い調子で言った。

「うんだな、そうすっか」軍隊の下士官で鍛えた角次は我慢強い。一しょになってから三年もはるえの実家の厄介になり、店まで出してもらった引け目もある。

北の国の秋は短かく、木枯しがひゅうひゅう街を吹き抜ける季節が来たと思うと間もなく乾いた雪がはるえ、角次の店の筋向いの小学校の庭を白く染めた。あの夏の日の遠足から間もなく秋の弱まってゆく陽差しにさそわれるように七重の方から「実家さ帰る」と言い出して、かの女は隣県の実家へ帰って行ったのだった。学生と姉の前からすすんで身を引くというしおらしい姿であった。七重が帰ってしまうと、二階の学生はひどく酒を呑むようになり、時には粗暴なこともやる様子で、服が破れていたり、顎のあたりに擦傷のあとや血のりを残して帰ってきたりした。年頃の男が思う女をもぎとられた創あとを示していた。そういう時に、はるえは自分に言いきかせていた母性的な気持ちで学生の服を縫い繕ってやったり、疵口に油薬をぬってやったりして、さすが忍耐強い角次も何か思い当る風で、猪之吉にそれとなく二人を見張らせるようにもなっていた。

その日学生は風邪で熱を出して、学校へ行かずに寝ていた。はるえは氷枕をとりかえてやると、午前中二度、午後一度角次が配達に出はらっている時を見て学生の部屋へ上って来た。夕方に最後に来た時、湯タンポを入れてやると寝床のすそから手を入れるときに、学生の足をそろえるように手を添えて来てかの女の意志を電気のように学生の足につたえてから「ここさおいとくわ」とことわって何かを枕の下にはさんで行った。学生が手さぐりでとってみると紙きれに鉛筆で忙がしく書いたものがある。「あす、実家へ七重のことでいきます。馬首温泉秋田屋で待ってます。二日の予定来て下さい」

その晩霏霏というふり方で雪が激しくなった。八時すぎ、学生は三十八度はありそうな気怠い身体をおこし、夕方湯タンポを入れてくれたときのはるえの手の動きを反すうして熱をおかしても、はるえが待っているという

馬首温泉へ行きたいと心をきめ、犯罪をおかす者の心になっていった。〝そうだ、今夜先に此処を出て、友人の下宿にとまろう、そして明日の夕方馬首につけば、一緒だとは誰も思うまい〟。通りには、もう人通りは途絶えていた。はるえはもう例の鷺の湯へ行ったようだ。少し間をおいて学生は落ついた足取りで階段を下りて来た。居間の囲炉裏にいた猪之吉が十三にしては子供らしくない上目づかいになって学生をとがめるように言った。

「どこさか出かけんか」

「うん、友だちんとこ、試験のことで泊って来る。今夜は帰らんよ」学生は然りげなくよそほってガラスの引戸をあけ、戸外に出ると小走りになった。いっときも早く脱出したい衝動がさせるのであろう。角次はもう寝間に子供たちと引っこんでいる様子であった。猪之吉が学生の出て行くのを咎める風であったのは、多分はるえが鷺の湯へ出て間もなく学生が二階から降りて来たからであった。学生はその足で真すぐ友人の下宿の窓をたたいていた。雪はいよいよ激しさを益して来て、学生の胸部は風邪の熱のせいもあって、明日女のあとを追って行くことで悲壮な気分にしめつけられるようであった。それはかれにとって詩的な感慨というものでもあった。〝馬首温泉は、いつかはるえさんが湯治に行ったことがあると話した所だな。隣県のはるえさんの実家の町へ鉄道で行く途中だ。秋田屋というのは多分行きつけの湯治宿だろう。秋の収獲終えて農家や漁業の年寄りが一息入れるところだから温泉といっても、並んだ二階建ての長屋の欄干に湯の色で茶褐色にそまった手ぬぐいがずらりと干してある一握りの部落であろう。学生の服ではいけない。目立ってはいけない〟学生のあたまには、第一高等学校の正帽正服で旅先きで女と風のような思いをかわす川端康成の小説のひとくさりが往来した。学生のこころざしは暗くよどれていた。

次の日の夕方、学生が秋田屋をたずね当てた時には、はるえはまだ着物も着かえずに囲炉裏のそばに少し青ざめて立っていた。角次には、七重の再婚のことで実家へ行って、一週間ぐらい泊って来ると言っただけで、途中下車して学生と会うということは、はるえにとってもさすがに思い切ったことであったのだ。その部屋は何の飾りもない六畳敷きで、窓よりに囲炉裏があり、壁や畳の汚れは、七、八拾年の年輪を四十燭光の電灯の下にさらけ出していた。坐ったはるえの膝のところが少し割れて、着物の下の紫の花模様の長襦袢が学生の目にしみた。学生は、はるえの膝へ自然に行く目をつとめてそらしながら、もそもそと昨夜熱をおして一晩友人の下宿に泊ってから此処へ来たのだと言った。それは決して角次や猪之吉には気づかれなかったということと、自分は熱をおしても来たかったのだと、自分の気持ちを語りたいらしい。

「そうだっか」

はるえは余り学生の話に感動した様子はなく、「すぐ風呂さ入りまひょう」と言った。二才の赤子は、もう二つ敷かれた布団の隅で小さく寝ている。

さすがに風呂は男女に別れてはいるが、小さな木の引戸をあけて入ると、湯舟も、男女風呂の境の壁も、洗場の簀の子も何十年そのままの腐り方で、うす暗い裸電灯の中で湯気にぬれていた。ほかに湯治の客はいない。学生は風呂場の沈んだ空気にいよいよ悲壮な滅入る気分におち入りながら、それでも女湯との境の木の壁のくさった割れ目を気にしながら、湯舟の中に肩を沈めた。隣には、はるえがやはり独りの気配である。

「赤山さぁここさ来いへえ」

しばらくすると、隣からはるえの声がした。その声はいつもの金属性の明るさはなく湯気に湿っていた。学生は木の壁の片側にある人の辛じて通れる程のすき間から、身体の前をタオルで覆って、おずおずと隣りへすべり込んだ。湯舟の中に肩までつかったはるえは学生の身体にじっと眼を据えた。それは湯気の中でも不思議に澄んで光ってみえた。学生の手足のどんな細かい動きも見逃すまいとする熱意に燃えているようであった。両方の足先から湯舟の中へすべり入った学生がしゃがむ姿勢になると、はるえは湯を押して前へ出て、腕が静かに学生の頸を巻き、澄んで光った目が学生の顔に近々と寄った。学生には、はるえの肉づきのいい白い肩のほかは、何もかも湯気の中にかすんで、どんどん遠ざかる感じであった。

風呂からあがると、はるえは、学生には呆気ない程さっさと赤子のそばに添寝のかたちで横になり、先き程の湯舟の中の余韻にまだ呆然として立っている学生をうながすように「赤山さぁ、ここさ寝へ」と自分の隣りを指さした。学生のあたまの中に、とうとう此処まで来てしまったという気持ちと、間男という潔ぎよくない言葉が走った。はるえは、そのような学生の逡巡にはおかまいなく、赤子の寝いきを確かめると仰向けになり。目をとじて、やがて静かな寝息さえ立て始めた。学生は上体をななめに起したままで、少しはるえの仕草に不服げにその白い顔をじっと見入っているうちに、はるえの寝息の中に自分のうごきを窺っている気配を感じて、にわかに熱くなって来た。その時、障子をへだてた廊下から「はるえさぁ、電話だわな」と老婆のしわがれた声がした。人気のない湯治場宿の廊下に突然老婆の声、それは妖気と不吉な予感を学生にあたえた。学生が秋田屋へ入った時も、ただ「お客さんケ。はるえさ二階のつきあたりの部屋だす」という老婆の声をきいただけで、人影を見なかった。湯治客も他にだれもいない様子、これはどうしたことであろうか。いままで寝いきを立てていたはるえが、老婆の声に寝床を蹴る勢いで起きて、出ていった。学生は耳をすませたが、スリガラス窓ひとつおいて外の雪が静かに落ちる気配だけで、コトリとも音がない。時間は

可成り長いものに感ぜられた。はるえは戻ってくるや、半身を起したままでいる学生の頸に、いきなり腕を巻いて、石のように固くなっているからだの部分に手を添えて来た。先き程までの静かな寝息とは余りに裏腹なはげしいはるえの力に、学生は湯舟の中と同じように、破れた障子も、すすけた壁も、天井も、どんどん遠ざかる感じで、仰向けに倒れてはるえのするがままになっていた。はるえは学生のその部分にしっかりと手をそえたまま、落着いていい聞かす声で言った。

「赤山さぁ、おやずがあすう五ずに立って来ると、あんたぁ、わりいけど、朝早くここ出てけれ、宿にやおれよくと言っとくはんで、すん配いらねえ、たんだ、おやずさ会っちゃまずかんべ、わりいなぁ、せっかく来てけれたに」

その時、突然はるえの隣りに寝ていた二才の赤子が、小さな両腕を宙にふりながら、ワラワラワラと声を上げた。学生はぎょっとしてその方を見た。赤子は此処に着くなり寝かされて、充分寝足りた眼で二人を見ていたのである。そして、それが母親のはるえと二階の学生であることがわかって、思わずうれしくなったのであろう。喚声をあげ、両手を宙にふり、顔は笑いで一杯であった。

あくる朝、まだうす暗い通りを、学生は鉄道の駅へ走った。はるえは昨夜の仕掛けを恥じてか、まだ寝たままで、出て行く学生をうす目をあけて見送っただけであった。学生が宿を出る時、引戸の心張棒はたしかにはずしてあったが、家人の姿には矢張り出会さなかった。野犬が怪訝な顔で学生を見たが、その目の光におそれて、尾を尻の間に入れて逃げた。一昨夜からの雪は止んではいたが、走る学生の足をもどかしくさせる深さはあった。そして昨夜からずっと忘れていた風邪の熱がかっと身体中を駆けまわるようであった。寒駅にはまだ人気はなく、引き忘れられたカーテンの隅から、鉄火鉢に赤々と盛られた炭火と、その火鉢のそばに駅員が一人うづくまっていた。かれは身動きもしないから、その器用な姿勢で仮眠から覚めないのであろう。駅長の官舎風の平屋の建物が、まだ明りもなく、その駅に並んで黒々と横たわっている。学生のあたまに、駅員に自分の姿を見られてもいけないぞという気が機敏に働いたが、梁桁に掲げられた時間表は見なければならぬ。まだこの時刻では、まちへ帰る汽車はない。まちを五時に角次が出たとすれば、六時四十五分に、此処に着く。それまで、まちの方へ行く汽車はない。駅にいれば角次と会う。身の置き所のないあせる気持で今走って来た通りにずっと目をやる。雑貨屋、商人宿の看板、床屋の赤と青の縞模様の立て札、ポスト、その先に一軒明りがある。長い提灯が朝のうす暗がりの中に目立った。山の村から此の駅に物を運ぶ馬ぞり荷馬車のばくろうの朝食所であるらしい。学生は駅の

建物からぬけ出して、走って来た通りをとってかえした。

ゴロゴロとひどく軋る重いガラス引戸をあけると、もう学生より先客があったらしく、土間に据えられた長方形の岩乗な木製の卓子の上に四五本の銚子とうどんの丼が二枚、汚れたまゝほおってある。学生は通りが見える位置に、そして通りから見えにくい隅をえらんで腰を下すと、息をついて昨日からのことを回想する落着きをとり戻した。その回想は性のあと味についてではなく、灰色にぬりこめられた罪の思いと、このところをどうやって角次と会わずに切りぬけるかという苦しい思案であった。ちらりと七重のことも心の隅を通りぬけた。・・・はっとして時計を見る。六時五十一分、表の通りに目を据えたが、配達人らしい人の走る姿を見ただけで、駅から山裾の湯治宿の方へ行くらしい者はいない。学生が回想におぼれていた間に角次は前を通ってしまったらしい。それでは角次とはるえをやりすごすまで此処にひそんでいなければならぬ。その間をぬすんで逃げる汽車の便がない。先程から店の土間と調理台所を仕切るところに立って、胡散臭げに学生を見ていた店のおかみが近づいてきて学生にきいた。

「早いでねえか、何にすんね」

学生は小一時間という時間計算と、懐中の金を素早く心中ではじいて、空腹の感じは少しもなかったが、先ず酒と、三品もの食い物の名前を、壁に大きく張り出してある紙の札から拾いながら、なるべく出来るまで時間のかかりそうなものをえらんだつもりであった。一番先きに、酒とわんたんめんの丼がおかみの手でどすんと卓子におかれ、山盛りのつゆが少しこぼれた。学生は酒を湯呑み茶椀についで、一息に飲んで又目をガラス戸越しに通りの方へ据えなおした。角次は宿へ行ってはるえを連れて此処を通る。まさかこの店に入って来ることはあるまい。そんなことになれば便所を借りてひそむよりテはない。角次に会えばすべては終りである。はるえと同じ湯治場に自分がいる。はるえがいくら繕っても、どうしようもない。だから通りを睨む学生の目は異様に光り、少しづつ口に運ぶわんたんは何度も箸から卓子や土間に落ちた。七時二十分と学生は時計をよんだ。

前を行く。二人が行く。はるえは二才の赤子を角巻きにくるんで高々と背負っている、角次は普段の仕事着ではなく、袖のある長物を着ている。下駄も新しい。店を猪之吉にまかせ、はるえを実家までおくって行くつもりであろう。はるえの方はすっきりと顔を前に向けたまま、角次をふり切る風にして歩いて来る。角次は、はるえに纏わる足つきで何かしつこく言いながら来る。自分に断りもなく、途中汽車を降りて秋田屋に泊ったことを非難しているのであろう。学生と約束がありそうだという疑いは濃かったが確証はない。学生は息を呑んだ。二人は店の前をもつれるようにしながら通りすぎた。一昨日から

の風邪の熱と、昨夜の恍惚と、あおった酒の酔が全身を走った。ガラス戸越しに二人の動きに据えられた学生の目は、にわかにかすんで来た。角次とはるえとはるえの背中の赤子が、はるかに遠ざかる感じになった。突然はるえ、角次、と赤子の三人の姿が、三体の骸骨にかわった。三ツの骸骨が、奇妙に踊る足取りで、雪の道を駅の方へ遠ざかって行く。学生は、どっと横たおしに失神して土間に倒れた。肘でおされた丼と徳利が土間に落ちて激しくはじけ散った。

赤い腕章
――遠い冬の挿話――

山本儀一

どういうきっかけでミシコフと知り合ったのか、どうも思い出せない。終戦直後、唐草模様の服を着、サモワールを載せた馬車を牽いて進入して来た人相の悪い戦闘部隊は、たくさんのお土産をもって十二月上旬に撤退した。間もなくそれと入替りに、少し品のよい小部隊が再び進駐した。市民はがっかりしたが、もうこれからは暴行掠奪は影をひそめたようだ。

ミシコフが後から来た部隊に属していたことは確実である。彼はスタルシナアと呼ばれていたから、日本の軍隊の階級でいえば曹長に相当する下士官であった。軍服の仕立ても歩き方も並の兵隊とは違っていた。背丈はほぼ私と同じで軀つきはがっしりしていた。赤軍の兵隊には様々な人種が混っていたが、ミシコフは確かにロシヤ人であった。戦争さえなければ、例えばボルガ沿岸のコルホーズあたりで、一家の柱として働く篤実な農夫ではなかったかとも思われた。

私たちの一隊は内地出発前に、大東亜大臣から弔辞にも似た激励の辞を賜って渡満した誇り高き一団ではあったが、ソ連軍の占領下では何の役にもたゝず荷厄介な存在であった。哈爾浜牡丹江羅津など北満東満から押し寄せた「疎開者」と呼ばれた避難民と共に、臨時社員として露天掘で働いた。私だけが「芸は身を助ける」という喩えの通り、きびしい戸外労働から免れた。大東亜省の役人である隊長の紹介で、満鉄撫順炭礦本部内に設けられた「蘇聯本部」という所で勤務することになった。私は赤軍司令部に行って身分証明書を受領し、ペレボーチックと墨書きした赤い腕章を着けた。事務所玄関に掲げられたレーニンとスターリンの大肖像画の下をくゞって通訳室へ通った。撫順炭礦は石炭を軸とした一大コンビナートであったから、接収された厖大な財産目録を期限をきられて提出するとなると大変である。哈爾浜学院出と東京外語出が上級通訳の主流であったが、独学系の者

もかなりいた。通訳室では常に十数名の連中が忙しく働いていた。庶務から届けられた帳簿や伝票を露訳して表記するのが、下っ端通訳の主な仕事だったので、私でも辞書片手に務まった次第。見たことも聞いたこともない機器にぶつかって当惑することもあったが、上級通訳が出払っている時は、どうせ奴らが持去るものだからと思って適当な訳語をつけて済ましたこともある。

少年時代からのロシヤ文学熱が昂じて私は東京外語のロシヤ語専修科に二年通った。八杉除村という大先生の指導を直接受けることができたし、かっては二葉亭四迷もこゝに学んだのだと自ら言いきかせてはみたが、才も根も拙く結局ものにはならなかった。語学というものは、泳げない者がいきなり海中へ突落されるような経験に遭ってはじめて上達するものであろうと観念し、辞書を引き引きチエホフの短篇など読んで自足していた。はからずも身を助けた私の芸とは、こんな程度のものであった。

たまに人手が足りず将校や技師などをどこかへ案内するという破目になると、私は戦々兢々たる心情となった。一度、炭礦の幹部級のお偉方とソ連将校との交渉に立会を命ぜられたことがあった。私はヒヤリングは水準以下であったし、専門技術用語などはまるきり分らない。両者の言分の取次にもたもたしていると、炭礦側の偉い人は突然机を叩いて立上り、中国語でペラペラとまくし立てた。将校は呆気にとられて眺めていた。私も驚いた。自分のロシヤ語ば拙いばかりに、と自責を感じたが、やがて面に出せない可笑しさがこみ上げてきた。それまでの成行を見ると、将校の方が多少無理な注文をしている感があった。会談は結局ウヤムヤに終った。その後どういう解決をみたかしらないが、私は自分のような等外通訳にもこういう使い方もあるものかと感心した。その幹部級の人の甲高い中国語の啖呵に、私は満鉄マンの心意気を見た。占領下にあっても炭礦経営は日本人の手を離れては成立たなかったのである。そして、撫順炭礦コンビナートは翼下に避難した数万の日本人の生命を支える責務をもっていたのである。

私はこゝで敗戦悲曲を再び奏でるつもりはない。私は無風圏に息を潜めていた無力な傍観者にすぎなかったのだ。たゞこの冬の挿話の背景を簡単に書いておきたい。

赤軍戦闘部隊の引揚げた十二月上旬のメモによると、撫順市人口七万、内日本人二万、従前からの日本人社員三千、流入した疎開避難民三万五千。このうち満鉄関係を優先して二万が炭礦の臨時社員として雇用され、社宅に同居したり社員寮に詰めこまれた。残りの一万五千は主に開拓団等の集団避難民だが、市内の学校寺院等に収容された。廊下便所といわず屋根のある所には人間が充満していた。金品無一物で莚を敷き麻袋を被って寒さを凌いでいるが半ばは病人であった。永安小学校居住の三千人の疎開難民の七割は発疹チフスに罹っているときい

た。炭礦側では出来る限りの救済物資を放出したが、多くの倉庫は敗戦直後に現地民の襲撃を受け、それを免れたものは占領軍の徴発掠奪を受けていて思うに委せない。疎開難民は日本人社員の月給から天引される拠出金で辛うじて生きている。その額は月三十万円。当時私は二等書記として月給千円であったが、四割の拠出金の他に地区費その他を差引かれると手取は半分になった。食糧費だけは他の物価に較べて安かったから、今様に言えば私は独身貴族であったろう。

炭礦から見捨てられた場合は悲惨であった。十一月中旬、赤軍警備司令部は炭礦に対してこれ以上の難民の受入れは治安上認めないと通達した。開拓団への勤労奉仕活動のため渡満していた女学生の一隊は、渾河対岸の新撫順（現地民街）まで辿りついたが橋を渡ることができず、衣食に窮して大部分が現地民の妻妾となったという話をきいた。十一月末東満国境附近から千数百の疎開団が到着したが、警備兵から下車を禁止された。三日間炭礦側と交渉したが、車中で死者が続出した。糧桟街外れの渾河の河原に暴動のため屋根と側壁だけになった倉庫が二棟あったが、そこに彼等を収容することをソ連側も認めざるを得なかった。出発当時より約三割の人員を失い三四才以下の幼児はほとんど死亡していた。救済用の被服食糧が支給されたが、彼等がこゝで越冬することは無理と思われた。満人の人買いが出没した。男児の方が値が高く四五十円から八九十円という相場ときいた。難民の売るまずい手巻煙草二十本入りが十円もしたから、ひどく安く買い叩かれた訳だが、母親からすれば金額の多寡は問題ではあるまい。育てきれぬと観念した上は、離ればなれになっても無事に成人してくれよとの祈りをこめて手放したに違いない。開拓団には若い男手はなくほとんどが老人子どもと女であったが、長い戦いの間に身につけた哀しい規律をもちつゞけていた。幾何かの代償で満人に春をひさいだ後家さんが団長から面罵されて除名された事件があったが、鉄の規律はすぐ崩れた。死ぬものは死に生きようとするものは街へ出ていった。

炭礦の引継書類の露訳完成の慰労午餐会があったのは、たしか十二月八日であった。福合楼という大きな料理屋で、はじめて本式の支那料理らしいものを食った。一卓七百円ときいて驚いたのを憶えている。飲むだけ飲み食うだけ食ったら、私は事務所へ戻った。やりかけの伝票の翻訳があったのだ。羅津からの疎開者で私と同様通訳に拾われた金子が一緒について来た。彼は私に対して同じ等外通訳としての連帯感を懐いているらしく、馴れなれしかった。私にとって、それは多少いまいましくもあった。前にこれからは共産主義を勉強しなけりゃ世間に後れるよ、などと忠告めいた口を利いたとき、私はあやうく彼の横っ面を張りとばすところだった。金子は私の脇へきて、行こう行こうとしきりに誘った。午餐会のとき同じ卓で喋っていた木島の話をきいて興奮したなと察した。木島は永安台へ行けば、最低五円高くても二十円までゞやらせると話していた。五円くらいのは満人労働者相手のあばずれが多いが、二十円も出せば処女だそうだ。もちろん皆難民の女たちである。寒空に氷の上に立って煙草を売ったり餅を売ったりしているよりは、この方が楽だからどんどん増えているという。「行ってこいよ」と私はつっけんどんに言ったが、別にこの男を蔑んでいたわけではなかった。私だって身中鬱勃たる思いを懐いていないわけではなかったが、難民同志が故地で春を売買することの佗しさに堪えられそうにもなかった。それに肚をきめれば女は強いもので、市場の包子屋で働いていても、下町の薄暗い飲み屋で働いていても、金のない見栄っぱりの日本人よりはドサクサまぎれに一儲けした現地民のおやじ様の方が、はるかに親切で頼り甲斐のあることを知っていたようだ。

それにしても木島がなぜこんな情報をひけらかすのか、不審に思った。木島は大へんなドストエフスキーかぶれで、ひどく観念的な小説を書いて私に見せたことがある。偏狭にして驕慢、四周の民族を愛することを知らなかった日本民族は、今汚辱の淵に呻吟しつくし、やがて古い堅い殻を脱ぎすてゝ素裸で立上った時こそ、全世界の霊的指導者となり得るのだ、というような宗教的妄想が謳ってあった。木島はまた、雪の路上で日本の女がロシヤ兵に犯されているさまを目撃して、いやロシヤ兵が日本の女を犯しているさまを目撃して、だったかもしれないが、大へん感動したと語ったことがあった。私は呆れて彼の顔を見つめ、この男は頭がおかしくなったのではなかろうかと思った。しかし、自分でどうにも打つ手がない悲惨に直面した時、思い切って感動してしまうのも一つの心術かもしれない。私は後でそう思い直して頷いた。

私たちの一隊は敗戦の夏以来ずっと霽月塾という寮に住みついていた。街外れの渾河畔にある校舎風の労働者住宅は灰色に煤けた殺風景なものだったが、永安橋を越して眺める夕日だけは美しかった。対岸には黒ずんだ低い家並が続き、戸毎に出す煙が眺望をぼかした。屋上に上ると橋のたもとに立つ警備兵の姿が見えた。時々豚の鳴声もきこえた。日が暮れると橋には灯がともった。南へ渡る雁の群をいくたびも見た。屋上は亡国の感傷に耽るには最適の場所であった。

双十節をすぎる頃から苦力風の労働者が次々と入りこんだ。毛布を盗まれた者が何人か出た。他に何もない私たちには炭礦支給の毛布は最大の財産である。誰を咎めることもできない。もはや主人公は彼等であった。十月下旬、私たちは割当てられた日本人社宅に分散入居した。疎開難民の受入れは義務づけられていたから、若い単身者は歓迎された。

私が接待係主任矢野氏方に迎えられたのは通訳室に勤めていたからであろう。家族は主人夫婦と両親に似て大柄な十八才になる娘がいた。藤子と君子という二人の接待婦を預っていた。これは戦後の内地風に言えばオンリーさんである。さらに二人の若い男がいた。一人は矢野氏の息子進君でもう一人は友人の佐々木君である。共に学徒出身の飛行将校であった。飛行機が足らず空を眺めているうち敗戦となり、地理に明るい進君は佐々木君をつれてわが家に潜入した。佐々木君は無籍者であり、公安局の戸口調査などある時は、当分の間息を潜めていなければならなかった。

藤子は矢野氏の長女ということで、市内大官屯駅長のカピタンのもとにいっている。時々ママに会いに帰って来るので、目下フリーの君子と一緒に奥の四畳半をとってある。向い合った六畳には夫婦と娘が寝た。茶の間の向いの六畳には二人の元飛行将校が寝た。私はいつまでも夜更しする習癖があるため、電気スタンドを引っぱって床の間に寝かせてもらった。カーテン代りに毛布を垂らした。少し窮屈だったが半年ぶりに布団に眠る気分は格別であった。寝つかれない夜は枕もとの白乾児（パイカル）酒を口のみした。酷寒期に入ると私の寝床は煖房の通りが悪くて寒かった。明け方になると必ず眼がさめた。床の間の壁一面に吐く息が凍りついていた。私はこゝで正月の雑煮を戴き七草頃まででのんびり過した。

接待係主任ともなれば物資の上でも多少の融通はきゝ、一応は恵まれた生活をしていたが、この家にも不安の種はあった。

翻訳完成慰労会の前後だった。帰宅すると奥さんがつきつめた表情で電話していた。「いいかい。進を迎えにやるまで絶対に戻って来ちゃいけないよ。分ったね」娘に堅く念を押していた。何事かと門口に立っていると車が着いた。藤子と二人の将校と顔みしりの警備司令部の通訳がおりた。将校の一人は藤子の旦那のカピタンであり、もう一人は恰幅のよい身ぎれいなマイオールであった。二人の将校は門口に迎えた人々と握手した。マイオールは背後に立っていた私にさえ温和な微笑をたゝえて握手を求めた。通訳氏のあわたゞしい話によると、少佐は単身でいるので適当な配偶を欲しがっていて同僚のカピタンの話をきいてついて来たのだそうだ。だからめかしこんで気どっているとのこと。奥さんと藤子は儀礼的に、もうすぐパパが帰ってくるから上って一緒に食事していくよう勧めたが、藤子を残して彼らはすぐ帰った。少佐の狙いが娘の知枝子らしいと感じてマダムは気が気でなかったのである。先日進君が街へ出た序に藤子のもとへ頼まれていた衣類を届けたところをカピタンが見た。あれはお前の弟ではなく情夫だろうと疑った。ママの所へ行くといってよく外出するのは男に会いに行くためだろうと責めた。藤子は、そんなに疑うなら今すぐ一緒に

家へ行って両親や弟妹に会いましょうと言い張り、忙しいのを無理やり連れて来たという話。妹がいるという事をきいて少佐ももの欲しげについて来たという次第。「急いで通訳さんに電話してもらったんだけど、丁度知枝子さんがおらず進さんがいてくれてよかったわ。ご免なさいね、ママに心配かけちゃって」藤子はこんな商売の女としては素直で無邪気である。気転がきいて相手にも好かれる。矢野氏の娘としても通用するが、カピタンの嫉妬で不意討をくわされ、その上娘の知枝子まで狙われたのではおちおちしていられまい。

フリーの君子も悶着の種となった。帰宅して呼鈴を押すと、珍しく君子がドアを開けてくれたことがあった。

「あ、お帰んなさい」君子はすり寄って耳もとで「今日はこれなのよ」と囁いて親指と子指で打ち合う仕草をしてみせた。間近すぎる女の香に虚をつかれて、私は大げさな表情で驚いてみせた。いつも婦唱夫随でうまく調和している家庭だから、チャンバラやるとすればお互の胸に溜りに溜った毒気を吹きかけあったのだろう。旦那は茶の間の食卓に両肱ついて顔も上げずに茶を啜っており、マダムは私の会釈に答えたのを汐に立ち上って流し台に向った。六畳では知枝子が育ちすぎた肉体をもて余し臼のような膝をくずして一人で花札を弄んでいた。私は居場所を失った感じで君子について奥の間へ入った。

君子は電灯をひねって横坐りに坐ると、すぐ編針をとり上げた。タブーは意識していた。こうして身近に坐ることはめったになかった。君子は手を伸して灰皿をとり私の前に置いた。「ねえ、もうたくさん、て言うの何ていったらいゝの。あたしあんまりしつこくされると、嫌よって日本語で怒鳴ってやるんだけど」それはどうやら私をもてなすための会話らしかった。「いやなことは何でもニヱートでいゝじゃないか。だけどニヱートニヱートばっかり言ってりや、商売上ったりじゃないの。編みものばっかりしてなきやならなくなる」私が意地悪を言うと、脹れ瞼の大きな眼を光らせおちょぼ口をぱくぱく動かして応戦する様は愛らしく楽しかった。東満の兵隊町で左褄をとっていた彼女は疎開難民の一人であった。年は二十八というが華奢な身体と色白な肌で二三才は得をしていた。しかしロスケ相手にはこの家の娘のように大柄な健康優良児の方がよかったらしい。ここの奥さんの蔭口によれば、あんまり商売気を出しすぎ取れるものなら何でも取ってやろうという肚を見すかされ、今まで勤めていた将校にも「キミコ、ニヱーハラショー」と断られたという話であった。君子だけが他の女のように定った相手と長く続かないのは、ロスケ向きでないとか商売気がありすぎる為ばかりではなく、身体の弱いせいもあろうと私は思っていた。こちらへ来てからもよく彼女は風邪を引いたりして臥っていた。彼女たちの身分は接待係嘱託だったから、矢野氏が引き取って不思議はない

が、藤子のように健康で相手の受けもよければ同居とは名目だけ、たまにママに会いにお土産でももって立寄り茶飲話でもして帰ればよかった。君子が加わってからこの家の空気もいくらか変ったようだ。勤め先が決っても彼女は三日行っては四日休みという風で家にいる日が多かった。矢野氏の沈鬱な表情が明るくなったのは確かである。家庭麻雀を一緒にやるくらいはよかったが、君子と花札を弄んで夜更しすることも珍しくなかった。

君子はしばらく黙って編む手を動かしていたが、ふと顔をあげて私の方へにじり寄った。

「ねえ山口さん、あたしこの家出たいの。やっぱり居ちゃまずいでしょう」

「へえ」

私は気のない返事をして、君子の脹れぼったい眼を見返した。今日の争議も原因は君子と見た。口さきだけで出て行くと言ってみても、それは虚勢である。どうしても出て行くなら、もう一ランク下らなければならない。マダムのこぼし話にも合槌を打ち、君子の愚痴の相手をするのも下級通訳の務であろう。

「この前の将校の所へいったら。ちょいちょい戻らず少しは辛抱するのさ」

「あそこはクビよ。クビじゃなくたって行く気がしない。どうせ無事に内地に帰れるとは思っていないんだから、せめて辛い勤めは余りしたくないの」

「おれが身受けしてやろうか」

「ふん、金も住いもないくせに」

君子は私の手の甲をつねった。

「こないだおかあさんに会ったら、うまくすれば一軒もらえるかもしれないと言ってた。そうすればあたしも少しは気兼なしに休めるよ。あんたもこんな家にいないで用心棒においでよ。大体こゝの奥さんなんかあたしたちを人間だと思っていないんだから。なにさ、年甲斐もなく断髪なんかしちゃって、自惚が強すぎるよ」

君子の声が高まるのを制すると、彼女は私の耳もとに口をよせていつまでもぼそぼそと続けていた。

矢野氏が接待婦預りのお役目を早く返上したいと思いはじめた頃、先着の戦闘部隊の引揚げに続いて例のカピタンもマイオールも帰国することになった。新しい部隊が再来したとき、矢野氏はもう接待婦は受入れまいと決意したが、その必要はなくなった。「おかあさん」を中心とした炭礦庶務課接待係嗔託グループは、さらに若干の補充をして中央広場の高級社宅の一角に晴れて居を構えたのであった。

一時流行していた社宅街の奥さん娘さんのざん切り頭と軍装は影をひそめ、外套をつけない着ぶくれた兵隊服はすぐ難民と分った。きらびやかな衣裳をつけた街の女たちが、人力車を連ねて中央大街を練り歩く姿を見かけ

おかあさんが
という意味

たこともある。

進駐した新部隊は市内各所に分駐したが、既に接収してあった高台の高級社宅には、将校とそれに隷属する小部隊が入った。兵隊たちは庭に幕舎を設けて作業や食事をしていた。空屋が幾棟か残った。庭付の一戸建または二戸建のテラスハウスは平社員のアパートや長屋から見れば瀟洒な邸宅であった。部屋数は多く煖房もよく利き、大きな浴室ではいつでも程よく湯が沸いていた。疎開難民が飢えと寒さと病いに苦しんでいる時、炭礦長以下幹部が窮屈な同居生活をしているだろう時、私は生涯で最高の豪華な住居で起居していたのである。申訳ないことだったが、矢野氏の指示によることである。もっとも籍は元のままであった。二階は接待婦たちの宿舎であった。総勢十名ほどと思われたが全部揃うことはない。「おかあさん」と呼ばれ指の関節が異様に膨れた初老の婦人と、時により顔ぶれが変る二三人の姐さんはいつもいた。おかあさんのもとに戻ると、みんなひどく陽気で無作法であった。日本の冬のように炬燵に入って縮こまっていることはなく、寝そべって自分の旦那の悪口を言いあって笑ったり、南京豆を食いながら豪快な屁を放つ姐さんもいた。君子はおかあさんの小間使のようになっていた。菓子を買いに行くのも茶を淹れるのも君子であった。暇があるとおかあさんのために何か編んでいた。私にはそれが君子の必死の生き方に見えた。あばずれとは思えなかった。私は自分から二階を訪れることはしなかった。広い階下の部屋に一人寝ころがって本を読んでいた。たまに君子が、「ヤーさん、おいでよ」と呼びにくることがあった。退屈しのぎの茶飲話とか、麻雀の人数が足りない時である。私は一応用心棒という形であり、赤い腕章を見て彼女らは幾分は心強く思ったかもしれないが、事情を知っている近所の兵隊は近よろうとはしなかった。

私は暇を見ては近くの幕舎を訪問した。手持ちぶさたの兵隊に近づいて、彼らの話をひき出すようにした。若い兵隊はベルリン攻略の手柄話を意気ごんで話してきかせた。彼らの早口のロシヤ語は断片的にしか理解できなかったが、独ソ戦が片づくと彼等がすぐ極東へ送られてきたことは分った。とにかく調子よく合槌を打っていれば徴発してきた旨い満洲煙草にありつくこともあったし、時刻がよければわりといけるロシヤシチュウのお相伴にも与かれた。もちろん勘定高く掠奪品を売りつけようとするものもいたし女を世話しろという奴もいた。しかし、赤い腕章のせいか私が訪れる幕舎の兵隊たちは概してホスピタリティに富んでいた。だが、どういうきっかけでミシコフと知り合ったのか、どうも思い出せない。とにかく仲間の平田が死ぬ以前に、私がミシコフという温和な下士官とある面識をもっていたことは確かである。

平田が発病したのは十二月半ば頃だったと思われる。

赤軍部隊が交替した空白期に当っていたが、市中の治安に異状はなかった。日本人たちが八路軍と呼んでいた東北人民自治軍が、すぐその空白を埋めた。彼らは市内にひそむ元警察関係者や国民党のスパイの摘発に努めていた。「新日本」という旬刊の日字新聞を発行した。新しい部隊が進駐するとすぐ市外周辺に退いた。治安が安定すると街の表情は徐々に変ってきた。それは流動期のいっ時の繁栄と言えるかもしれない。かっての目抜き通りはさびれていたが、市場と呼ばれた中華街は終日雑踏していた。どの飲食店にも日本の女が働いていた。それに続く丘の下の道は毎日が縁日であった。片隅には手巻煙草や餅を売ったり、売食いの品々を並べる日本の女が目立ち、銃を肩にかけた公安局の兵士がぶらついていた。奉天撫順間の列車交通も回復したらしく、電柱にメッセンジャーの広告も貼り出されていた。「世界紅萬字会為貧苦難民施粥」の黄いろいポスターの脇には、「麗人募集」や「飲食店開業」のけばけばしいポスターが並んでいた。中央広場で三人の日本人強盗が銃殺されたのもこの頃である。

私たちの仲間には露天掘で働く意味を見失って去る者が多くなったが、平田は最後まで踏みとゞまって働くグループの中にいた。私は発病直後、仲間と二人で住んでいた一間きりのアパートに彼を見舞った。彼は自分の体力に自信をもっていた。私も発疹チフスくらいでこの男が死ぬはずはないと信じていた。

既に入院していた平田が危いという報せを受けたのは、暮も押し迫った頃だった。昨日あたりから譫言を言うようになったという。事務所はもう休暇に入っていたが、私は何故か見舞う気持にならなかった。一日ぼんやり平田のことを考えていた。一番体格のよい頑丈で死にそうもない奴が一番先に死ぬのかと思った。早稲田を出た男で一見柔道部のOBといったところである。日灼けした丸顔一ぱいに無精ひげを生やし、時折り飴色の眼鏡の下からギョロリと眼を光らせるのが、もっさりした表情のアクセントであった。内地で教育を受けていた頃はよく居眠りをしている姿を見かけたが、決して鈍重でも粗暴でもない正義派であった。深いつき合いは無かったが私は彼の誠実さに敬意を懐いていた。敗戦前後の会合の際など、こういう時にあり勝ちな恰巧よい昂揚した主張を、冷静にきゝ分けようとする耳をもっていた。彼の宿は他の仲間のような設備のよい社宅ではなく、部屋の真中にストーブを置いたアパートであった。平田は黙々と剛情にきびしい環境の中での一つの生き方を示していたようであった。この日は日中でもマイナス二十三度。先日降った雪が、たった今降りやんだ雪のまゝに樹々の小枝に光っていた。一番生きていなきゃいけない奴が先に死ぬのかと思った。

一月八日。たしかこの冬四度目の大雪だった。暖かい

日だった。事務所で平田が峠を越したという知らせをきいた。たゞ咽喉のたゞれが嵩じているということだが、附添いの仲間はさして気にしてはいない。奴が死ぬはずないのさ。私は明かるい気分で帰宅した。床の間の壁の氷は一面に張りつめていたが、これが最後の夜であった。明日からは中央広場の高級社宅に移ることになっていた。私は久しぶりに街の恋人たちを夢みて眠った。

寒い朝だった。病室の寒暖計は零下二度を示していた。集った四五人の連中は葬式の相談をしていた。平田の枕もとには一本箸の盛飯が寒々と供えてある。赭黒い死顔は生きていた時と変らず、たゞギョロリと人の心を見すかす眼が閉じたまゝであった。

遺体はすぐ運び出さなければならない。二十五六名の集会が出来る場所は中央広場の空社宅しかなかった。通夜の手配の分担をきめてから、「ヤマさんに一役引き受けてもらわにやならん」と中島が言った。彼は剣道の達人で口八丁手八丁の情報通である。

「今どき火葬場へ持ってったって、いつになったら焼いてくれるか分ったもんじゃない。隠亡の奴、コンミッションをやたらと釣り上げとるちゅう話だ」

墓穴を掘ろうにも凍結した大地は鶴嘴の先を受けつけない。茶毘に付するには木材入手の当ては全くない。金のない難民たちは死骸を火葬場の内庭にこっそり置いて帰ってくるという。

「そこでだ、あり余った金のない我々には脅迫しかないのよ。今、奴等を脅迫できるのは大鼻子(ターピーツ)だけなんだ」

中島は私の顔を見てニヤリと笑った。中島の企図はすぐ分ったが、その時すぐ頭に浮かんだのがミシコフ曹長であった。

棺桶をどうするかが難問であった。ぜひまともな寝棺に入れてやりたかった。街の葬儀屋を探し歩くなどは論外である。棺材を資材倉庫から持出すということは、たとえ庶務課の承認を得たとしても、それからが大変だ。ロスケの管理下にある以上今夜の間には合うまい。最後の手段として空屋の床板を引っぺがすという案が出たが、発覚した場合隊長の立場も考えなければならぬ。結局棺桶は二次的な課題とされた。

病院から担架を借りて中央広場の空社宅へ運んだ。一週間前の大雪が凍って足場が悪い上に、四人で担ぐ平田の遺体はひどく重かった。通夜会場は私の住む接待婦宿舎と庭をへだてた隣家である。

打合せがすむと私はすぐミシコフの幕舎を訪れた。出来るだけ悲しげな顔をして頼んだ。

「私の友人が死んだ。火葬にするために協力してほしい。もし差支えなかったら、明日の昼頃、わずかな時間で済むから私と同道してもらいたい」

暇だったとみえてミシコフはあっさり引受けてくれた。私はミシコフの手を握ったまゝもしやと思って言ってみ

た。

「死んだ友人は大へん善良な男だったが、材木がないため棺桶に入れてやることもできないのだ」

私の言葉が通じたのか、ミシコフは同情の意を表して何度も頷いた。

毛布をかけた平田の遺体は、上座に設けた寄せ集めの祭壇に担架のまゝ安置された。形だけの焼香が行われた。霽月塾から分散して以来はじめての会合である。市場で仕入れて来た白乾児(パイカル)酒や雑多な肴が並べられ、あちこちで声高な追憶談がはじまった。私は呼ばれて玄関に出た。勲章をつけたミシコフが立っていた。連れて来た従卒が立てかけた板の束を片手で抑えていた。「棺桶が作れるぞ」私は後ろに立っている仲間に言った。二人のロシヤ兵は拍手で迎えられ、隊長の隣りに腰をおろした。器用な上坂は棺桶作りを買って出た。「われわれもロスケも考えることは同じだ」と笑って、近所の社宅へ道具を借りに出かけた。持ってきた板は明らかに上質な床板であった。通夜は次第に賑やかになっていった。二人のロシヤ兵も快活に調子を合わせていたが、ミシコフが従卒に何か囁いた。少年の幼さを残した小柄な従卒はやゝ渋った風を見せた。するとミシコフは左手の甲を腰にあて胸を張った。従卒は弾かれたように起立した。廊下の鋸の音が流れこんだ。ミシコフはゆっくり「スピルトを持ってこい」と言った。やがて従卒は携行用のガソリン缶をさげて戻って来た。ミシコフは水を求めスピルトの飲み方をまず私に教えた。盃のスピルトを顔をやゝ上向きにして咽喉の奥にほうりこみ、やおら水を飲んで胃袋の中で薄めるのである。うっかり舌の上にのせたら口の中が爆発する。咽喉から食道へかけての痛烈な刺戟を楽しんで、ガソリン缶は次々に回された。一瞬かすかな甘みを感じて、あの青臭い白乾児酒より後口はよかった。何人かの珍妙な歌や踊りのあと、ミシコフは従卒の手をとって座の中央に出た。二人で踊ったのが例のコザックダンスというものであったろうか。見事な脚のバネであった。二三人飛び出して真似て踊ってみたが、側でみるほど易しくはなかった。

座があまり乱れないうちに送り帰してくれと私に言ったのは、一隅にいる硬派の悲憤の声をきゝつけたからであろうか。隊長はお世辞笑いを浮かべてミシコフの手を握り謝辞をのべた。それは例えばこんな風な文句であった。「お蔭様でありがとう。謝々。サンキュウ。スパシーボ。わたしはお礼のしるしに、ユウに(こゝで隊長はミシコフの胸を指したのだ)ハラショーマダムを世話するからな」ミシコフは意味が通じたのかどうか、握り合った手を振って上気嫌で頷いていた。私は不安だった。分ろうとする意欲さえあれば言葉の障壁など問題ではない。難民の未亡人でも連れて来させるつもりだろうが、隊長の気紛れで走り回らされるのは気が進まなかった。

玄関で別れるとき、私はミシコフに明日迎えに行くからと念を押した。ミシコフはダアダアと頷いた。そして、マダムを待ってると言った。私も仕方なしにダアダアと頷いた。

部屋へ戻ると、廊下で棺桶を作っていた上坂たちが、「さあ納棺だぞ」と叫んで人を集めた。隊長は他愛なく酔潰れていた。私は副隊長石田の袖を引いた。

「どうする。あのロスケは隊長が女を世話するといったのを本気にしてるぞ」

「何とかなるよ」

石田は平然としていた。彼は私より年下だが一期先輩で、大東亜省理事官という下っぱ役人の肩書きをもらって、私たちと同行したのである。やゝ軽薄だがいゝマスクをもっていた。どこへ行っても女に不自由はしまいと思わせるタイプの青年であった。

「何とかなるじゃ困るよ。みんなが社宅へ帰ってしまやあ、ロスケの矢表に立つのはこゝに残ってるおれだけなんだから」

石田はちょっと軽蔑の微笑を浮かべた。「下町のバーに行けば女はいくらでもいるんだよ。おれが下話をつけて置くから、そのうち二人で行ってみようや」

翌日約束通りミシコフを連れて街外れの火葬場に行くと、すでに棺は到着し七八人の仲間が待っていた。火葬場の構内には足のふみ場もないほど死体が散乱していた。立ったままの位置からだけで四五十体は見えた。手作りの担架に乗せたまゝのもの、アンペラの上に寝かせたもの、凍土の上に直かに置かれたもの、なまじ毛布や衣類をかけてやっても剝ぎとられてしまうから同じ事だ。どれも桜の木肌色をした裸形であった。凍結して腐臭はない。発掘された土偶とも見えた。死体たちはもう土に還ったも同然で、凄惨な感じは薄かった。覗きこむと屋内にもぎっしり詰めこまれている模様だった。そしてその屋内からこちらを覗き返している眼があった。

「呼んでくれ」

打合せで中国語を担当することになった内原にいった。声をかけられた隠亡はノロノロと全身を現わしたが、私たちの一群に近よろうとはしない。彼は明らかに一群の中に大鼻子(ダービッツ)を認めていた。この男をこのまゝこゝに眠っている土偶たちの間に割込ましても、不自然とは思えぬ容貌風体である。眼を凝らせばその煤けた顔の生地が、気味悪く青白いのが生きている証しと見えた。身にまとった綿服は形容し難い色合いに汚れていた。

呆れ顔で立っているミシコフに私は頼んだ。何を喋ってもよかったのだが、

「あの男を睨んで、この棺をすぐ焼けと言ってくれ。大きな声で」

ミシコフは柔順だった。私は内原に大鼻子の意向を伝える態で言った。

いまいましい気分だった。だが、一度梅子をミシコフに引き合わせれば私の役目は終るはずだった。それから先のことは知ったことではない。私は自分の錯覚をわらった。

翌日梅子はぼってりした外套を着てやってきた。まるで熊だった。私が幕舎の中へ案内すると、あちこちに屯する兵隊を見て足がすくんでいた。私は梅子の背を叩いた。

「ミシコフはこの幕舎で一番偉いんだよ。あんたはその客人として訪問したんだから堂々とついて来なさい」

兵隊の間を通り抜けると奥にミシコフがいて、気嫌よく立上って迎えた。

「お前さんのお客を連れて来たよ」

それから、梅子に言った。

「これから先は通訳は要らないんだ」

ミシコフは梅子を迎えると、背に手を回して、続きの社宅にある私室に案内した。梅子が心細げに振返ったが、私は急ぎ足で幕舎を去った。

通訳室の仕事は暇になった。要人と立会う必要のない臨時通訳は、午前中は雑談で過し午後は市場街へ昼飯食いに出かけたまゝ帰らないといった日々であった。暇はあっても金がなかった。「黒猫」の類いの麗人のいる店はもっとましなのがいくつもあったが、アブク銭でも摑まぬ限り飲みにはいけない。矢野氏宅にいた頃、市場街の包子屋で顔馴染の娘が転業して飲み屋で働きはじめたので四日ほど通ったことがあった。こちらへ避難してくる前は、東安の地方事務所に勤めていたという、素顔が少年のような快活な娘であった。訪れる度に唇の色が濃くなり安手の脂粉の香が強くなった。酒を少しばかり飲んで雑談するだけの私が良客でないことを知らされた。それも哀しかったが金がなくなったのでやめた。一回行けば四五十円はかゝるのである。食費は払ってあるので飢えはしなかったが、昼食抜き節煙の日が当分続いた。

この頃は立食いで昼食をすますと、凍った道を最近開店した永安食堂まで歩いて、三円の甘酒をすゝった。こゝは疎開難民の雇用拡大のため単身社員寮の食堂を改装したもので、講堂ほどもあるコンクリートの床の窓際に一列にストーブと食卓を交互に並べた殺風景な喫茶室だった。奥の方は原穀高粱の袋を積んだ倉庫になっていた。こゝで働くのは若い単身女子疎開者であった。彼女たちはいつもストーブの周りで肩をすくめてお喋りをしていた。驚くほど薄着であった。私が行くとすぐ飛んでくる悦ちゃんという娘は、いゝ肉づきをしていたけれど笑くぼの頬のあたりから下は白っぽく鳥肌立っていた。三円の甘酒をのんで悦ちゃんとちょっと言葉を交し帰途につくのが日課となった。私は救済用にもらった外套の下に内地からもって来たレインコートを重ねて着ていた。弱

屈さが先立ちどっしりとしたシュウバでも着こんだような錯覚を得られたがそれはいっ時で、濡れた軍靴から冷えがじわじわと上ってきた。その代り帰宅すれば天国であった。気まゝな時に湯につかり、あちこちの社宅から借り集めた本を寝ころんで読んでいれば金はかゝらない。

こうして一月の末頃まで平安な日々が続いたが、ある日運悪く主任の爺さんに摑った。

「山口君、鏟子溝まで行って来てくれませんか」

言われた時は近くの事業所までの使い走りかと思ったが、鏟子溝採炭所長に紹介されると気が重くなった。所長は極めて慇懃に今回の出張の目的を説明した。鏟子溝は解放前は煙台といって鞍山製鉄所に近い無煙炭を産する小さな炭礦である。昨夏ソ連軍の侵攻と呼応して中共軍が北上したが、その一部隊は煙台の日本人社宅から十数名の娘たちを徴用しミシン隊を編成して吉林方面に行動した。帰途数名の病人が出たミシン隊を、治安のよい撫順で炭礦本部に托し遼陽に引揚げた。三月余り従軍し一ケ月撫順に療養滞留したその娘たちを送還し、若干の坑木と火薬を輸送するのが、出向した所長以下三名の目的である。

「護衛兵をつけてもらうよう警備司令部の方へ申入れておきました。大連直行の列車に有蓋車を一輛をつけるそうだから心配ないと思うが、蘇家屯では必ず止まるから、停車場司令部へよって一応挨拶して、念のため輸送許可証を確認させて置いた方がいいね。明朝九時に駅へ行って下さい。それから、シュウバなかったら通訳室用のやつを使いなさい」

かって沿海州ゴロだったと蔭口されている主任は、否応もなくテキパキと指示した。

「帰りはどうなるんですか」

私は心細くなっていた。主任は煙草のヤニがしみついた反歯を見せて微笑した。

「来た貨車をとめてのりなさい。直行が何本かあるでしょう。もちろん機関室にのらなきゃだめよ。凍っちゃうから」

ぶっきらぼうだが思いやりがあった。

その日帰ると石田がやって来た。彼は仲間が分散した家々を回り歩いて、何か旨い話があると一口のるという生活をしていた。

「梅子はどうしてるかな。ミシコフと旨くやってるだろうか」

傍にいながら、私はあれ以来ミシコフとも梅子とも会っていなかった。無意識に避けていたのかもしれない。

「どこかであったな。むこうから声をかけて来たよ。ロスケと具合よく続いてるかと訊いたら、親切な人ですと言ってた。そりゃ黒猫で嬲られるよりはましさ。何べんかキャンプへ寄ってる口ぶりだった。でも、あんまり金にやならねえだろうな」

私は石田に、明日から二三日家をあけるから差支えなかったら泊って居てくれと頼んだ。石田は気易く引受けた。二階には「おかあさん」の外に姐さんが二人来ているけど絶対にチョッカイ出すなよと釘をさしておいた。この男と関わり合うとどうも厭な尻ぬぐいをさせられる破目になりそうな不安があったのだが、男手なしにはして置かれない。石田は笑っていた。

撫順駅に着いた時は、所長以下娘たちは暗い有蓋車の中に閉じこもっていた。何時に出るか分からぬというので、私は待合室へ来てストーブに当っていた。とろとろと煮えている飯盒からなつかしい魚の臭いが流れてきた。白ちゃけた灰汁の泡の中で鯉のぶつ切りらしいものが踊っていた。絶えて魚というものを食ったことがないことに気づいた。カーキ色の胸に赤い星の徽章をつけたモンゴル系の少年兵が飯盒を持去った頃は、もう正午を過ぎていた。窓ごしの一月の空はすすけた屋根の上に青く光っていた。私はしばらく放心の静寂の裡で遊んでいた。

六時間またされて列車は動きだした。暗い有蓋車の中央にストーブがあった。男たちは前部のベンチに腰かけてひそひそと話し合った。めったにありつけない清酒があり白いお握りも豊富だった。後方のベンチには十数名のお針子たちが肩を寄せ合っていた。時々含み笑いもきこえたが、まだ健康が回復せず介抱されている娘もいた。彼女たちは歓びと安堵を抑えてあと数時間の経過の平穏を祈っていたのだろうが、貨物列車は至極のろのろと走っていた。男たちは酒をのみ回し私にも勧めたが異様なほどもの静かであった。突然娘たちが一斉に立ち上ったので驚くと、彼女たちは男たちの方に背を向けて半円陣を作った。放尿の音がいくつか交替し終ると、娘たちはまたベンチに戻って肩を寄せ合った。暮れかゝった頃停車した駅で貨車から飛びおり、駅長室に腰かけていたもの静かなカピタンに挨拶し証明書を提示したのが、私の通訳としての唯一の業績であった。

翌日所長宅で一服していると昨夜おそく帰宅した娘たちが挨拶に訪れた。所長が娘たちの無事帰還のために払った心労と尽力は大へんなものであったろう。明るい日差しのもとでみる娘たちの笑顔は感動的に美しかった。私は歓待されて所長宅に二泊した。手持無沙汰のいたずら小僧の遊び相手になったり、坑内見学をしたりした。それはエアポケットにも似た一瞬の楽しく空虚な時間であった。最後の日は所長と共に遼陽にある中共軍司令部に出向いて挨拶した。その夜は紹介してもらった支那宿の炕の温みの上で一人泊った。遼陽の方が列車を摑え易いという理由からだったが、心細かった。

私は主任に言われた通り列車の機関室にのり込んだ。先客にロシヤ兵がいた。私が大鼻子に馴れ馴れしく声をかけるのを見て、中国人の火夫は何も言わなかった。狭い機関室で立ち通しだった。兵隊は奉天で下車した。撫

順駅についた時はすっかり夜になっていた。帰宅するまでに二度自動小銃をつきつけられた。二度目はミシコフの部下だった。

石田はまだいた。二階のおかあさんたちと麻雀をやっていた。留守中は何もなかったようだ。枕を並べると石田は小山の話をした。小山が香油やヘアトニックを作って売捌く計画だという。もともと彼はこの仲間に入る前に、奉天の中山太陽堂に勤めていたことがある。鬚は濃く眉は太く中国流豪傑の風貌を具えていたが、実は人当りの軟かい大人風の男であった。彼の中国語は実地で覚えた訛りの強いものだ。まだ日本人には危険だった頃から平気で奉天まで往来して、昔の同僚から化粧品や薬品を入手して捌いていた。こんどは自分で製造販売するというのである。

「大豆油と香料とアルコールがあれば簡単に出来るんだとさ。奉天の会社にはまだ原料が残っているので、それを分けてもらって活用しようということだ」

「でも、そんなもの誰が買うんだね」

「もうまもなくロスケは帰るという噂だ。売り食い生活の社宅の女たちだって、髪が伸びりゃ手入れはしたいだろう。羽ぶりのいゝ満人たちだって買うはず。春になって世間が落着きゃ需要もふえるさ。彼、目のつけ所がなかなかいゝじゃないか」

石田はひどく乗気であった。

翌日石田が帰ってから私はゆっくり骨休みをしたが、休暇は一日で終った。ミシコフが悄然とやって来たのはその翌日であった。私は一件以来ミシコフと会う機会がなかったが、出張前に石田の話をきいて安心していた。ミシコフの姿を見たとたんいやな予感がした。部屋へ上げると、突立ったまゝ股間を指して、こゝがおかしいという。それを聞くと頭へ血が上った。それは怒りに似ていたが、その対象は定かではなかった。部屋の隅へ彼を呼びよせて、私は出来るだけもの馴れた口調で、出して見せろといった。ミシコフが前をはだけると、中肉中背色白の坊やが恐縮して頭を垂れていた。かって徴兵検査の時若い医務官が無表情に指先を使って自分に与えた屈辱を、私はそのまゝミシコフに与えた。彼の坊やが白い凄汁を垂らすのを見て、私は一瞬痛快を感じた。子供の頃いつも私を苛めていたワルガキを思い出した。そいつはいつも片方の鼻の孔からチョッピリこういう風に白いものを垂らしていた。私はポケットにあった紙を渡して拭きとらせた。洗面所に連れて行き二人並んで手を洗った。ミシコフがやめようとすると、もう一度、と言って洗わせた。こんないゝ奴に病気をうつして自分に難題を背負わせた女を憎む気分になった。梅子。あの熊女め。何が素人だ。あばずれの嘘吐き女だ。私の気分は吃っていたのでそれからは行為で教えた。彼の手を股間にあてるとすぐ蛇口の下へもって行く動作をくり返し、よく手

を洗え、分ったか、と繰返した。彼は素直だった。股間にあてた手を顔にもって行き眼をこする真似をさせ、その度に、ニヤート、と叫んで手の甲を叩いた。こういうことをすると眼が痛んで見えなくなるだろう、分ったかと繰返した。

「二三日に薬をもってくるから、今の注意をよく守ってくれ」

結局は軍医にかゝらなければ治癒しないだろうが、自分なりの誠意は示したかった。

「おれの居ない時に、お前は梅子以外の女と寝なかったか」

私が山をかけて訊くと、ミシコフは意外にも素直に浮気を認めた。

「その女だ」

私は責任免れの口実を見つけた思いでやゝ心が安まったが、まだ梅子への疑念がはれたわけではなかった。

私はミシコフを帰すとその足で小山の社宅をたずねた。石田が寝ころがって小説を読んでいた。小山は奉天に出かけたが夕刻までには帰るはずという。

「薬がないかと思って来たんだ。あのロスケ淋病になっちまった」

「奴らはほんとに好きものだからな。そういうこともあるだろう」

「他人事みたいに言わないでくれ。あんただって多少の責任感じたっていゝんだぜ」

「おれが責任もつのは初回だけだよ。あとあとまで面倒見られるかね」

「まあ、そう言われりゃそうだ。だがあいつ、おれの留守に他の女と寝たって白状したから梅子ばかりは責められない」

「実はね、ヤアさんの留守中にミシコフが来たんだ。ウメコ、ウメコって煩いから他の女を連れてきて宛てがったんだよ」

「その女だ」

ミシコフに言ったと同じ言葉で詰った。石田は身体を起して笑った。

「絶対そんなことはない。名前は言えないが素人だよ」

「あんたの素人はあてにならんよ。でも梅子と同様、吟味済みだったのか」

「まあ、おれが発病しない限りは、女の罪は問えないな。考えても見ろ、いくら顔みしりのロスケだっていきなり来られちゃ泡くうぜ。おれの知ってる単語なんていくつもないもの。手真似身振りでやっとこさ一日の猶予を得たんだ」

元大東亜省理事官は留守番の責任を果すべくそれなりの努力はしたらしい。

「なぜおれが帰った時、それを話さなかったんだ」

「実はな、いや、ナニが終れば互いに満足して右と左

にさようならだ。あとは、世は事もなしさ。何の後腐れもなくそれっきりで終りなんだ。それにあんたの部屋を借りた。おれはちょっと出すぎたことをした気分だったので言いそびれたわけさ。ヤアさんは純真だから想像もできないかもしれないが、後腐れさえなけりゃ名にし負うロスケとこっそり一度だけ濡れてみたいという奥さんだって、広い社宅には居るんだぜ」

私の頭は混乱した。とりあえず小山への薬の伝言を頼んで引揚げることにした。薬が手に入ったら自分が届けると、石田は約束した。

その日の夕方、私は梅子の家の前で待ちうけた。私を見ると、あら、と梅子は黒い顔をひきつらした。

「まだ戻ってないというので、家の前で待っていたんだ」

「家の人、誰が出たの」

「十四五の娘さんだ」

梅子は表情を和げたが、私の訪問に対する警戒は消えていない。戸外で立っていて私もかなり冷えてきたが、家の中へ招こうとする気配はない。その方が好都合だった。

「ミシコフが淋病になったよ」

私は梅子を睨んで言った。出来たらこの女から薬代ぐらい巻上げたい気分だった。

「まあ気の毒に、いつのこと」

「他人事のように言うな。きのうおれの所へ来て訴えたので調べてみたんだ。出来たことは仕方ないけど、あんたも少しは責任を感じてくれなくちゃ」

「あら、あたしもう一週間以上もあのキャンプには行ってないのよ」

「黒猫へは通ってたんだろう」

「いえ、あのお店やめました。お姑さんが具合わるくて看病していたし、妹が公安事務所に勤めるかもしれないので、あたしがあんな仕事してるって判ったら都合わるいんです。あたし、絶対にあの人の病気とは関係ありません」

きっぱり言った梅子の黒い顔には必死の色が浮かんでいた。なるほど梅子の足が遠のいたのでミシコフが我が家を訪ねたといえるかもしれない。私の貧弱な性病知識によれば、あの病気の潜伏期は三四日であろう。梅子の言葉が嘘でないとすれば、これ以上は責められない。

「お姑さんを、お大事にな」

私は吐き棄てるように言った。石田の言葉も疑えないとすると、さらに第三の女を設定しなければならない。ミシコフがどうして第三の女を手に入れたかはともかく、悪くすれば社宅の奥さんが被害者になってしまう。私はもう何の意味もない犯人さがしを諦めることにした。

一日置いて石田が薬をもって来た時、私は第三の女についての懸念を話した。石田は私にミシコフにもう一度

確かめたらいゝと言って大した関心を示さず、小山が今忙しく飛び歩いている模様を話した。石田は錠剤の瓶と注射薬の箱に注射器まで添えてもってきた。

「このスルファミンという新薬は品薄で奉天でもなかなか手に入らなくなったという話だ。注射も平行してやった方がいゝそうだ。発疹チフスに罹りやすぐ癒るっていってたけど、それはどうもな」

私はすぐ幕舎に行きミシコフにあった。言われた通り服用法を説明し、注射薬と注射器も渡したが、彼らが注射を甚しく恐れることを知っていた。神妙な面持ちのミシコフに私は忠告した。

「早く治癒することを望むなら、軍医の治療を受けるがよい。完全に治癒するまでは絶対に女を求めてはいけない」

第三の女について問いたゞす気はしなかった。世界に冠たる好き者を集めたソ連軍が、しっかりした性病対策をもたぬはずはあるまい。私はミシコフが恥を忍んで軍医の診療を受けることを信じたかった。

その夜、私はミシコフと社宅の奥さんが愛し合った、そして恐らく石田と奥さんが愛し合った毛布の上に、大の字になった。やっと騒々しい日々は終った。鏵子溝の美少女たちの夢でも見て眠りたいと思った。

矢野氏宅にいた頃は朝晩二食は古き良き時代の日本食が保証されていたが、高級社宅に移ってからは滅多に白い米の飯は食わなかった。市場には高粱粉玉蜀黍粉などで作った安直な主食品が豊富に出廻っていたので、それで済ましていた。矢野氏の奥さんからもらってきた手鍋一つで湯を沸し汁をつくりたまには粥のような飯も炊いた。

一人なら読書するに事欠かず、碁の好きな奴が来れば碁盤碁石は立派なものがあり、頭数が揃えば賭麻雀で共食いをし、金がある限りはまことに優雅な日々だった。

そのうち川村が居ついてしまった。川村は共に平田の遺骸を担いだ仲間である。平田の死の前後から露天掘をやめる者がふえた。この敗戦の街の雑踏の中には、病気さえしなければ何かしら飯の種はころがっていた。従来からの社宅の住人もこの冬の間ぐらいは若い居候を一人や二人食わせてしのぐ余裕はあった。川村に言わせると、露天掘に行ったって発破の穴を三つ四つ掘ってあとは小屋で焚火に当ってるだけでやることはないのである。現場は飽和状態になるまで臨時社員をつめこんでいた。活動的な実務家である川村には、街の繁栄をよそにいつも茫洋と煙っている湖底で怠惰な労働を続けることに我慢ができなかったらしい。

「今一番いゝ商売は売買だが、肝心の物がない。社宅の日本人は物をもっているが売り食いの使い走りではどうも旨味が少ない。そこで狙いはロスケなんだ」

私は川村の着眼に一応は感服したが、彼らが取込んだ物をどうやって、こちらに取戻すつもりなのか。

「資金があれば安く買い叩けるが、それは今は無理だ。そこでだ……」

そこで、川村と私は洗濯屋をはじめたのである。私は幕舎を回って兵隊たちから洗濯ものを集めて戻る。肌着類から外套までもちろん彼らの上官のものを含めて、顔見知りがあちこちいたから注文取りは楽だった。石鹸は多めにもらってきた。川村は褌一つで風呂場で働いた。風呂の湯は四六時中沸いていた。夜は川村がどこかで工面してきたアイロンをかけた。出来上ると私がそれを幕舎に届けた。代価は、黒パン煙草石鹸ローソク羊毛皮ベーコンの切端、その他雑多であった。自分たちで食うものはとって置き、売買するものは川村が街へもって行って物々交換したり現金に換えたりするという仕組である。川村は確かに露天掘にいる時よりは生々しい労働の実感は得たはずだが、余りに忙しすぎた。

どちらからともなく、これでは無理だという意見が出て一致した。もう一人助手がいないと注文を消化しきれないのである。口が一つ増えるということは生活にかなりの影響を及ぼしそうな心配があったが、それだけ注文を拡げれば何とかなりそうだ。この暮には、居留民会長炭礦長連名で全社員に檄が飛んだ。難民の窮状を訴え炭礦にはもはや余力がないから、せめて一人が一人を助けるという気持で救済の手を差伸べてほしいという趣旨であった。女手を一人見つけてくることに決した。私は川村に心あたりをきいた。

「いくらもいるよ。選ぶのに骨が折れるだろう」

私にも街角で見知ったいくつかの顔があったが、いずれも空白な夢を托するにはよいが、一日中ロスケの肌着を洗濯させるにはふさわしくなかった。

「じゃ委せよう。健康で労働できる人というのは当然だが、若いきれいな未亡人なんていうのはやめようぜ。お互いの友情のためにな」

「わかった、わかった」

川村は翌日中年の婦人を連れて帰った。油気のない赤茶けた髪を無雑作に束ね、着ぶくれた兵隊服の下でふっくらした腰だけが女であった。唯一の財産は肩から下げた雑嚢で、縫いつけた白布に、「羅津市松原町三五宮地杉枝三十四才B型」と書いてあった。何もきかずにすぐ風呂に入れ、身につけたものを全部洗濯させた。当座の衣類を二階のおかあさんに借りに行くと、上げるわよといって女っぽい衣類やモンペを分けてくれた。これでヤーさんも落着けるわねと、どうとでも解釈できる祝辞を頂いたが、落着いたのは確かであった。洗濯業の分担がほゞきまったのである。川村はたまに出る大物の洗濯と夜のアイロン掛けが主で外歩きが多くなった。杉江さんは昔懐しい流行歌を唄いながら終日浴室で洗濯した。そ

の上彼女は乏しい材料で朝晩の食事を拵えてくれた。唯一つの誤算といえば、幕舎の兵隊があまり豊富な物資をもっていなかったことだ。彼らの食い残しが主で換金物資は少なかった。終戦直後私たちの一隊は現地民の暴動掠奪に備えて生活用品倉庫の一つを警備していたが、戦闘部隊が進駐してくると自動小銃をつきつけられて鍵を奪われてしまった。彼らは衣類食料品酒煙草等倉庫の品々をごっそり運び去った。後から交替した今の部隊はあまり甘い汁にはありつけなかったようである。

この奇妙な家族がどうやら平安に厳冬期を過すことのできたのは、杉江さんの力に俟つ所が多かった。時には明日の米がない日もあったが一銭の金ももたず彼女は平然としていた。浴室からは相変らず古い流行歌と水の音が絶えなかった。私も川村も浪費を節して女主人公に献金せざるを得なくなった。

二月も末に近い夜、私は思いがけずミシコフの訪問を受けた。私は川村と一局打ち終ったところだった。お粗末な見落しから中央の大石が死んで投げた時、ほとんど忘れていた不吉な異国の友人が現れたのである。川村はそゝくさと隣室に隠れてしまった。私が愛想笑いして迎えると、ミシコフは、ウメコに会いたいと言った。私の気持は動転した。

「病気は治ったか」

「治った」

「それはよかった」

私はミシコフの全快を信じきれぬ気持だったが、一応は喜んで見せ抱えるようにして部屋へ上らせ、碁石の散らばった碁盤の前に腰を下させた。どう対応すべきか、時間をかせぎたかったのだ。

「日本の面白い室内ゲームを教えよう」

私はミシコフの表情に構わず五目並べのやり方を説明しはじめた。ロシヤ語の数詞の変化は苦手だったし、そうでなくとも私の説明は支離滅裂であった。一人で黒石と白石を交互に打ち、並べては崩し並べては崩ししてその度に、分ったかと訊いた。ミシコフは熱心に私の理解し難い片言をきいているようでもあり、私の言葉は全く耳に入らず別な事を考えているようでもあったが、念を押すと渋々頷いた。気迫に気おされたのかもしれない。だが私の頭の中では天秤にかけられたダアとニュートが激しく揺れ動いていた。

「さあ、やろう」

私はまずミシコフに黒石を天元に置かせ、白石を一間離して打った。ミシコフに黒石をもたせて促した。彼は教えられたように石をつないで置いた。私がやゝ考えるふりをして次の白石を打ち、さあと促すと、ミシコフはもう手を動かさなかった。

「ウメコに会いたい」

私は大きく頷いた。こうして自分がやっていることの

意味が分らなくなった。何のために時間を稼ごうとするのか。私の態度は玄関にミシコフの姿を見たときから決っていたのではなかったか。私はミシコフに腰の拳銃を抜かせたくはなかった。このロシヤ兵の上に自分が勝手に描いてきた甘い幻想を壊したくはなかった。それは厳しい敗戦の冬の間、凍える両の手でそっと囲って守り続けてきた幻の花であった。

「ウメコを本当に愛しているのか」

ミシコフは明るい表情でダアダアと頷いた。そのとたん、私は激しい自己嫌悪に襲われた。黙って立ち上ると兵隊外套をひっかけ防寒帽をかぶった。

人影のない暗い雪の道を、私はミシコフと肩を並べて黙々と歩いた。雪の路上で日本の女を強姦するロシヤ兵の姿に感動したと語った通訳室の同僚の顔を思い出した。私は木島の心術の卑しさを冷笑したのだ。しかし木島の見たものは「事故」と言えるかもしれない。私は今、純朴なロシヤ兵と醜い日本女との間の恋物語をデッチあげて免罪符を得ようとしているのであった。わが身可愛さのために、苦しい避難行の末にやっと貧しい平安を得た家庭を破壊しようとして歩いているのだった。家族の前で息子の嫁を強姦させるためにこうして歩いているのであった。いくら自嘲の罵声を浴びせ掛けても、私の足は意思のない木偶の足になっていた。

「こゝだ」

窓に黄いろい灯が滲んで静まりかえていた。

「ウメコは年老いた母親や妹たちと、この家で暮している。おとなしくしてくれ」

これがミシコフに言った最後の言葉であった。門口でノックする音がきこえると、私は急ぎ足で立去った。胸の中はがらんどうであった。

三月になって牡丹雪が二日続けて降り、街は春を迎える粧いをした。川村は外を出歩くことが多く、様々な情報をもたらした。中にはかなり眉唾ものもあった。とにかく、ソ連軍の撤退は間近いらしい。奉天あたりでは既に北に移動しているという。ロスケのあとは農村に基盤をもつ中共軍がすぐその空白を埋めているらしい。国民政府軍は破竹の勢で北上しつゝあり、その先陣は北支派遣軍司令官の率いる日本兵であるから、満洲を征圧するのは時間の問題であるという。春になれば日僑遣送が始まるだろうという。外地にとり残された夢想はすぐ情報となって拡がった。

私は自分に失職の時が近づいているのを感じた。洗濯屋稼業も終りである。安逸に慣れた自分には他の連中のように巷を彷徨する逞しさがないことを知っていた。今まで自分の心中にピンと張りつめていた絃が切れた感じになっていた。食いつめたら食いつめたでその時のことさ、と肚をきめていた。

三月の半ば頃赤軍部隊は突然撤退した。街には東北人民自治軍が再び入った。彼らは一様に赤い襟章のついた草色の軍服に人民帽という粗末な服装であった。日本人に対しては従前通り公正であり、専ら来るべき中央軍の進攻に備えてスパイの摘発に力を注いでいた。市外の丘で時々スパイの処刑が行われた。

中共軍の市街進駐は私たちの生活には影響を与えた。高級社宅の立退きを命ぜられたのである。二階のおかあさん一家はいち早く姿を消した。高級社宅は中共軍関係の要人の宿舎となった。しかし私たちは測らずもこゝで再びミシコフの恩恵にあずかることとなった。一棟だけ居住にたえず放置された家があったのである。玄関をあけたとたんに眼鏡がくもった。とっつきの八畳間の畳が五六枚壁際に積みあげられ床板がはがされていた。暗い床下から蒸気の洩れる音がしていた。恐らくあの少年兵が作業中誤って蒸気管の上に足を踏み外しでもしたのであろう。八畳の襖戸をたてても廊下と階段は濡れて滑り易かった。浴室の隣りの六畳と二階の一室は居住可能である。私たちは無断でこゝに住みついた。

川村は新しい職探しに仲間の社宅をとび回っていた。丁度その頃小山がヘアトニックの瓶をもってやって来た。評判がいゝからセールスをやってみないかと勧めた。きれいな赤い色をして嗅いでみると苺の香がした。とても頭にふりかける気はしなかったが、川村にとっては渡りに舟であった。間もなく香油も出来るといった。

私は依然として仕事のなくなった通訳室に勤めていたが、赤い腕章は気恥しくて外した。私の生活が乱れきらなかったのは杉江さんの存在のお蔭かもしれない。洗濯屋廃業となると彼女は自分も街へ物売りに出たいと言った。川村も私も許さなかった。二人の男は女主人に辛い思いをさせないように生活を慎まねばならなかった。救ったつもりが救われていたのだ。

私は事務所で矢野氏に出会ったとき、社宅移転の事後承諾を求めた。矢野氏は頷いた。簡単に修理できそうだが、というと、直せば君らはいられなくなるだろうと笑った。話によるとおかあさん一家は中央軍が入城するまで隠して温存しておくつもりらしかった。

「君子が入院した」矢野氏は最後に言った。胸を抑えて、もうダメかもしれないと言ったが、私は何も訊かなかった。病院に見舞いに行こうと思わなかった。たゞ、死んでも誰も泣いてくれそうもない脹れ瞼のあばずれのために、私はその夜二三滴の涙を落してやった。そして、時おり心の痛みと共に想い起すことのある梅子とその家族を、是非明日にでも見舞ってみようと決心した。ミシコフのノックの音を背後にきいて立去ってから、私は様々な想像空想を描いていた。それは概ね不吉な破滅的なものであったから、なかなか訪れる勇気が湧かなかったのである。

顔をのぞかせたのはいつか見た少女であった。少女は私の顔を見ると、おかあさん、と呼んで姿を消した。初老の婦人が穏やかな表情で現れた。

「山口ですが、梅子さんいますか」

「お名前伺っておりました。色々お世話になりましたそうで、さあどうぞどうぞ」

梅子がどういう風に私を家族に話していたのか訝ったが、人懐しげなその母親のものごしはひとまず私の心を落ちつかせた。先住の人から借りたらしい古い茶箪笥とちゃぶ台が一つあるきりの貧しい部屋であるが、私はそこにある平安を嗅ぎとった。

「せっかくお出で頂きましたが、梅子さんはもうこゝにはおりませんの」

婦人は気の毒そうに言ったが、その語調は私の気持とどこかもどかしい食違いがあった。梅子は三月のはじめ突然黙って姿を消したという。

「地久節の頃大雪が降りましたでしょう。その二三日前だったと思いますよ。今まで黙って外泊したことはありませんし、この大雪の中をどこでどうしているのかと、みんなで話し合いましたが、それきり戻って参りませんの。あたくしも気にかけてはおりますが、足が不自由になりましたので街へは出て行かれませんので、まき子に、はい公安事務所に勤めております長女でございますが、この娘に心懸けてくれるよう頼んで置いてあるのですが」

この姑の言葉には嫁の梅子の所在を是非ともつきとめようとする気負いはなかった。彼岸もすぎ春を望む心の温みとうらはらに、私はこの婦人のもの静かな語り口に、どこか冷え冷えとしたものを感じた。

「息子さんは応召されたそうですが」

「はい、シベリアへ連れて行かれたことと思います。あの六月に赤紙がきて二月ばかりで終戦ですからまるで捕虜になるために応召したようなものでした。でもお互いに達者でさえあれば、必ずまた会う日が来ると信じておりますの」

母親は平静に見えた。

「こちらへ避難される途中、お孫さんをなくされたと伺いましたが」

「いえ、倅はまだ独り身でしたから孫はありません。梅子さんがそういゝましたか」

婦人は微笑した。

「梅子さんとは避難の途中で知り合い、そのまゝ一緒に参りましたの。お子さんをなくしたというお話、あたくしも梅子さんから伺いましたよ。女ばかりでこちらへ辿りつくまでの苦労は、とても口では言えません。あたくしは今さら思い出したくもありません。梅子さんは単身でしたから途中で大へんお世話になったことがありますの。その時以来梅子さんとはぐれてしまい

ました。撫順に参りまして、幸い倅が満鉄と関係のある会社に務めておりましたので、わり合い早く社宅に同居させて頂きました。当座は長女が街の店やに手伝いなどしてどうやら過して参りましたが、梅子さんのことは絶えず気にかけておりました。ある日まき子が通りでぱったり会ったといって梅子さんを連れて参りました。本願寺というお寺で雑魚寝をしているという話でしたのでお世話になった方を捨てゝはおけません。こちらで冬の間だけでもと一緒に暮すことにいたしましたの。もとからこゝに住んでおられたご夫婦の方にはずい分お世話になりましたが、階下をあたくしどもにすっかり明けて下すったので、梅子さんには玄関脇の三畳に住んで頂きました」

「そうでしたか。私は梅子さんが出征された息子さんのお嫁さんだとばかり思っておりました」

「梅子さんも身寄りがなくて淋しかったのだと思いますよ。でも本当の嫁以上にあたくしたちの力になって下さいましたのよ。まき子の働きだけではなかなか大へんな時だったのです。それにあたくしもこちらへ来て気の張りが緩んだのでしょうか、しばらく寝込んでしまったりして。今はまき子も公安事務所に勤めさせて頂くようになりまして、乏しいながらも少しは落ちついて参りましたが」

「なぜ突然姿をけしたのでしょう」

「さあ、それは……　あたくしどもは内地へ帰るまでご一緒したいと思っておりましたのですから」

私はもう梅子について何も考えまいときめた。少し箍がゆるむと青臭い文学的幻想がきりもなく拡がるからだ。たゞ、もう一つだけ訊いておきたい事があった。

「以前、夜分にロシヤ兵がお宅を訪ねて来たはずですが」

「さあ、そんなことがありましたでしょうか」

婦人は首をかしげて宙を見ていた。私はもう何も訊くまいと思った。梅子が嘘の多い女だったことは疑えないが、この婦人も何かを隠している。私は二人の母娘の印象から、まだ会ったことのないまき子の面影を漠然と描いた。まき子はあの夜の出来事を知っているはずだ。まき子にあの夜の真相を語らせよう。私は淡い敵意をこめて決意した。

末の娘は窓格子によりかゝって外を眺めつづけていた。母親と私との対話の間、一度も振返らなかった。窓の外の通りではさきほどから中共軍の小部隊が訓練を繰返していた。意味の分らない号令の声が時々部屋の中まできこえてきた。奉天蘇家屯附近で国共の戦雲が日増しに濃くなっている頃であった。眺めつくす少女の背中は敗戦日本のみじめったらしい青年にいささかの関心をも示してはいなかった。

やがて撫順市周辺で散発的に砲声がきこえ、中共軍は

無傷のまゝ撤退した。下町に小さな暴動が起きたが市中は平静であった。

中央大街に国民政府接収委員歓迎の大アーチが飾りつけられ、炭礦本部玄関上に掲げられたレーニンスターリンの大肖像が、孫文蔣介石の大肖像と入替ったのは、およそ二週間後の三月三十一日であった。

この日蘇聯本部通訳室もひっそりと解散した。事務所を出ると、いつも鵲が群れていた玄関前の大楡の芽が心なしか膨らんで見えた。

（五六・一一・三）

連載

ハイラル挽歌（四）

第一章　海拉爾の白旗

金子正義

（一）

豊橋予備士官学校の教官であった原中佐は、昭和二十年三月関東軍第三課参謀を命ぜられ、更にハイラル混成第八十旅団参謀に転補された。彼は関東軍勤務は二度目であり、陸士の同期生も多いので気安く内地より赴任した。だが、関東軍司令部、第四軍司令部、師団司令部と順次転属報告をしながら前線に行くに従って、自分の転属旅団の立たされた戦局面の容易ならざる事態が次第に判って来た。彼はもう生還を期し難い最后の奉公の時機に面したと思った。

原中佐が着任した時は、ハイラルに昭和十九年六月迄駐屯していた二十三師団が、ノモンハン事件に全滅的な敗北をした教訓を生かして、ハイラル周辺を強力な防衛陣地に構築し直してあった。

堅固なペトン陣地には歩兵二百五十五連隊、三百六十二連隊、四百九十野砲機械化兵団より成るハイラル防衛旅団が配属されていて強力に見えた。地下要塞は開戦時に立て籠るので、平時は第五地区伊東山陣地の東山塵満鉄分岐線付近一帯の広大な軍事施設内に待期していた。

原中佐は着任直後砲兵隊の藤堂大尉の案内で、各隊将校連絡下士官等を伴ない、車で防衛各陣地を丹念に視察し廻った。

ホロンバイル平原の緩やかな丘陵地帯に在るハイラル市街を取り囲むように七、八百米の五つの山々が隆起している、地下要塞はこの山々を巧みに利用して満洲里方面より進攻する敵に向って砲座を据えたペトン永久陣地で、東西南北を第一地区より第五地区と編成し、各陣地は独立して戦闘が出来るようになっていた。中でも市街の西方にある第二地区陣地は最も堅固で、これを中心として五つの陣地の砲座は相互に射角が交叉して一台の戦車も侵入できない完璧の防禦陣地となっていた。

原中佐は要塞陣地の配置と構造に一応は満足したが、

肝腎要の要塞砲が一門も無いのには驚いた。申訳程度に少数の迫撃砲が備えてあるが、戦車に対しては野砲以上でないと何の役にも立たない。僅かに第二地区陣地には、十五サンチ加農砲三門と十サンチ加農砲二門があったが、残念なことに一定方向に固定されて転回が利かなかった。照準鏡を覗くと十五サンチ砲は満洲里方面に、十サンチはハイラルの東を流れる伊敏川の溪谷に照準をつけてあった。折角の火砲が陣地の南と東に向けたままで反対方面には向けられないのである。敵が旨く砲の射角内より進攻すれば捕捉殲滅できるが、死角に入ったら無力である。

「何んたる事か、後方内陸部や満鮮国境方面強化の為とは云え、此れでは強力なソ連機甲部隊に一気に抜かれてしまうであろう」

と原中佐は遙か満洲里の空を見渡して暗然とした。

彼は他の軍事施設も形ばかりではないかと不安を覚えたので、山の地下要塞を出ると疲労を厭わず各軍事施設を廻って丹念に点検した。果してハイラルの郊外に在る兵器廠に行くと七・五サンチ旧式野砲二門が放置されてあった。随行の迫撃砲の下士官に操作させると未だ充分使用に耐える。野砲ばかりでなかった、弾薬庫には予想外の砲弾、破甲爆雷、小銃弾等が残されてあった。

原中佐は、南方転出の二十三師団が如何に慌しく転出して行ったとしても、空しく戦力を死蔵しているのに啞然として、藤堂大尉に直ちに各要塞に配備するように命じた。巡視が終ったのは夕暮であったが彼は直ぐ旅団司令部に行き、野村旅団長に型通りの巡視報告をすると、

「防衛陣地は聞きしに勝る貧弱さです。要するに鎧冑が大き過ぎて体が小さいのです。おまけに弓矢も太刀も無いと言う訳です。竹槍肉弾で戦えと言うのでしょうか」

と巡視からの憂鬱をはらすように言った。

童顔で小柄であるが良く肥満した少将は

「ふうん、ふうん、そうか、服が大人の服で体が子供のような訳だな、身動きが取れんな、だが、今更別の服を新調する時間は無かろう。陣地に手を加えたり、新に陣地構築しても始まらんな」

と暗に師団の後方開嶺付近の新陣地構築の愚を諷刺するように言った。

原中佐は腹に据えかねたように、

「此のハイラル東西南北五地区陣地の約四十粁平方を守るには戦時編成一個師団半、約三万の兵力が必要と思いますが、現旅団の兵力は約一万、然かも四千は国境の三河・満洲里・磋嵐等に分散配備されています。戦力の不足は早急に補充するとしても、戦略上とは言え要塞砲を転出させてしまったのは取り返しのつかない事です。旅団の野砲十二門、迫撃砲二十四門を五地区に分け度いと思いますが、歩兵部隊が小銃と機関銃だけとなってしまうので敵機甲部隊には立ち向えなくなりますがどうであ

りましょうか」
と尋ねると、野村少将は、
「戦車に対しては火砲より肉迫攻撃一本に防禦戦術を変える以外にない。早速訓練を始めてはどうか」
と言った。原中佐は、
「地下要塞という身を守る立派な防弾チョッキが有るのに残念ですな」
と呟いたが野村少将は黙念と目を閉じたままであった。
翌朝早速旅団司令部で原中佐を中心にハイラル防衛作戦計画を練り直し、基本作戦要領を纏めると午後には各中隊長を召集して防禦作戦を伝達した。野村旅団長がはじめ訓示した。
「……戦局の急に臨み各要塞に新に予備の野砲・迫撃砲を分配する。歩兵部隊の大隊砲・迫撃砲も此れに加えるので各隊は有効に配備して遺憾なく火力を発揮するように工夫せよ。開戦に臨んでは要塞各隊は相互に陣地間の連携を考慮せず、各要塞それぞれ当面する敵に対して独立して戦闘せよ。開戦に至る迄は火砲の戦力を充分に発揮するよう百発百中に至る迄訓練に励め、歩兵部隊は既存要塞陣地の外側、及び敵進攻の道路沿いに蛸壺を掘り、肉迫攻撃陣地を構築して此れを拠点として敵戦車に爆雷を以って肉迫攻撃をかける。更に昼間は壕に隠れ夜間に出撃して敵司令部や砲兵陣地に斬り込みをかけ、最后の一兵に至る迄皇軍最前線部隊の名誉にかけて敢闘すべし……」
各中隊長は兼てから敵進攻は必至であると思っていたが、最早や時間の問題であると知り、混成八十旅団は名誉ある第一線部隊であり、逃れることの出来ない玉砕部隊であるとの覚悟を固めて各隊部署に帰ると、それぞれ中隊全員に戦局の緊迫と将兵の任務の重要性を徹底した。
翌日から各要塞では砲門弾薬の搬入や陣内の改修、壕掘り作業と急に慌しくなり、歩兵部隊は肉迫斬込み隊を編成して攻撃演習に励み始めた。漸く昂まった戦意を損うように朝令暮改の関東軍は作戦変更を次々と伝え、旅団の主力部隊を後方へ配置転換していった。
五月初旬主力の二百五十五連隊は少数の残留部隊を残して新南興以東の大興安嶺の陣地構築に転じ、その移動の最中に新たな突撃大隊の編成が命ぜられ、第二大隊長小野少佐以下千名の将兵はノンジャンに向った。続いて三百六十二連隊には牡丹江方面特別斬り込み隊編成の命が降った。編成人員不足の為に残っていた二百五十五連隊より第一中隊第一機関銃隊、大隊砲の主力第七中隊を転属させ漸く三千の部隊構成をして、連隊長水口大佐自から斬り込み隊長となってハルピンに向った。
原参謀はその都度師団司令部や、第四方面軍司令部に強く抗議をした。特に塩沢師団長には、
「関東軍の嘗っての精鋭師団は南方へ持って行かれ、更に旅団の主戦力を抜き取られて芋殻状の旅団ではハイラル防衛の任を完うすることは不可能であります」
と直言した。塩沢中将は、
「我が師団としても同じである。今や師団主力は大興安嶺の山地に退ぞいて壕掘りをやっておる始末だ。これも長期持久のため関東軍作戦に従わざるを得ないのだ」
と冷然と言うのみだった。原中佐は暗然としたが、残留各隊、四百九十野砲機械化兵団、六百八十一迫撃砲大隊の要塞砲兵隊と、百十九師団二十三師の残留隊、二百五十五連隊三百六十二連隊の残存兵力を寄せ集め、不足を現地召集兵で補って漸く旅団を再編成したが、正に掻き集め混成八十旅団であった。

(二)

八月に入って現地召集兵の即成教育もやっと終え、曲りなりに旅団編成、戦闘序列が出来たが国境の風雲は益益急を告げていた。
八月三日払暁旅団司令部に師団司令部より電話が入った。師団参謀柳沢少佐が、
「現在数十車輌のソ連軍ナラント付近まで越境中」
と慌しく言った。旅団司令部は緊張した空気となったが、宿舎より馬で駈け付けた野村少将は、
「偵察程度と思う、そのまま待て」
と動じなかった。緊張した内に夜が明け昼近く再びけたたましく電話が鳴った。今度は旅団より直接出してある国境監視哨からであった。旅団からは満洲里方面に四ケ所、モンゴリー、ノモンハン方面に二ケ所出してある。各監視哨は直接旅団司令部に電話連絡でき、同時に師団司令部にも繋がっていた。
電話は大慌てに、
「ソ連軍車輌部隊続々と越境中」
とだけ繰返して切れて何処の監視哨か判らなかった。続いてモンゴリー第四監視哨から電話が入った。
「国境近くに昨日迄放牧してあった羊、午の群が今朝より見えず、蒙古人の姿も全く姿を消しております。ソ連側の何等かの企図の有る模様であります」
未だ落着いた声であった。原中佐は直ぐ車輌偵察隊を編成して満洲里、ノモンハン方面へ次々と派遣したが、夜になっても一隊も帰って来なかった。
五日朝、柳沢少佐から電話が入って、
「師団より偵察隊を出すので、旅団から将校を派遣せよ」
と言って来た。原中佐は旅団より出した車輌偵察隊の消息を昨日から首を長くして待っていた矢先であったが、司令部にいた前原大尉に直ぐ師団偵察隊同行を命じた。
師団偵察隊が出発して間もなく、第四方面軍司令部より直接電話が入った。
「四百九十野砲機械化兵団をハイラル防衛混成八十旅団の編成より解き、速やかに四平街、南昌図に移動させよ、明六日直ちに出発のこと」

と一方的に命じて来た。
原参謀は流石に顔色を変えた。ソ連軍越境中の報に色めき立っている最中に、中心戦力を引き抜くとは何んたることか、と憤然と電話を置き、
「旅団長閣下、虎の子の四百九十野砲を下げよとの事であります」
と戦き乍ら言った。野村少将は、
「要塞は射ち手も居なくなるか、敵さんも素通りするだろうよ」
と平然として微笑んだ。原中佐は拍子抜けして旅団長の顔を凝視めた。
「温厚寡黙であるが、胆の据った人柄の旅団長である。この人となら共に死ねる」と次第に憤りが薄れていった。彼は慨嘆している余裕はなかった、直ちに野砲隊への下命や移動の手配に忙殺されて夜半になった。
前原大尉等の偵察隊が帰ったのも知らなかった。師団からは何等の情報も伝えて来なかった。勿もその後国境のソ連軍は動かず無気味に静かであった。野砲機械化兵団の大移動の六日、七日要塞の砲兵配備転換の最中であった、ソ連軍が大挙来襲すれば手の施し様もなくソ連軍に蹂躙される処であった。
八月八日朝、師団司令部より大詔奉載日の式は平常に行なうので旅団司令部の将兵も参加せよ、と電話が入った。此の緊迫した時にと原中佐は気が進まなかったが、野村少将が
「軍官民に平静を誇示することにもなろう。良いじゃないか」
と言うので司令部の将校は打ち揃って参列した。師団長は訓示の中で、
「数日来の国境の状況は険悪である。各部隊は戦闘準備に万善を期していると思うが開戦に備えて司令部及び、各屯営の整備を完了し尚、各人も既に環境及び身辺の整備を完了して不時の事態に備えて万善を期するように」
と言った。
ソ連進攻の時には師団司令部は開嶺へ、旅団司令部は第二地区地下要塞に入ることになっているが、未だ平時体制を併行しているので司令部には必要な軍事機密文書が相当残っていた。式が終ると両司令部では各部室ごとに暗号書や作戦命令簿等の文書を集めて次々とボイラーに投げ込んで焼却し始めた。
ボイラーの過熱と慌しく動き廻る将兵で司令部中が熱気に満ちている時、何の前触れもなく関東軍司令部の乗用車が、サイドカーの護衛を従えて乗りつけた。参謀肩章を釣った将校達が衛兵の捧げ銃に答礼もせず、急ぎ足で師団長室に駈け込んだ。何事かと不審の目で迎える塩沢師団長に先任参謀の藤井中佐が、
「国境視察中であります。亦、今度鮫島少佐が関東軍情報部に就任致しましたので挨拶に参りました」

と言った。塩沢中将は最前線は今日にもソ連軍の進攻があるというのに就任の挨拶廻りとは何事かと苦々しく思い、
「そうか」
と言ったのみだった。
駈けつけた師団、旅団の幕僚と関東軍参謀はテーブルを囲み、地図を覗き込んで防禦作戦を検討し始めた。主に師団参謀の柳沢少佐が国境全般の状況を、旅団参謀の原中佐が要塞現状を説明した。原中佐は関東軍司令部で同僚であった藤井中佐が来たので、この時とばかり、
「明日は是非一緒に山に行って現地を見て呉れ」
と言ったが、藤井中佐は、
「直ぐ牡丹江方面へ視察に行くので　明朝早々に引き返す。勘弁して呉れ」
と申訳無さそうに言った。
作戦会議に終始苦り切って黙っていた師団長も不機嫌を直して
「今夜は司令部将校と一緒に会食せい」
と言った。原中佐は緊迫した状況で酒宴でも有るまいと思ったが、藤井中佐とは一別以来の積る話もあり、鮫島少佐の就任の祝いも兼ねるので、気を取り直して参列しようと一旦旅団司令部へ戻り、日直将校に緊急事態に備える指示を与えて市内の軍人会館に行った。
会食は急なことであったので形ばかりの粗末なテーブルであったが酒は充分有って、関東軍参謀連は緊迫した戦局を超越しているように明かるく快活に喋り捲り、司令部の将校達も日頃の緊張が次第に解けて放吟する者もいた。師団長は参謀連と暫く歓談していたが、引揚準備があると前原大尉の車で官舎に帰った。
師団長を送った前原大尉はそのまま司令部に戻ったが、軍参謀が来る程であるから、国境は異状有るまいと、将校室のベッドに潜り込んだ。連日連夜の退去準備や国境偵察で疲労し切っていた彼は、忽ち高鼾を立てたが、僅か一時間足らずの後日直下士官が駈け込んで
「前原大尉殿、第四軍司令部より直接電話であります」
と揺り起された。飛び起きて受話機を取ると、
「三河地区視察隊が摑えた情報に依れば、ソ連軍車輛部隊が目下国境付近を移動中である。厳重な警戒を要す。貴師団も警戒態勢を以って待機せよ」
と伝達された。前沢大尉は直ちに塩沢師団長、野村旅団長の官舎に伝令を飛ばし、腕時計を見て未だ軍人会館に参謀達が居るだろうと思いつき、電話を入れると原中佐が出た。情報を受けた原中佐は
「直ぐ引き返す」
と答え、残っていた参謀達に事態を告げた。緊張した藤井中佐等参謀連はそのまま軍人会館より車を飛ばして、開嶺へ向けて真夜中の街道を全速力で引き返して行った。
師団司令部に塩沢中将、野村少将が駈け付け、程なく

原中佐と柳沢少佐がやって来た。第四軍司令部の電話が漠然としているので、師団長が直接電話で尋ねると、
「沿海州の東部国境付近で敵は一部越境して来ている。満洲里国境方面でもソ連軍のテントが急増している。非常事態に備えて厳重な警戒を要す」
と言うのみで具体的でなかった。原参謀を中心に情報検討をしたが、
「この程度のことは今迄も度々有った。越境はソ連軍の移動に過ぎないだろう。今頃こんな電話を入れてくる第四軍司令部は情況の掌握が遅すぎる。とにかく暫く待機しよう」
と原中佐が言うので、十二時迄情況を待ったが何の通報も無かった。疲れて来た師団長が、
「当直将校に任せて一先ず官舎に帰って休もう」
と先に帰った、野村旅団長と原中佐は連れ立って伊東台陣地に続く丘の師団司令部から、市街地の駅の近くにある旅団司令部に寄り、当直将校の多田中尉に事態の急を告げ、
「敵の進出に備え、戦闘準備体制に入れ」
と各防衛部隊へ電話を入れるように命じて一先ず官舎に帰った。
原中佐は軍装のままベッドに横になると会食の酒もあって直ぐ睡ってしまった。

(三)

満州里の南ノモンハンの北にラマ教の寺院で有名なガンジュル廟が在る。その南の国境の町アムクロにはアムクロ旗公署が在り、日本の国境警察隊も置かれていた。警察隊は二百七十名の隊員の内、日本人は三十六名で隊長の丸山修はアムクロ公署の参事官を兼ねていた。
警察隊の受持つ国境は約七百七十粁に及ぶ広大な地域で、此れを四個小隊で分担し、国境各地へ更に偵察隊を分進させていた。
八月八日午前十時アムクロにノモンハン近くの偵察小隊から全速力のトラックが着いた。焼け焦げる程のエンジンの震動する車輛から砂埃を被った連絡員が転げ出て、息を弾ませ乍ら
「ノモンハン近くの国境のソ連側で戦車を主とした装甲車約二百輛が集結中であります。昨夜は一斉に車輛のライトを灯けて皎々とした光の中で飯盒炊餐を始めてました」
と報告した。丸山隊長は度々ある演習かと思ったが、数日前からのソ連軍の集結の報告とは違って大部隊なので、愈々本格的な進攻と判断し、直ちにハイラルの師団司令部へ電話報告を入れ、国境に出ている各小隊に連絡員を急派して本部集結を命じた。
各方面の偵察小隊は八日夜半より九日早朝迄に続々とトラックで帰着した。丸山隊長は集結したアムクロ旗公

署員、警察隊員に事態の急を告げ、満・蒙隊員には直ぐ私服に着替えてそれぞれ自宅へ帰るように命じ、邦人家族婦女子はハイラルに先行するように言い渡した。
此の日あるものと覚悟はしていたが、モンペ頭布に急救袋や背負袋を背負った女子供は悲痛な顔で二台のトラックに分乗した。丸山隊長夫人と子供達は最后迄警察隊と一緒に残ると言い張ったが、丸山隊長は叱りつけてトラックに無理に押し上げた。
七十六名を乗せたトラックが朝霧の中に消え去るのを身を裂かれる思いで見送った隊員達は本部建物に立て籠った。丸山隊長が人員を掌握すると、アムクロ旗公社員を含めて総員六十五名であった。丸山隊長は本部建物を中心に部署を定めて防備配置を完了し、刻々の情報を師団に報告したが師団からは何の対応も命じて来なかった。重苦しい不安を鎮めようと秘密書類を焼却したり、小銃を布で擦ったりしていると、九日夕刻遂にソ連戦車群が出現した。
遙か地平線上の彼方にポツンと粟粒のように見えた戦車は、点々と横に拡がり次第に大きく形を現わし、起伏する草原の陰に隠れ再び姿を見せる度にその姿は大きくなり、粗らな松山を越えて現われた時にはもう判っきりと砲塔や長い砲身が見えた。そして雁行する渡鳥の大群のように大地に思う存分大きく拡がって驀進して来た。草原に伏せる警察隊の胸に、建物に隠れる耳朶にその轟々たるキャタピラと機関の音が響き渡って来た。警察隊員の心臓は次第に熱して高く脈打って来た。
丸山隊長は圧倒的なソ連軍を見て到底戦える相手では無く、警察隊の本来の任務からも戦闘すべきでないと総退却を命じた。邦人全員を二台のトラックに収容してハイラルに向って夜を徹して走った。
夜明けにハイラル街道に出ようとすると、既にソ連機甲部隊が驀進していた。丸山隊トラックは広い草原で隠れようもなく、そのまま運を天に任せて進攻するソ連軍と併行して走った。ソ連軍は丸山隊トラックを発見しても歯牙にもかけず、只、驀地にハイラルに向っていた。海のような草原の街道を延々とソ連機甲部隊が行き、丸山隊は鼠のように隠れ走った。丸山隊長は何時攻撃されるか判らず緊張したまま走り続けるのが苦しく、先発した引揚家族の身も案ぜられた。何処でも良い一刻も早く日本軍陣地へ辿りつけと念じていた。
昼過ぎ街道を進攻するソ連軍が見えなくなって程なく第三地区の松山が見え、遂に日本軍要塞に辿りついた。警察隊員は胸の熱くなる思いで入口に立った。

(四)

八月九日午前一時、西部ソ満国境に集結した西部第三軍マリノフスキー元帥揮下の百五十万の大軍は、二千六百台の重戦車と自走砲五千五百を始めとする火砲、迫撃

砲を積載した機甲軍団を組み、二千五百機の空軍と共に一斉に国境を破って潮のように殺到して来たのである。

同時に、極東軍司令官ワシレフスキ元帥は国境全線にわたって進攻を命じた。東満と北鮮にはメレッコフ元帥の第一戦車軍が、北部正面にはブルカーエフ大将の率いる第二戦車群が、西部方面のマリノフスキー元帥の第三戦車軍と応呼して怒濤のように押し寄せたのであった。

新京の関東軍総司令部には八月九日午前一時過ぎ、牡丹江の第一方面軍より「東寧・綏芬河正面の敵は攻撃を開始せり」と電話が入った。続いて「牡丹江市街は敵の空襲を受けつつあり」と慌しく報告して来た。宿直参謀は、当直将校と手別けして大急ぎで官舎に帰っている情報、作戦担当の各参謀に非常連絡して、総参謀長秦彦三郎中将に電話報告をした。その最中既に総司令部上空にソ連機が来襲した。時に一時三十分であった。

登庁した総参謀長は直ちに大本営に直接連絡した。大本営は二月のヤルタ会談以後ソ連軍の在欧部隊が極東に移動し始めていたので、ソ連との戦いは必至と見ていたが、太平洋戦争全体の終焉の中で対ソ問題を解決し戦争の終結を企る政府の外交交渉に期待をかけていた。対ソ戦に勝算の無い大本営は仮令、対ソ開戦となる場合でも今年の夏はソ連軍の攻撃を極力回避するよう隠忍自重して時を稼ぎ、最悪にして開戦となった場合でも、精強関東軍は南方へ転出して現在は戦力無き張り子の虎の関東軍なので、東満洲朝鮮国境地域を確保し、ソ連主力を満洲内陸部に誘き入れ、持久ゲリラ戦を行なう以外に作戦は無かったのである。

八月九日朝の関東軍よりの第一報には大本営は即答できなかったのである。関東軍は事態の急にその命令を待ってはいられず、午前三時十分、

「各方面軍各軍並びに関東軍直轄部隊は、それぞれ侵入する敵の攻撃を排除しつつ速やかに全面開戦を準備すべし」

と慎重な意味不明確な作戦命令を出した。その直後大本営は、

「帝国全般の戦況上朝鮮は最後の一線として絶対的に保衛するを要するも、満洲全土は前進陣地として止むを得ざればこれを放棄するも可なり」

と命じて来た。満洲東部確保の東辺道保衛計画より戦線を縮めた、朝鮮保衛と大きく後退した作戦であった。

だが、関東軍はこれを無視して飽く迄も東辺道保衛以外にないと決意し、新京付近が第一線となることを予想し、通化に総司令部を移動する為に転進を始めた。これは怒濤の如く殺到するソ連軍に立ち向う国境各方面軍、前線部隊、居留民を置き去りにして総司令部だけ逃げた結果となり、全戦線の将兵、在留邦人に大動揺を与えた。

（五）

ハイラルの百十九師団司令部では師団長達が一旦帰宅した後は何にか不気味な程ひっそりとしていた。前原大尉達は酒の酔もすっかり消えた顔で、会議用卓子に向い軍刀に凭って黙然として夜明けを待っていた。腕を組んだまま睡っている者もいた。その嵐の前の静けさを破って通信室から落合少尉が慌しく駈け込んで来た。

「只今、軍司令部より電話が入りました。『ソ連軍は各方面より越境中、敵空襲に備えて全軍隷下各部隊の燈火管制をせよ』であります」

居合せた将校下士官は全員手別けして各部隊の燈火管制を命ずる電話や伝令を飛ばした。師団長に伝令を飛ばせて一息ついた前原大尉は、ハイラル市街を見ると一点の灯も無く真暗で、向い側の第二、第三地区の丘陵が黒黒と見えた、空は星一つ無く昏く曇って雨雲が濃く立ち罩めていた。

師団長へ駈けつけた伝令が師団長命令を持って帰った。

『直ちに全部隊非常召集をせよ』と伝令書に走り書きである。司令部員は再び各部隊への命令連絡に大童となって動き廻っている最中柳沢参謀、続いて師団長が登庁して来た。前原大尉が状況説明したが、確実な情況を求めて師団長は軍司令部へ直接電話を入れたが、

「その後、国境方面のソ連軍の動きに変化なし」

との答のみであった。塩沢中将は不審に思ったが、いずれにせよ事態の急は変らないが、非常召集のまま各部隊を放置することも出来ないと思い、

「非常召集は演習であり、その成果は概ね良好と伝えよ」

と言って各部隊に解散を命じた。師団長はそのまま師団長室に入り、未だ暗い室内の椅子に軍刀に両手を凭れて端然と掛けていた。彼の脳裡には態々の対ソ戦の情況が浮び上っていた。輝しい勝利の戦闘でなく、敗走の情景であった。秋風が大興安嶺の丘陵の峡間を吹き抜け、樹々の落葉を捲き上げて行くように、疾風のように襲うソ連軍に枯葉のように吹き飛ばされる在満部隊の姿であった。敗残の兵が山々や草原の窪みに潜み、或いは岩山の孤塁に籠る悲惨な情景であった。だが彼は不屈な笑みを浮べ、我が師団は敵大部隊とは逐次戦闘し乍ら後方陣地に退き、大興安嶺の堅陣に拠って最后迄戦う。更に曠野に潜伏し山野に拠って飽く迄遊撃戦を展開し堅忍持久して戦局の転回するのを待つのだ、と決断の眼を闇に向けた時、慌しくドアを叩いて当直落合少尉が入って来た。

「師団長閣下、只今、三河前線監視哨より、今朝五時、ソ連戦車隊が三河地区より越境中と報告して来ました」

と緊張した声で伝えた、師団長はすっくと立って、

「非常召集をかけろ、各部隊は戦闘体制に入れ」

と命じ、再びドッカと椅子に腰を下してシガレットケースから朝日を抜いて緩っくりと喫った。彼は無念無想と云うより茫然として紫煙を吐いていたが、立ち上って黒布の間から窓外を見た。未だ暗かったが、司令部の前庭

では各部隊の命令受領者が右往左往し、慌しくサイドカーやトラックが動いていた。六時を過ぎ薄明となった中で爆音を聞いた。再びドアを激しくノックして前原大尉が入って来た。

「閣下、只今、空襲中であります。敵機は約三十機、ハイラル市街に投弾し乍ら南方へ向っております」

塩沢中将は立ち歩き乍ら、

「うん、そうか、新京爆撃だな・・」

と言った。

八月九日六時十分、第一回の空襲から一時間程の間に三、四回南方へ往還の都度ハイラルを爆撃して行った。塩沢中将は八日夜半別れたままの野村旅団長に会い、最后の連絡をしようと思って何回も電話したが通じなかった。既にハイラル全市街は火焔に包まれている状況なので、予定の第二地区陣地の旅団戦闘司令部へ移動したものと思い、ハイラルは八十旅団に任せて開嶺へ戻る時であると決断した。前原大尉を呼んで各部隊は兼てよりの開戦時の零号作戦第四八号戦闘作戦通り行動せよと確認の令を伝えるように言うと、柳沢少佐と乗用車で開嶺の陣地へ引き揚げて行った。

随行するトラックの将兵は、興安街道に点在する前進陣地ごとに、敵襲を告げ、零号作戦の発動を命じて全速力で南西に向い、九日夕刻師団長は興安嶺の戦闘指揮所に入った。

（続く）

編集後記

○第四号をおとどけする。私たちの共有するステージに思い思いのポーズで百花姸を競うありさまは、まことに頼もしい限りである。自賛しておきたい。「作家群」の時代にはなかったことだ。「まんじ」は作品のセレクトをしない自由の広場であるところに特色をようやく確立しようとしている。

○同人のそれぞれがすでにかなりの人生経験をもち、かつての青くささから脱皮を遂げている。いまさら右顧左眄する必要のない年齢に達している。と、言うと（異議あり）と唱える同人もいそうだ。私たちの付合いは年齢、職業を超えた成立ちをもっているので、お互にそういうことをはじめから問題にしてはいないのだ。さようにご理解を願いたい。無限の可能性を秘める若い人のために……。

○若いから駄目だと言えないように、墓が立ったから駄目という理屈も成り立たない。この世に生れて、この世に何か人間の生きざまを伝え得ればそれで本望ではないか。ささやかな私たちの営みをここにささげる、そういう気持で良いのではないか。私たちは自慰のためにこのサークルに加わっているのではない。これだけは少くともはっきりしておきたい。

（五六・一二・一）（禎）

「まんじ」第四号

昭和五十七年一月二十日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二―九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二―九〇八一五

キツネ火

山本儀一

二軒で一棟の背の低い家たちが、田んぼの中に食いこんで並んでいた。台所の外のポンプ井戸の回りはほうけたススキの株が残っている荒地だが、盛土をした細い通り路の向側には刈取りのすんだ田んぼが居汚なく寝そべっている。ところどころに稲架や森や小舎のシミを残して、それはくすんだ緑や黄の斑になった山裾に続いていた。街道は疎らな茂みを従えてうねって消えた。時々汽車の煙がなびいたが、すぐ青みを帯びた山肌に溶けてしまう。その上に城壁のような稜線があった。

東京のゴミゴミした場末に育ったススムには、こういう田舎の町はずれの風景はなじめない。箱根の山波が意地悪く通せんぼして、ススムにのしかゝっているほど大きく見える日もあった。

所在なく寝ころがって壁を叩くと、頼りなげにコンコンと鳴った。板壁の安っぽい家だと、ススムは思った。東京にいた時は、壁の裾が崩れて（それはネズミの仕業だったけれど）篠竹を編んだ下地が見えるようになったって、詰めものをして渋紙を貼っておけば、ぶつかっても寄りかゝっても安心であった。コンコン、コンコン、と叩き続けると、かあちゃんが怒鳴った。

「うるせえ。隣りの人が怒ってくるぞ」

かあちゃんは赤んぼのオシメを取り替えていた。あれ、さっき取っけえたばっかしなのに、こんな大ションベンしやがった、と言った。かあちゃんはもう赤んぼの世話なんか忘れちまったのにとこぼしながらも、自分の仕事がふえたのを喜んでいる風にススムには見えた。

「学校へ行きたいな」

とススムは言った。これがかあちゃんの急所であることを感じていた。かあちゃんはしばらく口の中でぶつぶつ言って、聞こえないふりをしていた。これはかあちゃんがとっさに返す言葉につまって、あれこれ考える時の表情である。

「ねえ」とススムは返事を促した。
「いつまでもこゝにこうしているわけじゃなし、そうそう学校を出たり入ったりする訳にゃいかねえだろ」
かあちゃんの言葉には力がなかった。ススムは何だか気の毒になって、そんじゃこんどはどこへ引越すの、ときくのはやめた。
誰も友だちはいないし、この見知らぬ町を眺め歩く好奇心も湧かなかった。退屈したススムは東京のことを思い出す。学校のことを思い出す。そして時々マチコさんのことも思い出すのである。本当はマチという名前なのだが、思い出すときは呼びにくいので、コ、をつけた。
二年生の二学期になると、ススムは受持の先生から、級長をやりなさいと言われた。その時、岩佐マチさんは副級長となったのだ。マチコさんは西洋人形みたいに愛くるしい女の子だった。勉強はよく出来るけれど出しゃばりではないし、言葉遣いもススムと違ってお上品だった。男女組というのは珍しく、ススムの組だけだったから、ほかの組の男の子がからかったけれど、ススムは平気だった。受持の先生は副校長先生だったのである。ススムはマチコさんとかわりばんこに教室で号令をかけた。たまには先生のお使いで職員室へ行くこともあった。
一年生の時の受持は坊主頭のこわい先生で、「前ヘナライ」をする時に腕がまっすぐ伸びていないとピシャリとその腕を叩いた。ススムはその先生が好きでも嫌いでもなかったが、ある時お使いの帰りにその先生の家の前を通ったら、その先生がズボンにシャツという姿で、赤い背負帯で子どもをおぶい、お尻をゆすってあやしていた。ススムはお辞儀もせずに玄関先を走り抜け、それからその先生が嫌いになった。
二年生の時の副校長先生は、もっとおじいさんでズウズウ弁であったが、やさしかった。せっかくススムを級長にしてくれたのに、十一月には学校をやめて知らない町に移って来てしまったのだ。マチコさんにさよならを言うと、これを上げる、といって頸にかけていた小さな銀色の十字架をくれた。ススムには何もあげるほどのものはなかった。少さな十字架はススムの宝物となった。ススムにはもう一つ、兄ちゃんからもらった宝物がある。それは湯呑茶碗の口ほどもある大きな一円銀貨であった。ススムは二つの宝物を小さな巾着に入れて、古ぼけた傷だらけの箪笥のひき出しに納めておいた。

三島へ来て十日くらいたったら、サイトウさんがいなくなった。サイトウさんは毎日夕方になるとシナソバの屋台を曳いて町を回り歩き、夜中に帰って来るのであった。ススムは二人の姉ちゃんが帰ってくる頃までは、たいてい起きていたが、サイトウさんが帰ってくる頃には眠っていた。かあちゃんのほかはみんな朝寝坊だった。サイトウさんと上の姉ちゃんと赤んぼは、四畳半にねた。

ススムとかあちゃんは六畳で同じ布団にねていたが、赤んぼがむずがると直ぐ取りに行くので、ススムは眼をさました。二人とも夜おそくまで働いてくるんだからよく寝かしてやらなきゃ可哀そうだと、かあちゃんは言った。ススムより六つ年上の下の姉ちゃんは、いつも丸太棒のようにぐっすり眠っていた。おそい朝飯には、残り物のワンタンやワンタン皮、それにチャアシュウの切り屑やシナ竹の入ったスープが出る。それにご飯を入れてかきまぜると、もう何もいらないほどおいしく腹いっぱいになった。サイトウさんは腕がいゝからスープの味も違うさね、とかあちゃんもサイトウさんの前で言っていた。
サイトウさんが帰らなかった夜、上の姉ちゃんはキツネのような顔になって、泣いたり考えこんだりしていた。ススムも眠れなかった。何かあったんだろうが、きっと朝になれば帰ってくるよ、とかあちゃんが気安めに言うと、上の姉ちゃんは首をふった。
「もう帰らないよ」
上の姉ちゃんはまた涙をほろりとこぼした。サイトウさんがいつか出ていってしまうことを知っていたかのようであった。
「何もあの人だけに頼っていたわけでなし、こうしてみんなで働いてきたのに」
上の姉ちゃんは唇をかみしめていた。
夜があけると、上の姉ちゃんは下の姉ちゃんを連れて、町へ探しに出かけた。ひょっとしたら、屋台だけでもどこかの街角にほうり出してありはしないかという心頼みであったが、何の手懸りもなかった。次の日は下の姉ちゃんだけが勤めに出かけた。ちょっとカゼを引いてしまってと旦那に言っておくれ、と上の姉ちゃんが言いつけた。姉ちゃんたちは、沼津の大きな料理屋に女中として働いていたのだ。家では上の姉ちゃんとかあちゃんが、ケンカでもしてるような口調で、いつまでもサイトウさんの悪口をいったりグチをこぼしたりしていた。こんなところへ夜逃げして来なけりゃならないようにしたのも、もとはと言えばサイトウさんのせえだ、とかあちゃんは言った。店の借金も済さないうちにバクチになんか手を出しやがるから、こういうことになるんだ、手足まといの赤んぼを置き去りにして、女子どもだけでどうやって食って行きやいゝと言うんだね、とかあちゃんは口惜し涙を流した。兄さんが帰ってくるまであと一年だね、上の姉ちゃんは空ろな声でいった。そうとも、それまでの辛抱だ、兄さんが帰ってきたらたゞでは済まさないさ、とかあちゃんは励ますように言った。しかし上の姉ちゃんはほかのことを考えているように黙りこくった。兄ちゃんが軍隊に出かける時、上の姉ちゃんが、この家はあたしたちみんなで守って行きますから、どうか心配しないで立派にお国の務めを果して帰って来てくださいと、きっぱり言ったのをススムは憶えていた。

と、誰もサイトウさんのことを口にしなくなった。兄ちゃんが除隊するまで、あと一年辛抱すればいゝんだと、みんなが思っているようだった。かあちゃんがこぼした最後のグチは、モミジヤだとかモミジテイだとかエンギのわるい名をつけるからロクなことになんねえだ、ということであった。なぜモミジがエンギわるいのさ、とススムが詰ると、モミジっちうもんはすぐ散ってしまうじゃねえかバカ、と言った。

上の姉ちゃんが出来るだけ明かるく振舞おうとしているのが、ススムには分った。この暮までに市営住宅が一軒あくかもしれないそうだよ、と上の姉ちゃんはみんなに言った。沼津の料理屋の旦那さんに前から頼んであったらしい。旦那さんは顔役だし、市役所にだって押しがきくから、うまくすればあたしたちの方へ回してもらえるよ。ススムは大げさに飛び上って喜んだ。そうなれば学校へ行ける。姉ちゃんたちだって、この家から通うよりずっと楽になるのだ。かあちゃんだけは赤んぼがいるから、あまり変らないかもしれない。

丸太棒のような下の姉ちゃんも、うすく口紅をつけるようになった。紅葉亭のころは忙しい時はお店にも出たが、出前や皿洗いが主な仕事だった。下の姉ちゃんは力持ちだった。姉ちゃんとケンカすると、箒をもって掛っていってもすぐ組伏せられてしまった。ススムはかあちゃんのいないところではケンカしなかった。かあちゃんは山でたくさん子を産んで半分くらい死なせた。ススムと下の姉ちゃんの年が開いているのは、その間に死んだ男の子がいるからだときいた。それをきいた時ススムはなぜかホッとした。相手が女なら二つ三つくらいの年の差ならば負けるはずないとススムは思っていたが、もし男だったら惨めな目にあうのはどうやら自分らしいと思われるのだ。口紅をつけると下の姉ちゃんも何となく可愛らしくきれいに見えた。同時にススムから遠のいてしまったようにも思われた。コケシみたいだとススムがひやかしても、姉ちゃんは、ふふ、とふくみ笑いするだけである。

「びっくりしたよ。ゆうべ裏のススキの蔭にキツネがいたの」

朝食のとき、上の姉ちゃんがススムに言った。ススムはどういう訳か、すぐサイトウさんを思いうかべたが、「犬だろう」と言った。

「犬じゃない。キツネ。犬はあんな走り方しないもの」

上の姉ちゃんは、「ねえ」と下の姉ちゃんをふり返った。「犬じゃないよ」と下の姉ちゃんはぶっきらぼうに言った。

「どんな走り方したの」

「こっちが気がつかないうちに、向うが驚いてピョンと飛び上ったのさ。ハッと思って目をこらすと、もう音も立てず消えてしまった。キツネなんか山で何度も

見てるもの、間違いっこないよ」

かあちゃんも「こんな田舎だもの、キツネぐれえ出たって不思議はあんめえ」とうなづいた。この日は上の姉ちゃんはいつもより気嫌よく、ススムくらいの年頃のとき山で見たというキツネのヨメイリの話などを、ススムを怖がらせるような口調できかせた。

ススムにはまた退屈な日々が続いた。暖かい日には、赤んぼをおぶって近所を回ってみることもある。夕方からとっぷり暮れるまで箱根の山を眺めていることもあった。晴れた日には、家の周りに宵闇がこめてきても、山肌はまだ明かるかった、やがて、それはススムが東京へ帰るのを冷たく拒んで、黒く長い壁となった。街道沿いの途切れ途切れの灯はだんだんと小さくなる。線香の火はススキの穂波といっしょに揺れて点滅する。これはキツネ火なんかじゃない、とススムは呟いた。だが怖かった。この黒い風景はかすかな灯影によって闇のもつ奥行をススムに見せたのであった。この深い闇の底にキツネ火が燃えても不思議ではないと、ススムは思った。

ススムはキツネ火の燃える夜をじっと待つより仕方なかった。そのうちに、こないだ姉ちゃんたちの見たキツネが、やっぱりサイトウさんかもしれないという気がしてきた。サイトウさんは赤んぼが欲しくて、キツネのふりをして忍んで来ていたのかもしれない。姉ちゃんたちはしめし合わせて、自分をだましたのかもしれないのだ。いや、もしかするとサイトウさんははじめからキツネだったかもしれないのだと思えてきた。三島のキツネが渡り職人に化けて東京へ出かけ、また故里へ戻ってきたのだ。サイトウさんはもともとキツネだから、熱いものを食べると化けきれなくなってつい鼻の先が濡れるのだろう。あの赤んぼだってキツネの子だから、すぐ水ッ洟をたらす。上の姉ちゃんだってキツネの癖がうつってだんだんキツネ面になってしまったのだ。

ススムは上の姉ちゃんが以前のように頬のふっくらしたきれいな娘になればいゝと思った。そのためには、キツネの赤んぼをキツネに返してやればよいのだ。サイトウさんだって、人間の娘に産ませた赤んぼが欲しくてたまらないのである。もし箱根の山腹にキツネのヨメイリが見えたら、それはキツネのサイトウさんがこの裾野のどこかに棲んでいて、ススムに赤んぼを連れてきてくれと合図しているのだ。

ススムが毎晩箱根の山を眺めていても、合図のキツネ火は現れなかった。

家並みと道の間を豊かに流れている水路は、ススムには何と呼んでいゝか分らなかったが目の醒める眺めであった。透き通った水はところどころで鯉の背が動くようなうねりを見せて、道といっしょにどこまでも流れて行くのである。家々の陰はそろそろ薄暗くなってきたが、

陽の当らない風景

山口　健二

明治四十二年、某月某日の東京の新聞はそろって仕立屋銀次検挙の記事を大きくとりあげている。その同じ社会面に「公郷小僧跳梁やまず」と小さい見出しが見える。

庫三が自分の生れの秘密を、豪農藤井伊ヱ門家の同じ作男のヤス爺からきいたのは、かれが十五才になったある夏の日のことであった。その時ヤス爺は厩で馬の金ぐつわの手入れをしていて、同じ厩で馬糞を熊手でかき出していた庫三に話しかけたのである。ヤス爺にしてみれば、こういう話は、向い合って折入って始めるとか、夜寝床にくつろいで、しんみり寝物語り風にするのは庫三の心をゆすぶる恐れがある。それよりも仕事をしながら呑気な口調でした方が無難だろうし、自分としても気楽に出来ると思ったのだった。でもかれは、自分の身の上にもつまされて、いつか一度はこのことを庫三に話してやりたい、「俺も先が長くないからな」と思っていたのである。

自分の身の上というのは、ヤス爺は、六十年前に、この豪農藤井伊ヱ門の家に拾われたのであった。拾われたのか貰われたのか、そのいきさつはもう今となってはわからない。ただかれには、二三コマではあるが、此の家とは全くちがった記憶を、幻のように持っていた。当主伊ヱ門の先・先代が壮年の頃、天保三年（一八三二）のことであった。

この年には関東一円に農民一揆や打ちこわしがあって、富農であった藤井家も打ちこわしの一団に火をかけられたことがあったのだから、そういう大騒動の中の一つの出来事が関係していたのであろう。とにかく藤井家の子供として他の子供たちと分けへだてなく育てられたのであるが、実際の暮し方は、かれが、十五才を過ぎる頃は農奴といった恰好で母屋の子供たちとはかけ離れていた。二十七才の時に、仲に立つ人があって町場の豆腐屋にむこ養子にやらされたが、町場の豆腐屋の暮し方は、朝暗いうちからの水仕事など大して苦にはならないものの、何しろ食べ物に細かい暮し方で、生来身体が人一倍大きく、丈夫で食の太い青年時代のヤスさんにとっては、一椀のめし、一杯の汁の分量にも姑の目が光る毎日にはとても我慢が出来ないで、とうとうめしの分量のことで女房と口論になり、たらふく食える藤井の家へ逃げかえる始末になった。これは、はたの者たちの意見ではヤスさんに辛抱が足りないということになった。だから、それからというものは藤井家の大家族制の中で、ヤス爺の身分は一段はっきり落ち、農奴そのものになり下った。折角仲に立つ人があって、一家の主人の見習であるむこ養子の身分を自分から捨てた報いのようなものであった。ずっと忠実な働き手であったヤスさんも、ヤス爺になり、当主のご隠居と同じように六十の坂を越した今日この頃は、もはや二頭の馬と二頭の牛の面倒を専門にするよりほかに出る幕もなくなって、寝部屋も西の門につながる長屋で、他の年期づとめの下男下女らと一ツ屋根の下になっていた。十五才になった庫三もいっしょであった。

その日ヤス爺の話はこんな風に口が切られたのである。

「くらヨ、お前さんはなぁ・・・うそじゃないよ」

初めのうちは庫三は藁の入れかえの熊手を休めず動かしながら自分には縁の遠い物語でもきいている気分であったが、そのうち馬の足首を持ち上げ片膝ついているヤス爺のそばにしゃがみこんで

「そんでおれ生んだ人は未だいるんか」

「おれの本当のおとうという人は今何処さいるんだ」

とせきこんで来るようになっていた。

そんな風に庫三が話に乗ってきてしまっては、ヤス爺もあとに引けない。つい聞きかじったことに飾りや感想さえ加えて話す意気ごみになっていた。

「なんせ、おれがご隠居さんと一緒に、お前さんが生れてまだ半年ぐれえで、先き様のお屋敷さ行っておめえを受取ったんだからな、うそじゃないよ、今の旦那の子供にするってよ。・・だがそん時、じ今この事は誰にも言わねえって、ご隠居さんと先き様のあいだに固え約束ごとがあったんだ。旦那とわか奥にゃほら、お琴サ生れてっから五年も男の子出来ずじまいだったからな。ところが、お前さんが来た翌とし、あのヒロ坊が生れたってわけよ。そうして又その翌としカズ坊が生れるのよ。変なもんだな。・・・だがな、おめえさんも、誰にも言わねえっちゅう約束ごとは心得ててくれよ」

ヤス爺の話にまとまりをつけ、言葉を物語風に整理すると次のようになる。

庫三の先祖は、近江の国弓削の庄の豪族で、西歴六、七百年頃、新羅の国から料理を作る術を土産に天皇家に仕えることになり、祖父の代には従五位の下という位の公郷であった。祖父の葛小路直実の代に、文久六年（一

八六一）十月二十日将軍家茂へ和宮ご降嫁のことがあった。和宮関東ご下向の一行に、料理番がしら大膳のかみという役柄で供奉することになっていた葛小路真実は、丁度神経痛が出て、旅が出来なかったので、その筋の許しをうけて息子直文を代理としておともさせたのである。この一行が江戸入りの直前三日間、八王子に滞留して徳川家側でお迎えの用意を整えたり、江戸入り後の儀式萬たんの打合せなどがあった。その時供奉のものたちの接待に八王子藩士、郷士の娘たちのうちから年頃のものが選ばれて奉仕した。その娘たちの中に、藩の祐筆森田長之進の娘かつがいた。若い独身の直文は、この関東のひなびた軽輩武士の娘に、京の女に見られないきっとした野性をみて、旅先ということも手伝ってひどく感傷的情緒的な気分になったのである。此処のところをヤス爺はこんな風に手っとり早く言った。

「ひと目惚れちゅうやつよな・・・こういう惚れっぷりってえもんは何か因縁みてえなもんだわな・・、でもあんまり縁起いいもんじゃねえ」

つづいて次のように批評を加えて言った。

「この若けえお公郷の年頃じゃ万事えらく気がせくってえもんだ。すぐ一緒になりてえって、その娘のおやじ様さ申しこんだんだよな」

ところがかつの父親長之進は〝手許不如意にして婚礼の儀にかける金子がござらぬ〟と言って来た。この言い分は武士の素直な告白とも受けとれるが、一ツひねれば、仕度嫁取りとかこしらえどりをねらう取引きの匂いもするというものであった。

申込みを断られると弓削の豪族の子孫直文は我ままに、がむしゃらにかつを自分のものにしたい気分になり、京の父親直実に早飛脚を立てて金二十両をせびって貰った。公用の旅先で女に惚れて〝金おくれ〟と電報打った直文は甚だ今日的男である。ここのところをヤス爺は矢張り批評的にこう言った。

「二十両ったらおっそろしい大金だぜ・・・・二両だって嫁は買えたんだからな、さむらいはこれでえらくもうかったべ」

そのようにして夫婦になった葛小路直文と森田かつの間に十一人の子供ができ、庫三は十番目であり、男の子の中では三番目であるというのであった。直文は、和宮ご降嫁供奉の料理番がしら格であったところから、そのまゝ江戸にとどまり、徳川家から直接祿を拝領して江戸は駿河台という所に屋敷がある。藤井伊ヱ門はどうやら葛小路直文の祿米を宰領する家であったらしい。そして直文もかつも、今日明治廿五年、代はかわっているかもしれないが、まだ生きていて、直文の長女で庫三の姉の加芽は、明治天皇の子供を何人も生んだ園さまというところに女官として奉公しているというのであった。一口で言うと庫三は公郷の出であり女官の弟であるということになる。

この話を、馬の金ぐつわの手入れがひと区切りした所でヤス爺は、口をあけて放心した顔になっている庫三を流し目でみて〝こりゃしまった・・・罪な話だったかな〟という後悔を、馬の頸をいつもより念入りに「おうらほらほら」とたたいてごまかそうとしたのであるが、矢張り一番しまいは口癖の「うそじゃないよ」で結んだのであった。

ヤス爺の話には、庫三にも思いあたるふしがいくつかある。そのふしを、かれは小学校初等科というところを二年まで行った頭の中でつなぎ合せて、ヤス爺の口癖の通りこりゃ〝うそじゃないぞ〟と思うようになった。

〝おれは、この家の子供だって言われて育ったが、母屋のヒロ坊ともカズ坊とも顔のかたちは違う。ご隠居さんのおめかけの女中のてつの連れっ子作太や、ご隠居さんとてつの間にできた女の子たちとも似ていない。それに、おれはクラ坊と云われず庫三だ。お琴サ、ヒロ坊カズ坊はご隠居さんや旦那さんをおじい、おとうと呼び旦那のつれ合いをおかあと呼んでいるが、おれはご隠居さん、旦那さん、若奥と呼ばなけりゃならない。こりゃ何か仕掛けがあるにちがいないぞ〟

差別とか平等とかいうむずかしい考えは庫三のあたまには浮んでこない。子供の頃には、母屋にいるヒロ坊やカズ坊やてつの子供たちと同じように一里半（六キロ）もある町場の小学校というところへもやってもらったし朝晩の食事の時の並び方だって、台所つづきの板の間から一段上った座敷に、ご隠居さんが仏壇を背中にして坐り、それに給仕するてつが控え、板の間の方の囲炉裏の正面には旦那さん、左側に旦那さんの弟の若旦那、旦那さんに並んで若奥というところは別であるが、子供たち、お琴サ、ヒロ坊、カズ坊、ご隠居さんとてつの間にできた娘二人、それらと庫三は並んで箱膳についた。又ヤス爺を中心にして、下男下女若い衆、それからてつの連れッ子作太がひと組になって箱膳につくのであるから、庫三はその家の子供たちと同格ということになる。小学校だってヒロ坊カズ坊、てつの娘たちと一緒に、風呂敷に読本、手習帖、筆墨、弁当を包んで通はされた。

ただ、この小学校で、庫三には妙なところが目立ったのだった。それは一種の〝大様な振舞い〟だと庫三をかばってくれた先生もいたが、明治八年にその小学校が出来たときから訓導心得という肩書きで先生になっていた老人が「いや斯様なる悪癖は双葉にして摘みとらんため、精神を洗滌するが肝要でござる」と言い張って、たった一人師範学校という所を出て、詰襟の洋服というものを着ている若い校長先生の意見を押し切って、ある冬の朝、学校の裏手の井戸端に庫三をつれて行って裸にして、釣瓶に何杯も何杯も、とうとう庫三が坐ったまま気が遠く

なって横にころがるまで冷水を頭にかぶせてから、庫三は学校へ行くことを拒んだ。一緒に通っていたヒロ、カズ、てつの娘たちもそろって「おらはずかしいもん、庫三と同じ学校さ行ぎたくねえ」と言い出したこともあずかっていた。

その庫三の〝大様で、恥ずかしいおこない〟というのは、かれには自分の読本、手習帖、筆墨、弁当までも、他の生徒のものと区別しない癖であった。言い方によってはぬすみとも言われる種類のおこないであった。だから、庫三だけは他の子供たちとちがって、小学校初等科二年の冬で学校をやめたのである。母屋の子供たちとのちがいと言えば、そのくらいのもので、野良仕事の手伝い、竹の子掘り、ランプ掃除、夜なべのむしろ織りの手伝いなどいつしょであった。だが庫三は、他の子供たちより丈が小さく、色が白く、腕の力がヒ弱くできていた。その上顔が可愛らしいので、ある日、母屋の裏手に広がっている竹林で竹の子掘りの作業中、てつの二人の娘と女中のまつが庫三の手足を押えつけて、股の間を念入りにいたずらして庫三にべそをかかしたことがあった程である。ところが丈が小さい割に足が素早く、六キロの山道を他の子供たちとそろって小学校へ通っていた頃、途中の山道に乞食が二、三人、冬の日など焚火をかこんで山賊まがいにとぐろを巻いていることがあった。大人たちは学校へゆく子供たちに「焚火になんぞあたるじゃねえぞ、乞食さんの前は走って通り抜けろよ」と教えていたので、子供たちは乞食の焚火の手前から全力で駈けた。庫三はいつも他の子供を一丁（約百二十米）走る間に十間（約二十米）は引き離して先頭を切った。乞食たちは、その山道のわきの森の中にある村社の床下に住みついて、気が向くと物持ちの農家を物乞いして歩くのであった。この乞食たちの神社の床下住いという方式は、のちのち庫三の暮し方に採用されて、重要な役割を果たすことになるのであるが・・・

ヤス爺の話を〝うそじゃないぞ〟と思っては見ても、庫三にはおいそれと今迄の拾五年の暮しを振り捨てて、自分の父親が公郷であり、母親が武士の娘であると言って見てどうなるものか見当もつかないし、ヤス爺が「誰にも言わねえっちゅう約束ごとは心得ていてくれよな」と言った言葉が藤井家の二十人に及ぶ家族、下男下女若い衆が食べる漬物の桶の重しの石の様な重さでかれをおさえつづけて、時には野良仕事の最中に腰がぬける程やる瀬ないという風な思いにかられながら五年がところ過ぎた。その間にヤス爺は心の臓を病んであっさり死んだ。かれが「俺も長くないしなあー」と感づいて庫三に生い立ちのいきさつを話してやったことは、見通しが当っていたと言えよう。又ご隠居さんは、先祖代々の藤井家の主とその連れ合いの似顔絵や写真が欄間にかざられてある奥の間に、寝たっきりになり、かれの食事の座には旦

那さんと若奥が上り、ご隠居さんのめかけ女中のてつはヤス爺さんが中心であった下男下女、若い衆らの一団の中に格が下げられていた。

徴兵検査ということが庫三にはっきり目を開かせ、やる瀬ない思いをふり振おうと決心させたのである。というのは、徴兵検査のため役場で読んでもらった戸籍というものが、庫三が葛小路真実とその妻かつの実の子であることを教えたのである。

その年の夏のことであった。

藤井家では、寝たっきり老人のご隠居さんを青蚊帳の中に一人残して若奥までそろって畑に出ていた。野菜の取り入れ、仕分、運搬、畑のすき返し、畝作り、草とり、畑仕事には切りがない。

蟬しぐれの激しい裏庭の木立の中から庫三が台所に入った。他の者たちの眼をかすめて、多分馬をせって物を運ぶと見せかけ、裏庭からとって返したのであろう。馬は台所の入口近くの桐の木につないだ。かれは迷わずに真すぐ台所にある大釜の蓋をあけ、今朝の残りめしを大きく結んで、味噌桶に手を入れ、結びに味噌をぬった。

〝まる一日はかかるだろう、もう帰らねえぞ〟かれは敵討ちに出かける若者の決死ともいえそうな心になっていた。結びを冬の納豆作りのために夜なべ仕事で作ってある藁の苞に入れると、かれは西の門の長屋に入り、野良着を、徴兵検査の祝いにと若奥が縫ってくれた紺の股引に着かえ、裸足を洗って木綿の地下足袋をつけ、夜なべにあんだ草履をはいた。

〝まだすることがある・・・〟

〝そうだ〟

かれは台所から旦那さん、若奥の食事の座になっている部屋へ上った。仏壇下の小引出しを音に用心しながらあけた。かれはもう子供の頃小学校で、他の生徒のものを自分のものにした〝大様な気持ち〟はなく、あからさまに、ぬす人の心になっていた。

〝もう此処さ帰ることはねえ、でも盗んだと思われねえように・・・〟小学校の井戸端の折檻を思い出していた。かれはその引出しからいつぞや若奥が馬の飼料屋に憂金色の袋から金を出してやったのを知っていた。

〝ある！〟その袋がある。かれは目をつむって袋の紐をゆるめ、中をさぐって紙の手ざわりをさけてギザギザの手応えのある貨幣を一枚だけぬき出して握っていた。壱円である。明治三十年、うどん、そばもりかけ壱銭二厘であった。

庫三が東京の駿河台の森の中に現われたのは、その日の昼近くであった。馬は町場まで乗って走らせ、そこから村の方へ鼻を向けてひと鞭くれたのであろう。

駿河台の森の頂上のあたりに、東京ニコライ聖堂の塔が、庫三の目に不思議の国の王様の城のようにニョキッ

と首をのぞかせている。〝ニコライ様ちゅうのはあれだな〟庫三は神田という所で馬車力の溜り場できいたニコライ様という異様な名前がこの建物であると直感的に感じていた。その馬車力の溜り場では、葛小路という家は直かにはわからなかったが、〝ニコライ様のあたりにそんな屋敷があったぞ〟と老人の伯楽が言ってくれたのが手頼りであった。

濃い緑の木立は密に葉を重ねて立ち並び、あたりを小暗くする程であり、その下草も蔓を従横にはびこらせ、目の前、足許の小道の行方をさえぎる勢である。〝今日は、おれの本当のおかあ、おとうに会えるんだ〟どくりどくりと耳に、身体の中を血の流れる音が聞えてくる。子供の頃、一度だけ村の神社の祭の夜に境内にかかった舞台で見たことがある〝石童丸〟という芝居の場面が、これ又一度だけ藤井の家で、若奥が嫁に来た時に持って来たという歌留多の絵で見たことのある物具姿、小桂姿の女官、束帯、直衣をきた男公郷の姿と二重うつしになって、草いきれの中で何度も目の前をかすめた。バサリと鳥の羽音、二羽の山鳩がめったに聞くことのない人の足音に驚いて飛び立った。山鳩も驚いたのであるが、庫三もうつむき加減の妄想をちぎり取られて、山鳩の羽音を追って目をあげた。そこにあった！そこに茅門につづいて茅屋の屋根がある。それは全く夏木立、下草の緑の煙の中から立ちあらわれた気配であった。庫三は文字は読めないが、字の輪郭でそれとわかる、茅門の右柱に小さくかかげられた門標は〝葛小路寓〟とあった。寓の意味は庫三にはどうでもよい。葛小路である。本当に葛小路であった。

茅門をくぐる時、足を蔓草にとられてひとつよろけたが、庫三の姿は決して怪しい程ではなかった。在郷のぼて振り百姓があさり、しじみとか葉唐がらしを入れた籠をおもてに置いて門をくぐる風情であった。

庫三は目を据えた。

左側に大玄関が見え、立蔀があっておどそかに庫三を拒んだ。その大玄関の方とは別に、もう一筋石畳が右へのびていて、その末えは台所らしく、そのつづきに内玄関が見える。全体としては藤井の家よりずっと小さい。庫三の耳には蟬の声にぬりこめられた底しれない真夏の昼の静けさの中で、こめかみのあたりを血の流れる音だけが聞えた。先程までは余り気にならなかった汗が、吹き出して顔中をぬらした。

「あらぁ、あんたはん・・・今日は何持ってきやはったんの」

内玄関の戸をなるべく静かに品よくと心掛けてあけた庫三の肩先きへ、台所の格子窓から若い女の声が降って来た。

「あのぉ・・・おれは・・・わしは・・・わたくしは・・・」庫三は戸はあけたまゝ、自分を呼ぶ言葉を三度

いい直した。その女は、台所から内玄関につながる四畳ばかりの畳敷きの部屋にあらわれ、立ったまゝ庫三を見おろして言った。

「あらぁ・・・まちがっちゃったワ、いつものあんさんとちがうんだワ」

その声は庫三が今迄きいた女の声の中で一番透きとおって聞え、調子の上り下りも耳新らしい。藤井の家の女中たちやて・つの娘たちのように野太く真すぐでない。小鳥がさえずる調子であった。

「わたくしは・・・わたくしは庫三・・・チチとハハ・に会いに来たです。・・藤井の庫三・・・ほんとうは葛小路庫三であります」

庫三はこれだけ言うのが精一杯で、女がどんな顔で、それがどんな変り方をしたかは見えずに、その内玄関の椽にストンと腰を落した。戸はあけはなしたままで、かれにしてみれば、精魂つきた挙句のふるまいであったが、女の方にしてみれば、見たこともない在郷の若者が、目を据えて凄味にゆするためにあぐらをかいて坐りこんだ感じであった。

「ちょっと待っておくれやすャ」

女は白い脛が見えるまで飛ぶ足取りになって奥へ駈けこんだ。庫三はゆらりゆらりと身体が左右にゆれるのを感じ、先程顔中をめらした汗にかわって、今度は両腋に汗が流れる冷たさを感じていた。

〝おれは今何んて言ったかな・・・〟〝はっきり名乗ったかな〟〝葛小路庫三だと〟〝あれは女中だろう〟

〝いや、ちゃんときまっていることだ、ちゃんときまっていることだ〟このちゃんときまっていることだを庫三は二度とも口に出して言ってみた。何か声に出して、その声を自分の耳で確かめないと、身体ごと浮き上って、そのまゝどこかへ運ばれそうな不安があった。

小半時もそのままであった。蟬しぐれの中で、物音も人の声もしない。庫三は目が覚めてみたら、藤井の母屋の裏の深い竹藪の中に坐っている自分を想像した。今朝あのうちを出て来たのは夢であったか、狐に化かされることはあるものだ。死んだヤス爺はよく狐に化かされる話をした。

その時、足音をことさら荒々しくふみ立てて、和服に袴をはいた若者がさき程の女をうしろに従える恰好で庫三のうしろに立った。

「キミィ、怪態なことを言わないでくれ給え、大奥様は左様なものは知らぬとおっしゃっておられる。大旦那様は病いで伏せていらっしゃる。キミの様な言い分を、ボクが専門とする学問では、キョウカツと称するのだ。いいかい、キョウカツとは、キミが相手方をおどして金品をゆすろうとする志がなくともだ、当方が異状に不快におち入っておどされていると感ずれば、キョウカツは成立するのである。従ってキミのやっていることはまさ

にキョウカツに当るものであって、当家としては、すみやかにキミを巡査の手に引き渡さねばなるまい。そうなればキミは司直の手によって囚獄に下ることになる。それはキミのためになるまい、引きとり給え、すみやかに引きとり給え」

それは堂々胸をはって行われる演説の調子を帯びていて、一挙に庫三を撃退しようとする意気込みがあった。庫三には、その若者のキョウカツの解説は少しもわからない。ただ〝大奥様は左様な者は知らぬとおっしゃっていらっしゃる〟という言葉だけがあざやかに耳にきこえ、太い丸太でいきなり脳天をうたれた目眩いを感じていた。

〝狐の仕業じゃない・・・徴兵検査のことで役場で戸籍というものを読んでもらって、俺はまちがいなく、この葛小路の家の出であると知ったんだ・・・そのような者は知らぬとはどうしたことだ・・・その大奥様とは、おれのおかあとちがう人なのか・・・病気で寝ている大旦那という人は口がきけないのか・・・おれのおとうではないのか・・・本当はどうなっているんだ・・・〟

先き程からあけたままの内玄関へ舞いこんでしつこく庫三にまつわる飛び方をしている一羽の蝶に、じっと目を据えたまゝ、かれの顔が、あたりの樹木のみどり色をうつしてか少しずつ少しずつ真青という程の青さに変ってきた。

突然、「ヒエーツ」とも「ウオーツ」ともつかない叫び声を喉の奥そこからしぼり出して、蝶を手で払いのけるや庫三は茅門目がけて走った。門の扉に身体をぶつけて外に出た庫三の姿を、もし眺めていた人があったとしたら、多分こんな風に話したであろう。

「右に左にゆれて歩いていました。それはぶらりぶらりとも言える酒にひどく酔った者の足つきでございました。神田川の流れの音が聞える土手までおりてきてそのまま水の中へ入って行くのじゃないかとさえ見えましたが草むらの中にペタンと坐りました。暫らくの間耳をすませている様子で、それは沈思黙考とも無念無想ともうけとれる姿でございましたが暫らくしてコロリと横に倒れたところは、寝ころぶと申そうよりは完全に気を失った者の姿勢でございました」

その夜、葛小路寓の縁の下から火の手があがった。縁側の一部と縁つづきの離れ部屋の入口のところを焼いただけで、火は消しとめられ、葛小路家では焚火の不始末と届け出て内々に済まそうとしたが、火事の報せで駆け登って来た巡羅の手で、葛小路寓から一丁（約百二十米）も離れていない木立の中に、片手に握りめしを半分つかんで、うっとりと立っていた庫三が何の抵抗もせずにつかまり、「おれがやった」と放火を認めた。だがかれは、その動機については、とうとう警察署でも裁判所でも「わからない」と頑固に口を閉じた。実のところ、かれには〝動機〟などと言われても、たやすく言葉にうつ

せるような心持ではなかった。

監獄の中では、雑居房でも、作業場でも、庫三は全く言葉を忘れたもののようであった。担当看守や房中のめんのきいた連中にはいつも「ヘイ」と言うことをきゝ、けっして逆らうところがなかった。このように柔順な者は獄舎の中ではあたりから軽んぜられ、忘れられるものである。どれもこれも、そろって意地悪く、とるに足らぬことでいさかいが絶えない雑居房の中で、かれだけは板の間に敷かれた薄べりの端に小さく忘れられて、独居の姿勢でいた。「シャリだぜ」という掛け声にも浮き立つこともなく同囚の一番尻についた。ある日そういう庫三を監察まがいの目つきで見ていた中年の同房の男が話しかけてきた。

「おめえ、まえもちだろう、何ふんだんだ」

こういう所では、とかく自分のやったことを大きく話して箔をつけたがる。「うぐいすをいただいたんだ」とか「ねむらして、ふけそこねよ」と熟練者を気取るものである。庫三にも〝まえもち〟〝ふむ〟ぐらいの言葉は、あたりの話から分るようになっていた。

「いえ大したことじゃねえんで・・・」

「大したことじゃねえって、いたのまかえ、あきかえのびかえ、それともあかねこか・・・おれはずやだ、くいつきがいて、まちがいになっちゃったのよ・・・もうすぐたいいんさ」

その男はささやいた。そして自分は、下総の国の生れで、仙吉と名乗り、ずやというのは盗品を買っておろす問屋であると解説を加えた。

「おめえさんも、たいいんしたらたよって来いよな、おれは北豊島ごおり日暮里村大字谷中に店を持っているからな」

店（みせ）というところに力を入れた。成る程それから半月程でかれは出た。出がけに自分の店のあり場所を何度も庫三の耳に吹きこむようにささやいて行った。かれにしてみれば庫三を見込みのあるしのびと目星をつけたのであろう。忍師は仙吉の商品仕入れ先であり、その道のれつ（仲間）であったのだ。

一年と半の刑を終えた庫三は、結局お上というものの指図があって、葛小路家が身許を引きうけねばならなかった。直文はもう他界していた。又その家に出入する加芽女をはじめ兄弟姉妹もある筈であったが、かれにはそのような身内のつき合いは許されず、一年半前に、かれにキョウカツの解説をした書生の山田と離れ部屋に寝起きさせられ、山田の監視の中で「フジイ」と呼びすてにされる下男であった。山田は明治法律学校というところに夜学生として通い庫三はその山田に頤で使われる身分になったのである。

大奥様かつは朝の風呂にたっぷり一時間はつかり、そ

れから油を洗いおとした髪を女中に念入りに梳かせ、白髪をぬかせ、結わせ終るまで三時間近くかけた。客の出入りのある時は台所に下りて女中を指揮することもあったが、主に部屋の道具、家具の類に毎日ゆっくりと布巾をかけ艶ぶきをして、さて長火鉢について、長煙管で煙草を吸い茶を喫することをたがいちがいに繰りかえしながら「我楽多文庫」「都の花」「しがらみ草紙」などをめくったり、時には山田を呼んで足腰をもませたり、一日中音を立てない暮し方であった。かの女は山田にだけ声をかけ、庫三を近づけなかった。庫三は食事も裏庭づたいに勝手口で女中の手から箱膳お鉢を受けとって、離れで山田に仕え、かれの監視の目の中にあった。葛小路寓はかつの隠居住いであり庫三の長兄道春の一家は此処には住んでいない。

山田は大奥様かつの足腰をもんで小遣を頂くようであったが庫三にはそのような手当てはもちろんなかった。だから監獄でもらった賞与金（作業報酬）はそう長持ちする額ではなかったので、かれのたった一つの快楽をつづけさせることは出来なかった。庫三は身体が小さく、食も細くてすみ、女に対する欲望もさして強くはなく酒は呑まなかった。ただ子供の頃からヤス爺のきざみ煙草を盗みのみして、少しばかりの煙にしゃがみこむ程の酔いの快感を知っていた。そば・うどんもりかけはまだ壱銭五厘の店もあったが、煙草は朝日六銭、しきしま八銭きざみ煙草ではなでしこ、あやめは二十銭四十銭の高値であった。かれは煙草の快感が欲しくて、物置部屋に入ることを覚えたのである。

物置部屋と山田や女中が呼んでいる部屋は大玄関の左わきにつづいた六畳程の小部屋で、大奥様かつも忘れたように放ってあるところで、中には刀剣、軸物、焼き物鎧兜、書籍類が雑然と積み重ねられていた。大型の長持も二竿鍵がかかっていた。中味はわからぬ。庫三は一番初めは、奥の方に束ねてころがしてある刀剣の中から短かくて目立たぬつくりのものを抜きとって、一晩と一日離れの床下に置いて、山田が夜学へ出てから、忍び足になって垣根を越えて出て、北豊島ごおり日暮里村大字谷中の方角へ走った。狐狸の出そうな夕暮れ道ではあるが、庫三の目は子供の頃から暗さには順れている。若奥が徴兵検査の祝いにぬってくれた股引に着がえたかれの足は子供の頃、山道で乞食の焚火の前を走りぬけた時に仲間の子供たちを十間も引き離したことのある韋駄天ぶりであった。

「こりやこかすにやちょっと手がかかるわな・・・とばならとこびら、すけびら何でもいいんだがな・・・まあ何でもいいやな」

仙吉は、寺の墓石に寄りかかる恰好で傾いているひと握りの長屋のはずれにあるかれの間口一間（約二米）の「店」で、隣の寺の墓場から持ってきてためてある蠟燭

を特別につけて庫三を迎えた。奥ゆき二間（四米弱）の物置小屋めいた「店」の奥に、四畳程のかれの寝室兼作業場らしいものが見えた。女気はない。その部屋でかれは器用にばい品に手を入れて形や色をかえる作業をするらしい。ひと通り庫三の持ちこんだ刀にケチをつけながら、それでも気前よく壱円くれた。仙吉が壱円で賈いとるのだから、もし銘だの何だのうるさいことを言ったら相当な刀であったろうが、庫三にはそんなことは分らぬ。ただやすやす壱円もの大金を手に入れる技術（？）をかれは身につけたのである。

仙吉が〝何でもいいやな〟と言ったので、庫三は段々隅のものから持ち出し初めた。ある日〝びらがいい〟と云う仙吉の指金で、長持の腰の板をはずして、死んだ直文のものらしい衣類に手をかけた所を、山田に腕をねじ上げられていた。

山田の手で、額を畳にすりつけるまで引き据えられた庫三に、大奥様、すなわちかれの実の母かつが言った。かの女は長火鉢をわきにして立て膝気味に中腰になって、長煙管を構えていた。その全身には、三十余年の昔、葛小路直文を感傷的情緒的な気分にさせたあのきっとした野性があふれていて、その三角にとがった眼は、鬼の顔を作っていた。庫三の心は、シンとして冷え切って、もう「ヒエーッ」とも「ウオーッ」とも叫ばずに、ひき据えられたままであった。

「お前のようなものはこの戦争へ行って死ぬがいい。加芽もお前のおかげで園さまのところをご遠慮申し上げることになったのだぞよ」

時に庫三二十七才・明治三十七年であった。その夜庫三は葛小路寓を出て、二度と帰らなかった。巷には遼陽会戦勝利の号外が飛んでいた。

公郷小僧とは、忍師の腕前を認められ始めた葛小路庫三に、世間がささげた称号であった。かれは東京中の神社仏閣の床下を本拠として、神仏の加護によるものか、風のように走り、その行動はまさに〝神出鬼没〟そのものであった。

漬物・兵士・馬のラプソディー

大和禎人

輜重兵特務兵にまつわる話を書きたいと思う。

輜重兵特務兵という呼称のこの兵種は輜重兵科に属しているが、単に輜重兵と呼ぶものとは違っていて、輜重兵の指揮をうけ、あくまで下働きの、裏方に徹した一群の兵士たちであった。

輜重輸卒が兵隊ならば
トンボ、チョウチョウも鳥のうち
電信柱に花が咲く

という侮りに黙々と堪え、つねに舞台の裏方であった輸卒こそ特務兵の前身であった。

かっての日本陸軍の歌は第七節に至って、

砲工歩騎の兵強く
連戦連勝せしことは
百難おかして輸送する
兵糧輜重のたまものぞ
忘るな一日おくれなば
一日たゆとう兵力を

と輜重兵に花を持たせるが、この小節の（輜重兵）とあるだけでは下働きの輜重輸卒はかくれたままである。輜重兵特務兵と呼称が変ったものの、任務と性格は全く変っていない。現役二年のところ、輸卒の時代で三ケ月、特務兵となってからは五十五日、短期教育で帰休除隊となった。一般兵が輜重兵を含めて二年であるから、（帰休除隊）というニュアンスをもって表現した。星一つのまま昇進ということの全くなかったこの兵士たちも応召、再応召という戦争の長期化とともに一般兵と同じ昇進の道が開かれるのだが、輜重兵一等兵の指揮下に輜重特務兵の上等兵が入るというおかしな現象も見られるようになる。それでも淡々として輸卒の時代からの伝統をうけつぐ本来の姿で、虚心ならざるを得ない宿命を特務兵はあくまで担ったものであった。

黒龍江を遡江して運ばれる兵器弾薬、秣糧の膨大な集積を蟻のように運ぶ任務を私たちは与えられていた。

私は二回目の応召で昭和十六年七月から十八年にわたり、いわゆる「関特演」と呼ばれた関東軍特別演習の召集をうけ羅北にいた。もちろん戦時編成で中部第七四部隊の輜重部隊に属する名誉の特務兵であった。

ソ満国境はこの頃すでにソ連軍の侵攻する予兆が濃厚になっていて、任務に余暇があれば対戦車地雷作戦の演習に私たちは駆り出されたものだ。「満炭」に働く日本人宿舎の人々の売店ではまだ物資が豊富であるというのに、私たち兵隊の給与はすでに十分とはいかなくなっていて、兵士の馬糧を盗み食う状況がぼつぼつ始っていた。

私たちはひそかに赤い蕪の漬物を作った。断っておくが、ここでいう赤蕪は内地のものを想像されては間違いになる。ご存知の桜島の大根に似る大きさのものだった。漬物に飢えた兵隊の才覚で飼葉桶を利用し、馬房の敷藁の中にそれを匿していた。岩塩を馬糧用からはずす工面が行われていた。この割愛の作業をあえてしたものが特務兵の中でも御兵であったことは言うまでもない。御兵、補助兵に彼等の任務は別けられており、御兵は軍馬の轡をとり、補助兵はもっぱら弾薬班、梱包班としての仕事を分担しているから、御兵が仲間の渇望に応えることになる。指揮者として輜重兵の騎乗する軍馬の世話まで御兵の手中にあったのだからお手のものなのだ。

漬物を喰いたいという願望はとくに塩分を欲する生理的な欲求が兵士たちにあったものかどうか、ともかく特務兵の内務班では公然の秘密としてくだんの赤蕪の漬物が食事に上った。しんねこのこのメニューはどれだけ私たちにささやかな満足感を与えたことか……。羅北の街区の郊外には誰の手で耕作されていたものか、この漬物の材料として徴発をほしいままにできる赤蕪の畑がいくらでもあったのである。

もちろん御兵が岩塩を横領する行為は許されてはならない無法の行為である。が、しかし、彼等はまだその行為がやがて重大事につながろうとは夢考えてもみないのであった。（員数あわせ）という無法はむしろ兵隊要領でさえあるという観念がすっかり身についていたからだ。足らざるを補うことは兵隊のおのずからな自衛の手段に外ならないのであった。彼等は単純であり、かつ無邪気そのものの振舞いを重ねていたのだ。

なぜか、軍馬がお互のたて髪を喰み、尻尾まで噛み切る状況が馬房で起った。尻尾はおのれのものまでも喰む狂おしさである。

「おんた（雄）もめんた（雌）もえげつにャ（かわそうに）いがるの（叫ぶ）」
「ぼだい（まったく）いがるの」
「どげで（どうして）」
「このしようから（腕白）！」

御兵たちは出身の鳥取訛で異常に気づいた。日ましに荒みがひどくなる。腕白として馬を叱るだけではもはやすまされない状態だ。

軍馬は通常雌雄とも使われていたが、雄馬の方はすべて去勢されていて、雌馬にいくら発情がきても、あの種つけの壮絶な交合は起ろうはずがない。雌馬の悲しげな嘶きばかりが馬房を震わせるのだ。妻子のある兵士が彼等の藁布団の中で声を忍ぶ男泣きにも似て、軍営に哀感を漂わせるのであった。

しかし、いま馬房に起っている異常はそういうものとは違う。兵士たちの理解しがたい狂燥で、手のつけられない状況であった。

「はてな」

と、隊付のヨーチン軍医どのがまず気づいた。

（これはむさんこ（むちゃくちゃ）ぞ）

彼は心の中で狼狽を覚えた。ヨーチン軍医どのというニックネームは彼が能なしで、何かといえばヨーチンを塗布して治療をすませるところからきていた。もっとも部隊に軍医はいてもロクに薬を備えのない貧しい医務室であったから、あながち責めは彼一人の負う性質のものでもなかったのだが……。ここで、彼の本来は獣医という立場の、こと専門に関するだけに敏く真因を察知できた。

（やはり、これは塩分の不足だ）

そう断定して良い。確信をもって彼は状況判断をした。

（兵隊たちだ）

と、直感が働いた。対岸のソ連兵の動きに神経を研ぎすます一方に、これは内側に起った火の手であった。

「こたえるのう（こまるなぁ）」

彼は同じ郷土兵の罪科を厳しく追究せねばならない。思わずこうひとり語ちた。辛いがここで軍紀は正さねばならぬ。彼はそれを軍医の立場に立ってまず処理したいと考える。部隊の幹部に知らせないですませたい。できればそうしたい。責任の一半はすくなくとも自分にもあると気づいていたのだ。

「特務兵は舎前に集合」

彼は帯びている軍刀の柄頭を拳でたたき、やおら行動を起した。

（これは、おぬしだけが知っている経緯であろう。おぬしは馬を救い、兵隊にこれ以上のあやまちをつづけさせてはならぬ）

いやしくも軍刀を帯びて、将校と呼ばれる立場にあるものだ、という自覚が彼を激しくつきあげたようだ。

彼は特務兵の全員をそれから黒龍江の河岸まで走らせた。

「全員、裸になれ」

そして、それからふしぎな禊（みそぎ）が行われた。

満洲はようやく遅い初夏であったが、河の中では歯の根がカチカチと鳴り、たちまち唇が紫に変わる。連帯責任をとり罪をあがなう麗わしい光景であった。河の水の冷たさにかかわらず、岸辺にはそれでも陽炎が燃え、日本陸軍の一応召将校と多数の兵士たちのふしぎな贖罪の情景を彩っていた。越中褌の中の日本男児が縮まれるだけ縮まり、恐縮を表わし、何人かは思わず生温い小水を河の中にもらした。冷水の中にふしぎな快感がはい上った。北支に転戦した一回目の応召ではクリークの中で私はこれと同じ経験を何度もしている。

「よおし、上れ」

軍医どのが叫んだ。生白い皮膚の持主で、どの兵隊よりもひ弱に見える彼は血の気を失った顔に悲壮感を浮べており、そのことが兵士たちに贖罪意識を共鳴させるのに役立った。

「軍馬があっての輜重隊である、君らのしていることは輜重隊の命とりになる、自殺行為に等しいものだ、ええな軍馬があっての輜重隊であることを忘れてはならん」

軍医どのは（君ら）と言った。応召軍医のそれは青白さなのだが、兵士たちの心証にはそれがかえってこたえた。彼は一言も漬物のことを口にしなかった。

黒龍江の流れは時ならずこの異邦の兵士たちに汚された。日本軍独特の精神主義に汚された。しかし、悠々の大河は知らぬ気に兵士たちの生温い何リットルか小水をあわせて、その汚れをたちまち海へ運び去った。

右のことはもう昔々のお話である。いまとなれば一種コメディ風にさえ胸に甦える（お話）にすぎない。

最近、某日。ペットに飼われている小鳥たちにも自殺行為があるという話を聞いた。おのれの胸の羽毛を嘴で毟りとり、ついに胸を裂くというのだ。ストレスからくるのだという。凄惨な話だ。この話が話題に上った時、居あわせた別の一人はあの「夕鶴」という戯曲で乙女に化身した鶴がおのれの羽毛を犠牲にして機織る話はこれに似ている。恐らくは作者の木下順二氏もそのへんにヒントを得た発想ではなかろうかと言った。

私は卒然としてこの時右のような（お話）を思い出したことだ。

（五七・三・三〇）

志功頌

岸田幸雄

どうして私はこんなに
板画家の棟方志功さんが好きなのか
自分でもよくわからない
何故かと考えるよりも先に好きなのだ
そういう志功さんに私は一度もお会いしていない
テレビでは幾度か姿を見ている
鉢巻をして一ッ気に板を彫りつづける彼
度の深い眼鏡は今にも板にくっつきそうだ
どうやら片目はもう完全に駄目らしい
その姿を見ていると
不思議な力が私を痺れさせる

三十年ほど前のこと
野村という私の教え子が
自慢そうに一枚の絵を見せてくれた
親類の者が描いてくれたのだと言う

半紙大の板画だ
黒一色で刷ったものに
あとは荒っぽく筆で色が塗ってある
見れば志功のサイン
私も美術の教師だからその名は知っていた
だがこの絵は感心しない
お世辞にもうまい絵とはいいかねた
私はただ
「棟方志功さんと親類なのか　この人は有名だよ」
といってなんのことなくその絵を返した
ところが後になって
不思議な力が私を魅きつけている事に気がついた
私はいつの間にか
志功さんの展覧会はかかさず見に行っていた
そして段々好きになっていった私
今では好きで好きでたまらぬ私だ

志功さんの絵がまず第一番に私を痺れさすのは
「仏心」のようなものだ
それも彼なりの彼独特の「仏心」だ
彼は好んで真ッ裸の女や菩薩を描く
その乳房や腰のあたりは丸出しだ
時には股の内側まで描いてあることもある
それらが群をなし天空を舞ったり
馬に乗って翔けていることもある
なんという野放図さだ
なんという出鱈目だ
狼籍、不逞といってもいい
それでいてやはり「仏心」に違いない
彼の心底信奉する華厳経とは
畢竟
『とどまる事を知らぬ無限の自由
宇宙に満ち溢れる光の中に自分があり
自分の中に宇宙の光が流れている』
と言う事なのだろう
この教えに志功さんは自分の裸をぶっつけ
そこに醸し出される自分を、宇宙を
不器用ながら懸命に描き出そうとしているのだ
もともと青森の田舎で生れた彼
おばばの懐の中で育ちながら
いつも同じことを聞かされた彼

「あの障子には仏さまがいるのだよ」
幼子にはそれが不思議でならない
「どうして仏さまがいるの」
答はいつも決っていた
「ああ　いるとも」
彼の「仏心」はその時からのものだ
これに後年火をつけたのが
陶芸家の河井寛次郎さんだから驚く
志功さん三十五才の時だ
河井宅に四十日間閉じ籠り
華厳経に全身を投げこんだ
彼の板業の方向は
この時固ったといっていいだろう
現実にその直後大作「華厳経」を
河井さんに献じている

誰もが板画家の棟方志功と呼ぶ
だが同時に私は文人棟方志功と呼びたい
彼の板画と文学は絶対に切り離せない
文人・詩人・俳人の作から
発想しているものが極めて多い
例えば
宮沢賢治・岡本かの子・谷崎潤一郎
吉井勇・草野心平・石田波郷

というように
だから志功さんの絵には「文字」が遠慮会釈なく登場
する
岡本かの子さんとの「女人観世音板画巻」なども
その十二枚の殆どが
絵よりも「文字」が幅をきかせている
こういう志功さんが日本より早く
西洋で認められたのは何という皮肉だろう
美術から文学要素を一切取り除くことが
世界の現代美術の大きな潮流ではなかったのか
志功さんの仕事はそれとは正反対だ
その彼に各国は競って賞を贈呈した
これは正しく彼等の「驚き」であり
「反省」だったのに違いない
だから痛快である

また、志功さんの板画は郷土の匂いがぷんぷんする
彼の激しさは生地青森のネブタと凧絵の激しさだ
民芸の匂いもする
これは柳さんや河井さんの影響だろう
それともう一つ、私には彼の作品から
能の「物狂い」のようなものが感じられてならない
現に能の「善知鳥」から直接取材したものもある
だがその他の絵にも私は「物狂い」を感ずる

何にも彼も好きな志功さんだが
どうやら煎じつめると
その作品よりも　そこに丸出しになった
志功さんの「人間」そのものが私は好きらしい
棟方志功さんはもうこの世にいない
しかし彼の魂は今でも
宇宙の隅々を翔けめぐり
私の身のまわりを舞い踊り
私の心の中にどっかと腰をおろし
怠け者の私を鞭打ちつづけている

（五七・三・一六）

雑　詠

増　川　遼　三

ふたりしてひと日がかりに張替へし障子にほのと初日影さす　（元旦）

鉈彫りの肌理（きめ）冴え冴えと笑み給ふ日向薬師に新春（はる）の陽は満つ　（初詣）

娘（こ）の朱筆遺れる辞書のほつれしを劬（いたは）り繰れば筆捗（はか）ゆかず

通ひ慣るる街坂にしてこの日頃わが上りゆく歩幅狭まる

宵告ぐる「夕やけ小やけ」の鐘の音の余韻くぐもる雨の日曜日

家路辿る吾を見かけてさりげなく妻は特売の列離れ来る

春雨にこぼるる梅の花を背に夫婦（めおと）の蓑は瞑（つむ）りて久し　（啓蟄の日）

週末の車中に拡げ拾ひ読む歌壇の紙面照り翳りして

転びたるわれにはしなく手を伸べし行きずりの人よ吾娘（あこ）の年齢（とし）なる

汗をかいた壜

柴田富佐子

夜通し強い雨が降り続いて明けた朝は、空気までが重みを持っているようだ。閉めきった店に下りると、湿気を含んで膨れあがった空気がぎっしり詰っている感じで、朋子が入口のシャッターを開けに動いていく場所の空気だけが、押し拡げられて僅かに動く。

ぎゅっと握りつぶせば、滴がしたたり落ちそうだ、と朋子は思った。

冷蔵庫のガラスは、中が全く見えないほど水滴に覆われ、底部の受皿からは水が溢れて床に長い糸を引いていた。

昨夜遅く買いに来た客がレジ台の上に置いていったままのビール瓶も、棚に並んだウイスキーや酒の壜も、じっとりと汗をかいて白く押黙っている。

（我慢較べをしてるみたい）

心の中で朋子は呟いた。

ガラス戸を開けシャッターを押上げてみたが、期待していた軽やかな空気は流れ込んで来なかった。真向いのビルの上に拡がる空は、コンクリート剝き出しのその建物と同じ色に拡がっている。

（また、やな天気）

空がカラッと晴れれば気持ちも軽くなるだろうに、そんな想いがあった。

自転車を出そうとしかけた朋子の目を棚の壜達の不快気な顔が捉えた。朋子は奥へ馳け上り、乾いた雑巾を取って来ると、棚の壜を一本一本丁寧に拭き始めた。

拭かれて棚に戻された壜は、湯上りのようなさっぱりした顔を朋子に向けて微笑んだ。

その微笑みの小さな波が、数を増すごとに増幅されて朋子の胸に伝わり、冷たく蟠っていたものを、少しずつ崩し始めた。毎朝の目覚めと同時に、喉元を押上げるように巣喰う蟠りが、こんなに早く消える日は滅多にない。起きて働き出してしまえば、いつとはなしに生活の流れ

の底に置き捨ててしまえるものなのだが、それまでの重苦しい気分は朋子を無口にしていた。

「どうしたの、そんなむきになって」

背後からしばらく朋子の様子を見ていたらしい久夫の言葉が、朋子の手を止めた。

「まり子、起きてるよ。後は僕がやるから」

自転車も看板も外へ出さず、憑かれたように壜を拭いていた自分の姿が急に恥しくなって、朋子は手にしていた壜を棚に戻すと久夫の側を摺り抜けて奥へ馳け込んだ。

二階の部屋でまり子を着替えさせ、布団を片付けて下りて来ると、茶の間にきちんと身仕舞いを済ませたきのが待っていた。

「まり子ちゃん、おはよう」

坐ったまま、きのはまり子の方へ両手を差出した。きのの揃えてくれた座布団の上へまり子を坐らせ、

「おばあちゃん、おはようは」

と朋子が言うと、まり子は顎を引いて二、三度こっくりをして笑った。と、開いた下唇の真中からつつっと涎がこぼれた。

「おっとっと」

きのは前掛けの裾を慌ててまり子の唇に当てた。

まり子と向い合ってきのは積木を積む。

「三つ、四つ、五つ、六つ」

ゆっくりゆっくり積んできのが手を引くと、それを待っててまり子が右手を横に払う。積木が崩れる。

「おや、まあ」

大袈裟に両手を拡げてきのが驚いた素振りをする。まり子は弾けたような笑い声を立てる。その声にきのの

「ホッ　ホッ　ホッ」

というつつましやかな笑い声が重なる。

きのは又積木を積む。まり子が手で拡う。

「おや、まあ」ときのが驚く。まり子が笑う。きのも笑う。同じ動作を二人は倦きずに繰り返している。

その頃になって、綾はようやく床から抜け出して来る。寝巻の上に茶羽織を重ね、足袋もはかずに茶の間に入って来た綾を、きのは一瞬咎めるようなきつい目で見たが、何も言わずに視線をまり子に移した。

「毎日毎日よくそう同じ事ばっかりやってて、倦きないわね」

「だって、まり子ちゃんが喜ぶんだものね」

語尾の「ね」を、まり子に同意を求めるように笑いかけると、まり子はこくんと頷いてきのを見つめた。

「さあ、まり子ちゃん、まり子ちゃん」

背が曲ってひどい猫背に見えるきのは、片手を畳について体を支えながら、別の片手で又積木を積み始めた。それは、これ以上腰が曲らないようにつっかい棒をしているようにさえ見える。

卓袱台の前に坐った綾は、きのとまり子の和やかな空

気を振り払うような乱暴な音を立てて新聞を拡げた。
「まり子ちゃん、一寸待っててね」
きのはまり子に積木を預け、綾が起き抜けた布団をたたみ始めた。坐ったままたたむきのにとって、大きな布団はたたむのだけでも骨の折れる仕事だったが、たたんだ布団を押入れにしまうのは、更に困難な仕事だった。
両手で押しては膝でにじり寄り、又押してにじり寄り、という動作を繰返してやっと押入れの口まで運ぶ。布団の下に頭ごと突込むようにして肩で持上げ、少しずつ、少しずつ重ね上げる。仕舞い終えると、長いこと両手を前につき肩で大きく息をついていた。
久夫が急ぎの配達で出てしまったり、裏の空地で空壜の片付けをしたりしている間は、台所に立っていても朋子は神経の半分を背中に廻していなければならない。台所と店との間の茶の間に坐っていても、綾はテレビを見ているか、物を食べているかして、決して店へ立とうとはしない。
（居ないと同じなら、いっそ居ない方がいい）
朋子の胸に少さな蟠りの芽が生える。
電話が鳴る。朋子は煮物の火を止めて店へ走る。
「はい、柳屋酒店でございます」
注文の品を伝票に書きとめ、配達伝票の箱へ入れる。引込もうとすると客が来る。客を帰し、気がついた品切れの品を黒板に書き、足りない小銭を補充したり、セロテープを新しいのと取替えたりしている中に又客が入って来る。
台所へ戻って来ると、煮かけの鍋はすっかり冷えてしまっていた。卓袱台の前に綾の姿はなく、綾の坐っていた場所に読み拡げられたままの新聞が放り出してあった。
まだ久夫も目を通していない新聞に、無惨につけられた何本もの筋は、朋子の心に同じ数だけの筋をつけた。
夕方近く、踊りの稽古から帰った綾は、坐るのももどかしげに袋から紙包を取出した。包装紙を破りくるくると丸めて膝の脇へ投げ捨てた。ビニールの袋を歯で食い千切り、殻付きの落花生を一気に卓袱台にあけると、手でならし手前の方から食べ始める。時計を見てテレビのスイッチをいれ、目はテレビに向けながら、手は休みなく殻を割り、豆を取出し、口に抛り込む。殻や皮は卓袱台の下へ払い落す。食べ尽してしまうとそのまま立って、胸から膝にへばりついた殻や皮を両手でパッパッと払い落して又出ていってしまった。
「食べりゃ食べっ放し、出しゃ出しっ放し」
呪文のように口の中で綾を罵りながら、きのはその動きの鈍い体でギグシャクと綾の散らかした後を追いかけて片付け廻っている。
「全くどこへ行くんですか、よくまあ次々と出掛ける用があるもんですね」
朋子にそう言いながらも、きのは綾が出掛けるとほっ

としたように坐りこむ。顔付きまでが穏かになる。
どうして綾だけが店も手伝わず、家事もせず、勝手気儘に出歩いているのか、どうして綾が体のきかないきのに生活を預けっ放しにして平然としていられるのか、結婚して以来一日として消えない朋子の疑問であった。
「どうしてって言われても、別に理由はないだろう。昔からそうだったっていうだけだよ」
久夫は答えた。
「焼ける前は人が簡単に使えたからね。店の人間も多かったし、女中の二人や三人はいつもいたから、一人娘のお嬢さんは何もすることがなかったんじゃないの。親爺は小僧上りの養子だし、おじいさんはあの人にやたら甘かったらしいから」
「それであなたは何とも思わないの」
「何を」
「何をって、今は女中さんなんていないのよ。お母さんの後始末はおばあちゃんが全部やっているのよ。あの体で息を切らし、切らし動き廻ってるのを見ても、何とも思わないの」
「仕方ないだろう。そう育てたのはおばあちゃんなんだし、おばあちゃんだって、やりたいからやっているんだろう」
「あたしには見ていられないわ」
「二人の事は二人に任せとけばいいじゃない。それでずっとやってきたんだから。見て見ないふりしてりゃいいんだよ。じき慣れるよ」
背が曲った分だけ小さくなったきのが、長い箒の柄にすがりつくようにして掃除している姿は、見まいとしても朋子の視野に入って来る。前掛けの裾を踏んづけて危うく転びそうになるのも一度や二度ではない。綾の汚した食器類を台所へさげる時も、片手で傍の柱や障子に摑って手の力を借りなければ立上れないきのが、やっと立上り、歩き初めの幼児のようなたどたどしい足取りで皿を一枚一枚運ぶのを、黙って見ているのは辛い事だった。
初めの頃、堪りかねた朋子が手を出そうとしたが、きのは
「あなたにこんな事までさせては罰が当ります。私がやりますからいいんですよ」
と朋子の肩を押えた。その言葉は「それでも、あたしが……」とは言わせない冷たい拒絶に裏打ちされていた。
朋子が手伝って罰が当たるというのなら、身動きもままならない年寄りにやらせている綾に、どうして罰が当らないのだろう。綾に対する反撥が凝固して蟠り、朋子の胸に堆積していく。
暮れは酒屋の書き入れ時である。
十一月も十日を過ぎると、歳暮用のセット物や暮れ用の荷が次々と入り、倉庫に納りきれない荷が茶の間の片

隅や廊下の片側を占領していた。近くの会社や商店から受ける纏った歳暮品の配達で、久夫は日中殆んど車で出ている。その分だけまり子を背負った朋子が店番をする時間が長くなる。きのは形だけでも店を手伝おうと、帳場の椅子に腰掛けているが、電話の声もよく聞きとれなくておろおろするばかりだった。

綾だけが、いつもと変らない時を過している。今年も例年通りデパートから正月用の晴着が届いた。待ちかねてた綾は、早速に取出して肩にかけ

「どう、おばあちゃん」

ときの前に立った。

肩に喰い込んだ背負い紐を、手を差込んで引上げ、少しでも肩の負担を軽くしようとしながら朋子が通りかかると、

「朋子さん、今年の柄どう？　いい色でしょう」

裾前を合せ、片袖を拡げて声をかけた。

「そうですね」

朋子は着物に視線を投げただけであった。

「あの人はいつもああなんだから。つまらないったらありゃしない」

尚も袖を二度三度とひるがえして鏡の中の姿に見惚れている綾に、

「少しは若い人達に遠慮するもんです」

珍らしくきつい語調できのが言った。

「若い人達こそ新しい物を欲しいでしょうに」

「欲しけりゃ買えばいいじゃない」

「この忙しい中で、買いに行く暇もないでしょう」

「暇な中に買いに行けばいいのよ。用意が悪いから」

「暇な時なんかありゃしません」

「休みの日があるじゃない」

「あなたと違って、毎日朝から夜まで働いているんです。休みの日は体を休めなきゃ、続きませんよ」

「どうでも欲しけりゃ、いくらくたびれていたって、買いに行くわよ」

「それはあなたの事でしょう」

「何でおばあちゃんは、いつもそうやって朋子さんの肩ばかり持つのよ」

「店のためにあんなによく働いてくれる人が外にいますか。有難いと思わなきゃ、罰が当ります」

「どうせあたしは罰当りよ。何よ。朋子さん朋子さんてお世辞使って。いやらしい」

新しい着物を脱いで鏡台の前へ投げ出すと綾は裏口から出ていってしまった。袖裏をみせて投げ出された着物を、きのはにじり寄ってたたみ始めた。いつの間にか朋子が部屋の入口に立っていた。

「おばあちゃん、一寸いいでしょうか」

目尻に溜った涙を、きのは急いで前掛けで拭いた。たたみ終った着物を箱に納めてから片手をついてそれを軸

に、坐ったままの膝を廻して朋子の方に向いた。

「いいですとも。いらっしゃい、まり子ちゃん」

くぐもったきのの声はよく聞きとれはしなかったが、精一杯まり子の方へ伸した両手には力がこもっていた。

「一寸急ぎの包装があって」

「御苦労様ですね。あなたも背負い通しじゃ肩が痛くて大変でしょう。いいんですよ。遠慮しなくたって」

まり子を背から下した朋子の項にきのの手が触れた。まくれ返った衿を丹念に直してくれているきのの手は、瀬戸物に触れた時のような懐しい冷たさを、いくつも朋子の肌に残した。

壁と畳の境い目から黒いものが這い出して来る。目をこらして見つめていると、それはゴキブリのようだが、角があった。虫はぬめぬめと光る背中をくねらせ角を振り立てて、朋子の方へ向って来る。朋子は履いていたスリッパを振り上げて叩き潰そうとした。その気配に、黒い虫はくるりと向きを変えて壁の方へ戻り始めた。朋子は手のスリッパを虫めがけて投げつけた。が、スリッパは虫を通り越して壁に当った。その衝撃で虫は跳ね飛ばされ、寝ている朋子の耳元に飛んで来た。

「ヒー」

という声と共に、朋子は上半身を起した。実際に声を出したかどうかは解らないが、隣りの久夫は静かな寝息をたてているから、多分悲鳴は夢の中だけだったのだろう、と朋子は思った。枕の脇に、さっきの黒い虫がうごめいているような気味悪さが残っていた。肩先の寒さが背骨を伝って下りてくる。その時目覚めきれない頭の芯を揺さぶるような激しい音を聞いた。突嗟に「火事」と思った朋子は飛起きて廊下へ出た。奈落の底のような階段の下に、綾が顔だけを浮上らせて立っていた。

「大変、大変、早く来て、早く」

綾は持っていた洗面器を廊下に落した。洗面器はけたたましい音を立てて転っていった。

先に階段を馳け下りた久夫に綾は、

「おばあちゃんが」

開け放しの便所を指差して言った。

きのはタイルの床に横倒しに転っていた。

久夫と朋子はきのを抱き上げ、そっと布団に寝かせた。

荒い息を吐いてきのは眠り続けている。

それからのきのは、耳元で呼べば深く覆いかぶさった瞼をわずかに上下に動かすが、意識はないまま起きているとも、眠っているともつかない状態であった。点滴と注射だけがきのの生命を繋いでいた。

きのに倒れられて、まり子が朋子の背中から離れるのは、午後二時間ほどの昼寝と食事をさせる間だけになった。発育のいいまり子は、小柄な朋子の背にぶら下るようにくくりつけられていると、足が床に届けそうであった。

おりたがって手足をばたつかせると、疲れきった朋子は後ろへ引倒されそうになり、慌てて胸の前で交叉した紐に両手をかけてまり子を揺りあげた。気ばかりあせっても、きのの世話にまで手が廻らず、歳暮用のビール券を数えてる最中に、ふっときののおむつが気になりだして数を間違えたりした。忙しさと、体の疲れと、それに輪をかけてきのに済まないという想いが、僅か一日で朋子の目を凹ませた。さすがの綾も出にくいとみえ、終日何となく茶の間に坐っていたが、それはあくまで坐っているというだけで、電話が鳴っても、客がたてこんでも店へ出て手伝うという訳ではなかった。

ただ毎日医者が点滴に来るので、布団を敷きっ放しには出来ず、渋々とたたんで仕舞っていた。

「どうせ坐ってるんだから、少しみて貰えよ」

久夫に言われて朋子は断われるのを覚悟で綾の前へまり子を連れていったが、綾は意外と簡単に、

「いいわよ」

とまり子を抱きとってくれた。

次の日、店を開けて間もなく、真新しい割烹着姿の女が、ボストンバッグを手に忙しげに入って来た。五十前後と見えるその女は、家政婦会から来た宮下だと名乗った。店先での朋子とのやりとりが聞こえたのか、綾が寝巻姿のまま出て来た。

「まあ、もう来てくれたの。よかった。さあさあ　上って」

昨日、まり子を抱いて出たついでに、知合いの家政婦会に寄って頼んで来たのだという。その家政婦会の会長は戦前柳屋の家作に住んでいて、きのは随分と面倒をみてやってたから、暮の手のない時でも無理を聞いてくれるだろうと思っていたが、まさかこんなに早く人を廻してくれるとは思わなかった、と綾は上機嫌であった。

「外の家にいたんですけどね。会長さんがこちらはどうでもあたしでなきゃならない家だからすぐ帰ってくるようにって、ゆうべ呼戻されたんですよ」

会長が特別に廻してくれただけあって、宮下は申し分なく気の利く働き者であった。

「さあ、わたしが来たから　もう安心ですよ。おばあちゃんの面倒はわたしが見ますから、若奥さんは心おきなくお店で働いて下さい」馴れたもので宮下は一目で家の事情を飲み込み、手際よく家事を片付け、その合間にきのの世話もまり子のお守りもしてくれた。肩が軽くなっただけでも朋子は有難かった。

「あなたが来てくれて、本当に助かったわ。あたし一人では、どうしようもなかったの」

「あら、若いおばあちゃんがいるじゃありませんか」

探し物をしていた綾が出しっ放しにしていった箱を、簞笥の上に積み上げながら宮下が言った。

「まあ、今に解るわ」

朋子は宮下のいれてくれた熱い茶を啜った。一日中店で立ち続けていると、体の疲れは冷えと共に足に溜ってくる。だから座敷に上って座る、と溜った疲れと冷えが臑の骨を伝ってじんじんと膝に逆流してくる感じがする。

それは痺れがとけていく感覚に似て、ふっと気が遠くなるような恍惚感を朋子に与えた。

背負っている中に寝入ったまり子を茶の間に敷いた布団に寝かせてから、宮下はきのの布団の裾に廻った。物を口にしなくなっても、きののおむつは汚れた。布団をめくり、寝巻の裾を拡げると、紛れもない排泄物の匂いが茶の間にも流れて来た。炬燵に入ってテレビを見ていた綾が声をあげた。

「ああ、早く早く、そこの襖しめてよ。汚い」

朋子は走り寄って襖を閉めた。

「あんた、おむつを取替える時は、そこ閉めてくれなきゃ、臭くって堪らないじゃないの」

荒い声であった。

「やだ。気持ち悪くなっちゃった」

食べかけの柿を皿に投げ出して、綾は部屋を出ていった。裏口のガラス戸が閉るのをみすまして、宮下は襖を開けた。

「なんですか、あの言い方は。仮にも自分の親じゃないですか。他人のわたしさえ何とも思わずに世話してるっていうのに、汚いだの臭いだの、よく言えたもんだ。ねえ、そうでしょう」

怒りをぶつけるように宮下は激しい音を立てて襖を閉めた。

「土台この家はおかしいんですよ。旦那さんや若奥さんがいくら店が忙しくたって、奥さんは何一つ手伝おうともしないじゃありませんか。いい年して、暇さえありゃ鏡とにらめっこで、めかしこんで遊び歩いている。あの人は孫が可愛いくないんですかね。まり子ちゃんが泣いていたって、抱き上げようともしないんですよ。いくらお嬢さんで育ったからって、あれじゃひど過ぎます。近所の人が悪く言うのも尤もですよ」

眉の薄い宮下の硬ばった顔は、ひどく意地の悪い表情を見せていた。

「わたしはね。さっき瞬間的に感じたんですよ。あの人はおばあちゃんの本当の子供じゃありません。第一全然似ていないでしょう。顔だって、体つきだって、貰いっ子に決ってます。きっとそうです。血が繋っていないんです。だからあんな非道い事が言えるんです。血が繋っていたら、自分の親のこと、汚ないだの臭いだのって、言えますか。わたしなんか、嫌いな姑だったけど、見てられなくて二年も三年も下の世話をしました。それだって、汚いなんて、思った事はありませんでしたよ。終りの頃は、可哀想で可哀想で、実の親みたいな気がして、誠心誠意面倒をみてやりました。死ぬ前にはわたしに手

を合せてくれました。それがとっても嬉しかった」
感情の激しに宮下は、いつか涙声になっていた。割烹着の袖をたくしあげた腕を目に当てて、嗚咽を噛み殺している。
宮下が言った「貰いっ子」という言葉の棘は、朋子の胸に強く突き刺った。
そうだったんだ、そうに違いない。何故それに気が付かなかったんだろう。一緒にいるからといって、血の繋った親子とは限らない。綾に対してきのが変に遠慮がちな謎が、それで解ける。
暫く二人の間に沈黙が続いた。
汚れたおむつを風呂場へ置きに行って戻って来た宮下は、朋子に照れ笑いをしながら言った。
「年甲斐もなく興奮しちゃって、余計な事を言いました。済みませんでした。聞かなかった事にして下さい」
「いいのよ」
「お茶いれ直しましょう」
言うだけ言った後の宮下の顔は、汗を拭かれた壜のようにさっぱりしていた。朋子は羨しかった。ああいう風に綾に向って言えたら、どんなに胸の蟠りがすっきりするだろうかと思った。

病人を抱えた正月に、正月らしいはなやぎはない。宮下が作っておいてくれた二・三の煮物と、綾が買って来た蒲鉾・伊達巻の類だけの淋しい祝膳であった。
きのの病状は良くも悪くもならず、はっきりした意識の戻らないまま眠り続けている。三日間だけ帰らせて下さい、と大晦日の晩に宮下が帰った後は、朋子がきのの面倒をみた。
何年か前から二日の初荷も問屋の年始廻りもなくなって、店からは完全に解放された三日間を、朋子はまり子を遊ばせながら、なるべくきのの側にいるようにした。
「昔はね、正月の二日というと問屋や蔵元の番頭さん達が次から次とお年始に来たもんです。お年始の手拭が、このお盆に山盛りになって、そりゃ賑やかなものでした。売れ残りの酒なんかに、初荷の旗を立てて、初荷です、って持ってこられちゃうと、御祝儀がわりに買わなきゃならないで、正月過ぎは、その荷を売り捌くのに苦労したもんです」
大晦日の朝、きのは押入れの奥から黒い漆塗りの角盆を取出す。それがきのの正月を迎える心の準備であった。
「昔の蔵元は金持ちでした。うちもそれだけ大きな取引きをしてたんでしょうけど、蔵元招待の旅行には、東京から芸者衆まで連れてったそうですよ」
箱書に北海道旅行記念とある漆塗りの重箱には、酒の名前が図案化され、美しい螺鈿細工で飾られている。
「おじいさんは遊ぶ事もよく遊びましたが、商いの巧い人でした。尤も今と違って儲かる商いの出来る時代でし

たからね」
きのの夫の嘉兵衛は唎酒の才に恵まれていたという。新酒の時期になると、番頭一人を連れて中央には名を知られていない東北の酒蔵を歩き、自分の舌に適う酒を見つけては、現金で買い叩き、貨車で東京へ送った。集めた酒を自分の舌だけを頼りにブレンドし、それを柳屋の上等酒・中等酒・並等酒として売った。雛物よりは格安なそれらの酒は、旨くて安いという評判を呼んで、口伝てに伝わり面白いようによく売れたという。そういう嘉兵衛の話をぽつりぽつりしながら正月用の品を取出し、ネルの布でいとおしげに拭いている時のきのは、一年の中で一番嬉しそうであった。店の主も、店そのものも、商いのやり方も自分が先に立って働き続けていた頃とはすっかり変ってしまった今、きのに昔日の賑わいを思い出させてくれるものは、それらの品々だけなのかもしれなかった。
「そんなもの」
と綾に言われながらも、疎開の荷の中にしのばせておいたのは、それだけ愛着が深かったからだろう。
「一升壜じゃ、いくら飾ろうったって、あれだけのものです。昔の樽はきれいでしたよ。それに匂いがありました。新しい杉の匂い。新しい菰の匂い、新しい酒の匂い、飾り樽を積み上げた倉庫の中はむせかえるようでした」
昔、倉庫が建っていた場所には、綾が暇にまかせて買い集めた草花が植えられ、昔の店だった場所に、店と倉庫が納って、小じんまりした商いになっている。
きのの枕許で、朋子はきのの大事な正月用品を拭いた。角盆・重箱・酒盃、心をこめて拭いていると、朋子にも新しい年を迎える心構えが、少しずつ形作られてきた。きのが培って来たこの家のしきたりを守っていくのは、綾ではなく自分なのだと思った。

まるで正月が終るのを待っていたように、きのは一月の半ばに静かに息を引取った。直接の死因は尿道症であった。
きのの写真が、嘉兵衛や綾の夫の写真と並んで茶の間の長押に飾られた。その写真の下を通るたびに、まり子はきのの写真を指差して「バアバア」と言った。
きのが居なくなってぽっかりあいた「おばあちゃん」の席に、綾は坐りたがっているようであった。まり子に対して自分の事をしきりに「おばあちゃん」と言う。
「まりちゃん、おばあちゃんと遊ぼう」
宮下に抱かれたまり子に手を伸して抱きとろうとしたが、まり子は「バアバア、バアバア」と言いながら長押のきのの写真を見上げた。
「あのバアバアは死んじゃったの。今のバアバアは、これ」
まり子の手をとって自分の頬をぴしゃぴしゃ叩いた。

まり子はどうしていいか解らないといった表情で宮下の顔を見た。
「さあ、おばあちゃんのとこへ行きなさい」
宮下はまり子を綾に預けた。
「おばあちゃん、おばあちゃん」
と歌うように言いながら綾は裏口から出ていった。
「奥さんでも、孫はやっぱり可愛いいんですかね。まり子ちゃんを抱いて出ていきましたよ」
店にいる朋子に宮下はわざわざ知らせに来た。

醸造も機械化され、四季醸造と言って一年中いつでも新酒が出廻るようになって、「新酒」という言葉が醸し出すきゅんと引締った、それでいてきらびやかな感じは失われて来た。伝統的な醸造過程のいくつかの場面の代りに、銀色に輝く巨大なタンクの列が醸造会社のパンフレットを飾ってさえいる。
温室栽培が盛んになると共に野菜にも花にも季節感が薄れたように、酒屋の店先にも季節感はなくなった。
ただ一つ、昔ながらの季節感を残すものが、桃の節句の白酒だった。
一月の中旬を過ぎて入荷した白酒を取出す時、
(ああ、春が近いな)と朋子は思う。
朋子の記憶にある限り、二月に入ると生家のウインドーには白酒が飾られていた。母親が活けた菜の花と桃の花は、まだ蕾を固く閉じているが、その下には小さな立雛も飾られていた。狭い通りに面した生家のウインドーに陽が当る事はなかった筈なのに、白酒が飾られるこの時期だけは、ウインドーがやわらかい陽差しの中で明るく浮上っていたように朋子には思えてならない。
きのも又、白酒を並べた横には、桃の花や菜の花を飾りたがった。
「朋子さん、すみませんが、お買物のついでにお白酒の花を買って来て下さい」
自分の財布から紙幣を取出した。
「店の方で買いますから、いいんです」
と朋子がいっても
「わたしのお道楽ですから」
と無理にも朋子に紙幣を握らせた。
足先がきかなくなって下駄がはけないきのは、畳の上を行き来するだけで、店へは下りて来られない。茶の間と店との境に立って、朋子が飾った白酒と花を、柱につかまり背伸びをして眺めていた。
「今はみんな壜詰になってますから楽ですけど、昔は樽で来たものを杓子で量って売ったんですよ。今みたいにほかにいろいろな飲み物がありませんでしたからね、女にも飲める甘いおいしい飲物として、よく売れましたよ。朝から晩まで量ってた事もありました。寒い時ですから手が真赤になって、感じがなくなっちゃうんです。その

上、あれはぬるぬるしてて滑るもんで、計りにくいんです。慣れない中は、よく壜を落して割ったもんです。
鏡を抜いた四斗樽をいくつも並べた店の中は、甘酸ぱい匂いとアルコールの強い匂いで、お酒を飲んだように酔っぱらってしまいました」
行儀よく坐った膝の下に前掛けの裾を挟み込み、両手をその間にさし入れて、きのは朋子に話した。くぐもった細い声は聞きとりにくかったが、朋子はその話の中に、赤い襷がけで生き生きと動き廻っているきのの姿を想い描くことができた。
活け終った花を白酒と並べて棚に飾りつけきのの言葉を思い返していた朋子は、背後に人の気配を感じて振返った。綾が店との境の暖簾を片手で抑えて立っていた。
綾は朋子が初めてみる晴れやかな顔付きで朋子に笑いかけた。(あの、何でしょうか)という言葉を飲み込むようにしながら朋子は綾に近付いた。何かこれまでの綾とは違う親しみを感じていた。
「桃の花、飾ってくれたの」
綾は目で棚の花を示した。
「おばあちゃんが喜んでるわ、きっと、有難う」
「いいえ」
「お茶飲まない。草餅買って来たわ」
綾の引く糸に手繰り寄せられるように朋子は綾の後について茶の間へ入った。
「まりちゃんは」
「さっき宮下さんと公園へ遊びに行きました」
急須にポットの湯を注ぎ、朋子の湯呑みに茶をいれてくれる綾の手元を、朋子は息をのんで見ていた。それは綾が朋子にしてくれる初めての行為だった。水仕事も力仕事もした事のない綾の手は、幼女の手のように愛らしい凹みが指の付根に並んでいる。
「おばあちゃんによくしてくれて、あなたには有難いと思ってるわ」
「いいえ」
「あたしが意気地なしだから、あなたや久夫に迷惑ばかりかけて」
「そんな事」
「おばあちゃんが居なくなって、あたしも少しはしっかりしなきゃいけないと思ってんのよ」
客が入って来た。贈答用のウイスキーにのし紙をつけ包んで渡した。
「上手に包むのね。あたしなんか、この年になっても、何も出来ないわ」
「毎日やってるんですから、上手になるのは当り前です」
どく平均的な酒屋に生まれ育った朋子は、高校生の頃から店を手伝っていたし、高校を出てからは母親と交替で店番をしていた。だから朋子が軽く触れただけで包装紙は手に吸いつくように素早くきれいに折れ曲って箱を

包みこむのは当然だった。
空壜のぶつかり合う音が近付いて、店の前に車が止った。
「帰って来たようですから、一寸」
朋子は久夫を手伝って車から空壜を下した。数を算え帳面に控えて店に戻ってくると、坐った背を伸して二人を見ていた綾の目にぶつかった。綾は慌てて目を外したが、朋子にはこれまでの綾が見せた事のない淋し気な表情が胸にひっかかって離れなかった。
「お母さんは、本当は自分も店を手伝いたかったんじゃないかしら」
その晩床についてから朋子は久夫に言った。
「そんな事ないよ。やりたきゃやりゃいいんで、やりたくなかったから、何もしないで来たんじゃないか」
「おばあちゃんがやらせなかったんじゃない」
「思い過しだよ。あの人は自分の手を汚すのが何より嫌いなんだ。自分がやらなくても、誰かがやってくれる。いつでも誰れかに寄っかかって、甘えているんだ」
「そうかしら」
「おばあちゃんがいなくなって、今度は君に寄っかかろうとしてんだろう。そういう人なんだ」
「親子なのに、随分冷たい見方をするのね」
「生まれた時からずっと見て来たんだから、あの人の事は、君より僕の方がよく知ってるよ」
「何だか、とっても淋しそうだったわ」
「あれだけ勝手に遊び歩いてて、淋しい訳ないだろう」
「好きで遊び歩いてただけじゃないような気がして来たの」
「じゃ、どうしてなんだ」
「あんまりおばあちゃんが出来過ぎた人だったから、お母さんは家にいても、坐る席がなかったのよ」
「戦前はそういう事もあったかもしれないよ。だけど親爺が死んだ時なんか、やる気があるなら、何も僕が学校を中退してまでやらなくたってよかったんだ。二年も我慢してやってくれてたら、僕は卒業出来たんだから」
折角入った大学を二年で中退せざるを得ない事情を作った事が、久夫と綾との間に埋め難い溝を掘った。
「もういいよ、あの人の事は。したいようにさせとけば」
話を無理にも打切ろうとするように、久夫は強く朋子の手を引いた。
「奥さん、また食べないで行くんですか」
台所から宮下が声をかけた。
「だって、食べちゃうと下っ腹が出っ張って恰好悪いんだもの」
鏡台の前で半幅帯を結んでいる綾が答えた。
「毒ですよ。お腹空いてんでしょう」
「いいわよ。帰って来てすぐ食べるから」

きのがいなくなってから部屋の電気は鏡台の真上に引張ってあった。鏡は一〇〇ワットの光をまともに反射して、前に立つ綾の姿を浮上らせている。真横を向いて半幅帯の下に膨れ出た下腹を両手で押えこんでは膨らみを消そうとするのだが、何度やっても手を離せば着物の線は元に戻ってしまう。
「ああ、駄目だ。やんなっちゃう」
立って見ていた宮下と綾は顔を見合せて笑った。
手おんぶでまり子を背負い、店先で外を見ていた朋子にまで綾は、
「行って来ます」
と声をかけ、店の前で陽が当る向う側へ渡った。
「気楽なもんですね」
宮下も並んで綾を見ていた。
「でもまあ、ブスッと部屋に坐っていられるより、ああやって御機嫌で出ていってくれた方が、こっちも気が楽ですけどね、ねえ、まり子ちゃん」
まり子はすぐに体を宮下の方へ乗り出し両手を差し出した。
「ああ一寸待ってて下さいね。おばあちゃんが散らかしたの片付けてきちゃうから」
鏡台の前に放り出してある普段着を長押の衣紋掛けに掛け、蓋が開けっ放しの化粧品を片付け、箪笥の小抽斗からはみ出している紐を中へ納め、半開きの箪笥の扉を閉め、そこここに散らばっているおかきの包み紙を拾い集めて屑籠に捨て、宮下は大急ぎで部屋を掃いた。
「さあさあ、お待遠さま。いらっしゃい、お買物にいきましょう」
宮下はまり子を乳母車に乗せた。座席を取り外すと三輪車になるその乳母車は、少し早いけどまりちゃんのお誕生祝いだと言って、綾が買ってくれたものだったが、まるで綾は自分がまり子を乗せて押して歩きたいために買ってきたようなものだった。天気さえよければ、朝食前の小一時間を綾はまり子を乗せて散歩に出る。
「アッチ、アッチ」
待ちきれないまり子にせかされて、綾は笑いながら出ていく。
「まりちゃんのお陰で朝は早く起きられるようになったし、御飯はお美味しくなったし、まりちゃんはおばあちゃんの神様だ」
綾は毎日機嫌がよかった。
「自分の子のお守りはした事がなくても、孫のお守りはするものなんだね。乳母車押して歩いてるの見て、びっくりしちゃった」
買物に来た近所の年寄りが朋子に言った。
「別嬪さんだったからね、若い時からお高くとまってて、あたしらになんか挨拶もした事なかったのに、こないだそこで会ったら、こんにちは、なんて先に言うんだもの、

ツッパリ君

三戸岡道夫

ことの起りはサンペイがツッパリ人形を持って学校へ行ったときに始った。

人形は駅前のスーパーで買った。名前を「ツッパリ君」という。サンペイたち中学生のマスコットだった。

値段は千円。長さ十センチばかり。小さな人形にしては、ちょっと高かったが、かわいくて、買わずにはいられなかった。

人形は黒のガクランを着て、ツッパッている。頭は全体がチリチリのカーリー・スタイルだが、茶色の毛糸でできていて、とてもチャーミング。そのヘヤスタイルはサンペイのあこがれだった。

だが学校では、生徒たちがそのマスコットを持つのを喜んでいない。そんなツッパリ人形を持つことは非行につながるという先生たちの一致した意見からだ。だが買ってはいけないと禁止まではできない。ほとんどの生徒はひそかに持ってはいるものの、サンペイのように堂々とカバンのひもにぶらさげて学校まで三戸岡道夫者はいなかった。

ツッパリ君を学校へ持っていったのに、それほど深い理由があったわけではない。家を出るときに、ひょっとつかんでカバンに入れた、あんまりかわいいので学校に持っていきたい、家に一人ポツンと残しておくのはかわいそうだ、ただ、そんな気持。ましてや学校の禁則を破るなんて大それた考えは、まったくない。

カバンを持ち上げたとき、思い直してカバンのひもにぶらさげた。その方が人目について、カッコいいと思ったからだ。

案の定、学校に行くと

「サンペイ、やるーう」

女生徒から拍手がきた。サンペイは得意になった。誰からも、いつも無視されているサンペイの心に、ちょっぴり光が射しこんだ。

一時間目は数学の時間。

先生が入ってくる。あだ名はブルドック。ずんぐり、むっくりで、中年のいやらしさがにじみ出ている。そのブルドックの眼が、いち早く、サンペイのカバンを捉えた。

『見たな……』

だが知らん顔をしていた。あわててツッパリ君を隠すのも、わざとらしい。

「これから先日のテストの結果を発表する」

サンペイはちぢみあがった。

『ああ、今日もまた、やられる…』

恐怖が全身をかけ抜ける。

ブルドックは生徒の名前とテストの点数を一人一人読みあげていったが、サンペイの番になると

「おい、ビリ助、また駄目じゃないか！」

サンペイの頭をつかつか歩いてくると、まるめた答案用紙でサンペイの頭を二、三回たたき

「これを見ろ…」

テスト用紙をひろげて眼の前につき出した。

0点。

やっぱり…、また……。

その途端に、それまでサンペイの心の中にわずかに張っていた精神の最後の張りのようなものが、プツンと切れてしまった感じがした。仕方ないよ、おれ、生れつき、頭、よわいんだもの……。

「しっかり勉強しないと、大学に行けないぞ」

おれ、大学なんかに行かないよ……。

「おい、ビリ助、聞いているのか」

いくらビリがビリだって、そう、ビリ助、ビリ助、ビリッかすのように言わないでくれよ。おれにだって、村木三平って、ちゃんとした名前があるんだ。

「ツッパッてばかりいないでな、少しは勉強するんだ」

ブルドックは、カバンからぶらさがっているツッパリ君を、いやというほどスリッパの先でけとばした。

『痛い！』

サンペイはわが身のことのように、声にならない悲鳴をあげた。

やっと一日の授業が終った。

これで学校から開放されたかと思うと、肩の荷がおりたようだった。

足早やに校門を出る。一分でも長く学校には居たくない気持。駅にむかう。

『ツッパッてばかりいないで少しは勉強しろ』

ブルドックの声が耳によみがえってくる。

ぐなってきた。

だが授業が始まると今度はそれが地獄のはじまりだった。

英語の時間だった。先生のあだ名はツルピカ。頭がツルツルに禿げあがって、ピカピカに光っているから、ツルピカだった。教壇に立つと、その視線はまっさきにサンペイの頭で止った。

「やったね、原爆雲型スタイル……」

おいでなすった、とサンペイは思った。だが原爆雲型なんて古いなあ、英語の教師だろ、もう少しナウな言い方できないものか ― なんて思っていたら、次の瞬間鉄パイプで眉間をぶんなぐられたようなショックを受けた。

「バカに限って頭の毛なんかに一生懸命になるんだ。パーマかけるひまがあったら勉強しろ。さあ、サンペイ、今日のところを読んでみろ」

サンペイは指名されて、目の玉がでんぐり返った。英語の授業はサンペイの無視されてすすめられていくから、これまでツルピカから指名されたことなど一度もない。だから英語の時間は安心して坐っていられたのに、今日はパーマのおかげで指されてしまったのだ。予期しないアクシデントにサンペイは雷のように立ちあがり

「ゼア、リイズ、ア、ハウス、ザット……」

以上はわからない。

「ゼア、リイズ、ア、ハウス、ザット……」

同じところをもう一度読む。

「ゼア、リイズ、がどうした。ザットの次を先に進んで……」

読めないことを知っていて、ツルピカは嘲笑的に言う。サンペイは酸欠の金魚のように口を動かして

「ザット…、ザット……」

と繰り返した。

「もう、いい。そのまま立っておれ……」

ツルピカは教室のなかを見まわすと

「だれか読める人？」

「ハイ」

「ハイ」

元気な手が林のようにあがる。

「清川君」

「ハイ」

清川正は優等生だ。

「ゼア、リイズ、ア、ハウス、ザット、グリーン、カントリー……」

流れるように、どこまでも読んでいく。

なにも、おれの次に優等生の清川をあてなくたっていいだろう…、清川のなめらかな発音を聞いているサンペイの身体のなかに、だんだんツルピカに対する憎しみのようなものが湧きあがってきた。

朝の登校とちがって、帰りのサンペイはすっかり気落ちしていた。

『バカほど髪の毛に夢中になる』

ツルピカの言葉が心にグサリと突きささっている。ツルピカばかりではない。二時間目の国語も、三時間目の社会も、四時間目の音楽も、先生たちは異口同音に

「パーマに夢中になる暇があったら勉強せよ」

ひどいのは

「栄養がヘヤにばかり行く」

ので、脳みそに廻らないのじゃないか」

などとも言う。これが教師の言うことか…。

ひどすぎる。これが教師の言うことか…。

成績が悪くて、ひどすぎる。これが教師の言うことか…。

頭のいい奴って、いいよなあ ― とサンペイは思った。教室で同じように勉強していても、たとえば清川のような奴だったら、普通にしていたって、センコーの一回の説明で

「ああ、なるほど」

すーっとわかっちゃうんだもの。だが、おれはそうはいかない。怠けているからじゃなくて、普通にしていてわからないんだ。両方とも同じように、普通に授業を聞いていて、一方はわかるのに、片方はわかんない。そしてわかった方はほめられるのに、わかんない方は叱られる。不公平だよな。

センコーはおれの顔さえ見れば

「勉強しろ、勉強しろ」

って言うけどさ、おれだって、別に勉強しないっていうんじゃないよ。勉強は好きではないが、と言って別にきらいでもない。まあ、普通っていうところか。だが、おれの頭がよくないからさ、どうしても成績がよくならないんだ。これ、生れつきだから、しようがないだろう。

その点、おやじも、おふくろも、センコーたちと同じで、家に帰ればすぐ

「おい、サンペイ、勉強しているか」

そのくせ、おやじはいつも酒に酔っぱらって、テレビのアチャラカ番組見ながら大口あいて笑っている。全然わかっちゃいないんだ。おれの方から言わしてもらえば、そんなこと言うひまがあったら、勉強のわからないこと、一つでも二つでもいい、教えてほしい。

だが……と、おれは思う。たとえ勉強ができなくたって、身体がデカくて、体力があって、スポーツの選手みたいなめもいいよなあ。衆人環視の中で走ったり、泳いだりして、拍手を送られ、認められるもの。スポーツ選手でなくたって、歌がうまいとか、絵が上手だというの

勘定は須川にまかせて一行が出ようとすると、須川はサンペイだけには
「おい、お前は別だよ」
サンペイはガンと一つ、ぶんなぐられた気がした。ヤケ飲んで大人の気分だなんて……、そんなもの白日夢のようにすっ飛んでしまっていた……。
"道づれ"にはそうしたにがい思い出がある。だが今日はそうした挫折感のなかのがうれしかった。
"道づれ"に入ったのは、タイガーを頭に六人である。男が五人に、女一人。女子学生の名前はモモ子といった。
長いテーブルに三人ずつ向きあって坐った。一番奥にはもちろん親分のタイガー。その次が、石井、茶の木、波川と、サテンで坐るのにも偉い順番は変わらない。だからサンペイは一番の末席。モモ子はサンペイの前。
「モク……」
とタイガーが言うと、前の石井がタバコを差しだし、それを合図に、石井も茶の木もタバコに火をつけた。
「おい、原爆ヘヤー、お前やらねえのか」
サンペイはびっくりして
「ええ、まだなんです」
「おくれてるんだな。まあ、やらねえもの、無理して吸う必要ねえや」
タイガーの蝶り方はテレビ映画のやくざのようだと、サンペイは感心した。

「授業から解放された後の一服はこたえられねえよなア」
とタイガーは気持よさそうに煙を吹きとばしながら
「おれ、昨夜、サツに追いまわされてよう……」
オートバイのことらしい。タイガーは暴走族の高校生ともつきあっているのだ。
「どこでさあ…」
「羽田の高速ぶっとばしてやったんだ」
「へーっ、カッコいいじゃんか」
「そうしたらよ、ポリのやつ、きっと張ってたんだな猛烈な勢いで追ってきやがってよう…」
「うまく逃げられた…？」
「バッチリさ。だが、ポリ公のやつ、オートバイぐらい走ったって、別にどうってことないのにな」
「そうさ。騒音だ、騒音だって言ったって、選挙運動の街頭演説のスピーカーと大差ないじゃないか」
「飛行機の騒音、新幹線の騒音、トラックの騒音、日本全国騒音だらけじゃねえか。暴走族だけが、なぜ悪い……」
「それに暴走族って言うけどよお、センコーなんかいつも日教組大会でもめているし、大人は国会でロッキード事件だろう。大人だって、ろくなことやってねえよな。

オートバイだけを取締る権利あるのかよ。学生にだってさ、単車にのるぐらいの自由あっていいさ」
「そうだとも。大人のゴルフ場。あれ、いったい何だい。せまい日本に土地がない、土地がないっていいながら、高い金かけて、芝生うえて、広いゴルフ場作っちゃってさ。無駄だね。暴走族を目の仇にするなら、あんなゴルフ場一つぐらい、つぶして、オートバイ場にしたっていいじゃんか。こんなこと、ささやかな要求だよなあ」
「おれ、早く高校に入って、デスマスク・グループに入るのが夢なのさ」
タイガーはみどり一色のゴルフ場を、数十台のオートバイで目茶目茶に走りまわり、そしていずこともなく逃げていく場面を空想していた。
そんなタイガーの話をきくのは、サンペイにとってはただ驚異の一語につきた。
この日を境に、サンペイは、いいようのない魅力で、ツッパリ軍団のなかにのめりこんでいった。それは止めようのない魔力だった。
サンペイには新しい友達ができた。波川とモモ子。それに"道づれ"ではいっしょでなかったが、ユキオとサチコ。五人は気が合って、いつしかツッパリ軍団のなかの仲よし五人組になってしまった。

五人はしょっちゅうサテンでいっしょになったり、学校の帰りに公園に集ったり、繁華街をぶらついたりした。
ときにはお互いの家に遊びに行くこともあったが、どの家も親がうるさいので、家にはあまり近づかないようにした。
五人組のお気に入りのサテンは"スカーレット"といった。名前はすてきだが、"道づれ"よりは小さく、見すぼらしい。だが自分たちで探したサテンなので、結構満足していた。それに電車の駅に近いのがよかった。近いというよりも、"スカーレット"の前は駅前広場の延長といった感じなので、広場にあふれた置きっぱなしの自転車の洪水が、ひたひたとここまで溢れてきて、ガラス窓の外にもワッといった感じで並んでいた。
サチコと波川とユキオには、あだ名があった。サチコのあだ名は花吹雪で、"スカーレット"に入るといつもその由来を自慢するのがくせだった。
「ね、スケバン同志がさ、こうやって、カミソリを使ってやりあうのさ。そして勝った方が負けた方の肌を傷つけて、そこへ塩をなすりこむのよ。ころげまわって痛がるよ。だがそれに堪えられなくちゃ、スケバンの資格はないっていうわけ。そのリンチが花吹雪。あたし、二回も、それ、やられたわ。ね、ほら、見て、この傷…」
はセーラー服をまくり上げると、腕や太股の傷

あとを平気で見せるのであった。
「これ、女の勲章よ」
「おお、いやだ」
モモ子が肩をすぼめると、サチコは
「あたしの夢は卒業までに、この花吹雪の仕返しをしてやることさ」
昂然と言った。
波川のあだ名はニューヨーク。幼いころ、父親の仕事の関係でニューヨークに居たことがあるという、ただそれだけの理由にすぎなかったが、しかし背は高く、英語もうまいのは、そのあだ名のいわれにそむかなかった。
ユキオのあだ名は博多人形。男のくせに色が白く、頬がふっくら丸くて、まるで博多人形の子供のようだから
「サンペイとモモ子はあだ名がないんだなあ」
「何かみんなで、つけようか」
すると、モモ子は
「いいわよ。無理してつけたあだ名なんかは、面白いものないもの」
すわけない調子でいつも答えた。
サンペイは[illegible]のモモ子の、ふっくらした胸もとを見て[illegible]のが好きだった。きつめのセーラー服のなかで、[illegible]オッパイが窮屈そう[illegible]。マシュマロのようにすべすべで、豊かに重い感触を[illegible]想像
「モモ子、ブラジャー、してるのかい」
「そんなもの、してないわ」
「うそだ」
「うそだと思うなら、さわっていいよ」
人さし指でつつくと、
ふっくら、ぷっくり、とした感触。
とたんにサンペイの全身に電流が走った。
これがよく週刊誌などに書いてある戦慄というやつか。
サンペイは思った。
「おい、サンペイばっかり、ずるいぞ。おれにもさわらせてくれ」
ニューヨークと博多人形がそれを見逃さなかった。
「だめよ、不良…！」
モモ子は両腕で胸を抱くようにした。
「いいじゃないか、減るものじゃないって、よく言うじゃんか」
するとマンガを読んでいた花吹雪がくるっと向き直り
「そんなに触りたきゃ、あたしのを触らせてあげる」
とたんにニューヨークと博多人形は
「ケッコー」
にわとりのような声をあげて拒絶した。
[illegible]モモ子はちょっと真剣な顔になって

「そんなことより、さあ…」
カバンから一枚の新聞紙をとり出し
「これ、どう思う、ちょっと気になるものだから、家から持ってきたんだ」
「へーっ、モモ子、新聞なんか読んでんのかよお、学者だなあ」
モモ子の拡げた新聞には
『ケニア飢餓前線』
という大見出しがあり、そこにはショックな写真が大写しに出ていたのであった。
それは痩せ細った餓死寸前にある、黒人の子供の写真だった。腹だけが異様にふくらみ、手や足はもうこれ以上痩せられない、針金のようになってしまっていた。
その子供が力なく地面にうずくまり、ただ、じっと、なすすべもなく、死を待っているのである。
「これ、まだ生きているのかしら」
「生きている証拠に目あいてるじゃないか」
しかし空中の一点を見つめている、うつろな眼には、悲しみがみち、生きていくことをすでにあきらめて、諦観の静けさに澄みきっているようにみえた。
「ギャッ、気持悪いよ、こんなの。おれ、こういうの見るの、弱いんだ」
逃げ腰なのは[illegible]博多人形だったが、新聞の記事は次のようだった。

アフリカ・ケニアのトルカナ地方は、三年間に一滴の雨も降らない。この干ばつで、トルカナ族十六万人全員は文字通りの飢餓地獄に追いこまれ、死に直面している。
あちこちに横たわる子供や老女の死体は、まるで眠っているかのように見えた。地べたに身体を丸くして片手を枕に、もう一つの手をあごにあてるようにして横たわっていた。体には汚れたボロ布がかけられているだけ。
ここではカトリック救済事業団などのキリスト教系の救援活動が行われているが、それはかろうじて、子供と老人を食べさせるのがやっと。給食センターで提供するのはトウモロコシの、まるで糊のような味しかないスープだが、子供と老人たちが食べたあとの木の器には一滴の汁も残されてはいない。

「ね、[illegible]なんだか、じっとしていられない[illegible]」
モモ子が激しく言った。
痩せ細って、ほとんど骸骨に近い黒人の子供は、羽をもがれた[illegible]、黒こげの[illegible]鳥のように、モモ

子の眼には映るのだった。
「まるで人間でないみたいだ。いくら黒人だって、ひどすぎる」
アメリカで黒人の子供たちといっしょに遊んだ経験のあるニューヨークには、その悲惨さがじかに身体のなかに甦ってきた。
「かわいそうというより、むごたらしい」
「なにか許せないって感じジャン。同じ人間でありながら、こんなになってる人間が同じ地球の上にいるなんて……」
サンペイも花吹雪も叫ぶように言った。
「なにか送ってやらなくちゃあ」
いつもは世の中を斜めの角度からしか見ない花吹雪も、珍らしく身をのりだしてきた。
「なにか、そうしたこと書いてない」
「ここにあるわ」
モモ子が写真の左下を指さした。

こうしたトルカナ地方の人々の悲惨な姿は全国の読者に衝撃を与え、義援金が続々とK新聞社に寄せられている。「ぜいたくをしている自分が恥ずかしい」、「飢えに苦しむ人がいるのに、うちの学校では給食のパンをぶつけたり、ミカンをつぶし合ったり、ひどいものです」と訴える手紙を添えたものもある。

「たしかに、そうだよ」
「おれたち、豊かすぎるよ」
「募金を扱っているのは、K新聞社会事業団、郵便振替東京8＝71663、電話03・221・1687とあるわ。ここへ送ればいいのよ」
「そうだ、送ろう」
「なにかを送ろう」
仲よし五人組の意見はたちまち一致した。
五人で集める目標は十万円ときめた。一人当りにすれば二万円ずつ持ち寄ればいいのだが、せいぜい毎月の小遣いが五千円程度の中学生たちにしてみれば、そう簡単に掛け算のようにはいかなかった。
とりあえず五人の小遣いや貯金を集めてみたのだが、三万八千円にしかならない。
「案外集まらねえもんだな」
目標の十万円は前途遼遠に思われた。
「仕方がない、アレ、やろうか」
ニューヨークが右手である仕ぐさをした。
「カツアゲかい」
「そう」

「そんなの、ヤバイよ。ケニアに送るんだろう。そんな金でない方がいいよ」
「かまうものか。富の再配分さ。社会科で習ったろう。金持ちからまきあげてさ、困っている人に送ってやるんだよ」
そこでサンペイたちは学校の帰り道、金を持っていそうな生徒を待ちうけては金をせびった。不思議なことに五人でやるとちっともこわくないのだ。いざというときには、親分であるタイガーの名前を持ち出す手もある。そうしたことがわかっているのか、五人組の網にかかると誰もが素直に金を出して、面白いように集った。だが、
「センコーには言うなよ」
念を押すことも忘れなかった。
だがそれだけでは足りない。さらに五人組はデパートやスーパーに押しかけて、学用品やアクセサリーなどを万引し、学校の昼休みに、バーゲンセールと称して売って金にかえた。
しかしカツアゲも、バーゲンセールも、せいぜい一人からとれる金は五百円か千円程度で、金額がのしてこない。罪悪感の割には損な商売だった。
「もっとうまい方法はないかなあ」
あれこれ思案したが、結局
「仕方がない、おふくろに頼んでみよう」
サンペイは家に帰ると母親のご気嫌をうかがいながら
「ねえ、かあさん、一万円くれる…？」
「一万円…？なんに使うの…？」
サンペイはちょっと言いにくそうにしていたが
「アフリカに送るんだよ。新聞に出ていたろ、ケニアで飢えているんだってさ、黒人の子供がどんどん死んでいく、その義捐金をK新聞社で受付けているんだよ。友達ときめたんだよ」
「バカだね、お前…、そんなこと考えているから、0点とるんだよ。このあいだの数学も0点だったんでしょ。かあさんも、父さんも、恥かしくて学校へなんか行けやしないよ」
「そんなんじゃないんだよ。かわいそうなんだよ」
「かわいそうなのは、かあさんの方ですよ」
「かあさん、わかってないなあ」
サンペイはがっくりした。全身から力が抜けていくようだった。
とぼとぼと階段を二階にあがり、勉強机の前にひっくり返って
「……」
ため息をつく。カバンのひもからツッパリ君がぶらさがって、サンペイを見ている。サンペイはそのほっぺたをつついて
「お前はのんきでいいなあ」

だが窮すれば通ず、そのときサンペイの頭に
「そうだ、あの金がある……」
一万円がひらめいた。
新しく自転車を買うために、母親からもらった一万円である。月賦で買う頭金。自転車屋に行くのがおくれてしまったが、まだ定期券の間にはさまっているはずだった。
「自転車はもうしばらくの間、古いので我慢しよう」
義捐金はモモ子の担当で、現金を持っていると使ってしまうので、銀行の預金通帳に入れてある。サンペイが一万円を持っていくと、
「あら、凄いジャン、どうしたの…」
「いや、いいんだよ、入れといてくれ」
サンペイはちょっとカッコよかった。モモ子は目をみはった。
だがサンペイは次第に困惑を感じはじめていった。やはり新しい自転車がないと不便なのだ。古い自転車は修繕しても、すぐ故障してしまう。ガタブルで、もう限界にきているからだ。
ある日、サンペイは顔じゅう擦り傷だらけで帰ってきた。
「どうしたの、お前、びっくりするじゃない」
母親は眉が吊りあがった。
「自転車のブレーキがきかなくて、ブロック塀に衝突しちゃったんだよ」
「危いねえ。だから早く新しい自転車買わなくちゃあって言ってるじゃないの。学校が忙しくて自転車屋へ行けなけりゃ、かあさんが行ってきてあげるよ。自転車屋まで行かなくたって、スーパーにだってあるし…。駅前の丸菱スーパー、自転車、月賦だよ。今日の夕方、買物のついでに頼んできてあげようか」
「いいよ、いいよ、自分で行くから」
サンペイは胆をつぶして二階へかけあがった。
それから四、五日たった、ある日。
サンペイがなかなか学校から帰ってこなかった。夜、八時をすぎてもまだ帰らない。その日は学校におそくなるような特別行事があるとも聞いていない。また、どこかをほっつき歩いているな、帰ってきたら、とっちめてやらなくてはと思っているところへ、電話が鳴った。
「もし、もし、村木さんですか」
威圧的な声だった。
「はい、村木ですが」
電話には母親が出た。
「村木三平君の家ですね」
いやな予感がした。

「そうですが…、三平がどうかいたしましたか」
「こちらはS警察署ですが、お宅の息子さんが留置されております。すぐ両親が来てください」
警察に留置と聞いて母親は仰天した。
「サ、サンペイがなにか、やりましたので？」
全身がふるえ、声もふるえた。
「窃盗です」
「セッ、トウ…？」
「自転車を盗んだのです。とにかく早く来てください。待っていますから。あ、来るときハンコを忘れないように……」
電話は先方から切れた。
「あなた、サンペイが警察に…」
「警察に…？　あのトンチキめが、何をしでかした？」
「自転車泥棒…！」
父親もキッと立ちあがった。早く出掛けなくては。
「ああ、ハンコ、ハンコ……」
二人はあわてふためいて警察にかけつけた。
夜おそい警察の奥の方で、サンペイが神妙にうなだれていた。若い警官がサンペイの原爆雲型の頭をしげしげと見ながら
「お父さんも、お母さんも、大変ですな」
と言った。本当はその後に、『こんな息子を持って』と続けたいのであろう。
「息子さんはいますっかり白状しました。なに、計画的な犯行ではなくて、ほんの一時の出来心です。古い自転車が故障で乗れなくなったものだから、駅前の自転車をちょっと借りようと、軽い気持で乗っていたのです。もう一週間にもなりますが、盗まれた本人からは被害届けが出ておりますので、その番号を探していると、今日お宅の息子さんがその自転車にのって通りかかった、警邏の警官が発見したのです」
父親も母親も夢にも知らなかった。このド阿呆めと、警察のなかでなければ思いきりどなりつけてやりたいところだった。
「どうも本当に申し訳ありませんでした」
二人は平あやまりにあやまる外に、なすすべがない。
「たとえ駅前の自転車でも、無断で持ち去れば窃盗ですからね」
「はい、ごもっともです」
理窟を返してもはじまらない。
「だから警察としましては一応の手続きをとらざるをえません。でも、子供の出来心です。悪いようにはしません。一応は家庭裁判所へ出頭してもらうことになりますが、いや、それもただ一度だけ、形だけですから、ご心配いりません」
家庭裁判所と聞いて、顔が青くなった。もしも少年院送りにでもなったら、どうしよう。

「今夜はご両親のところへお返しいたしますから、これにお父さん、署名して、そしてハンコを押してください」

頭がすっかり混乱していて、出された書類に何と書いてあるのか、わからない。とにかく書類に住所と名前を書いてハンコを押せば、息子を返してもらえるのだ――と、夢中で署名捺印して差し出すと、

「はい、これでいいでしょう。息子さんはお返しします。まだ子供ですからね、家に帰ってから、あまり叱らないでください。本人も悪いことをしたと充分反省しております。心の傷つきやすい年頃ですから、どうか、あまり叱らないで……」

警官の言葉を背にして三人は外に出た。

夜道を歩きながら

「父さん、かあさん、ごめん」

サンペイがプツンと言った。

「仕方がない、やってしまったことだ。今後はぜったい、するんじゃないぞ」

今夜のおやじは馬鹿にやさしいんだな、とサンペイは思った。

駅前広場にさしかかると、母親は自転車の洪水を見て

「ねえ、あなた、窃盗、窃盗って言うけれど、第一、あんなふうに自転車を放置しておく警察がいけないんですよ。どうぞ自由に持っていってくださいって言わんばかりじゃありませんか。中学生を自転車泥棒であげるヒマがあったら、自転車の一台でも片づけりやいいのに」

腹にすえかねるようにそう言ったが、すぐまおろおろ声で

「でも、もしも少年院送りにでもなったらどうしましょう」

「自転車のコソ泥ぐらいで、そんなことがあるものか。あんまり心配するな」

「ねえ、区会議員の鶴野さん、警察にとっても顔がきくんだってねえ。あした、ちょっと頼んでみようかしら…。そしたら家庭裁判所へ行かなくてもすむかもしれない。家庭裁判所なんかへ行ったら、サンペイ、前科者になってしまうもの」

母親の心配はきりがない。

三人の横を、ヘッドライトをつけた夜の車が走り抜けていった。

そんなことがあって、次の日の朝。

学校へ行く途中、自転車泥棒をした駅前広場までくると、向うから大型トラックがやってきた。道を曲ろうとするのだが、自転車の行列が出っぱっているので、運転手がどんなに棍棒をにぎっても、曲れない。大きなトラックは曲り角をななめにふさがれて、通勤を急ぐサラリーマンは敵意のある眼で車の上を見上げている。運転手

は気が気でないようすで顔を真赤にし、ほとんど目茶目茶にハンドルを切っていたが、やにわにトラックからとびおりると

「このバカヤロー」

大声でわめいた。

邪魔な自転車を両手でつかみ上げ、思いきり遠くへ投げとばしたのである。二台目、三台目と、同じように力いっぱい持ち上げては、たたきつけ、若い運転手なのでその力はすさまじく、自転車と自転車は

ガシャッ！

と音をたててぶっつかりあった。それを見ながらサンペイは

『どうして自転車泥棒を警察が片づけないのだろう』

と不思議に思った。自転車はもゴミなのか、落し物なのか。ゴミならばさっさと捨ててしまえばいいし、落し物なら片付ければいい。もしも自転車が交通障害物が道路に置いてあったら、警察から大目玉はまちがいないのに、どうして自転車だけが大手を振って放置されているのかと、サンペイには理解できなかった。

その日の夕方。

駅前は依然として自転車の海。どこからこんな自転車が集ってくるのだろう。まるで湧き出てくるといった感じだった。

スーパーの前に、サンペイと、ニューヨークと、博多人形が立っていた。黒のガクランの中学生が三人、ツッパって立っているのは人目についた。それが三人の自慢だった。

「サンペイ、お前、サツにあげられたんだって…？」

「どうだった、感想？」

「どうってこと、別にないさ」

「おやじに叱られたろう？」

「平気、平気…」

ちょうど買物の時間なので、スーパーに押し寄せる人と、出てくる人とで、自転車に占領された広場は足のふみ場もない。

そこへ一人のおばさんが小さい女の子をつれて、スーパーから出てきた。ずいぶん買物をしたらしく、ふくれあがったショッピングバックと大きな買物籠を両手に持ち、女の子にも一つ小さな袋を持たせている。女の子といっても、まだ三才ぐらい、ちょこちょこ歩きである。

そのちょこちょこ歩きと、おばさんとが、買物といっしょに、よっこら、よっこら、とやってくるのだから、はかがいかない。やっと自転車の間をすり抜けて、駅前広場に出ようとしたときだった。

そこへ自転車に乗った若い警官が通りかかった。

おばさんがその警官にぶっつかりそうになり、あわて

警察とか、区役所とか、何らかの権威を感ずるらしく、ほとんど五人組の言うことに従った。だが女学生などになると、時にはかわいそうなこともあって

「ほんとうにダメなんですか」

半分泣きそうな顔になって、訴えるような眼ざしで見られると、困ることもあった。

五人の駅前自転車追放運動の効果はたちまち現れて

「せんだって、おれ、スーパーの店長さんにほめられちゃったよ、自転車が減って助かるってさ」

博多人形が頬を赤らめて言うと、モモ子も

「あたしもよ、この間、警察の人にほめられちゃった」

サンペイは少し厭な気分になった。ほめるくらいなら、ポリ公、自分で一台でも片付けたらいいのに。

しばらくすると、五人には新たな疑問が生れてきた。というのは

「駅前の自転車が減ったのはいいけどさあ、いったい、どこへ行っちゃったのかなあ」

「自転車にのってくる人が減ったんだ」

「でも駅まで乗ってこないでさ、途中に置いておく人もあるんじゃないかな」

「そういえば、この頃は駅に置けないので、少し遠いところに置いてある自転車がふえたって、誰か聞いたわ」

「それじゃ同じことだよなあ」

するとある日、モモ子が面白いことを見つけてきた。

「駅の反対側にね、とっても広い自転車置場があるの、知らない？　あたしこの間発見したの、行って見てきたのよ。有料なんだけどさ、区の自転車置場だから、安いの。一ヵ月、たったの千円。だが、広いのに、それがガラ空きなのよ」

「反対側だから、行くのが面倒くさいんだろ」

「それもあるけど、あまりPRもしてないから、みんな知らないのよ」

「それはモモ子の大発見！」

「それに、とってもいいこと聞いてきたんだわ」

モモ子は意気ごんで言った。

「なんだい」

「自転車置場に一台契約リベート百円くれるんだってさ」

「ホント…？」

「ホントよ。番している人に聞いてきたのだから、まちがいないよ。せっかく作ったが利用者が少いので、千円のうち、最初だけ百円、お礼出していいって区の方で言うんだって」

「魅力だなあ。一台で百円なら、十台で千円か。百台なら一万円、千台で十万円…、ケニアへの送金、軽いじゃんか」

五人の眼は輝いた。

「やろうよ」

「やろう」

翌日から五人は登校前に駅前で仕事をし、学校から帰ると、続きをやった。一週間もすると、九分通り自転車は駅前から姿を消した。

自転車が除かれると、その跡は、紙くずだらけ、ゴミだらけである。モモ子と花吹雪が掃除した。

引きとり手のない自転車も数十台出てきた。中にはまだ使える車もある。だがサンペイは自転車泥棒でこりている。それに手をつけるようなことはしない。持主のわからない自転車は一括して有料自転車置場に移動させ、スーパーの壁に貼紙が出た。

放置自転車は駅北側の区営有料駐車場に移動いたしましたので、所有者は至急お引取り下さい。なお二週間以内に届出のない自転車は処分いたします。

こうして駅前広場からすべての自転車がなくなった。

「ねえ、ねえ、お金いくらたまった？」

「もちろん、十万円以上はまちがいないさ」

五人は預金通帳のページに視線を集中した。放置自転車追放運動で目標はらくらくと達成し、翌日、お金を銀行からおろすと、K新聞社あてに送金した。

電話のベルが鳴った。

「はい、村木ですが……」

「こちらS警察署です」

ふたたびサンペイの母親は卒倒しそうになった。だがこの間の事件は区会議員に手を廻して、もう済んでいるはずだった。警察に顔のきく先生の力で家庭裁判所へは行かないですんだ。するとサンペイが何かをしでかした？

「あのう、また、サンペイが……」

「ヒョウショウですよ、お母さん」

「ヒョウショウ？」

「そうなんです。サンペイ君が今度警察から表彰されるのです。友達と力を合わせてね、駅前自転車整理に功績があった。今度の区民の日に、警察から表彰されるのですよ。おめでとうございます」

「はあ……」

母親は呆然としている。

「表彰されるのはS中学校サンペイ君たちの駅前自転車整理と、E中学校の「らく書き消し」の二組です。広い区の中で、たった二組です。お母さん、名誉なことではありませんか。わがS署としても鼻が高いですよ」

自転車泥棒が今度は表彰だという、上げたり下げたり

とはこの事だと思った。

E中学校の「らく書き消し」というのは、こうだった。団地や民家の塀などに、最近、高校生暴走族によるらく書きがひどい。それがスプレー・ペイントを使って大きく、『極悪』とか、『血しぶき』などと書きなぐってあるので、なかなか落ちない。見るに見かねた中学生たちが、PTAと力を合せて、うすく溶いたセメント液を塗り重ねて根気よく消していったというのである。いわば兄貴たちの尻ぬぐい的な仕事に精を出した善行が、評価されたものだった。このことは「それ消せ暴走族のらく書き」としてK新聞の地域版にものったことがある。

警察からの連絡は五人の家へそれぞれ電話であったが、五人は直ちに"スカーレット"に集合した。

"スカーレット"の窓から見える駅前広場には、もう自転車が一台も見えない。自分たちで片付けておきながら、ちょっと気の抜けたような気持だった。

「でも、らく書き消しと、いっしょじゃあな」

期せずして五人の意見は一致した。

「あっちはPTAママさんと組んだ、ままごとみたいなものだろう。おれたちのは、ちょっとちがうよな」

「表彰なんかいらないわ」

突然モモ子がうたいあげるように言った。

「らく書き消しとは根本的にちがうわ。あたしたち、別に表彰されたくてやったんじゃないもの。もっとちがうのよ」

「そう、もっとちがうんだ」

「もっと、別なんだよ」

「表彰なんて、いらないさ」

「そうよ、いーらない」

……

表彰の日。

五人はモモ子の家に集まり、表彰式に出なかった。

「でも、せっかくの表彰ことわって、カッコウつけてるって、みんな言ってるらしいよ」

「いいじゃんか、言わせておけば。おれたち、表彰なんてされたくない、ただ、それだけなんだよ、ほんと、それだけ」

モモ子の部屋には大きな地球儀があった。中学校に入ったとき、社会科の教材として学校で買わされたものだ。

モモ子が地球儀の一点を指さし、

「ケニアって、この辺にあるのねえ」

そう言って地球儀をくるりと廻した。

「もう、お金、着いたかなあ」

「まだ、だろ。この間送ったばっかりだもの」

「早く着くといいのに」

サンペイの眼の前に、不意に黒人の子供の顔が浮んだ。針金のような手と足。あばら骨の浮き出たミイラのような胴体。

サンペイはモモ子のスカートの下から、にゅっと出ている健康な二本の足を見ながら

「黒人の子供さあ、モモ子の足ぐらいに肥えるといいのにな」

モモ子はとたんにモモ子は

「いやあよ、そんなこと言って、気味が悪い」

モモ子が廻した地球儀の回転は次第におそくなり、やがてアフリカの地図は、五人の眼の前でゆっくりと止まった。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしておるます。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

現に維持会員になられた方をご紹介します。

稲垣正信さん（板橋区）川野弘能さん（北区）
増川遼三さん（大田区）内山善次さん（福岡）

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載

ハイラル挽歌（五）

第一章　海拉爾の白旗

金子正義

（五）

九日未明、原中佐は浅い眠りの夢の中で、昏い森林を彷徨っていた。故郷の鎮守の杜のようであった。

遠くで誰かが呼んでいる。答えようとしても声が出ない。激しく半鐘が鳴っている。起き上ろうと跪いても動きが取れない。眼底に焔が真赤に拡がって、ハッと目を睜らくと電話が鳴っていた。急いで受話器を取ると、「旅団司令部の多田中尉であります。只今、旅団から出してある第二監視哨から『目下敵襲！』と電話が入りました。敵襲！敵襲！と叫ぶ声と銃声が入り混って、それ切り切れてしまいました。直ぐ此っちから掛けましたが全然通じません。他の監視哨にも掛けましたが、応答無しであります。どう致しますか」

緊張した声を聞く内に意識が判っきりして来た彼は

「遂に来たか」と、闇を見据えて、

「情報は師団の方が正確だから、師団の指示をそのまま待て」

と受話器を置き、そのままベッドに座って昏い窓外を睨んだ。

夢の続きのように、ハイラル着任以来の情景が次々と脳裏に点滅した。市街や防衛主要陣地、遠い前線監視哨や前線拠点の情景が、走馬燈のように次々と浮んでは消えた。

ノモンハンに近い監視哨に視察に行った時、初夏のホロンバイル草原が余りにも美しいので、車を停めて菖蒲の咲き競う草原に佇んだ。傍らに通信隊の宮崎軍曹や、内藤一等兵の若々しい顔もあった。付近に蒙古人部落があって、土で固めた低い屋根の小屋が草原の菌のようであった。部落の中央にラマ教寺院があって、朱塗の柱に赤、青の原色の紙片がベタベタと貼ってあった。部落の南を流れる伊敏川が雪解で氾濫し、本流の他に何本もの脇流が出来て、その間に大小の沼沢が光っていた。水辺

の葦の茂みに沈みかけた木棺が漂っていた。棺には色鮮やかな日本の着物を着けた人形が納めてあった。原住民は子供が五才にならず親に先立って死ぬと、親不孝者としてその亡骸を野に捨てる習慣があったが、人形を添えた親心を思って、外地へ出征してから一度も思い出さない家族の面影が脳裏を掠め、水に漬った人形に娘を偲んで一抹の哀愁を嚙みしめた。

大草原に平和に暮し続ける満蒙の人々の生活や伝承を、幾度か侵略者どもが蹂躙したことであろうか。今、あの静かな湿原の菖蒲を、戦車で踏み潰してソ連軍が進撃している。

往時の追想から我に返った原中佐は憤然として立ち上った。待っていたかのように電話が鳴った。

「全師団は非常召集であります。直ちに旅団各部隊に非常召集を掛けます。」

多田中尉の声がビンビンと響いて、緊迫した情況がそのまま伝わってきた。原中佐は「愈々本物か」と覚悟の吐息をついて時計を見ると、四時十五分であった。伝令兵の内藤一等兵を呼ぼうとしたが、起すのも不憐と緩っくりと身支度を整えると、宿舎裏手の厩に行って馬を挽き出し、薄明の空を見上げて鞭をあてた。

爽快なギャロップに意識は冴えた。展開される戦闘の細部まで思い浮かべ、作戦の隅々まで反芻しながら騎行するうちに旅団司令部に着いた。

司令室に入ると待っていた司令部要員が一斉に立ち上って緊張した眼を向けた。多田中尉が、

「その後師団から何の連絡もありません。前線監視哨は依然応答無しであります。」

と不安な顔で言った。原中佐は、

「開戦と同時に旅団は要塞に入る、各部隊に再度そのむねを確認せよ、下士官は地下要塞へ持ち込む梱包を点検し、車輛に積んで搬入の準備をせよ」

と指示を与えていると、師団伝令が駈け込んで、

「師団命令、今暁の非常召集は演習である。各部隊は部署・兵員を確認の上解散」

と連絡して来た。呆然とした原中佐は、そのまま命令を黙殺して旅団隷下へ伝えずにいた。悠然と登庁して来た野村少将は、

「此の期に臨んで何にを逡巡するか、ハイラル防衛八十旅団の責任に於て各部隊は戦闘部署につき待期せよ」

と決然と言ったので、旅団はそのまま戦闘体制を執っていた。前線との連絡が途絶え、敵情が不明なので、原中佐は集結した司令部直属隊から、車輛斥候隊を二個小隊編成して、満州里と、将軍廟に通ずる道路の索敵を命じた。トラックには無線が無いので、小隊長に

「索敵が目的である、敵と接触したら戦闘を交えず直ちに退き返せ」

と念をおして出発させた。間もなく師団から電話が入っ

た。
「今朝五時、再度ソ連戦車隊は三河地区に大挙越境中、全師団は直ちに戦闘体制に入れ」
と言って来た。原中佐は斥候隊の帰りが気になったが、先に要塞に入った野村少将の後を追って、第二地区河南台要塞に向った。
地下要塞の戦闘指揮所に入った原中佐は、直ちに各要塞間の通信機関を戦闘方式に切り替え、全砲門を開かせた。要塞内が最後の死場所と兼てから覚悟を定めている将兵は、狭い地下道や、各部署間を機敏に動いて、午后一時には全ての戦闘体制を完了させた。野村少将が師団司令部に戦闘準備完了の電話を入れたが通じなかった。既にこの時刻、塩沢師団長は全速力で開嶺へ向う車の内であった。

（六）

最初の非常喇叭に深い睡りを破られた各部隊の将兵は、「すわ敵襲！」と飛び起きて、闇の中で装具をつけ、各個に命ぜられている集合地へ息切って駈けた。戦闘と同時に要塞部隊に編入される者、開嶺引揚部隊に行く将兵、軍施設、市街防衛陣地に集合する分隊等が、西に東に走り廻り、閑散とした屯営地に、未だ此んなに大部隊がいたかと思う程であった。
各集合地点で人員点呼をしていると、非常召集は演習である、と伝令があった。兵隊達はやれやれと気を緩めて兵舎に戻った。装具を解いて一息ついていると、再び非常喇叭である。
「何ん態いこっちゃ」
と古兵達は腰を上げずにいると、戦闘喇叭が鳴り響いた。今度は本当か、と再び集合地へ駈け出すと、既に頭上をソ連機が掠め、ハイラル市街を爆撃し始めていた。走り廻る将兵の相貌は一変して真剣であった。起居を共にした戦友とも今生の別れと、声を掛け合って走り別かれて行く。屯営地は駈け廻る連絡兵や、叱咤する将兵で騒然となり、蜂の巣箱を引っ繰り返したようであった。然し、軍隊は斯うした混乱の中で、崩れた蟻塚の蟻が右往左往しながら、女王蜂や、蛹を運んで行くように自然と一定方向に行動が決められて行く。暫くすると混乱状態だった将兵も戦闘部署に就いて、広大な軍事施設内の兵員は影をひそめてしまった。慌しい動きの最中に師団長は幕僚と大興安嶺の開嶺方面へ引揚げ、続いて二百五十五連隊長清水大佐も軍用トラックで新陣地に向った。連隊長の車の後には兵器、弾薬、糧秣のトラックが続いた。その後には軍用車に乗り込む将兵もいれば、延々と徒歩で行く部隊もあった。黙々と行く将兵は、ハイラルに踏留まって、ソ連軍を迎撃する友軍を想い、長途の引揚行軍の前途を案じ乍ら、戦火渦巻くハイラルを後にした。

二百五十五連隊残留第二機関銃の中谷軍曹の分隊は、旅団の指揮下に入るので、始めの非常喇叭と共に飛び起きて、戦闘配置の野菜倉庫屋上の対空監視哨に入り、戦闘体制に就いていた。
間もなく暁の薄明の中から、遂にソ連機が出現した。ソ連機は七、八機の編隊を組んで、ハイラル西方の山陵を起え稍々高々度より、次々と襲来した。真先に発見した杉山上等兵は、「敵機来襲！来襲」と叫んだ。分隊は機銃を回転させて、対空射撃を開始したが、ソ連機は意にも介せず、悠々と旋回してはハイラル停車場付近を爆撃して去った。続いて約三十機が、濛々と立ち昇る火煙を衝いて大胆にも、低高度より高射砲陣地や、対空監視哨陣地を爆撃し、更に伊東台西側の軍事施設を爆撃した。別の一編隊は市街中央部を爆撃して去った。執拗にも再三度来襲したソ連機は、市街の国際運輸、満鉄支所、軍人会館などの主要建物を爆破して行った。火災は市街や、軍事施設の至る所に上って、ハイラルは濛々と立ち昇る黒煙に被われ、一挙に戦いの坩堝に投げ込まれてしまった。駅も市街も軍事施設も間断なく誘爆発音が轟いていた。その火焔と轟音の中を潜って日本軍の爆破工作隊が、爆撃から残った陸軍貨物廠、兵器廠等を、次々と爆破して行った。
暁の爆撃は、残留邦人に急転直下の大衝動を与えた。鉱山関係の会社、満鉄支所、日満の雑貨商の家族等は、八月に入る迄に後方の札蘭屯、チチハル方面に避難していたが、限られた車輛と、情報の不正確な為に、未だ相当残留していた。市街地の爆撃で動天した人々は、身一つで火焔を潜ってハイラル駅に向ったが、駅付近も既に煙に包まれていた。邦人達は泣き叫ぶ子を背に、脅える子の手を引いて右往左往し乍ら逃げ場に迷い、重い荷を担った老人達は杖に縋って興安街道を南に向い、或いは鉄路に沿って東へと逃げ落ちて行った。その群を追い散らすように、焼け残った商社のトラックが、家族や家財を満積して追い越して行った。
開嶺方面にいる上級将校は、新陣地には官舎が無いので家族の者をハイラルの将校宿舎に残していた。この軍人家族達は、砲兵隊に引き込まれてある、軍用路線を知っていたので、暁の爆撃の後から次第に集まり始め、午後の再度の爆撃があると、重大な危険が直ぐ背後に迫ったと感じて、引込み駅に殺倒して来た。引込線はハイラル市の東側の伊東台陣地の山間に秘かに引き込まれた軍用路線で、東ハイラル貨物駅と言われていた。駅の直ぐ南側に師団司令部があり、二粁程離れて軍官舎があった。軍関係家族は着のみ着の儘の者や、持てるだけの家財や衣服をトランクや、満人袋に詰めて殺倒して来た。人々は空襲と絶え間なく炸裂している弾薬庫の激音に脅えて、未だ運転する者も居ない、無蓋車輛や汽罐車の中迄ギッシリと乗り込んでしまった。溢れ出た者は車輛の傍を口

々に何にか叫び乍ら右往左往していた。
待てど暮せど列車は動かず、軍からは誰も来なかった。黒煙を透かして夕陽が沈みかけると、不安と動揺は次第に大きくなり、泣き叫ぶ者や、喚き合い、争い合う女達もでて来た
師団司令部から、その動揺と混乱が良く見えたが、将校達は気を配る余裕が無かった。兼てから最後の引揚軍用車の司令は翠川大佐が任命され、松山中尉が副官となっていたが、兵器弾薬、食糧医療品等の積み込みに忙殺されていた。司令部前の広場には、各方面から興安嶺へ引揚げる部隊の将兵が集結しつつあった。付随する病院関係や、軍属も爆煙を潜って次々と集っていた。列車輸送はこれを第一にしなければならなかった。
指揮連絡に血眼となって奔走していた前原大尉が、漸く軍人家族の輸送に気付いて、工兵隊下士官達を連れて貨物駅に駈けつけたのは五時を過ぎていた。
師団司令部勤務の益子軍曹は、八月九日は週番下士官となっていたので、軍人軍属の家族に正式に退却命令を伝える為に、当番兵二名を連れて軍人官舎に駈けつけた。
既に大半は東ハイラル貨物駅へ引揚げていたが、念の為に当番兵と大声で、
「残っている軍人ご家族は居りませんか、直ちに東ハイラル駅に行ってください、引揚列車が出発します」
と繰返し乍ら各棟を廻っていると、官舎の一室に幼い娘を小脇にして芒然と坐り込んでいる婦人が居た。
「早く退出してください」
と声を掛けると、不安定な顔を向けたのは、一、二度公用で会ったことのある六百八十二迫撃砲大隊の林田中佐夫人であった。然かも身重の様子であった。青天の霹靂のような爆撃に動天して、どうしたらよいか不安に脅えていた時に、益子軍曹が来たので、急に気を緩めた夫人は取り乱したように泣き出した。益子軍曹は夫人を励まして、手早くトランクに食糧や衣料、貯金通帳等を詰め込み、当番兵に少女を背負わせて東ハイラル駅に急いだ。
夫人は益子軍曹に縋りつき、
「軍曹さん、東ハイラルからも一緒に行ってください、此んな私と、子供ばかりで心細くてたまりません」
と息を弾ませ悲痛な声で何度も繰返した。益子軍曹は、縺れる足の夫人を励まして漸く貨物駅に着いた。
ホームでは前原大尉の指揮で、将兵達が声を枯らして五輛編成の引揚列車に、女子供を詰め込むのに大童であった。益子軍曹が来たので、前原大尉に
「林田中佐殿夫人とお嬢さんをお連れ致しました」
と大声で報告し、混雑を押し除けて漸く、二人を列車に押し込んだ。一旦車内に入った夫人は、車から飛び降りて益子軍曹の腕に縋りつき、
「一緒に来てください、お願いです」

と真剣な眼を向けて放さなかった。前原大尉は狂気のような夫人の様子に手を焼いて、夫人を引離すと、松山中尉に命じて汽罐車の次の有蓋連結車に連れて行かせ、岡部参謀長夫人の隣に押し込ませた。
林田夫人はやっと落着いたが、車窓から首を出して混み合うホームにいる益子軍曹を見付けると、最後の声をあげて、
「一緒に来てください、お願いです！」
と叫んだ。益子軍曹は、聞えぬ振りで、挙手の礼をして動き出した列車を見送った。
五車輛の列車には、軍人家族の外に軍属関係女子従業員、司令部女子職員、陸軍病院看護婦等、二千五百名余も乗り込んだので、無蓋車に寿司詰め状態で立ったままであった。人々は払暁より一挙に動乱の中に捲き込まれ、埃と煤で容貌も一変し、もう敗北の難民のようであった。
列車の左に戦火に焦げる真赤なハイラルの空があった。右に山の端に見え出した三ケ月があった。列車は夜の鉄路を驀らに走った。火焔は遠くなり、無気味に鋭く大きい三ケ月が空に冴えていた。進行する列車の沿線には既にソ連軍機甲隊が進攻して、各所の守備隊と交戦する激しい銃撃音が響いていた。

（七）

益子軍曹は、列車の発車を見届けると再び司令部へ向った。司令部は既に徹退し、彼は零号作戦発動で第四地区の原隊へ復帰しなければならなかったが、松原文子のことが気になった。彼女は一般邦人が引揚げ始めても、八月に入って情勢が緊迫しても、司令部要員軍属として最後迄残っていた。昨日も酒保の残務整理をしていた。最後の引揚列車に乗ったかと、益子軍曹は混雑の中を探したが見当らなかった。既に市街の彼女達の軍属宿舎は火に包まれている。必ず司令部の酒保事務室に居るに違いないと彼は信じた。それは愛する者の直感であった。彼は夢中で駈けた。真夜の司令部構内は既に無人であった。各兵舎もゴーストタウンの無気味さであった。時折り遠くで爆発音が響いて、ハイラル市街に真赤な火の手が上ったり、新しく火柱が熾ったりしていた。その火映で兵舎の入口や窓だけが暗い口を明けていた。赤煉瓦の建物の上に三ケ月が無気味に冴えていた。
司令部の西側裏の酒保事務所のドアを押し除けるようにして入ると、倒れた六人掛け長椅子や、机戸棚の向うのカウンターの蔭に人影が動いた。彼が駈け寄る靴音に弾じけるように立ち上った人影が彼を見た。闇の中に明滅する火照りで顔の輪郭が人形のように白く浮んだ。彼が駈け寄ると彼女もまた駈けた。無言のままぶつかるように強く抱き合った。言葉は無用であった。唯、彼女は彼の肩に凭れて泣いた。彼女の頤が彼の肩で震えていた。
彼は彼女が司令部経理部軍属の中から、酒保事務補助として配属され、彼の前に初めて立った日の事を想った。

編集後記

○第五号は七人七作。あいかわらずのベースでみなみな意欲を燃やしている。六人はとくに皆勤である。一号でも休むと筆があがることを恐れるという意識もあってのことだ。極微の掌編でもよい、みんな顔をそろえたいものだ。

○掲載作品については言葉を加えまい。活字になった以上作品は一人歩きをするものだ。作者自身すらもう手の届かない距離を置かれる。

○本号から用紙を薄手のものに改めている。印刷所としてはこれまでサービスとして厚手のものを使用してくれたものだが、造本上薄手の方がかえってスマートであるという意見に拠った。

○短歌の増川さんは新に維持会員となられた方でせっかくの寄稿として掲載させて頂いた。

○かつての「作家群」同人湯郷将和氏の作品「遠雷と怒濤と」が第一チャンネルの土曜ドラマとして七十分三回にわたり堂々の放映を見た。放送文学賞に輝く注目の作品のドラマ化であった。華々しくスポットを浴びただ本人の本懐はもちろんであるが、仲間の私たちにとっても近来の快事であった。

（禎）

「まんじ」第五号

昭和五十七年四月三十日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一　東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー九〇八一五

小さな銀色の十字架

――「箱根・富士」終章――

山本儀一

校舎の屋根の後ろから、夏の富士がのぞいていた。松原越しに海の見える広い運動場を、二つに分けて柵が通っている。その丸太にもたれて、女子部の女の子が二三人、こちらを眺めていた。

エイッ、エイッ、エイッ、エイッ、切り返して踏み出していって、大きく振りかぶって、メェン、と打ちおろす時、ススムの切先はどうしても「く」の字の形に曲ってしまう。担任の先生は目ざとく見つけて近よる。

「お前はメンではなくて肩を打っとるが」

先生はススムの脇に来て、木刀をもった小さな手の上にゴツい大きな掌を重ねて、こうもたにゃいかん、といってグッと絞った。身近に感じた大人の男の臭いと、自分の手を押えつける荒々しい感触に、ススムは脅えた。先生はそそくさと立去って、また他の子に注意を与えていたが、針のような毛が黒々と生えた先生の太い指が、いつまでも目に残っていた。

担任の先生は黒い詰襟の服を着た大男で、お巡りさんみたいにゴツい感じのオジサンであった。スミノミヤという宮様が夏休みに御用邸においでになるので、学校では剣道の練習や試合をお目にかけてお慰めすることになった。「お前たちはまだ早いのだが、宮様と同い年じゃによって、各組から上手な者だけを選んで連れて伺うことになった」と先生はいった。

夏休み近くなると、海の見える広い校庭を一ぱいに埋めて、毎日練習をした。先生は兄ちゃんがもっていたボッケンと似たアカガシの太い木刀を振るって、お手本を見せてくれた。それはほれぼれするほどリッパな身のこなしであった。

生徒たちは始まる前に、倉庫のカゴの中から木刀を持ってくる。それはいかにも子ども用といった白ちゃけて汚れた細い木刀であった。早くとりにいかないとゆがんだのや傷だらけのものが残った。ある日、ススムは形のよい木刀にめぐりあった。満足した気分で歩きながら、反り工合や肌の色を見た。切先に赤黒くシミがついているのに気づいた。それはひからびた血の痕に見えた。ススムはゾクッと身震いしたが、もう取替えに走る暇はなかった。メェン、と打ちおろす切先が「く」の字に曲るようになったのは、その日からだとススムは思う。それからは練習の時間が来ると駈け出して倉庫にいき、念入りに木刀を調べて選んだ。しかし、練習のとき木刀の血の痕を思い出すと、なぜか腕が縮んでしまう。先生から何度も注意を受けた。先生の指導はだんだん荒っぽくなり、やがてほって置かれるようになった。

御用邸に伺って、スミノミヤ様の御前で、エイッ、ヤッ、とやれなかったことを、ススムはそれほど残念には思わなかった。なぜ自分の腕がすくんでしまうのかしら、と考える方が恐ろしかった。

「東京から来た子」ススムは重苦しい気分で夏休みを迎えた。

春が来て三年生になってからは、ススムはクラスの人気者になっていた。クラスの子どもたちは半分以上は袴もつけずキモノのまゝであったし、ススムのように本をスラスラ読める子は余りいなかった。子どもたちは東京の話をきゝたがったので、ススムは見たこともない名所の話まで、ききかじりのうろ覚えで尤もらしくきかせた。雨の日のお昼時間に先生が教員室へ食事に行ってしまうと、ススムは弁当を食べかけのまゝ教壇に上って、知っている限りの童話や昔話を話してやった。

ススムにとって夏休みの重苦しさは、木刀の血の痕から導き出された記憶のためばかりではなかった。一学期の通信簿に「丙」があったのである。しかも一ばんテッペンの「修身」の欄である。教室の隅でススムは自分の眼を疑った。だが何べん見ても、その荒々しいペン書きの異様な文字は「丙」であった。東京にいるときは、ススムはずっと、「全甲」であった。いつも体操だけが「甲」で、あとは「あひる」の行列だった下の姉ちゃんだって、「丙」なんかとったことはない。

「お前、わき見やおしゃべりばかりしてお行儀が悪かったんじゃないの」

下の姉ちゃんが他人事のように言った。お行儀悪くなんかなかった、ススムは口の中で呟いた。ススムはいつも先生の話をよくきいていた。いや、きいているふりをしていた。先生の話はクドくて退屈だったから、ススムは顔を前に向けたまゝ、心の中で遊んでいたのだ。学期末に先生がワラ半紙を配って、今日はシケンだといったとき、ススムは少しあわてた。修身のシケンて何をするのだろうと思った。先生はちょっと首をかしげ、マルヤマオウキョの話を書けや、といった。先生は窓際に椅子をもっていって雑誌を読みはじめた。マルヤマオウキョという名前をどこかできいた気はしたが、どうも思い出せなかった。周りの子どもたちは、鉛筆をもち頭をさげて書きはじめるのもいたし、両肘ついて首をかしげてるのもいた。ススムはあせった。修身の時間は楽しい夢想の時間だったのである。あの黒ネズミ色の薄い本の中は、お念仏のようでなんにも面白い話はなかった。みんなと同じように鉛筆をもって書くふりをしていたが、頭がカッカとするだけで何も書けなかった。

「丸山おうきょは昔のゑかきです」

一番後ろの子が集めにきたとき、ススムはワラ半紙に自分の名前とその横に一行書いただけであった。答案を出してしまってから、マルヤマオウキョが藪かげでイノシシを写生している挿絵を思い出した。それから先の話は、本を見るまで思い出せなかった。ススムはこのことが修身「丙」をもたらすなどと、夢にも思わなかった。

ススムは少なからず誇りを傷つけられショックを受けたけれど、かあちゃんも二人の姉ちゃんも大した関心を示さなかった。この年の暮には除隊して帰ってくる兄ちゃんに、何と申し開きをしたらよいか、それだけがススムの心配であった。

沼津の市営住宅は、線路際の木立を切り開いて建てられてある。三島の家とそっくりの板壁トタン屋根の二軒長屋が、軒をぶつけ合うばかりにかたまっていた。ススムの家は外れの方で、家の裏には幾つか切株の残った草地があった。その向側の林は高く深く繁っていて、崖下を通る汽車は地響きだけで姿は見せない。風向きによっては煙の臭いが流れよることもある。富士山も見えなかった。木立を透かしてくろぐろと見えるのはアシタカ山であった。

赤んぼは狭い部屋の中を這い回るようになり、目が離せなくなってきたが、かあちゃんはめったにススムに子守りをさせない。出かけるときは負(おぶ)っていった。住宅には同じ年頃の子どもはいなかった。学校のそばへ行くと顔を見知った子どもはいるが、たいてい土地の子どもたちと遊んでいて、ススムを見て言葉をかけたりしても、すぐ群の動きの中に溶けこんでしまった。

本町通りへ出て姉ちゃんたちの働いている料理屋「鳥政」の前あたりに、たいていサブロウがひとりぼっちで遊んでいた。サブロウは教室でススムに東京の話をせがむ子どもたちの一人であった。サブロウにはかあちゃんがいないそうで、いつも汚らしい身なりをしていた。カスリの着物の袖口はヤニがついたように光っていた。そのまゝの服装(なり)で本をフロシキに包んで学校へ来るのである。夏休みの間にススムはサブロウからこの街のことを

いろいろ教えてもらった。何かきくと、うん、ワッチが教えてやる、といってどんどん先に立った、千本松原にも何度かいった。この浜辺には砂浜がなくて、一面に漬物石を敷きつめたような石浜であった。たいへん歩きにくかったが、サブロウは跳ね虫のように松林の間を走り回るのであった。

キツネのいるところ知らないか、とサブロウにきくと、アシタカ山へいきゃいるずら、といった。でもキツネは人を化かすっちゅうかんな、と尻込みした。ススムはいつかサブロウといっしょにアシタカ山へ行ってみようと思った。

サブロウはススムを見つけると、すぐどこからか飛び出してきた。サブロウが出て来ない時は一人で千本松原へ行った。波が荒く海で泳ぐ人は少なかった。

あの時の兄ちゃんの蒼ざめた顔をススムは忘れない。はす向いの廉売市場の前でガヤガヤ騒いでいた一団が、バンザイと叫んでからしばらくすると、兄ちゃんが帰ってきた。兄ちゃんは古い柔道衣を着て、手拭で鉢巻きをしていた。兄ちゃんは上り端に腰をおろし、ボッケンを仕事場の板の間にほうり出して、大きな息をした。水をくれ、と下の姉ちゃんに言った。まだ上の姉ちゃんはお屋敷から戻ってなかった。ススムはカッコいゝ兄ちゃんの真似をして、ボッケンをもって構えてみた。先の方に赤黒いものが着いていて、ローソクの光でチラと光って見えた。そっと触るとスルリとすべり、指先が赤く染った。

「血がついているよ」

「さわるなッ」

兄ちゃんは大きな声でススムを怒鳴りつけた。雑巾をもって来させて板の間へ上り、ボッケンを何べんも拭いた。雑巾を裏返してまた拭いた。雑巾を姉ちゃんに投げて、よくゆすいでおけ、と言った。固くなって坐っているススムに、兄ちゃんはやっと和らいだ顔を向けた。

「ノラ犬があんまりしつこく吠えついて来たんで、一発お見舞いしてやったんだ」

兄ちゃんの笑顔はゆがんで見えた。それは陰翳の深いローソクの光のためばかりではなかった。それから兄ちゃんは急に声を荒げて、いくら学校がないからといって、子どもがおそくまで起きていちゃいかん、と叱った。

ススムは暗くかしいだ二階へ上って、かあちゃんの布団にもぐりこんだ。天井板が外れ屋根瓦の落ちた軒のすき間から、星が一つ光っていた。家の修理にはまだ手が回らないのである。地震はおさまったが、東京の空には大きな煙の柱が立って雲につながっていた。シュギシャや、フテイセンジンなどという悪い人たちが、何をするか分らないということで、夜になると兄ちゃんたち町会の人がジケイダンになって回り歩いたり、毒を入れられ

ないように井戸の番をするのであった。

地震は本当に恐かった。ススムはあの日一日、王子電車の線路際のクサギの木の下で、なんにも食べずにうずくまっていた。それから後は、みんなが恐い話をするから恐がっていたようだ。その夜、ボッケンについた血を見て、ススムはあらためて恐ろしい気持になった。兄ちゃんを疑うのはいけないことだが、兄ちゃんがやっつけたのは、ノラ犬ではなくて、何かほかのものではなかったろうか。

ススムにとって、それは思い出したくない記憶であった。千本松原への往き返りの間に、ススムは、もしかしたら兄ちゃんはキツネを打ち殺したのかもしれないと考えた。あの近くには王子稲荷があるのだから、キツネの多いところに違いない。地震に驚いて迷い出したキツネを、兄ちゃんは犬とまちがえて打ち殺したのかもしれない。王子のキツネは野山にいるノラギツネとは格がちがう。タタリもあるだろう。ススムの想像はそれ以上に飛躍しなかった。飛躍することを抑えるもっと恐ろしい巷説の記憶が幼い心に残っていた。

兄ちゃんに手紙を書くのは、まともに六年を卒業した下の姉ちゃんの役目だったが、お前勉強できるんだからたまには書きな、とおだてられて押しつけられることもあった。なぜか自分から書こうとは思わなかった。かあちゃんに、こういう事を書けと言われて書くのだが、かあちゃんはまとまりなくあれこれいうので、ススムが腹を立てることもある。かあちゃんは最後に必ず、「ススムも元気でよく勉強していますから安心してください」と書けや、と言った。

五月の末に、兄ちゃんの手紙が届いた。兄ちゃんの手紙は字が踊ったり跳ねたりして、それにあて字が多かったり送りかながへんだったり、大へん読みにくいのである。ススムと下の姉ちゃんが首つき合わせても読めない言葉もあった。そういう時には、一日も学校へ通ったことのない上の姉ちゃんが、なぜかスラスラ読んでしまうのである。

兄ちゃんは五月から、聯隊から十五里も北にある山の中の陸軍通信所へ派遣された。

「当所では不便で御金は何程ど有ってもつかへないんです　本月分の奉給五円五拾銭も今迄で一銭もつかはずそれで東京から本お送ってもらふ様うに本屋へ注文しました此の処は暇まですから家へ帰っては出来ないから一生懸命勉強して帰へり度いと思って居ります」

これは小包を送った御礼の手紙であった。下の姉ちゃんが手紙の中に入れて送った金魚草の種をとても喜んでいた。

「御母様は毎日お得意を廻って居るとか　仲々たいて

いでは御座いませんでせう　最う少しの間自分が帰へる迄で御しんぼう下さいます様う此の手紙お読む者は悪しからず母上に伝えて下さい　六七八九十と後と五ケ月計りですから自分も精励して帰へる心得で有ります」

その時は、かあちゃんのことを、御母様だの母上なんて書いてあるのが、くすぐったくておかしかったけれど、夏休みになって兄ちゃんの手紙を思い出すと、ススムはユーウツになるのであった。兄ちゃんの留守中にこんなよい事をしたと胸を張って言えることは何もないのである。かあちゃんと二人だけのヒミツだけれど、赤んぼを堀割りに流そうとしたり、ミカサノミヤサマの御前でカッコよく剣道をやることもできなかった。それは黙っていればよいとしても、修身「丙」をとってしまったのは隠しようもないのである。

千本松原の帰りには「鳥政」に寄ってみることがあった。午後になると姉ちゃんたちは勤めに出ていた。まだお客は少なく、板前のオジサンは笑顔で迎え何かしら食べさせてくれるのだ。ススムは生まれてはじめてトリのサシミを食べた。姉ちゃんたちはこのお店の看板娘になっているのだとススムは感じた。上の姉ちゃんが、用もないのに来るんじゃないよ、と厭な顔をするので、ススムは三四回行ったきりでやめた。

サブロウと遊び歩いて帰りかけたとき、ススムは見覚えのないおにいちゃんに呼びとめられた。

「ススム、アイスをおごってやろう」

ススムの名を知っているおにいちゃんは、馴れ馴れしく近よって言った。姉ちゃんの店へ来る客の一人だろうと思った。姉ちゃんたちがお目当てで「鳥政」へ行く若い男たちがいることを、ススムは家で姉ちゃんたちが交す会話から察していた。あゝいう男は気をつけなけりゃいけないよ、などと上の姉ちゃんが下の姉ちゃんに説教しているのをきいたことがあった。

埃じみたハタが軒先でゆれている氷やの店で、そのおにいちゃんは、ススムの家のことをいろいろきいた。ススムは仕方なしに言葉少なに答えた。店を出ると、もう通りにはポツポツ灯影が見える頃になっていた。海の色はまだ明かるかったが、かあちゃんに叱られると思ってススムは急ぎ足になった。おにいちゃんは不意にススムの顔を覗きこんで薄ら笑いをうかべた。

「ススム。ワタ一貫めとテツ一貫めと、どっちが重い」

ススムは突然へんなことをきかれ、小学三年生の誇りを傷つけられた思いで、黙って歩いた。「えッ」とおにいちゃんはもう一度問いかけた。

「きまってら」

ススムは無愛想にいった。

「言ってみな。じゃあ、どっちだ」

「ワタとテツじゃ、テツの方が重いさ」

ススムの頭の上で哄笑が起った。うまくひっかかったと得意げなおにいちゃんのお喋りをきゝながら、ススムは、あゝ、そうか、というように頷いてみせたが、ハラの中ではおかしくてしようがなかった。サブロウじゃあるまいし。どうみてもあまり賢こそうでないこのおにいちゃんは、自分がひっかかったことに気づかないのだ。ススムとしてはこれがアイスの御礼だった。

満足げなおにいちゃんは、歩きながらふところ手を帯の下に突っこんでモゾモゾしていたが、縮れた毛を一本つまみ出して、ススムの目の前でひらひらさせた。

「これなんだか分るか」

ススムは首を振って顔をそむけた。前方に水溜りが光っていた。道路の側溝がつかえて溢れているようだ。あそこまで何歩あるかな、とススムは計った。

「これが生え揃わんとな、おなごは抱けんのじゃ、ススムはまだずら」

おにいちゃんは頭を下げてススムの耳もとで囁き、咽喉を鳴らして小さな笑い声を立てた。歩数を数えていたススムは、不意に横っとびに跳んだ。きたない水音がして、やっ、とおにいちゃんが悲鳴を上げた。ススムは「サヨナラ」と叫んで駈け出した。バカ。そんなもの見飽きるほど見てるさ。いつもかあちゃんと女湯へ行くんだから。しかし考えてみると、女の縮れっ毛はいつも身近にあったが、男の縮れっ毛を見た記憶がないのである。

このおにいちゃんの不器用な御気嫌とりはススムの心に屈辱感を植えつけた。宵暗に浮かんだ若い男の生白い面長な顔を、ススムはいつまでも忘れることができなかった。

かあちゃんは夏休みの間も「お得意廻り」を続けていた。赤んぼを負って両手にカゴをさげて出かけた。家の真ん前の住宅の玄関には「むつみ派出婦会」という小さな看板が打ちつけてあって、こゝにはいつも何人かのオバサンが寝泊りしていた。かあちゃんの最大のお得意さんは、「むつみ派出婦会」であった。こゝからだんだんお得意が広がったらしい。使い走りの駄賃稼ぎではなく、注文をとって買出しに行くのである。東海道線の線路を越えてアシタカ村の農家へ行ったり、時には漁師村へも行く。野菜や卵や魚のヒモノなどが、かあちゃんのカゴの中味であった。お得意さんはそんなに多くもなく、また毎日の仕事でもなかった。かあちゃんは稼いだ金を何べんも何べんも数えてから、小さな革のカバンにしまった。たまにひゞの入った卵をもって帰ると、ススムと赤んぼに半分ずつ呑ました。これは今朝とれたての地玉子だから生で含まなきゃもったいない、と言った。かあちゃんはズングリと小肥りで、山で働きつけていたから力もちだったが、さすがに暑い最中は、危いめに遭わせるなとクドクド言ってから、赤んぼをススムに預けて出かけた。お誕生日も近くなった赤んぼは、肌の色が花びら

のようでかわいかった。ススムは本が読みたくなると、赤んぼを犬のように柱につないで、周りにありったけのオモチャや小物を散らばして置いた。

兄ちゃんは十月一ぱいで満期だから、それまでに帰りの身支度や路銀など、九月中にもう一度小包を送ってやらにゃなんねえ、とかあちゃんは一生懸命だった。

九月の末にやっと小包を送ると、間もなく下の姉ちゃんが病気になった。腹をこわしたのだとかあちゃんは言った。下の姉ちゃんはガンジョウに出来ていて、何を食べたって腹をこわすなんて考えられない体だったのに、青い顔をして一週間あまり寝ていた。起きられるようになってからも、時々下腹が痛い、とかあちゃんに言った。姉ちゃんはずっと茶色い煎じ薬をのんでいた。かあちゃんが土瓶で薬を煎じていると、香ばしい匂いが家中にひろがった。

下の姉ちゃんが病気になる前、かあちゃんと姉ちゃんたちが夜おそくまで小さな声で話し合っているのを、ススムはうつらうつらときいた。「兄さんがもうすぐ帰ってくるというのに……」とか「あたしだって気をつけなって言っといたんだよ」とか「とにかく、もうしようがないよ」とか、言葉の切れ端がススムの耳にも届いたのだ。だが、ススムにしては姉ちゃんが元気にさえなれば、それでよいのである。

十月の半ばごろ、兄ちゃんの手紙が来た。五日付だから一週間もかゝっていた。奥地のことだからしようがないさ、と上の姉ちゃんはいった。家中集って夜おそくまで、何べんも読みにくい手紙を回し読みして、みんなはしゃいでお喋りした。

「早速く着て見ました処ろ大分行きも丈けも短かくなって居りました　多分ん軍隊に来てから大きくなったので有ませうはゝ、然し彼の様に態々長襦袢など新調して呉れたり高価な帽子お買ふて呉れては自分の為めに大部分御金お費った事で有りませうな　御金も有難うポケットの中にたしかに入って居った　本当に大分散財おしたね

然し帰れば勿ち取返す可く懸命働くからね此れで先づ帰る仕度くも出来たので一安心皆んなそれぞれ遊んで居らぬ様子だし本当に結構です　此の上は自分んが一日も早やく帰って仕事に掛れば先づ先づ吾家も一と落附き落附くはけで有る　皆なも其のつもりで最ふ少しの処だ体だお大切にそして仲良く精出してやって居って呉れ」

手紙には、帰ったらすぐ働けるように、何でもやるつもりだから、なるべく仕事を見つけて置いてくれ、と書いてあった。

「帰れば速ぐ正月だからまごまごしては居られれん　当

所には二十一日迄で居るが最ふ手紙は呉れても受取れるか何うかはからん沼津駅着は午前七時頃に成ると思ふが何れ大坂より電報お打つ考へだから頼む　但し今日ススムより図面おもらったから多忙なれば出迎への要は更に無し」

写真が数枚はいっていて、その中の四五才の子どもは、いつも大変お世話になっている駐在所の坊やで、周りの草花は下の姉ちゃんが送った百日草や金魚草だと書いてあった。

兄ちゃんは帰郷の列車の時刻表まで調べていた。ススムにとって、もう兄ちゃんは〝いつか帰ってくる人〟ではなくなったのだ。張り切った兄ちゃんの息づかいが、はっきりきこえてくるのであった。

ススムはサブロウといっしょにアシタカ山へキツネを見にいった。はじめサブロウはいやがった。ススムはサブロウを脅した。道案内しなければしないでいゝ。その代りキミがボクと通りを歩いていって、ヤオヤの店先でナシを取ったり、オカシヤの店先から棒アメを抜いたり、そうだ、千本松原の涼み茶屋でユデタマゴを盗んでオバサンに追っかけられたことなど、先生やみんなに喋ってしまうよ。サブロウは泣きそうな顔をした。取ったのはワッチだけど、ススムくんもいっしょに食べたずら。ススムくんが欲しいゆうから取ったこともあるし。そうだよ。ボクはキミといっしょにお巡りさんに縛られるつもりで言ってるんだ。いやならいやでいゝさ。

ススムとサブロウは、もう薄暗くなった田んぼ道を歩いた。ところどころ大きなススキの株があったり稲架があって、その風景は三島の家から箱根を眺めたのと似ていた。たゞアシタカ山がすぐ近くに黒々とうずくまり、その上から富士の頭が見えた。

雑木林の中に入ると急に夜になった。木の根の這った細い坂道を、ススムはサブロウの手をとって登った。一本道を進んできたつもりだったが、ずい分曲りくねっていた。結んだ手が汗ばんでいた。サブロウに逃げられないため、恐ろしさのため、手は離せない。まだか、ときくと、知らん、こんなところまで来たことないじゃ、とサブロウは哀れな声を出した。落葉を踏む湿った足音がしばらく続くと、突然黒い鳥が羽音高くとび立った。ススムとサブロウは腰を抜かした形でその場にしゃがみこんだ。虫の声の間に水の音がした。二人は木の根につかまって山道の曲り角まで這い上った。谷川の水音がはっきりきこえた。暗闇に目が馴れると、崖下に誰かいるのに気づいた。ひそひそと話し合っている。三四人いるらしい。手を離したサブロウを振返ると、サブロウの姿はもう見えなかった。

いなかの方の段取りはついているんだろうな。聞き

覚えのある声だった。もうそろそろ取りかゝってるはずね。女の声が顔をあげると、暗闇の中にくっきり白いキツネのお面が見えた。あとババアとガキが残ってる。その声は忘れられない。間抜けた縮れっ毛のあんちゃんだった。このあんちゃんもキツネの面をつけていた。もういゝだろうさ、おふくろさんをやっちゃ赤んぼが可哀そうだ。大事なことは、あの家族がただ不運を歎くだけでなく、なぜこんな不倖になったかと気づくことなのだ。それを悟ることができるのは、あの子どもだけかもしれないのだ。ススムにはもうこの声の主が分った。この後姿がサイトウさんだと思うと、急に寒気がして身体が震えてきた。

ススムは風邪をひいて三日ばかり寝た。ひどい熱を出してウワゴトを言っていた、とかあちゃんが教えた。ススムの床のまわりではいつも何かあわただしい囁きがあった。兄ちゃんのために新しい布団作りにかゝらなくてはとか、当座の職を何か当っておかなくてはとか、金算段に追われながらも、それは明かるい心配ごとであった。りっぱにお務めを果して帰ってくる兄ちゃんに、色々なことはあったけれど、みんな精一ぱいにやっていたよと見せなければならないのであった。

兄ちゃんが入院したという電報がきたのは、ススムがやっと学校へ出られるようになった日であった。みんな何のことやら訳が分らずにまごまごしているうち、三日目の十九日には「キトク」という電報が入った。続いて二十一日には、午前五時死亡、という電報がとどめをさした。それを追って、衛戍病院から、「至急」「公用」という朱印を押した手紙が届いた。簡単に病状を知らせ、「然るに其後病状益々険悪にて全然楽観を許さざる状態に立ち至り居候間予め御了承被下度」と、墨書の達筆で万一の覚悟を促していた。

兄ちゃんの葉書は中隊長の悔みの手紙と同じ日に届いた。看護卒に代筆してもらったと断ってあった。急病で入院したけれど決して心配はいらないとくり返し、除隊がおくれると金がいるから、この手紙の着き次第電報為替で二十円程送ってくれ、「お願いします」と、二度も書いてあった。

兄ちゃんの代筆の葉書を、上の姉ちゃんが読むと、みんなはじめて落着いて泣いた。ススムは泣かずに黙っていた。兄ちゃんはやっぱり殺されたにちがいない、と思われた。

中隊長から来た手紙の封筒にも「至急」「公用」の印があった。その手紙には美しい崩し字が流れるように書かれており、すっかり拡げると一間余りもあった。こんな素晴らしい筆跡で書かれた手紙を見たことは誰もなかった。スラスラと書いてあっても、スラスラとは読めなかった。「拝啓　痛惜の念……」までで、もうつかえ

てしまうのである。読めない字を飛ばして見ていけば、それでも意味は分った。はじめの大きな文字がだんだん小さくなり、行間も狭くなり、発病から死亡までの経過が精しく説明してあった。

兄ちゃんは十三日の晩発病喀血し、鉄道終点の鐘城にいる部隊の看護兵に来診を求めた。翌十四日、看護長が自転車でやって来たが、病状がよくないので、翌十五日、五里の山道を担架で鐘城まで運んだ。翌十六日、早朝の列車で会寧まで輸送し衛戍病院に入院したのが発病から四日目で、既に手おくれとなっていた。意識ははっきりしていて十八日には看護卒に葉書を書いてもらった。十九日危篤状態に陥り、家へ電報を打ち内科主任が家族へ覚悟を促す手紙を書いた。二十一日朝、看護の戦友に、おれはもうダメだ、といったのが最後の言葉となったそうである。

中隊長の手紙には、明二十二日に官費を以て葬式を営み、「遺骨及び遺品香花料等は後刻明細表を作り御送付致すべく候」と書いてあった。

長い巻紙のお悔み状を、かあちゃんは何べんも読んでくれとせがんだ。かあちゃんは目をマッカにして聞き入り、あんな山ん中へやられなかったら助かったろうにとか、内地の聯隊に入ってたら面会にも行けたのにとか、同じようなグチをくり返していた。そのうち、チュウタイショウ様をはじめみんながこんなに親切にみとってくれて色々お世話になったんだから、兄ちゃんも思い残すことはあるめえ、と言うようになった。「チュウタイショウじゃない、チュウタイチョウだよ」ススムがとがめると、うん、と頷いたが、そんな話になるとやっぱりチュウタイショウと言うのであった。

兄ちゃんが至急二十円電報為替で送れといって来たって、帰りの支度で金は遣いはたしているもの、そんな金はおいそれと出来やしねえ、むろん金にゃ替えられねえから、姉ちゃんを料理屋に年季奉公でもさせて作るよりしようがなかったろうが、とも言った。ススムには、かあちゃんがもう頭を切りかえて、長患いされて死なれるよりは諦めもつくといっているようにきこえた。

兄ちゃんの遺骨が戻ってきたのは二十七日であった。朝まだ暗いうちに戸を叩くので、かあちゃんが飛び起きて玄関の戸をあけると、巡査に案内されて、白い骨箱を持った兵隊が立っていた。

四角い顔の鬚の濃い軍曹は、家内のあわただしさを見て、列車の都合でこんな時刻になりまして、と恐縮していた。型通りの悔みの言葉を述べ、主もなく一本箸を立てた茶碗を供えた小机の後ろに、白布に包まれた遺骨の箱を置くと、家族の悲しみも一段落した。

軍曹は焼香をすますと、遺品や香花料と名簿、中隊長の奉書の弔辞、葬儀の写真などを差出し、死亡診断書は何か手違いがあって遅れたので出来次第お送りしますと

いって詫びた。要件をすますと、軍曹はほっと息をついて、こういう役目が一番辛いのでありますと言った。かあちゃんや姉ちゃんはもう落着いていた。打ちとけた軍曹は、問いに応えて、いろいろと軍隊生活の話をきかせた。自分は雪国の出身だが、北朝鮮の冬の厳しさは内地の比ではなく、いわゆる白頭山おろしが吹き募って、初年兵の頃は毎日泣く思いでありました、といった。

「北朝鮮の民は皇化に浴することが後れておりまして、なかなか気が許せないのであります」

国境の豆満江を渡ってひそかに満洲と往来する者も多いという。広い受持区域を保線のため活動するので、国境近い通信所には特に腕っぷしの強い兵隊を派遣してあるのだと言った。「ま、こんな話は他言してもらっては困るのでありますが」と注意した。朝鮮人の子どもが日本人が飼っているニワトリをうまく釣って盗むので、巡査が取り抑えると、日本人は朝鮮の国をまるごと盗んだ、日本人からニワトリ一羽ぐらい盗むのがなぜ悪いと、駐在所の巡査が逆に食ってかゝられたという。

「まことに歎かわしいことであります」

昼食がすむと、みなが是非一泊してと懇願したが、公用でありますから、と言って立ち上った。家中揃って駅まで送っていった。

家に戻ると、もう何もかも終ったという放心のまゝ、みんな畳の上にペタリと坐った。

「なんで兄ちゃんは上等兵になれなかったんだろうね」

ススムはぼんやりしている下の姉ちゃんに話しかけた。たいていの兵隊は上等兵になって除隊すると、きいたことがあった。

「上等兵だって一等兵だっていゝじゃないか。もう死んじゃったんだもの」

姉ちゃんはなげやりな口調でいった。

「でも、死亡診断書がなぜ後れるの。役場の手続きを済ませなけりゃ落着けないよ」

上の姉ちゃんは、どうという当てのなくなった行先のことを考えているようだった。

ススムはまた、兄ちゃんは殺されたんだ、と心の中で呟いた。けれど、「死」の実感はなかった。兄ちゃんが死んだことにされて、国境を越えて密偵として満洲へ渡っていったのだという空想の方が、本当は好きだった。

「この家の縁の下にはキツネがいるんだ」

とススムが言うと、かあちゃんはギョッとして、ススムの顔を見つめた。

「オスが二匹とメスが一匹。三匹いるんだ。そいつらが悪いことをするんだ」

堤が切れたようにススムは叫んだ。しかし、オスの二匹がサイトウさんと縮れっ毛のおにいちゃんであることは言わなかった。

姉ちゃんたちはススムの顔を気味悪そうになながめた。

「朝早くから起こされて疲れてるのよ。寝かせてやって」

上の姉ちゃんは静かな声でかあちゃんに言った。かあちゃんは涙をポロポロこぼしながら、ススムを赤んぼの寝ている布団の脇につれていった。キツネなんかあしたエブリ出してやるから、心配するこたねえぞ、といった。ススムは素直に横になった。かあちゃんたちはいつまでもひそひそと話していた。気がふれたわけじゃねえ、あの子だって辛いんだよ、というかあちゃん声が耳に残った。

その晩、ススムは火事の夢を見た。メラメラと燃えさかる炎の中を、エブリ出された三匹のキツネが逃げまどっていた。

遺骨が還ってから十日ばかりして、ススムたちの家は焼けた。

まだ姉ちゃんたちが戻って来ない宵の内だったから、電灯をつけたまゝかあちゃんは赤んぼの横で添寝をしていた。あの音は何だ、とはじめに気づいたのはかあちゃんだった。晴れた晩だったのに、はげしい雨音がして弾ぜる音がまじった。ススムがとび起きて玄関横のカーテンを引くと、ガラス窓が赤く染った。すぐ前の「むつみ派出婦会」の玄関が炎につゝまれ、軒庇に火が移っていた。いつも見なれたコールタール塗のゴミ箱は、炎の中に消えていた。ススムは人声も人影も気づかなかった。燃え上る炎を見て、あゝやっぱり燃えるんだな、と直感した。かあちゃんは素早く赤んぼを負い、タンスの引出しから古い小さな袋鞄を取り出していた。それは兄ちゃんが問屋へ仕入れに行くときも、掛取りにお得意を回るときも、必ず離さなかったもので、今はかあちゃんの金庫であった。

それから先の行動については、ススムの記憶は混乱した。かあちゃんと端をもちあって脚をよじらせながら、狭い台所を通って何べんか布団を裏の空地へ運んだ。ススムを荷物の傍に立たせて、かあちゃんは赤んぼを負ったまゝもう一度引返し、洗濯物をとり入れるように一抱えの衣類を取って来ると、もう無理だ、と口惜しそうに言った。その時、ススムは何かに呼びこまれたように、ふらふらと家の中に入っていったのだ。背後でかあちゃんのドナる声がした。ススムは六畳の部屋の真中に突立ったとき、自分が何をしに飛び込んで来たのか忘れた。玄関との境の襖がその時、鼓を叩くような静かな音を立てゝ、一瞬に火の壁となった。ススムは飛び上って神棚にぶらさがった。棚が崩れ落ちて尻餅をついた。ススムは「天照皇大神」のお礼を拾い上げて、これではない、と思った。ススムを火の中へひき寄せたものは、たしかにこれではなかった。これは年の暮にかあちゃんと八幡

様へ行けば十銭でお授けしてくれるものだ。ススムは立ち上って煙にむせた。顔だけでなく寝巻の体全部が熱かった。出よう、と思ったとき、大きな腕がススムの体を横だきに抱えた。

積みあげた布団の側に立って、かあちゃんは暗闇の中に消えた男の人に何べんもお礼を言い、ススムに向ってドナりつけた。気がつくと空地の外側の方には、見物人の顔がいくつも火の照り返しをうけて並んでいた。やがてススムの家の勝手口から火が吹きだした。この時はじめて半鐘の音が聞こえた。

上の姉ちゃんが金切り声をあげてかあちゃんに飛びつき、赤んぼを引きとった。鳥政の板前さんたちも駈けつけていた。「道が狭くて手押しポンプしか入れんじゃ、こりゃよく燃えるぜ」と誰かがいった。「とに角、店へ運ぼうや」と、鳥政の人たちは荷物を担ぎ出した。「あんまり急なもんで、布団ぐれえしか出せなかった」とかあちゃんがいうと、「いゝのよ。みんな無事だったんだから」と上の姉ちゃんが乾いた声でいった。下の姉ちゃんは遺骨箱と一かゞえの衣類を持ち、ススムはニュームの釜の中に皇太神宮のお礼を入れて歩き出した。ふり返ると、ベニヤ板と細い柱とトタン屋根の一廓は、焚火みたいに華やかに燃え盛っていた。ところどころ、屋根の上に青い炎がチロチロと燃えているのを見ると、寝巻姿のススムは震えがとまらなかった。

鳥政は脂染みた長い飯台に腰掛を並べた大衆食堂の他に、小座敷もいくつかあり二階には広間もある大きな料理屋である。北側に突出た棟には、物置に使っている屋根部屋があった。そこの荷物を片つけて、当座の棲み家として借してもらった。

ひと晩ぢゅう汚れた布団のカワをはいだり衣類をたゝみ直したりしていたかあちゃんは、朝になると赤んぼを姉ちゃんに預けて、焼け残りの品を探しに出かけた。ススムも後について行った。出がけに、ススムの額の火ぶくれを見て板前のオジサンが、神宮様のお礼を火の中へ取りに入った心がけをほめた。ススムは黙っていた。もしかすると、自分をいきなり横抱きにして外へ連れ出した男の人はサイトウさんかもしれないと思った。ススムは自分を激しく火の中へ誘ったものが何であったか、ようやく気づいていた。

火事場には持出したセトモノ類のザルの他には大したものはなかった。火に罹った金物類はたいていひしゃげていた。かあちゃんはそれでも惜しげに一々手にとって眺めた。

家の焼け跡は、みすぼらしく狭かった。ススムはタンスの金具の落ちているあたりを、小枝でかき回した。まだ灰の熱いところもあった。いくら掘っても目当てのものは見当らなかった。

「わたしゃ、附け火だと思いますです」

かあちゃんは空地で巡査と立話をしていた。火元の「むつみ派出婦会」は火事の前日、みんなで慰安旅行に出かけるからよろしく、とかあちゃんに断っていったのだということを、繰返し話していた。

「ススム、もうかえろ」

巡査と別れると、かあちゃんが呼んだ。かあちゃんはまだ使えそうなヤカンを下げ、ザルに皿小鉢と小さな木箱を入れた。四角い木箱の中に抹茶の茶碗が入っているのを、ススムは知っていた。かあちゃんの父親の死後、そのコレクションの中からかあちゃんの弟が形見分けで貰いうけ、その一つを、若い時に生家を飛び出したまゝのかあちゃんに、ずっと昔に届けてくれたものである。それはかあちゃんにとっては何の役にも立たためものではあったが、やはり宝物であった。しかし、ススムの宝物はもう跡形もなくなっていた。

「お前、あの一円銀貨を探してたんだろ」

かあちゃんは小さな声でいった。

「つい言いそびれてたんだけど、あの銀貨、姉ちゃんに頼んで売ってもらったんだ。お客さんに古い銭を集めてるって人がいてな、五円で買ってくれたんさ。お前にゃ悪いと思ったけど、金のいる時でな、どうにもクメンがつかなかったんだよ」

「そんならそれでいゝんだよ」

かあちゃんには、その一円銀貨といっしょに巾着に入れといた小さな銀メッキの十字架なんか、オモチャにしか見えなかったんだろう。長い間思い出すことができなかった自分が悪いのだ、とススムは思った。小さな銀色の十字架は、鉛の兵隊みたいに熔けて消えてしまったのだ。あの十字架を首にかけてくれた森永ミルクキャラメルのエンゼルのようなマチコさんの面影も、心の中で薄れて行くのをススムは感じた。キツネのことで一ぱいだったススムは、自分の心がきっとドロドロに汚れていたのだろうと思った。

十一月の末頃、朝鮮から二つの手紙が届いた。死亡診断書を送ってもらうために、遺骨をもって来てくれた軍曹あてに、火災により住所が変ったことを知らせてあったのだ。

一つは衛戍病院からのもので、前の軍医正の手紙と同様に陸軍用箋に、なかなか読めないほどの達筆で書かれ、死亡診断書が同封してあった。

拝啓

益々御清栄の段奉賀上候

先般御請求の死亡診断書は閲覧の為軍医部へ提出致居当院に写なき為延引致し申訳無之候へとも本日軍より回送を受け候間早速調製御送付申上候に付御受納相成度候也

もう一通は軍曹からのもので、巻紙に震えたような筆

蹟で書かれてあった。

正雄

謹而御不幸重ル諸子ニ一言申サン
顧ルニ早クヨリ君父ニ永遠ノ別ヲ告ラレ今又不図スモ
便ノ兄ヲ失ハレ剰サヘ何如ナル悪魔ノ誼シヤ十一月八
日ノ悪日来リテ貴重ナル家財ノ焼失ニ遇ヒタル諸子ノ
御胸中御家ノ御不運実ニ例ヘンモノナシ
回顧スレバ十月二十七日午前余ハ夜中乍ラ貴家ヲ訪レ
シ折リ浅カラサル御世話ニ成リシ其ノ御家モ今ヤ一ノ
煙ト化セシヲ思ハバ暗涙イカデカ尽キサルヘキ……
諸子決シテ悲歎スル勿レ稼クニ追付ク貧乏ナシ今ニ幸
運必ス来ルヘシ
幸ニシテ御老母ハ御壮健ナルヲ以テ克ク一人ノ御老母
ニ仕ラレ畏クモ
勅語詔書ノ主旨ヲ奉体セラレ以テ御家ヲ再興サレンコ
ソ余カ重々モ諸子ニ依頼スル処ナリ希クハ余カ意ヲ汲
マレ以テ奮励ニ余念ナカランコトヲ

宛名は、令弟御妹御中となっていた。姉ちゃんたちは、代る代るつっかえつっかえ声を出して読んで涙ぐんでいた。かあちゃんは有難いことだといって目を拭った。その手紙は兄ちゃんの手紙なんかよりずっとムツカシい言葉が使ってあり、文字も揃っていたが、中隊長や軍医正の手紙と較べるとまるで段違いだった。ススムは、「令弟」と書かれて少しよい気分だったので、ついロをすべらした。

「兵隊は位によって字のうまさが違うんだね。この手紙の字はボクが小筆で書く字よりちょっとうまいくらいかな」

「何を生意気なことを言うのよ」

上の姉ちゃんは目をむいて怒った。下の姉ちゃんも

「そうよ」と、ススムを睨んだ。

「字なんか下手だって読めりゃいゝんだ。真心が伝わりゃそれでいゝんだよ。この上手な手紙を見な。益々御清栄の段賀し奉り上げ候たあ何の事。さんざ手続きを後らしといて」

二学期の通信簿は、修身が甲になっていた。面白くもない教科書の話を、ススムはみんな空暗記していた。誰も別にほめてはくれなかったし、ススムもうれしくはなかった。

去年の暮は三島で、来年は兄ちゃんが帰ってくるよ、といって励まし合った。今年の暮は屋根裏の部屋で、正月が来ても何も楽しいことはなかった。キツネの子はようやくつかまり立ちしてヨチヨチ歩き出すので、階段が危くて仕方なかったが、一家の笑いの種になるのは、この赤んぼだけであった。

「あたしも正月が来れば数えでハタチだよ。しかも三つになるコブつきで……この二年の間にすっかり変

っちゃったねえ」

上の姉ちゃんはミカンの皮を力を入れてむきながら、ムリに笑った。このミカンは皮が固くて厚く大きさも不揃いで、すごくスッパいのである。ミカンの好きなススムも三つ続けて食べるとウンザリした。その代りとても安かった。かあちゃんが以前のお得意の農家から、出荷できないクズをたくさん買ってきたのである。

兄ちゃんももう死んじゃったし、ロクにない家財も焼いてしまったし、これからはハダカ一貫で出直すさ、とかあちゃんは元気づけるように呟く。

「東京に帰りたいな」

とススムは言った。誰にとっても東京の場末の長屋が故郷なのであった。

「お前にゃ分らねえが、うかうか東京にゃ帰れねえわけがあるんだよ」

「でもこの家にも、いつまでもこうして厄介になっちゃいられないよ」

と上の姉ちゃんが言った。

「この春には若旦那がお嫁さんを貰うらしい話なの。この部屋に古い家具なんか入れてしまわないと、新婚さんの部屋がとれないのよ」

上の姉ちゃんは本気でこゝを出ることを考えているらしかった。

「外に一軒借りるとしたって、こんな小さな町じゃ働き口も限られてしまうし、まともに暮しちゃ行けないもの」

「サイトウサンも消えちゃったし、兄ちゃんも死んじゃったんだから、借金取りが来たって平気じゃない」

と下の姉ちゃんは言った。

「そうは言ったって、またのこのこ滝野川あたりへ帰れる。あたしは東京へ戻るんなら、大森か蒲田かあの近辺がいゝと思う。柄は悪いけど働き口はいくらもあるらしいよ。そこでしばらく様子を見ればいゝ」

ススムは東京へ帰れそうなことは嬉しかったが、サブロウとユカイな遊びが出来なくなると思うと、ちょっと淋しい気がした。

日暮里界隈

――井中加和寿氏の生活と意見――

山口健二

I

この町には、テレビドラマや映画の撮影に恰好な場所が多い。時代物向きには、長い土塀がひっそりと残っていて、その向側に森閑とした樹木、時々土塀の上を尾の房々とした鼬鼠が蛇を追って走り、樹木の中に名の知れぬ鳥の絶叫が聞える寺が並ぶ。やたらに細く曲りくねった小路の長屋は、建てられてから百年はするであろう。

左右に少し傾いて屋根瓦はずれて頼りないが、住んでいる人の丹誠で、手のとどく格子戸の桟など入念に拭きこまれて銅色に光っている。そういう長屋の角に共同水道の名残りが水を切られて残っていたりする。これなど明治大正ものの撮影にいい。何しろ大正十二年の大震火災にも、今度の戦争にも焼け残って来たこの町には、東京府下北豊島郡何々村の残映が思わぬ所にその姿をあらわす。住んでいる人たちは、それとはっきり気がつかぬだろうが、江戸が東京になってから、そして百余年の間に三代四代と人間やその人間の営みには移り変りもあった筈だが、そのうつりかわりが、とてもゆっくりと、しかも目立たぬ静けさの中で過ぎて来たようであった。

一週間前には餅菓子屋兼食堂の竹の屋と梅の屋の間の小路の入口に、二台の撮影機械を積んだ自動車がとまっていて、そのあたりを鳥打帽子や中国帽、ベレー帽などをななめに頭にのせ、荒い格子縞のオープンシャツなどをきて、中にはチョビ髭を蓄えたいかにも大正の頃活動屋と云われた風彩の男たちが事あり気にうろうろして廻り、小路の奥の方にはそのドラマの多分主演格なのであろう、胸の厚みの足らぬ体格の若い男が、顔はうすぎたなくドーラン焼けして、梅の屋の裏の調理場の流し口の敷石にしゃがんで煙草を吸っていた。撮影が一服模様と云う所だろう。ここらの住人はこんなことには順れているのであろうが、それでも竹の屋梅の屋並びのそば屋、水菓子屋、文房具屋、パン屋のおかみさんたちや、向い

側の不動産屋の主人公など十五六人、それに街ゆく人も一寸足をとめて、この撮影がどんなドラマにまとまるのか、この一服のあとで格闘の場面でも始まらぬかと立って観ていた。

又二三日前には、これで二度目になる。最初はNHKであった。駅からだらだら坂を登り切って都営霊園と名乗る墓地の方へ曲った道にある銅屋の銅松の前に、今度は文化フィルムの撮影車がとまっていて銅松の仕事場をうつしていた。その店の先代は拾年ばかり前、六十そこそこで死んだ。かれはベレー帽をかむり、職人ではなくて芸術家だと称していたが、かれのお祭好きは根っからの江戸ッ子職人であることを物語っていた。銅松から半町ばかり離れている夕倉と云う彫刻屋の親分は芸術家のせいか町の祭りには特別関心を示すことはなかったどころか、仕事部屋の屋根の天辺にロダンの"考える人"をもじった裸の男を飾って町家を見下ろさせていたが、銅松では地元の氏神の祭礼には自分の店をとじて紅白の幕を表に張り祭礼風に飾り立て、祭壇を店一杯につくって供え物をあげた。そしてその銅松の裏手の長屋に住んでいる毛島の亀さんがサービスに太鼓をたたいていたりした。子供たちは普段何となく亀さんに習った笛をヒューヒョロ、ヒョロヒョロ、ヒューと吹きならし、亀さんは太鼓をトタンタン、タントンタンとならした。何しろ亀さんは上野鈴本寄席の囃方を若い時からやっているのだから、撥のさばきは手品師の手つきである。そしてその笛と太鼓の音色は、夏の強烈さが間もなく逝って、やがて秋が深まり冬が来るのだと歌っているようで、恋などしている若い男の胸をやる瀬ない不安で一杯にし、女たちはそういう男たちの心をそそるかのように、その祭の夜のために新調した浴衣に、とっておきの帯を結び、木履に仕組んだ鈴の音をたてて歩いた。酸漿が口の中でキューと鳴る。

その通りを、井中加和寿氏が折目の跡かたもないズボンに下駄履きで、手製のステッキをついて往く。

「お宅の旦那杖なんかついてどっか悪いんですか」と近処のおかみさんが井中加和寿氏の女房にきいたら

「あれ恰好つけてるんでしょう」と女房はあからさま亭主の悪口を言った。

だが井中加和寿氏にはそれなりのわけがある。最近通り魔と新聞ラジオ・テレビで言われるものが全国的にはびこって、いきなり刃物で女や子供、さては大人の通行人まで刺し殺したりするので、かれは武装する心意気なのであった。かれは五十年前すなわち十五、六才の頃、剣道三段の腕前だったと、女房子供を初めかれの五十年前のことを知らない者たちの前で口走ったことがある。又下駄を履くのは足の指に力がは入るから脳の働きをうながすという迷信を持っているのである。加和寿などと義太夫か踊りの師匠のような名前であるが、かれは日本

の古典的な文化とか芸術と云われているものにはとんと造詣はない。六年ばかり前、新制中学の教員の職を勧奨退職と云う筋がきでやめて、それ以来入れ歯からもれる怪し気な英語を新制中学や高等学校で週何時間か教えて暮している。時々相手によっては、「占道同好会会長」と云う肩書の名刺を出すから易者もやっているらしい。但したまに来るお客に対し笠竹算木が示した通りを余り有り態に言い過ぎる。例えば若い女が結婚の吉凶を観て貰いたいと現われると、

「天山遯と出ましたぞ。井戸を掘って水の出ない象(かたち)じゃ。こりゃいかん。水が出ませんやめた方がよろしい」

と言った調子で、結婚したがっている女に向ってやめろなどと言うからそのお客は二度と来ないし、"あの易者さんよく当る"とも宣伝してくれない。だから易者の方は「門前雀羅を張る」為体(ていたらく)である。又時には「温古史談会会長」という肩書の名刺を出すこともある。ずい分会長が気に入っているらしい。その上温古の温の字にウンとルビがつけてある。だからこれは「ウンコシタンカイ」とよめる。臍を曲げて世間を韜晦している趣きもある。

その井中加和寿氏が銅松の撮影があった翌々日、めずらしく愛想よく銅松の主人の菊さんに声をかけた。

「やあ、キミンところの商売はいいなあ、キミの先代は芸術家だったからなぁ」

「よして下さいよ、おれんとこぁもうこの商売じゃ食っちゃいけねんですよ」

「でも世間じゃキミンとこぁ財産あるんだとうわさしているぞ」

「財産なんてねえよ、この腕一本よ、死んだおやじは俺に腕だけぁきたえてやる、ほかは何もしてやらんって俺をきたえたもんですよ」

かれは五尺(一米五十糎強)たらずのからだの一部分である細い腕を二三度たたいた。何しろテレビが二度もこの吹子で火をおこして金物を溶かし、銅板を槌でたたきたたき、薬鑵や、釜や水差しや軽目焼きの手鍋をつくる古風な仕事場をうつしている。時には何々理科研究所とか医学研究所などと云うところからの特別注文で水槽のようなものを設計図の青写真に首をかしげながら尤もらしく作っていたりする。テレビで二度もうつされたので好事家(こうずか)らしい老人などが店を見に来て、品物の値段をきくと、一寸した水差しが二十万円だと言われてうなずいただけで帰るようだ。銅の値段が上っていることは確かであろうが、手製品だから作るのに時間がかかる。時間を金にかえるとそうなる勘定であろうか。菊さんが"この商売じゃ食っちゃいけねえや"と言う通り、製品が飛ぶように売れるところを見たことがない。だがかれは鼻息あらく井中加和寿氏に言ったのである。

「まけろっていう客にゃ腹が立つね。けえってくれって言ってやるんだ」

「キミンとこの先代は惜しいことに早死にしたなぁ、だからキミに全部教えこまないうちに逝っちゃったんだろ」

井中加和寿氏が"お前は未だおやじから技術を全部仕込まれなかったのだから知らぬことに出合うと困るだろ、それに近頃その道ひと筋という職人もあとが絶えて来たから、教わる当てもあるまい"と同情を遠まわしにほのめかすと、

「うん、何しろね、俺のような商売は青酸加里使うからどうしても早死にしちゃうね」かれはおやじの早死の原因をあっさり青酸加里にしたが、自分の腕の不充分さについては、

「だがネ物を作るってこたぁ結局手めえの工夫と勉強だよ」と仲々強気である。かれの言うことには女々しさがない。愚痴がない。石屋には石屋病があって長生き出来ぬ、畳屋もどうも胸をやられ易い。豆腐屋は冷えから腕や腰が痛み易い。酒屋は荷が重いから脚がガニ股風になり易い。何商売だって生きてゆくのに長いこと夢中でやればその職業特有の職業病があるもんだ。"教員なんか"と井中加和寿氏は考える。"自分より大体、体力や知識が劣っていると想定される者を相手にして、それに一日中わめく調子で声を張り上げるし、学校という殺風景な檻の中をやたらに歩きまわるから長生きする者が多いが、そのかわり一生懸命長いことやれば、普通の世間じゃ使いものにならない変なアタマになるワイ、それも一種の職業病じゃ"だから、かれ井中加和寿氏にとっては、職業病を国家社会のせいにして盛んに訴訟と云うことをやる人の気持が仲々解せないのである。尤も大いに世の中の出来事を訴訟と云う形に持って行って飯を食う弁護士と云う職業もある。

"俺の商売青酸加里使うから、どうしても長生き出来ねぇ"と平然と細腕を撫して愚痴めいたことを言わぬ銅松を井中加和寿氏は好きなのである。かれは"潔(けっぱく)"ことが好きなのである。この銅松の中学校へ行っている娘が体操中に足の骨を折って入院したことがあった。父親の菊さんの日課に一ツ別の仕事が加わったのである。かれは毎朝病院へ一番乗りで娘を見舞って、朝八時頃、自転車を引きずって自家へ続く駅からの坂道を登って来る。どうも青酸加里を使うせいか息切れがして、未だ四十ぐらいの若さなのにその坂をひと息に自転車で乗り切れない。その朝散歩の態(てい)の井中加和寿氏とすれちがった。

「お早よう、散歩かね」

井中加和寿氏は想像力がたくましくないから我が身に引き比べてこんな言葉しか出ない。

「いやね、娘が怪我したんで毎朝ちょっと病院のぞくんですよ」

「怪我！どうしたの」

「あいつが悪いんだよ。学校の体操の時間に飛び箱か

を黒々とのばし、近頃ヨーロッパ、アメリカくんだりへパッケージツァーとか云うやつで出かけ、土産に買って帰った髪油の匂いを振りまいて往く僧職者に出会うと井中加和寿氏の目は三角になって光る。そしてかれは悪癖あからさまにパッと唾を吐いて、今日の言葉でストレス解消をはかるのである。大体ストレス解消なんて言葉を井中加和寿氏は好かぬ。かれに言わせると〝気を晴らす〟となるのである。

さて唾を吐くだけでは気が晴れぬと見えて、かれは手製のステッキの石突きの音を殊更荒々しく立てて、ぬっと足利屋酒店に入ってゆく、時には一寸会釈風に顎を軽く引く程度で入ってゆく。このかれの態度を、かれが教員という職業をやっていて出来上った尊大さだと影口をきく者もいるが、そんな大それた態度ではない。かれのもって生れた物臭さがさせるのである。「いい日寄ですな」とか「いやな雨ですね」なんてきまり文句を言うのが億劫というよりいやなんである。だってこんな文句は大体きまっていて五ツぐらいの型をかわりばんこに毎日繰り返すなんてかれにはあきあきするのである。それより向う様に言わせておいて「あゝそう」とか「まあね」なんて短かく口の中だけで言った方が口数の節約にもなる。かれは人様とわかり切ったことを会話したくないのである。

そういう不尊な物腰で井中加和寿氏は足利屋酒店の三尺程の入口から入って、うそ暗い店の中で暫らく様子をうかがう目つきになっている。先客があって飲んでいると、その者たちの品定めを素早くする必要がある。というのは、この店は朝から立ち飲み客があって、その中には先刻むしょを出て来たばかりとか、留置場を只今出て来て気晴らしをしている男も珍らしくないから、ざっと品定めをしてこちらの態度をきめておくのである。〝態度をきめる〟と言ったって、持って生れた身体つき、目付きでは、そう役者のように芝居がかりにゃやれないから、心持だけの話である。相手になってやろうか、無視してやろうか。いやな奴か、いい奴ならたまにはこちらもニヤニヤしてやろうし、いやな奴なら年の加減で耳がきこえぬことにしようぐらいのところである。

三尺の入口と書いたから少しつけ足すと、足利屋は結構間口二間半はあり、その間口につづいて風通しのいいバラック倉庫と、更に一層風通しのいいガレージもある。だから酒屋としては一端な店なのであるが、その二間半の間口が三尺になってしまうのは、入口一杯に自動販売機を三台も並べたからである。朝三時頃魚河岸へ行く銀さんや、新聞屋の伜で配達もやっているクラさんや、はては夜おそくまで散々呑んだくれて家の敷居が高いので、もう一度此処らで威勢をつけたいトビのクリちゃんなどには、この自動販売機のガチャガチャドスンという音もそう味気なくはないのである。自動販売機を三台も店の

入口に並べるのは、ふところ手で金をかせごうという魂胆がみえて井中加和寿氏の気に食わぬところであるが、これは穴勝足利屋のお内儀お華さんの金本位性がそうさせるのではなくて他にわけもあるらしい。

立ち飲み客の呑み方によっては近処の一杯呑み屋からすれば客をとられる勘定になるので、いやがらせや保険所当ての密告などもある。立ち飲みはぐっとやってさっさと店を出てゆくのが優等生であり井中加和寿氏のように店の主が一休みするための店の奥の椅子に腰をおろしてじろじろ客の観察をしたり、物思いにふける恰好でいたりするのは劣等である。いわんや呑み屋のつもりで歌など出るのは以ってのほかである。だから店の表に自動販売機を並べて外から店の中を簡単にのぞけぬように一種の遁甲の術のつもりもあるらしい。

足利屋には店の壁に額縁入りの文字がニツ飾ってある。ひとつは警視総監豊田篤正と署名の入った盗賊逮捕に協力したという感謝状であり、もう一つは店主敬白という署名で、〝前金男之証拠・借飲不縁之因・放歌高吟不好・喧嘩口論以外・という絶句めいた文句で、その題が「立飲H気等〟となっている。この六言律は、まともに読めない珍文漢文である。H気等はエチケットらしい。前金とは男の股間のモノを呑む前に金を出せという意味に懸けている。「以外」を「イガイ」と読んで意外の意味にとった元陸軍大尉で魚河岸へ行っている銀さんが、学のある所を披露しようとしたが、これはモッテノホカと読ますつもりである。前の警視総監の感謝状はむ所を出て来たもの又はそれに縁のあるものにニラミをきかすつもりであり、H気等は飲み逃げに警告を発しているのであるが両方とも余り効き目はない。

その日も井中加和寿氏が入ってゆくと先客が一人いた。ニッカーポッカーズと云うのかゴルフズボンと言うのか膝のところで細くなっているズボンを恰好よくはいて、巾の広い革のベルトに剪定鋏をぶらさげて意気を狙った三十男である。かれも常連という程ではないが折々昼間からビールなど呑んでいる。言葉使いが猫なで風に丁寧で一体何者だろうかと井中加和寿氏は主人の柔一君に聞いたことがあった。決して陰で他人の悪口を言わない世渡りの秘術を心得ている柔一君言った。

「何でも、もとコックさんだったらしいですがね、今はホラあの大行寺の門のわきに家があるでしょう。あそこの人ですよ。あの人の死んだ親爺さんもよく呑みに来ましたよ」

大行寺と云うのは、この町の駅の入口の右側にぬっと山門を構えている寺で「盂蘭盆会施餓鬼大法要厳修」という大看板をその季節に大きく張り出して井中加和寿氏に唾を吐かせる所である。

「あゝ寺男さんか、コックさんの方がずっとためになる商売なのにな」

「でもおやじさんが死んだんで、あの人が寺にゃ必要なんでしょう」柔一君は言った。

「女房らしい人、丸々ふとってるだろ、ありゃ栄養がよすぎて運動がたらんからじゃ、寺女やりゃいいんだ、生花教えますなんて張り出してあるが、生花の方が寺女より上等だと思ってるんかな、そして亭主の方はコックさんやってりゃ収入もいいだろうにな。寺男なんて、あの年じゃ勿体ないやな」井中加和寿氏はいつぞや入れ歯からもれる英語教えに背広など着て朝早くから駅へ入りかけたところで、この寺男氏が寝間衣姿で駅で朝刊を買って悠然と読み歩きしている所を見かけて、我が身に引き比べて〝コン畜生〟と思ったことがある。又いつぞやはこの寺男氏が

「近頃お墓参りに来る人がくれるチップが少ないですよ。中にはさんざん墓洗わしておいて壱銭もおいていかないチャッカリもいるんでございますよ。これがナウイと云うことでございましょうか」とこぼしていたのを井中加和寿氏は思い出したのである。恰好いいヤクザの乾分は堅気のコック商売やめてチップ屋の方をえらび、その女房は生花を教える方が寺女より高等だと思っているのである。

その寺男の元コックさんが半紙一枚大の訃報を届けに来て序でにビールを呑んでいるのであった。訃報は印刷で当山住職が死亡して今夕密葬、後日本葬を行なう由がすってある。僧職者のやることは大行である。多分この寺の地所を借りている借地人、町内全部にこの印刷物を配るのであろう。足利屋のお内儀が

「ずい分この頃人が死ぬんで、お金の出も忙しいんですよ」とこぼした。足利屋の地主は大行寺であろう。序にかの女は告げ口風に井中加和寿氏にささやいたのである。

「お寺の坊さんが、〝近頃老人が長生きするんで寺の実入りに痛手だ〟なんて平気で言ってるんですって」

ウイスキーの小瓶一本で手軽に気を晴らした井中加和寿氏が大行寺の門前を通る時、寺男氏はもう先程のニッカーポッカーズを黒のダブルの喪服に着換え、胸のポケットから白いハンケチをのぞかせて、もったいをつけた物腰で山門の入口に立って弔問者の案内役をやっていた。先程のビールで顔の血色がいい。

「何の病気だったの、いくつのひと？」

井中加和寿氏は寺男氏つかまえて話しかけた。

「七十一でございました。ずっと前から糖尿のようでしたから何か余病が出たんでございましょう。わりと早死にと云うもんでございますね」寺男氏は言った。

山門の中の天幕の下には僧衣に着飾った僧職たちがずらりと椅子に並び、外からの弔問者を見張る目付でいる。これだけ数をそろえて経を読ませ鉦や太鼓をたたかせたら随分金がかゝるだろうと町家の弔問者をたじたじさせる態であった。その僧職者の中に井中加和寿氏の住居が

その寺の墓場につながっている溜銭寺の住職が金壺眼をむいて井中加和寿氏を睨んだ。それは多数の同業者を頼みにして井中加和寿氏を威嚇しようとする目付であった。というのは、ことは三十年近く前にさかのぼるが井中加和寿氏の住居が余りきたなくて寺の美観をきずつけるというわけで、氏の家の軒の高さまで一夜のうちに用意しておいた木の塀をおっつけた。その手早さは羽柴筑前の築城の故事にならったと思われる程であった。その塀は当時未だ赤子が三人もいた井中加和寿氏の家から完全に太陽の光をさえ切って真暗にした。ある日その塀ごしに井中加和寿氏の台所の汚水が寺の方へ流れて困ると文句をつけようと住職が塀の上へ首を出して、「井中さん、お宅の水が・・・」とまで言ったところで、生憎二日酔いで台所でがぶがぶ水を呑んでいた井中加和寿氏と面と向い会うことになって、十五、六才の頃もう剣道三段であったと口走る程の井中加和寿氏は三十そこそこであった。かれはやにはに前にあった洗桶の水を坊主頭にあびせたのである。又ごく最近になって寺の墓地ぎわ、塀の根本から井中加和寿氏の住居の屋根に覆いかぶさる勢で茂っている樫の枯葉が雨樋をうめ、雨水が小さな瀧になって地面をたたく音に業を煮やしていた氏はある日、寺の住職が朝の庭掃除をひとまず終えて、井中加和寿氏の住居寄りの無縁墓を見廻って、今度はどれとどれを整理して何坪程金になる墓を造成しようかと楽しく目論んでいるところへ、井中加和寿氏の住居の窓があいて氏が相当悪化した人相を突き出して言ったのである。

「おい、隣りの坊さん」

虚をつかれて住職は突嗟に常に使いなれている上品な答えが出てしまった。

「ハイ」

「お前さんのこの木の葉っぱが、おれの家の雨樋を埋めて雨水をはけなくして困るよ。お前さん坊さんだろ、自分だけよけりゃそれでいいじゃおさまらねえよ、近処でも皆そう言ってるぜ」この近処でも皆そう言ってるという台詞は井中加和寿氏の勝手な凄味を持たせるための創作である。

「じゃ切りましょうか」

「おいおい坊さん、切るなんて殺傷なこと言うなよ、俺はただ考えてくれちゅんだよ」

この会話のやりとりは、三十年前に塀ぜめに会って敗北を喫した井中加和寿氏がやゝ有勢気味で、その翌日樫の木は樋の高さを下廻るあたりで切られたのである。そのうらみを今度大行寺の山門の中に立籠って集った僧衣の仲間を頼みに井中加和寿氏を睨んだ次第であろう。井中加和寿氏は持っていたステッキを片手上段に振りかぶって「えいッ」と気合の入った空振りをひとつお返しにして、悠然と、本人は感じているのであろうが、実際は先程のウイスキー小瓶一本に尿意をもよほした腰つきに

なって駅の入口わきにある公衆便所に向ってヨタヨタと足早やになったのであった。

「山門不幸」と書いた立看板が、それから二ケ月余、未だ山門わきに立っている。その前を通る度に、井中加和寿氏は〝山門ばかりが不幸なんじゃねえ、世の中みな不幸なんだ。その不幸な世の中にお前ら何が出来たと云うんだ〟

かれは当りちらし気味につぶやくのである。

旅に拾う

増川遼三

麦秋の野辺ほのぼのと温もりて童子仁王に蝶の来て舞ふ　（秩父）

ボート漕ぐ児らのかけ声遠のきて式部の像は黄昏に坐す　（大津・石山）

大和なる薬師寺の塔再びを夕照のなかに双び立つ見ゆ　（奈良西の京）

白壁の商家列なる町筋を往き戻りして猪口一つ買ふ　（丹波篠山）

栄耀の影映し見む毛越寺の池巡り来て遺構に佇ちぬ　（奥州一ノ関）

石塔の丘にひしめく小仏の呟くごとし木洩日の中　（湖東・石塔寺）

雪冠（かつ）く伊吹嶺近み宿外れの裏背戸漁る白鷺一羽　（湖北・長浜）

長老を囲む団居の安らけし野に土筆摘む児らの声して　（郷里・法会にて）

潮ゆらぐ東尋坊の磯づたひ夏の陽返す海女の白衣は　（越前・東尋坊）

荒磯の巌に止まりて空を見る孤りの海鵜身じろぎもせず　（越前三国海岸）

一日違い

三戸岡道夫

一

社長が代わると、にわかに社風まで変ったと芥川眞郎は思った。

死んだH株式会社の湊社長はワンマン経営者であったが、新しく就任した小谷社長は民主的である。

前の湊社長は一度言いだしたことは絶対後へは引かず、何事もてきぱきと自分で決めて強引に会社をリードしていったから、時には雷が落ちることがあっても、すべてが鶴の一声で決まり、会社の中はピリピリしていた。それにくらべると今度の小谷社長は物柔らかで、役員や部下の意見をよく聞いた。だから下の者の立場からすれば仕事がやり易くなったといえる。新しい社長には人気が集っていた。

社長が代わると一般社員にも大幅な人事異動があった。だが秘書役というのはそう簡単に変えるわけにはいかぬポストなので、芥川はそのまま残ったのだった。湊社長が死ぬまで、七年間も芥川はワンマン社長に仕えたわけであったが、秘書役としての役目柄時には、その強引な仕事ぶりの蔭にかくれた人情味などにもそれとなく接する機会もあったりして、一般の社員が抱いているほどの恐怖感は持っていない。むしろ死んだ独裁社長をなつかしむ少数派の中の一人といってもよかった。

昨日の日曜日も墓参りに行き、帰りには湊家の仏壇に両手を合わせてきたばかりであった。

「こんなに急におなくなりになってしまうなんて、奥さま、本当に夢のようでございます。本当だとは思われません。あんなにお元気だったのに…、それが……」

芥川は湊未亡人の前に坐って、仏壇の写真を見上げていた。

「わたくしとても未だ信じられない気持でございますよ。未練で申すわけではございませんが、あんな死に方でございましたから、いっそう心残りがいたすのでござ

いますよ」
未亡人は瞼を押えた。
額縁の写真は元気な頃の社長の写真である。肉の厚い四角な顔に、太い眉が二本並んでいるのは、意思の強い性格を現わしていた。髪は半分ほど白いが、とても七十五才とは思えない潑剌さだった。

仕事のちょっとした途切れに、そんな思い出にふけっていると、受付から連絡があった。来客は経済省財政局の和歌森課長補佐であった。
和歌森は経済省におけるH社の担当者だった。だから芥川は顔を知っている。だが、ちょっと嫌な記憶のある人間だった。
「今月一杯で経済省を退任することになりました。それでお別れの挨拶にまいりました」
応接室に立ったままの姿勢で和歌森はそう言った。
「それはおめでとうございます。これまで本当にいろいろとお世話になりました。ありがとうございました。それで今度はどちらの方へ……」
「大阪にある中央電興といいましてね。いえ、ちっぽけな会社ですよ」
「何をおっしゃいます、ご謙遜を…。本当に結構でした。おめでとうございました」
和歌森が現役時代であれば民間会社に自分の方から出向いてくるというようなことは一切ない。用事があれば相手の方が出向いてくるし、またこちらが必要な時は呼び出せばいい。しかし民間企業で第二の人生のスタートを切るともなれば、いつまでも役人風を吹かせているわけにもいかない。その辺が役人の変り身の早さであった。
和歌森は停年が迫っているのに次の就職先が決まらなくて困っていると、聞いたことがあった。経済省の担当である清末部長がいつか芥川に
「最近は世の中もせち辛くなってきてね、経済省あたりでもノン・キャリア組になると、うまい所が見つからないらしいね。とくに和歌森さんはノン・キャリアの筆頭として、仕事は出来るのだが、強面だから、あまり評判がよくない、だからどこでも受けいれたがらないらしいんだ。」
そう話したことがあったからであった。
「すぐ清末部長が参りますから、しばらくお待ちください」
そう言って芥川は秘書室に戻ると、調査部長の清末に電話で来客の旨を連絡した。清末部長が応接室に入るのを確認すると、女子社員に餞別の用意を指示した。

二

湊社長の死は普通の死ではなかった。殺人事件の犠牲になったのである。上場会社の社長という地位にふさわ

しからぬ死に方であった。
殺されたのは自宅近くの路上で、胸を鋭い刃物で刺され、即死であった。
会社への出勤は車であったから、路上で刺されるような隙はないといっていいのだが、運動不足を解消するために、帰りだけは車を途中で降りて、徒歩で帰宅するのを日課にしていたのだった。約一キロメートルの距離である。それだけを毎日歩くだけでも、年とった社長にはいい運動になった。その途中で殺されたのである。
刃物で胸を刺されていたが、急報を受けて馳けつけた警官が調べてみると、後頭部にも打撲傷があるのが発見された。察するところ、後からしのび寄ってきた犯人が鉄棒のようなものでまず頭を一撃し、ふらついたところを前に廻って胸を刺したと推定された。そうでなければたとえ七十五才の老人といえども、前方からやすやすと胸を刺されたりする筈がない。だから現場検証は意外に簡単で、司法解剖に付す必要がないくらい死因がはっきりしていた。
場所は人通りが少ない住宅地の中であり、それも右手が神社の境内という淋しい場所であっただけに、誰も犯人を目撃した者も居ず、断末魔の声を聞いた者もいなかった。犯人は夕闇に魔物のように姿を消してしまっていた。
もしも計画的な殺人だとすれば、犯人はかなり以前から湊社長の一日の行動を研究していて、車を途中で降りて家まで歩いて帰るその時間に待ちぶせして犯行に及んだとしか考えられなかった。
原因は物取りか、または怨恨か。
しかし調べたところ懐中から何も盗まれてはいなかった。内ポケットの財布に手をつけた形跡はなく、クレジットカードもそのまま。手帖や名刺入れなども見向きもされておらず、そうしたところを見ると物取りとは思えない。
すると怨恨ということか。しかし会社での人使いは荒いが、人から殺されるような怨みを買うとは考えにくい。
とすると、残るのは偶然の通り魔殺人である。夕闇しのびよる住宅地を通りかかった湊社長が、変質狂か、あるいは精神異常者による衝動的殺人の犠牲になったとでも考えなければ、考えようがなかった。
しかし警察の必死の捜査にもかかわらず、犯人は正体を現わすことなく、現在のところは完全なる迷宮入りとなっていた。しかしH社の社長が殺人事件によって命を落したというのでは外聞もはばかられるので、警察捜査本部からの発表は差し止め、対外的には脳溢血による急死ということで、葬儀は済んでいた。

三

和歌森課長補佐に対する芥川秘書役と清末部長の嫌な

記憶というのはこうであった。
それは三カ月ほど前。もちろん湊社長生前のことである。清末部長が経済省から帰ってくると
「嫌なことを頼まれてしまってね」
そう秘書室へ相談にやってきた。封筒から書類を出して芥川に見せながら
「黒石代議士っていうのが居るだろう」
「うん、知ってる。会社にちょっとでも事件があると、すぐあばいて騒ぎたてる奴だろう、嫌な野郎だよ」
「だが政界では実力者だからね。黒石代議士に睨まれて、ひどく泣かされた会社は多い。その彼が日本教育研究会というのをやっていてね」
「へーっ、彼が教育研究会ねえ」
「趣意書にはカッコのいいこと書いてはあるが、要は政治献金集めの隠れ蓑さ。その会員に一口入ってくれって言うんだよ」
「一口って、いくらだい」
「年会費で百万円」
「一年で百万円…？　ずいぶん高いね」
「それがね、経済省の和歌森課長補佐の依頼なので、ちょっと断われないんだよ」
「和歌森さんが黒石代議士の窓口になっているのかい？」
「そうらしいんだ。経済省も代議士先生には弱いからね、そうやって下働きをやっておかないと国会の時などうまくいかないんだね」
「他の会社へは？」
「はっきりはわからないが、われわれ同業者十社へはすべて口をかけているらしい」
「それで……」
「A社、B社、C社、D社、E社の五社は、第一次募集でもう入会ずみらしいのだ。それで今度が第二次募集というわけで、残りのF社、G社、それにわがH社、あとI社、J社の五社に入ってほしいといってきたのだ」
「ふーむ、困ったね。うちは社長がね…、知っているだろう」
「わかっている」
湊社長は大の政治家嫌いで、その上更に経済省嫌いときていた。経済省嫌いというよりも、そもそも役人というものが大嫌いなのである。だから政治献金も業界で取りまとめるものは別として、それ以外に個人に対するものは、H社はまったくといっていいほど、やっていないのであった。この点が
「うちの社長はクリーンすぎて困るんだなあ。経営に政治性がまったくないよ」
と社員たちが嘆く原因なのであったが、だが、経営のトップ自らが政治家や役人と癒着までして商売を伸す必要はないという信念に立っているのだから仕方がなかった。政治家の中でもとくに湊社長が嫌いな人間が五人いた。困ったことにこの黒石代議士がその中の一人でもあったのである。
「弱りましたねえ」
芥川は思案投首でそう言った。
「でも経済省からの依頼だから、断わるわけにはいかないし」
すると芥川は
「黒石代議士は断わるとどこで意地悪されるかわからないねえ。後がこわい人ですよ。たとえ社長がそうした信念でも、他の会社が入って、うちだけが入らないで果してすませられるかどうか。まあ一つ、庶務部長とよく相談して決めてくださいよ」
この事件からするりと逃げるように、そう言った。
H社では政治献金とか、業界への寄付、総会屋対応などの仕事は、庶務部の担当である。
部長は清末と同期の錦本圭一といった。清末とはいわばライバルという関係にあったが用心深い男だった。案の定、今日も話をする前から顔を警戒気味に緊張させていて
「うちは政治家との付き合いは非常に少いんですよ。だが、まあ絶対無いというわけじゃあない、予算の枠もちょっぴりはとってありますから、社長がいいとおっしゃれば結構ですよ。だから社長のオーケーを清末さんの方でとってくださいよ」
と一気に言った。危険なケースだと感じて、眼先が利く錦本はさっと逃げたのだった。そのタイミングの巧さは絶妙といってよかった。憎らしいほどだ。そしてその言い方には、自分の方に火の粉が飛んでくるのを絶対防がなければならないという決意がこもっていた。
清末は部屋に帰ると作戦を考えた。
この話は社長に相談するまでもなく、最初から駄目だと、結論はわかっている。だからストレートにお伺いを持っていけば社長は激怒し、そして怒られた奴が損をするのは目に見えていた。うまく立廻らないと馬鹿をみる。
とすると、物は順序として担当常務のところへバトンタッチしてしまうことだ。常務から社長のところへ持っていかせるのだ。だが清末の上にただ帽子のようにのっかっているだけの担当常務はあまり頼りにならなかった。
「ふむ、ふむ、わかった。難かしい問題だね、よく専務と相談してくれ」
と態よく逃げを打つことは目に見えていた。仕方なく専務のところへ持っていく。
「わかった。副社長へよく説明しておいてくれ」
副社長へ持っていく。
「わかったから、社長へは君の方からよく話しておき

給え」

誰も彼もが逃げてしまって、結局湊社長の前に立つ破目になるのは清末になる。そして以上総代でどなり散らされるのだ。そんな馬鹿な……。

『いま社長からどなられては絶対まずいのだ』

自分に言いきかせるようにそう思った。というのは株主総会があと二カ月先に控えていて、新しい取締役が一人選任されることになっている。その候補が清末と錦本の二人に絞られているからであった。

清末と錦本とは卒業大学も同じの同期生で、現在取締役への可能性という点では同条件といってよかった。部長になったのも同時期で、業績面でもほぼ同等の評価を受けている。どちらが取締役になってもおかしくなかった。社員名簿に記載されている順序をみると、一応清末の方が上席になっているが、それには大した理由があるわけではなくて、清末の方が生年月日が一日早いという、それだけの理由にすぎなかった。H社ではすべての条件が同じならば、生年月日によって序列を決めるというルールがあり、単純にそれに従っているにすぎないのであった。

だが考えてみれば、生年月日の一日の違いぐらい、ちょっとしたこと、たとえば社長から叱責を受けるということぐらいで、すぐすっ飛んでしまうハンデキャップである。いわば社長の激怒を清末が受けるか、錦本が受けるかによって取締役をどちらが握るかが決まるといっていい。

庶務部長室の錦本の緊張した顔を清末は更めて思い出した。いち早くこのことに気がついた錦本は、『社長の了解は清末さんの方でとりつけてください』と、危険な火薬玉をすばやくこちらに投げ返してよこしたのだ。油断がならない。清末としてもこの火薬玉を自分の手の中で絶対に爆発させてはならない。

四

しかし結果として清末は株主総会においてめでたく取締役に選任されたのだった。ということは錦本とのライバル競争に勝ったことになる。引続き調査部長のポストを踏襲し、その清末新取締役はいま応接室で和歌森課長補佐の挨拶を受けているのである。

だが清末が取締役になるためには、和歌森から依頼された黒石代議士の入会金問題を、社長から叱責されることなく、うまく処理しなくてはならなかった筈だった。もし失敗していれば、生年月日の一日違いという鼻の差のハンディで並んでいた錦本部長が、逆転滑り込みをしたはずである。

いったい、清末部長はあの難問をどうやって処理したのだろうか、疑問とも好奇心ともつかぬ関心が、芥川の心の片隅にいつもある。というのは、湊社長の死と、黒石代議士の入会問題とが、どこかで変な工合に繋がっているような気がしてならないからであった。別にはっきりした理由はないのだが、漠然とそんな気がする。長年仕えていた湊社長への追慕の情が、そんな形で芥川の気持の中に浮き上ってくるのかもしれなかった。

芥川はあの日以来の出来事を時間を追って並べ、反芻してみた。あるいはその中に解決の糸口があるかもしれない。

まず経済省への回答である。清末部長は入会を断わった。そのとき社長との間でどんなやり取りをしたかは知らないが、芥川のところへは

『社長の指示で断わることにした』

と了解を求めに来たから、社長と相談の上断わったことにまちがいないであろう。断わりの返事に対して和歌森からは、なんとかならないかと、再三の押し問答があったようであったが、結局最後まで清末部長は断わり通した。社長の指示の厳格さよりも、清末部長の冷たさのようなものを、そのとき芥川は感じたことを覚えている。

その功績が評価されたように、清末は株主総会で待望の取締役のポストを手に入れたのである。

湊社長が帰宅途上、何者とも知れぬ者に、刃物で刺されて死亡するという事件が起きたのは、それから暫くしてからである。あまりの突然の死で、H社の内部は一瞬騒然となったが、しかし急拠小谷副社長が昇格して、新社長の椅子に着いたのである。

小谷社長は部下の意見をよく聞く性格に加えて、政治家に対する特別の考えも持っていなかったので、いったん断った黒石代議士への入会も、新社長になってから更めてすんなり入会が決った。

しかし、ということは、もしも社長が交代しなかったならば、入会は実現しなかったわけである。これをもう一枚裏返して言えば、湊社長が死ななければ黒石代議士への入会は実現しなかったことになる。そこまで考えたとき、芥川の背中を冷いものが走り抜けていった。

五

清末部長が黒石代議士の入会問題を解決しようとしたとき、一番の悩みが、どうやって湊社長の激怒を避けるかにあったことは言うまでもない。

清末が予想したように、担当常務も、専務も、副社長までもが、事の重大さにおののいて

『わかった、君の方からよく説明しておき給え』

と逃げてしまい、結局湊社長に話を持っていく破目に陥ったのが清末になったのは予想した通りであった。損な役割を一手に引受けることになった。なんとかこれを切り抜ける方法はないか。そのとき清末はこれから自分が演じなければならない社長との一問一答を予想してみたのだった。

『なにイ…、黒石代議士への入会だって…、そんなもの絶対まかりならん。そんな判断ぐらい、君はできんのか。何のために部長という肩書きをつけているのだ』

そう湊社長はどなり散らすにきまっている。

『申し訳ありません。でも、経済省からの依頼ですので、無視もできないと思いまして…』

『馬鹿者！経済省がなぜそんなものを斡旋する。なお、けしからん。そんな役人のやることにいちいちペコペコしていて、君は馬鹿か、阿呆か…！』

これでは取締役への途がふっ飛んでしまうこと間違いない。何かいい知恵はないか。

『社長に相談なんかするから問題がおきるのだ』

考えてみればたしかにそうだった。

『相談せずに断ってしまえばいい』

相談しても、しなくても、駄目と結論の出ているものを、相談する必要はない。社長の激怒を買うだけ損である――急に気持がすっきりとした。

「だが、まったく社長に無断で断って問題はないだろうか」

すぐ次の心配が追いかけてくる。サラリーマンの習性である。

「だまって断って、何かのときに露見したら、叱責を受けかねない」

そのとき清末の頭に悪魔のよろこびそうな考えが頭をもたげてきた。それは社長に『報告』という形式ですませてしまう方法であった。

『黒石代議士の日本教育研究会への入会依頼を経済省から受けましたが、検討するまでもなく入会する必要がございませんから、断わります。こんなことは社長のお耳にお入れするほどの問題ではないのですけれども、後日の念のためと思いまして一応ご報告にあがりました。』

そうした報告ならば社長から異論が出ることはないだろう。そして怒られることもない。

清末はその足で社長室に向った。

廊下を歩きながら、いつになく緊張した。社長室に入ったらこの科白を一気に喋ってしまわなければならないのだ。清末は口頭試問を受ける学生のように、言うべき科白を繰り返した。もたもたしていると湊社長は口が早いから途中で言葉をはさんでくる。だから、断わります、までを一気に言わないと、

『なんだと、黒石代議士だって…、すぐ断わってしまえ。そんな判断も君には出来ないのか！』

そう来るに決っているのだ……。

社長室に入る。

湊社長は何か書き物をしていたが、机から清末の方に顔をあげて

「何だ……」

ぎょろっとした眼を向けてきた。

「ちょっとご報告にあがりました」

報告という言葉に力を入れてそう言った。相談に来たのではない、報告だということを強調するためであった。

「うむ、何だ？」

今日は気嫌がよさそうだった。成功はまちがいないように思われる。

「実は黒石代議士が日本教育研究会というのをやっておりまして、その入会依頼を経済省から受けましたが、検討するまでもなく入会する必要がございませんから、断わります。こんなこと社長のお耳にお入れするほどの問題でもないと思いましたが、後日の念のためにと思いまして、一応ご報告にあがりました」

最後までうまく言い切ることができたと思うと、どっと汗が全身からふき出した。

「ふーむ、いいだろう」

社長は一言そう言った。その顔に満足の色が流れていた。清末の作戦は当ったのだ。

社長室を出ると、清末は秘書室に直行して芥川に言った。

「社長と相談したが、結局断わることに決ったよ」

「やっぱりね。だが後で問題が起るようなことはないだろうか。黒石代議士といえば名うての悪だからね。いつ竹篦返しを喰うかわからない。それが心配だ」

「でも社長が断われというのだから仕方がないよ」

「それも、そうだ」

「とにかく経済省へは断っておくよ。問題は黒石代議士がそれでどう反応するかだが、それはその時になってまた打つ手を考える外はないさ」

「そうだね、ところで社長、怒らなかったかい」

芥川は一番聞きたいことを最後にそう聞いた。秘書役にとっては仕事の成否よりも、社長の一顰一笑の方が心配なのだった。

「そうでもなかったよ。案外すんなり話がついた」

「君は言い方がうまいからな」

「いや、いや……」

清末は言葉を濁した。しかし芥川は疑問を持つことなくほっとしたようだった。

六

清末部長は翌日経済省に行った。

和歌森課長補佐に逢うと

「どうしても社長が承知しません。当社はご承知のように政治的には無色の経営をしたいというのが信念ですので、たとえ御省のお話しといえども、その信念を曲げるわけにはいかないというのが社長の考えです」

何でも彼でも湊社長の信念のせいにして

「と言っても、社長のその清廉潔白経営に私どもも実はいささか困ってはいるのですが、なにせ社長の信念で

すので…、本当にご期待に沿えず、私の力不足でまことに申し訳ありません」

謝ってしまった。だがそれを聞いている和歌森課長補佐の顔はにがにがしげで

「困りましたな、清末さん。本当にそれでいいんですか」

と圧力を加えてきた。

「社長の決定ですので、どうすることもできません」

「黒石先生は十社すべての加入を希望されています。第一次の五社はすでに入会がすんでいますし、第二次五社もほぼ決定しているんですよ。おたくだけ孤立して本当にいいんですか。その辺を考えてもう一度再検討してみてくれませんか。私の方としましても先生の強いご要望ですので、できるだけ十社の入会を揃えてあげたいのです」

「わかっております。でも社長の考えが変わらないことには…」

清末は一息切って、ちょっと思案をしているようだったが

「もし黒石先生がどうしてもとおっしゃるなら、先生の方から直接わが社へお申し出くださったらどうでしょう……」

「直接言えば可能性はありますか」

「無いこともありません」

清末は答えた。だがこれは清末があらかじめ考えておいた悪魔の創作であった。もし黒石代議士から会社へ直接申込みがあれば、その担当窓口は清末ではなくて、庶務部長である錦本のところになる。錦本としては嫌が応でも処理せざるを得なくなる。錦本は仕方なく社長のところへ相談に行くだろう。当然そこで湊社長の激怒を買うはずである。その結果がどうなるか、言わなくても判っている。この筋書きを清末は二日がかりで考えたのであった。

二、三日たったころ、清末のところへI社の部長から

「君のところ、例の黒石代議士のことさ、どうした？」

問い合わせの電話が入ってきた。

「うちはもう断わりましたよ。社長の指示でね」

すると電話のむこうの声がにわかに安堵のトーンに変って

「そうですか。実はうちもね、社長や専務と相談しているのだが、どうも結論が出なくてね。断わりたいのだが、断って竹篦返しをされるのがこわい、それに断ったのがうちだけになって、孤立するのも心配でね。だが、あなたのところが断ったのならば、うちも決心がつきましたよ」

「いや、それはお互いさまですよ。うちだって孤立するのは困るんです…」

和歌森課長補佐は第二次の五社全部と頼まれているのに、三社もほとんど入会が決ったと言っていたが、それは嘘だったのだ。

「あとの三社はどうしたんだろう？」

「F社とG社は入会を決めたらしいが、J社はまだ迷っているらしいね。出来たら断りたいと言っていたから、われわれといっしょなら断るかもしれない。連絡してみようか」

「ぜひ頼むよ。われわれ三社は結束して入会するのをやめたいね」

経済省の和歌森から清末のところへ

「ぜひ頼みたいことがあるから来てくれ」

と電話があったのは、それから三日ほどしてからであった。官庁はものを頼むときでも先方からは出てこない。電話で呼びつける。そしてそのことを民間の方も当然と考えている。

清末が書類がうず高く積まれた経済省の部屋に出頭すると

「黒石代議士の件をもう一度よく検討してみてくれませんか」

やはり巻き返しがきた。

昨日と、一昨日と、I社とJ社がつづいて断ってきたというのである。

「三社が結束して断わられては困るのですよ。黒石先生からは第二次の五社全部と頼まれているのに、三社も断わられたのでは経済省の顔が立ちません。各社ともいろいろ事情はあろうかとは思いますので、全部とはいいません、もう一社か二社入ってくれれば面子が立つのです。先生への義理が果たせます。だから、どうか三社の話し合いはやめて、せめてあと一社だけでもお願いします。本当に…、本当にお願いしたいんです」

和歌森はまるで机に額をすりつけんばかりにして、そう言った。それはいつもの居丈高な言い方とちがって、哀願調なのである。いつもの和歌森とまったく違う。清末は違和感を感じた。

「三社の団結は清末さんのところが音頭をとっているというじゃありませんか。I社もJ社も清末さんのところがオーケーすれば入会するといっています。どうか清末さん、旗を降してください。もう一度湊社長さんと相談していただけませんか」

だが清末にしてみれば、この問題は取締役への道と引きかえである。そう簡単に哀願に応ずるわけにはいかなかった。

会社に帰ってから電話で連絡をとると、I社にもJ社にも、同じような哀願があったとのことであった。

しかし三社は結束を崩さなかった。

湊社長が殺されたのは、そんなことがあって暫くたっ

た日のことであった。

七

挨拶に来た和歌森が帰っていくと、やっと清末は重苦しい空気から開放された。あの顔とつき合っているとただでさえ気分が重い上に、黒石代議士の入会金事件をいやが応でも思い出さざるをえないからだった。清末がぼんやりと窓外に眼を向けていると、芥川秘書役が顔を出して

「もうお帰りになりました？」

「ああ、いま帰ったよ。餞別も渡しておいた。いまエレベーターまで送ってね、帰ってきたところだ」

「でも、よく和歌森さん、再就職が決まりましたね。なかなか決まらなくて困っていたというのに……」

「仕事が出来るばっかりに会社筋から煙たがられ、敬遠されて損したんだね。でもなにかうまい手蔓を摑んだのじゃないかな」

官庁というところは一流大学を卒業したキャリア組と、そうでないノン・キャリア組という、二つのはっきりしたグループの組み合せの中で仕事が処理されていく、不思議な世界である。キャリア組には昇進のためのローテーションが組まれていて、仕事をろくに覚えないうちに次から次へと短期でポストを変っていく。それを支えるように、下積みになって実際に実務をこなすのが、叩き上げのノン・キャリア組であった。だが叩き上げ組はいくら仕事ができても、上へは進めない。

和歌森はそのノン・キャリア組のトップであった。五十五才。課長補佐止まり。嫌な仕事、難かしい仕事、ややこしい仕事、事故トラブルの処理などが、すべて和歌森のところへなだれこんでくる。和歌森はそれに辣腕を振うのだが、その結果勢い相手には強面になり、敵も多く、したがって嫌われていたとしても仕方のないことだった。

だから同僚が停年近くになって再就職先が決っていくのに、和歌森だけはどこも受入れてくれる企業がない。だがこのまま経済省を抛り出されるわけにはいかない。どこかいい会社に潜りこまなくてはならない。和歌森があせっていたのは事実であった。

「とにかく就職先が決ってよかったよ。いつかなんか、よかったら採用してくれないかなんて直接本人の口から頼まれたりして、弱ったことがあったもの。うちの会社などに万が一決ったら大変だったよ。よかったよ」

よかったという意味の中には、そうした『よかった』も含まれているのであった。

「だが考えてみると、変なことを言うようだが、湊社長が死ぬと間もなく和歌森さんの就職が決った…、そういうタイミングになりますね」

芥川秘書役は謎解きに挑むような眼つきで言った。

「湊社長が死ぬと、なぜ急に和歌森の就職が決ったのでしょうか？」

だが清末にはすぐ答えられない。そこへ芥川はたたみかけるように

「もっときつい言い方をすれば、湊社長が死んだから和歌森さんは就職できた、そんな考え方ができませんか……」

清末の顔色がはじめて、はっとしたように変わって

「すると、もし湊社長が死ななければ、和歌森さんは再就職できなかった……？」

二人はギョッとして顔を見合わせた。

「……」

「……」

だがそう考えると、湊社長が死んで実現したことがもう一つあったのである。黒石代議士の日本教育研究会への入会である。湊社長が生きていたのでは絶対実現しなかったが、新しく小谷社長になったので実現した。

湊社長の突然のむごたらしい死、黒石代議士の研究会への入会、そして和歌森の再就職——、この三つには、どこかで絡みあった、なんらかの関係があるのではなかろうか。

八

和歌森の後任者が決った。築地という新しい課長補佐へ挨拶するために、ある日清末は経済省へ出掛けていった。

三階でエレベーターを降りると、入れ違いに警官が二人乗り、そのまま下におりていくのが、飛びこむように清末の眼の中に入ってきた。

「何かあったのだろうか」

だが経済省の中を警官が歩いていたって、別におかしくはない。無理に清末はそう自分に言いきかせてみた。

清末は財政局財務課の室に行くと、新任の築地課長補佐に挨拶をすませた。築地は年恰好はほぼ和歌森と同じだったが、性格は温厚そうなので、今度は助かったと思った。

挨拶が終ると、同室の他のメンバーにも挨拶の言葉をかけた。経済省へ来たときには、出来るだけそうやって大勢の人間に愛想をふりまいておかねばならぬ。最後に一番気楽に話ができる相良という若い係官の脇に腰をおろすと

「さっきエレベーターで警官と逢ったが、何かあったのですか」

気軽な気持で聞いてみたのだが、急に相良係官の顔が困惑の表情になって

「ちょっとお茶でも飲みにいきませんか」

その場での話しを避けた。経済省の建物の五階には喫茶室がある。そこへ入ってコーヒーを注文すると

「ちょっと大きい声では言えないのですが、和歌森さんをいま警察が調べているのですよ」
「えっ！　それでさっきの警官が……」
「そうなんです。今はまだ内偵の段階らしいので、もちろん和歌森さんはまだ知りませんが…」
「いったい、どうしたんです？」
「それが、おたくの社長さんの殺人事件の犯人だという疑いです」
「えっ！」
清末は二度びっくりした。
「くわしく話してください」
「和歌森さんの再就職に関係があるのです。実は和歌森さんの今度の就職は黒石代議士の紹介で決ったのです。和歌森さんは再就職先の斡旋を黒石代議士にひそかに頼んでいたのですね。黒石代議士なら顔が広いですからね。就職先ぐらいはいくらも見つかるでしょう」
「そうだったんですか。ちっとも知らなかった」
「だが黒石代議士もただの鼠ではないですからね。ただでは引受けない。条件を出した。その条件というのが日本教育研究会への入会斡旋だったのですよ。そこで和歌森さんは自分の立場を利用してとりあえず入会しそうな五社に声をかけた。A社、B社、C社、D社、E社と五社の入会は取りまとめた。しかしがめつい黒石代議士は五社だけでは駄目だという。同業の十社の入会が条件だというのです。そこで和歌森さんは第二次の入会勧誘を始めたというわけです。だが第二次勧誘はうまく事が運ばない。F社とG社の二社は入ったのですが、あとは清末さんとこの湊社長が絶対駄目だというものですから、あとの三社がどうしても決まらない。和歌森さんはずいぶん悩んでいましたね」
H社、I社、J社の三社が協定して入会を断ったとき、和歌森がいつもの居丈高とは打って変って哀願するように頼みこんできた裏には、実はそうした切実な事情があったのである。話を聞いているうちに清末は次第に息苦しくなってきた。
「和歌森さんは停年が眼の前に迫っている。どうしても再就職先を探さなくてはならない。そのためには早く研究会への入会を完了させねばならない。だが三社が入会しない。その原因はH社の湊社長の反対にある。つまり湊社長が自分の再就職を妨害しているのだと、次第に和歌森さんは思いはじめたらしいのです」
「……」
清末は何とも合槌が打てず、暗い穴の中に落ちこんでいくような気持に襲われていた。
「湊社長がいなければ就職がうまくいく…、そう和歌森さんが考えるのに、そんなに時間はかからなかったのではないでしょうか」
「それで和歌森さんが社長を殺したというのですか」

「別に証拠はありません。でもそう考えると、あの殺人事件がスムースに解釈できるのです。湊社長が死ぬ…、新しい社長になる、新社長は物わかりがいい、いったん断った研究会への入会をオーケーした。H社が入会したので、I社も、J社も入会し、業界十社全部が出揃った。黒石代議士は条件が履行されたので、約束通り和歌森さんへ就職先を斡旋したのです。」
研究会の入会に反対をしたのは本当に湊社長だったのだろうかという複雑な思いが、そのとき清末の胸を流れた。
遠く離れた大阪の地で、やっと手に入れた再就職のポストを、やがて警察の手によって奪われるであろう和歌森の姿を、清末は思い描いてみた。

勲章ばなし

大和禎人

某日、ある知人の宅を訪ね香華を手向ける機会があった。その人は多発性骨髄炎という難病に蝕まれ生を終えた。気がついて見ると、仏壇の脇、長押の上に一つの額が掲げられており、勲記が眼についた。

（勲五等……）

とある。内閣総理大臣〇〇〇〇、賞勲局総裁〇〇〇〇、そして厳かに印璽を添えられ、日本国天皇はという主文に始まり二月二日、（須崎ニオイテ璽を捺サシム）と読みとれた。

（この須崎ニオイテとあるのはどういうことでしょう？）

と、もの好きな私は聞いてみたのだが、

（さあ、……）

ということであった。

もっともその須崎がどこであろうと、さして私も問題としていたわけではない。

ややあって、その人の夫人はそれでも、

（どこかの場所ではありませんか）

と言われた。ポツンという感じで、悲しみを新にされたように思える。

（その二月二日が主人の亡くなった日でございます、一時は主治医の方も信じかねる回復をして、仮骨ができたりしたのでしたが……、ええ、仮の骨と書いて（かこつ）なんですの、……）

骨髄炎は病状の進行にともなって骨格を冒し、空洞化して漿液が腹水としてたまる、肋膜炎に似た症状を呈する。厄介な病気である。足がしびれるという訴えから始って、歩行の困難にいたるほぼ十年にわたる闘病生活であった。

訃を知ったのがおそく忌日もこの時はじめて承知したのであった。

叙勲ということが行われ、そして勲記というものがあってみれば、これを額におさめる慣いはこれもまたきわめて日本的な光景なのかも知れない。まだ戦争中のことであったが、日本国天皇ではなくて大日本帝国天皇はという主文によるものを見た覚えがある。記憶に間違いなければ、たしかそれは金鵄勲章のものではなかったかと思う。

春秋の二度、生存者叙勲が行われている。この方は死後の叙勲、つまり追叙よりもいっそう芽出たいことであるらしい。そのためか日刊の新聞紙もこぞって報道し、受勲者の喜びの声をかなりの紙面を割いて伝えるのが恒例になっている。

さすがに勲章の制度は生き残っていてもこれを佩用する場面はなくなったし、骨董店に売りに出されたりもしている。現にショーケースの中にそれを見てなんとも滑稽を覚えた経験がある。売り手があれば多分買い手もあるのだろう。（社会の木鐸）を任ずる新聞社もなぜかタブーとするものらしくかって批判を加えたというためしを聞かない。

未亡人はお孫さんの手をひかれ、門口ばかりでなく道の曲り角まで見送ってくれた。

（バイバイ）

とかわいい手がふられていた。

（バイバイ）

とこちらでも手をふった。いまは亡き故人への哀惜をもこめるように手をふった。遠く慇懃に小腰をかがめられた夫人の姿が心に残った。そしてふと、再びこの道を訪ねることもあるまい、という想いが胸にわいた。

いまさら（人生朝露）というようなことばを借りるまでもなく、この場合人の世の無常を感ぜずにはすまされない。そしてあの額の中におさめられた勲記はそのはかなさや、空しさを皮肉にももっともよく物語っていてくれたように思う。

この（勲章ばなし）はここで、金鵄勲章にまつわる挿話をとりあげることにしたい。

金鵄勲章といえば軍国日本の、もちろんハイライトである。とびきりの戦場の勇士に与えられる勲章であった。名誉に輝く勲章であった。

ところが、ここに紹介しようとする話はある弱虫の兵隊が主人公なのだから面白い。

一人の輜重兵特務兵が軍馬に頬をすりよせている写真が内地の新聞に載った、ということから話の端を発することになる。もう一つ説明を忘れてはならないことはその馬の首に千人針がかけられていたという事実である。これが（美談）のきめ手になった。（美談）は針ほどのものから棒ほどに従軍記者の手で脚色され紙面を飾った。

折しも一つの軍歌が内地では圧倒的な人気を博していた。やがて戦地でも歌われるようになる。

くにを出てから幾月ぞ
ともに死ぬ気でこの馬と
攻めて進んだ山や河
とった手綱に血が通う

「愛馬進軍歌」である。当時、陸軍に馬政局という役所があって、作詞、作曲が公募され、昭和十三年の冬日比谷公会堂で盛大に発表されたのがこの歌であった。もし軍歌のベストテンを選ぶとすれば、この「愛馬進軍歌」は必ずその上位に入るであろう。それほど人の口の端に親しまれ、よく歌われた軍歌の一つであった。大戦への傾斜を次第に深めていながら、まだ国民一般は誰も危機感をもっていなかった。無言の戦士としての軍馬がこの歌のヒロインであるところが人気をあつめたポイントであったように思われる。動物の愛護がたとえどんな時代であろうとも共鳴をよんだのであろう。

翌十四年一月になると、「愛馬進軍歌」は当時のレコード会社七社によって発売される。そしてアピールはのりにのり前線でも銃後に負けず、一世を風びすることのあった歌だ。

慰問袋のお守札を
かけて戦うこの栗毛
ちりにまみれた髭面に
なんでなつくか顔よせて

歌詞はとんで四節目にくると、こう歌い上げる。

ところで、わが（美談）の方は（お守札）を（千人針）におきかえ、しかも同じ慰問袋から展開をみるのだ。

その千人針は慰問袋にこめられ、愛馬の首にかけてほしいという手紙が添えられていた。くだんの金鵄勲章の兵士がこれを受けとったものだ。こともあろうにというほかはない。こともあろうにという思いはなによりも当の本人が多分真先に思ったに違いない。

輜重兵特務兵の任務は大行李（食糧）小行李（弾薬）の荷駄をひく軍馬の手綱をとり、ひたすら歩くことがその使命であった。彼もそうした御兵の中の一人であった。兵士となるまでに馬に近づくこともなかったのが大部分の彼等だから、誰もはじめから馬になれたものはいないのであったが、彼の場合はとくべつであったようだ。馬の方もそうなると言うことを聞かなくなるものだ。いよいよもてあます結果になる。もともとの苦役に苦しさを加えるばかりである。彼はつまりは落ちこぼれの兵士であった。

大休止となると馬の方も脱架する。鞍を解いて人馬ともに骨を休めるのだ。慰問袋はそうしたくつろぎの中に配ばられる。まだまだこの時期の戦局ではそういうゆとりがあったものだ。本人の家族からのものもまだ許されていた。

千人針と言ってみても、いまの若い世代には耳なれぬことになりそうであるが、応召兵士なら誰もが贈られて

（千里を征き千里を還える）という虎の縁起をこめて身につけた一種の腹帯なのだ。銃後の女たちが一針、一針縫いとりに心をこめ、とくに寅の年生れは喜ばれて年の数だけ縫ってもらうという作法があった。小筆の尻を応用して朱のスタンプ、その〇印が千コ。赤糸でその〇の一つ、一つ縫いとりをする。母や妻たちは時に街頭にまで立っことがあった。

兵士のうけとった馬に贈られた千人針も同じ思いがこめられたものであった。慰問文に切々とそれは訴えられていた。若い女性のものだ。行文にそれが読みとれる。たまたま馬のいる輜重隊だからよかった。彼は恐る恐るそれを馬首にかけた。馬の千人針が兵士たちの話題になった。従軍記者がスクープ記事として（美談）を作りあげるという経過がそれからあった。苦手の馬に頬ずりするポーズをとらされた。

さて、こんどはその（美談）の掲載紙が内地から部隊へ届けられた。

彼はとうとう部隊名誉の兵士という地位を与えられることになった。兵隊仲間からさんざんからかわれながら、部隊長の賞辞をとくにうけた。愛馬の模範として訓示にも利用された。一度はたしかにかけてみた千人針であったけれども、そうなると常時馬首にかけざるを得なくなった。他社の従軍記者まで追随記事を書くために彼を追いまわした。馬をどうしても好きになれない彼、馬に弱い彼であったが、そのことを除けば真面目な彼は模範兵となるためのあらゆる努力を次第に強いられていった。

彼はとうとう勲章を授けられた。金鵄勲章功七級、武功抜群という授与条件にもとずくものであった。誰よりも彼自身が心の中に不当を思わず叫ぶ、重く鉛のような栄誉であった。

戦後、それも日の浅いある日、彼は金鵄勲章を入質した。質種は流す腹であった。

（あ、お客さん、たしかに米穀通帳は拝見させて頂きましたが、お品ものがこういうものでございますから…勲記の方もお預りしたいもんですな……）

（なるほど、いっそ間違いないわけですね……）

携えていたから言われるままに添えて手渡した。勲記まではという気持が若干彼にあったが、かえってこれでさっぱりしたようである。気弱な彼は勲章を抱いたままこれから先を生きていく自信がなかった。戦死者よりも生存者に多く与えられていたこの勲章の意味にようやく気づいたのだ。その意味を人に語るだけの勇気を彼は持合わせていなかった。

それから間もなく新憲法下この金鵄勲章だけは明治二十三年いらいの歴史に終止符を打たれた。

（五七・六・三〇）

扇子

柴田　保

病院に向う道の最後の四ツ角で二人は顔を見合わせて、思わずアッと声をあげるところだった。シグナルが赤に変わり、車が通過し始めたところで、彼女は、

「水沼さんじゃございません？」

と小走りに近づきながら、懐かしそうに声を掛けた。

「あなたはレムちゃん・・・」

昔の中学時代の友人に出会ったような懐しい気分になって、水沼は足を止めた。

駅を出た時から、前を歩いて行く彼女に、どこか見覚えがあるような気がしていたが、顔を見たとたん、「ぜん」でゴーゴーを踊っていたレムちゃんだとわかった。

まだ、生えぎわに幼い香りが残る髪の毛を腰の上まで伸ばし、いつも伏目勝ちで、口数の少ない女の子だったが、今では長髪も短く切って無造作にうしろに束ね、見違える程愛想がよくなったのに、びっくりした。

十年前、横浜東口のショッピングセンターのあるスカイビル一階に「ぜん」というディスコがあった。昼間は西口にある地下街やデパートをまわり買物を楽しんだ人たち、夜は勤務を終えた人たちが、浜風が吹く長い歩道橋を渡って踊りに来た。民放のテレビでも、時々ゴーゴー大会をここから放映するので、若者だけでなく、いろんな年令層にも人気があったし、豪華な二つのバンド演奏を聞きに来る人も少なくなかった。

しかし、テレビもゴーゴーを放映しなくなり、小さな子どもにまで浸透したかに見えたゴーゴー熱も下火になって来た。変り身の早いゴーゴー喫茶は看板を塗りかえて、「歌える喫茶店」にし、踊り場を改造してステージを作り、カラオケの設備を置いた。「ぜん」も不況の波を免れなかった。従業員たちが、駅やデパートの出入口で宣伝のビラやマッチを配ったり、内部を改装し二つのバンドを一つに減らし、かわりにホールの所々に小さな

円い踊り台を置いてゴーゴーガールを踊らせる一方、バンドを演奏するステージの裏側で踊っているゴーゴーガールをシルエットで見せるように工夫した。そのゴーゴーガールの中に「レム」がいた。彼女たちは踊る場所、踊る時間、休憩時間を互いに話し合って決めていたらしく表面に出たがらない「レム」はステージの裏側で踊る方に回った。当時短大生だった彼女は、今の仕事を学校の仲間に知られたくなかったのだった。でも、これが幸いした。バンドを演奏するステージの西側の、マホガニー色に縁取った長方形の化粧ガラスに映し出される長い髪をした美しいプロポーションは、幻想的な効果をあげたのである。

だが、これだけで客足が増える筈もなかった。ゴーゴーガールも二人、三人と解雇されて、残るはシルエット・ガール二人だけになり、バンドもなくなり、その代りミュージック・ボックスからレコードが流された。それでも常連は変らなかった。人数といっても十人たらずだが、毎日顔を合わせた。彼等の溜り場は、ホールの奥にあるバーだった。店の盛況時は、ビールやコカコーラ等を販売するスタンドが特設されていて、なんでも高いバーで飲む客はなかったが、溜り場になってからはスタンドにもなり、シルエット・ガールの休憩所にもなっていた。日頃口うるさいマネージャーも、眼に余る事がない限り干渉しなくなった。ここの常連の中に譲次という黒人のハーフがいた。十八才で母方の祖父母と同居して夜は本牧辺のスナックで働いていた。年寄りと一緒に暮しているせいか、考え方にも律義なところがあり、弱い者への思いやりがあった。ゴーゴーが飯より好きで、自分で振付けを考えて踊った。生れつき口の重い「レム」とはなにが合うのか、姉弟のように気軽に冗談を言ったり、笑ったりした。いつだったか、黒人のGIが何かを聞きたくて、このバーに入って来た。部屋には売店の店員や「レム」たちも休憩していた。ちょうどその時、譲次たちが入って来た。GIは譲次を見て、安心したらしくしきりに彼に話しかけたが、譲次は父の国の言葉は出来なかったので黙って下を向いていた。やがてGIはそれと察したらしく、一瞬、悲しい表情になった。部屋の別の男がGIの問に答えてあげたので、GIはサンキューと言ってバーを出て行く時に譲次に千円札を握らせたのである。

常連とはいかないまでも、「ぜん」開店以来、和服姿で、扇子を持って踊りに来る七十年輩の男がいた。彼は踊りが最高潮に達すると持っていた扇子をパッと開いた。桜の枝から花びらが散っている下に鉄かぶとが画かれ、上に〝花は桜木、人は武士〟と書いてある戦前の除隊みやげの扇子ででもあったろう。この男が「レム」と親しかった。親しいというより「過ぎる」というべきだろう。踊って汗が出るとハンカチを貸してやったり、コカコー

ラを持ってきてやったり、そのたびに老人は嬉しそうに相好を崩していた。一体あの男と彼女は、どういう関係なのだろうと誰もが興味を持ち始めた。親子ではなさそうだし、単なる知人とすれば、親切にし過ぎるし、第一レムはそんなに気がつく女じゃない。それとも恋人かな。なにしろ最近の娘は進歩的で我々が理解出来ないことをするから、と話はだんだんエスカレートしていった。

「川崎では、あんな爺さん入場を断られる」

この男はゴーゴーを踊る雰囲気を大切にした。

「民謡酒場にでも行けばいいのに」

「彼は酒は飲まんよ」

「東京ではもっと年寄りの爺さんだって、みんなゴーゴーを踊っているよ」

交代が終ってレムが部屋に入って来たが、自分に関係のあることと察したらしく、黙って聞かないようにしていた。

「俺はどんな踊りでもいいと思うよ。あの爺さん、あんなに楽しそうに踊っているんだぜ。俺たちに邪魔する権利なんかないんだ」

「譲次は何時から爺さんの味方になったんだい」

「味方という訳じゃないんだ。ただそう思うだけだよ。俺は新宿に踊りに行ったが、ある店では踊り方の指導をしているんだ。マイクで〝右足から三歩前〟とか奴鳴っていて、初めての俺たちが中に入って踊れる雰囲気じゃないんだ」

「日本人ってそういうの好きなんじゃない」

「ゴーゴーは自分で良いと思ったように踊れば良いんだ」

「俺たちは、ある音楽のリズムを、自分のリズムとして体で表現しながら、一緒に踊る人の踊り中に共通するものを発見して喜ぶ」

音楽が始った。みんな踊り出した。譲次にはさすがにこれがゴーゴーだと感じさせるものがあった。彼が足を動かすだけで、我々と違う黒人特有のリズム感のようなものを感じた。扇子の爺さんも、扇子をかざすと、我々の間を縫うように踊り始めた。そしてみんなの頭の中にこれが「ぜん」での最後の踊りになるだろうといった感傷があった。

それは水沼にとって、十年前のよき思い出でもあった。そして、いつかあの「ぜん」の仲間たちと、もう一度、会ってみたいと思っていた。

午後ともなると、一階の受付の辺は閑散としていた。リハビリや検査室が一階に集中しているので、車椅子の患者が目立っていた。ちょうど面会の時間が始まった所で、エレベーターは混んでいた。レムは顔見知りらしい幾人かの面会人と挨拶を交した。二人の患者の病室は同じ病棟にあった。友人は眠っていた。奥さんとその母親

が来ていて、手術の結果は良くて、数日中に退院出来そうだと話した。彼は奥さんとしばらく話をしてから、明日、また来てみるといって部屋を出た。

レムの患者の部屋はその二つ先の看護婦の控室の前にあった。水沼は自分も知っている患者って誰だろうと、レムのいった言葉を考えながら、その部屋に入った。中では、さきほどエレベーターで挨拶を交した女の人たちが、湯の入った大きなタライをベッドの下に置いて病人の体をふいてやったり、寝巻を取り替えたりして忙がしそうに動いていた。レムは寝ている患者の汚れ物を洗って、隣室にある乾燥機に入れてきたところだった。レムは水沼を見ると、彼だと、眼で合図をしたので、その患者のベッドの傍に近寄り顔をのぞき込んだ。色が白く、顔は少しむくんではいるが、顔形はまぎれもなく「ぜん」で会ったあの扇子の老人だった。彼は静かな寝息を立てゝ眠っていた。レムは患者の顔をのぞき込むようにして、

「おじさま、水沼さんが来ましたよ、『ぜん』で一緒に踊ったわね。わかりますか」と普通の人に言うように話し掛けた。だが、彼は、じっと天井を見たまま、何の反応も見せなかった。眼ばたきもせず、見開いた眼には何も写らないようだった。

「脳出血なんです。道を歩いていて倒れたのです。意識不明のまま一週間になります」

レムは老人の頬をさすりながらいった。両方の鼻孔に細い透明のビニール管がさし込まれ、絆創膏で止めてあるので、半ば開かれた口から呼吸音がここまで伝ってきた。尿道から通したビニール管が、ベッドにぶら下った計尿袋につながっているので、ふいに尿が健康的な音を立てて流れこんだ。

「大変ですね、あなたがお世話するの」

「いいえ、たいていの事はここの看護婦さんがしてくれますから、私のすることはただ寝巻や汚れたものを洗濯する程度です。私は勤めを終えて来るので、どうしても遅くなります。そんな時、ここでは皆さんが手を貸してくれるので、とても助かりますわ」

レムの話によると、この老人とレムの一家は満州で同じ開拓村の引揚者だった。この老人の妻は引揚げの途中、匪族に拉致され、今だに生死さえ知れないという。

「私は引揚げの途中、棄てられたんですって、それをこのおじさんが拾ってくれたのです」

彼女はこういうと、さもおかしいというように笑った。

「小さい時分、姉と喧嘩をすると、よく棄子といわれたのを覚えています。」

満州開拓者の日本引揚げは言い尽せない程悲惨なものであった。

彼等は、日本に歩いて帰るよりほかはなかった。途中でソ聯兵、武装した反日中国人民兵に襲われ、男や女た

ちは殺され、あるいは自ら命を断った。女、子供たちは隊列を整えるようにして歩いた。匪族たちは隊列を包むようにして後を追い、落伍する者があると襲いかゝり、掠奪、丸はだかにした。男たちは歩けなくなった子供たちを殺すか遺棄した。　…満州大敗走（現代）より…

満州の東北、ソ連との国境に近いこの辺は荒涼とした原野で、東安を出た汽車は、この原野を国境の町虎林に向って走る。単線で、右側は荒野、左側は線路沿いの道路がどこまでも伸び、荒野のひだのような赤茶けた丘陵の彼方に消えて行く。道路に沿って兵舎が山肌の一部のように並んでいる。線路の枕木はいつか白樺の木に代用され、汽車は「ヒトク」に着いた。

司令部の隣りにある待合所で待つ間もなく先客の子ども連れの夫婦を乗せた兵隊のトラックが来たので、荷台に乗ると、やがて発車した。兵隊の車は野菜を受領しに開拓村に行くのだという。三十八年型のフォードで、ボディに「東京砂利運送会社」の名が薄く残っていた。車は山ひだに挟まれた道を登り始めた。見渡す限り禿山だが、中には雑木林が所々あって、臀部に白い斑点のあるノロが車の音に驚いて林の奥に逃げ込んだ。

カタカタカタとキャタピラの音を立てておもちゃのような戦車がトラックを追い抜いて行く。キャタピラがたるんで、躍るように回転する。

「あんな小さな戦車を、どんな格巧で運転してるのだろう！」

戦車は急にスピードを上げたり落したりして山道を一生懸命に走る様子がおかしいのか、小さな子供は田舎弁でしきりに父親に話し掛けていた。一時間程走って、車は丘の上の村の事務所の前に止った。さき程の戦車も停っていて、戦車兵らしい眼鏡をかけた中年の男が事務所の前の椅子に腰掛けて、お茶を飲んでいた。事務所の前で、筒ッポの着物の袖を光らせた小さな男の子が遊んでいた。その子どもの足下で、数羽のキジが餌をついばんでいた。全員はここで降りた。岡の上の平たい台地が碁盤の目のように区切られ、広い畠と同形の練瓦の家が並んでいた。ここが開拓村だった。

大矢は東京の学校を卒業、農事指導員として開拓村に入って三年、親戚の娘　かよ」を娶った。最近になってかよは、夢のように幸福な新婚生活ではあるが、影のように忍びよる不安を、しだいに感じ始めていた。

かよは、かねて見たいと思っていた湿地帯を、村の若い女友だちと一緒に見に行った。湿原はヒトク駅の北側の荒地一帯に広がっていた。

「この湿地は世界の三大湿地の一つなのよ。表面はただ草が茂る野原に見えるけれども、すぐ下は水なの、今は秋で枯葉ばかりだが、初夏になると、それは美しい色とりどりの花が咲くお花畠に変るのよ」

湿地帯は見渡す限り茫漠と果しなく広がっていた。遠い右手に万年雪をいただいたソ聯領の山が見える。国境を渡る風が、千古変らず湿原の隅々まで花の種を粉雪のようにまき散らすだろう。花粉が嵐のように空を覆うだろう。やがて花の季節が終わり数知れぬ花の遺骸は腐り、ドロドロになるだろう。だが、いかに変り果てようと、湿原の花の種は、槍のように、その体内を突き刺すのだ。かよは湿原の魔力をひしひしと感じ始めていた。湿原の岸に土で作った満人の家が建っていた。今まで、家の前にいた満人の子どもが、かよたちを見ると大急ぎで家の中に入った。暗い家の中には人の気配はなかったが、恐らく部屋の隅で憎悪をこめて我々の行動をうかがっているに違いない。

開拓村の耕地は、以前満人と朝鮮人が開懇した所だった。それを満拓公社が強制的に買上げ、彼等を奥地に追いやった。追われた彼等は外地に行くか、日本人に使われるかするほかに生きる道はなかった。

ここの国境を流れるウスリー河の対岸に、こうして追われた朝鮮人部落があります。彼等は常に満人と連絡を取りながら、奪われた土地を、取戻す日を待っているそうです」

「冬になり、ウスリー河が凍結すると、彼らは渡って来るのです。雪の降った朝なぞ、日本の監視所がいくら気をつけていても、対岸のソ聯領から歩いて来て、帰って行った靴の跡を発見するそうです」

「今でも夜になると、湿原のどこからか、赤いのろしの火が上るのを見ます」

「湿原の下は水が流れています。じっとよどんで動かない所もあれば、急流のように音を立て、流れている所もあるそうです。水底の水温は夏でも摂氏二度以下だから、生物の遺体は分解されることはありません。生きた儘の姿で残っています。人も馬も生きたままの姿で湿原の中を宛もなく、さまよっているのでしょう」

かよは、その夜の会話の中で、自分の幸せな生活と満人との格差について話し合った。

「日本が行ってきたことは、対立を越えて大道に就くという天の道の考え方に基いているのだよ。満人は日本人と協力することによって、いずれ豊かな生活が出来るようになるのです。それに、日ソ間には不可侵条約が結ばれているし、ソ聯は独逸との長い戦争で戦力は消耗しているし、ソ満の国境線は世界最強と言われる関東軍が守っているのだよ」

彼女は自分の小さな手が、がっしりと強い夫の手の中に包まれるのを感じた。

かよが開拓村に来て最初の正月を迎えた。村の人々は日本の正月と同じように、朝はお雑煮を食べ、晴着を着て皇居を遙拝し、夜は村の会堂で新年宴会が開かれた。各家庭から持ちよったご馳走が運ばれ、村長の音頭で祝

杯の後、無礼講となり、郷土の民謡や日本を離れる当時に流行した歌、小学校の頃の歌と宴会は最高頂に達した頃、若い女の人たちは日本を発っていちばん新しいかよの歌を聞きたがった。そこでかよと彼女の夫に白羽の矢が立った。かよの夫は、白鉢巻にたすきを掛け、長い竹の日本号を持って黒田節を踊れば、男たちは〝酒は飲め飲め、飲むならば〟と合唱した。かよは〝さくら〟を舞い、レムのお母さんたちは〝さくら〟を合唱した。暗黒のおしよせるのも知らず、舞扇をかざして〝さくら〟を舞う新妻の可憐な姿に、拍手は何回も起った。

その年の五月、ヒトク駐留の各部隊は、起床時間を三時間早めた。兵舎の周辺は、まだ真暗だった。その兵舎の正門をシャベルをかついだ兵隊が中隊毎に将校に引卒され、湿原に向った。声を出してはならなかった。現地で湿原に近い土を厚さ二十センチ幅三十センチ長さ五十センチ程に切り取り、人の背丈の高さに積上げるのである。三十メートル毎に銃眼のあるトーチカまで作られ、万里の長城に似ていた。作業中、誰もが声をひそめ、暗い中で土を切るザクッ、ザクッという音だけがきこえた。そして夜の明けぬ間に、兵舎に戻り、就寝した。作業は半月程で終了した。夜が明けて見渡すと、土の万里の長城が延々と湿原の果までも続いていた。金をかけず、秘密裡に人力とシャベルで作り上げたのである。これで冬になれば、固く凍りついて、充分役に立つという。それから半月後、ヒトク周辺の各部隊は兵舎、什器具類、酒保の酒等を司令部に移管した後、砲、戦車、車輛は無蓋車で偽装し、将校、兵員は有蓋車に乗り夜の間に出発した。山海関を越えて中支に渡り、呂号作戦と称し中支戦線に参加したのである。かくして開拓村周辺の関東軍は事実上ゼロになった。

八月九日、ソ聯が参戦し、ソ聯軍は飛行機・戦車をもって、国境線を一気に突破したのである。

駅の時計は九時少し前だった。電車のプラットホームに行く階段の少し手前で肩をポンと叩かれた。目の前にダブルの背広を着た背の高い黒人が立っていた。水沼は顔を見上げた瞬間、譲次だとわかった。

「ハイ、あの時の譲次です」

「随分立派になったなー」

と言うと、彼は胸のポケットの辺をおさえると

「中身の方は昔と同じです」

と笑った。その表情は十年前と同じだった。水沼は彼と階段を登りながら、

「どこまで行くの」

「私は渋谷、水沼さんは？」

と聞くので鶴見と答えた。

彼は着いたばかりの渋谷行急行に乗ると水沼も〝発車

するまで〟といって腰をかけた。

「今まで君もよく知っている、珍らしい人に会っていたんだ」

「よく知ってるって、一体誰ですか？」

「ぜんにいた女の人」

というと

「エッ、レム」

と懐かしそうに、眼を輝かせた。

「彼女から驚くような話を聞いたんだ。一時間やそこらでは話し切れないよ」

というと、彼はポケットの紙入れから名刺を一枚出して

「ぜひ教えて下さい。いつでも良いけど、午前中はだいたい暇です。今晩は用事があるが、ふだんの夜は十時を過ぎたら、いつでも結構です。夜の渋谷を案内しますよ」

といって、名刺をよこした。それには、パブ・レストラン〝扇〟マネージャーに彼の名前があり、裏に住所と地図が書いてあった。発車のベルが鳴ったので、水沼が電車を飛出すと、譲次は立上ると大声で

「〝セン〟ですよ」

と言った。水沼はOKの代りに、右手の親指と人さし指で丸を作ると目の高さにあげて電車の窓ガラスに押しつけた。

五七・六・二五

ハイビスカスの島とヴァイオリン

山根　三枝子

どうにか寒い冬も過ぎ去り暖房なしでも結構すごせるようになると体全体がかすかながら春を取戻した草木のようになる。腕をなでてみながら皮膚に何んとなく艶のある張りが出ているのに気づいた、こんな或日テレビを見ながらうとうとしかかっていた朝子はハッとした。画面にはクローズアップで映し出されたハイビスカスの真赤な花が風に揺れている。あゝなつかしい花だ。忽ちに消えてしまった映像だが色々な事が次から次へと流れるように思い出されて来た。

朝子は今彼女がくつろいでいる室の片隅にあるヴァイオリンに目をやった。斜めに置いたテレビとピアノの間に出来た三角形の空間に居心地よさそうに納っている。これが朝子の所有物となったのは、所は台湾の台北市、時は今から五十余年も以前のことだ、と云うと本当に遠い昔のことのようだがアッという間の年月であったように朝子には思われるのである。ヴァイオリンは、二百年位は命があると云うからこのヴァイオリンは未だ未だ生きながらえることだろう。そして朝子は考えた。わたしは人間だからやがては此の世から消えてしまうがこのヴァイオリンは私の無きあとも色々なことを経験し又変りゆく世界も見聞きすることだろうと。一体どんな人と？そして何人位の人と？このヴァイオリンは触れ合っていくだろうかと。朝子は彼女のあとこのヴァイオリンを専有する未だ分からぬ人、それは自分の血のつながりのある者であることを希望するのだがその人に対して一寸ばかり嫉妬するような気持がないでもなかった。朝子は心の中でつぶやいた。「私の愛するヴァイオリンよ、どうか私のことそして私と共に経験した数々のすばらしいことをよーく覚えていて頂戴ね。」と。

このヴァイオリンは表側の木は杉らしい真直な規則正しい木目が縦に通り裏側は楓科の木らしく幾分荒らくて太目の木目が横に通った一枚板だ。そして感じの良い明

かるい柿色に塗られている。木は枯れに枯れて弾く時にはヴァイオリン全体が不思議な振動を起こし朗朗と鳴り響く。コマの両わきにある*f*孔といわれている*f*字形の切り込みからは胴体の中を覗いてみることが出来る。古くなって茶色味を帯びた紙の上にはニコラス・アマチウス・ファシット（製作）クレモナと書かれてあるのがはっきり読みとれる。

朝子はE線の音を開放絃で思い切り出してみた。稚い感じのする音色だ。その音は朝子を十才そこそこの少女として台北の街によびもどす。台北の家の庭には大人の背丈より高いハイビスカスの木があって真赤な花を一杯つけていた。あの花や葉っぱでおまゝごともしたっけ。南国の強い光線をはね返すような真紅の花とあつみのある艶やかな緑の葉っぱは亜熱帯のムッとするような空気と土から蒸発する臭いまで伴って朝子の脳裡によみがえる。

朝子が通った台北の第一師範の附属小学校に木戸先生という先生がいらっしゃった。背が高く長髪をオールバックにして縁なし眼鏡をかけておられた。先生は生徒の中の希望者に放課後ヴァイオリンを教えておられ朝子も習った生徒の中の一人だった。

父母との話し合いでヴァイオリンが先生を通して註文されていたようで或る初夏の午後木戸先生がこのヴァイオリンを抱えて彼女の家まで持参して下さった。当時すでに$\frac{3}{4}$のヴァイオリンもあって子供用に使われていたが体格の良い朝子は四年生でもどうにか大人用のものが使えた。「一寸今は大きすぎるけど体はすぐに大きくなりますから・・・」と木戸先生は母におっしゃった。

そして「お宅のお嬢さん天才ですよ。何んでも譜をみてどんどん弾くのですから・・」とかなんとか冗談半分の先生の言葉を嬉しそうに聞いていた彼女の母の顔。未だ人生に夢も希望も多分にあった三十代半ばの母の顔を朝子は思い出す。小学生の頃いくらか勘がよく又健康な体にそなわったねばり強さもあった朝子は他の子供達に比べて早く上達した。

放課後お掃除も済んで気持よくなった教室でレッスンが始まる。それまでは校庭の肋木や平行棒の所でまるでお猿そっくりにさかさまにぶら下がったりして遊んでいた朝子達はお教室に入る。ボーイングを可成り練習してどうにか音が出せるようになると教則本には入った。練習曲をはじめに先生と一緒に弾いてちゃんと弾けると今度は先生が教師用の譜を弾くので二部合奏のようになる。朝子が八分音符のリズムだと先生は四分音符で悠々と、朝子が二分音符でのばしていると先生はチョコチョコと八分音符で走るといったリズムの面白さ。そして音も適当に離れてみたり和したりで易しい単純な練習曲でも結構面白かった。

秋の学芸会の折にはシューベルトの子守歌やクシコス

のポストとかを独奏したり又或る時はマーチ風の曲を三四人で合奏したりした。

あれだけ熱心に生徒達にヴアイオリンを教えていた先生のことを朝子は忘れられない。勿論先生は無報酬だったのだ。そして暑い夏休みにも朝子には自宅に練習に来るよう声をかけて下さったのでカンカン照りのどての上の道をヴアイオリンを提げて先生のお宅に伺った。どてから降りて夏草のボウボウ生えた中の細い道を少し歩くと先生の家のお玄関。草っぱらではヴアイオリン片手に蝶やトンボを追ったりした。先生の家は、今はやりの言葉で言えばほんの兎小屋のような家であることは子供である朝子の目にも単純な事実としてのみ映った。若い奥さんが着物にたすきがけという姿でまる見えのお台所でコップに冷い飲み物を用意して下さっていた。小さい子供がぐずっていたりしたこともあったが先生はいつもおだやかで豊かな顔つきをしておられた。

今度はA線を使ってサードポジションでEの音を出してみる。E線を使って開放絃で音を出すよりいくらかませた音色だ。すると朝子の思い出の中に現れ出るのは村橋先生だ。彼は米国の大学を出て旧制高校の英語の先生をしていたがヴアイオリンも弾けてたまには独奏会を開いたりして朝子も聴きに出掛けたこともあった。この先生は高校の男子学生（旧制高校なので十七、八才以上の人達）ばかりあつかっていたので女学校に入学したばかりの女子生徒の指導にはあまり適していなかったように後日朝子は思った。練習曲の選び方も適当でなく難しすぎた。滞米中自分が習った曲を使ったので日本には楽譜がないような曲であった。それで練習のあとなどに「今度はこれにしような」などと云って五線紙に私のために譜を写したりしていた。髪の少し縮れ気味の美男子タイプの男だった。インクですらすらとても早く譜を写していった音符の形やインクの色まで朝子は覚えているのだ。朝子は読譜のむずかしさのはじめての壁につきあたった。シャープやフラットや本位記号のあまりに多いものやポジションも一になったり四になったりだと指使いも混乱して来る。彼女は練習が重荷になって来てレッスンをさぼるようになって来た。母親は「又きょうもお稽古にいかないの？　お月謝が勿体ないじゃないの」なんて怒鳴るまでになった。

「練習してないから弾けないもん。行ったって仕様がないもん」と朝子はふくれっ面。

「弾けないからいくんじゃあないの！」と母親。

とうとう朝子はヴアイオリンごと追出されてしまった。仕方がないので朝子は先生の家の方向にトボトボ歩いていくより他なかった。

丁度その時台湾人のお葬式の行列が通りかかった。シンバルやトランペットのような音を出す楽器を鳴らし傭われの泣きばばがその葬送の音楽に合わせて大げさな泣き声とも歌声ともつかぬ声を張りあげ家族とおぼしき人達は本気で泣きながら「アイヨー　アイヨー」（悲しみや残念な気持を表わす言葉）とわめいている。皆白っぽいベージュ色の本麻の衣を纏い三角にとがった防空頭布のようなものをかぶっている。お棺は丸太を三つ割りにしたような片面が円周の一部のような丸みのある板で作られて両はじを麻縄でつられて担がれ歩調に合わせてギシギシと音をたてゝいた。その葬列はほこりっぽい郊外の道を親指山の方向に向ってだんだん小さくなってゆき葬送のあわれな楽の音も小さく消えていった。

遠い回り道までして葬列をみていた朝子はハッと我に返り先生の家に向った。その日練習した曲はシベリウスの交響曲の中からとって編曲したアリアであった。音というものは聞いただけで突進したくなるような音、例えばド、ミソ、ドを適当に組合わせたもの――進軍ラッパもそうらしい――又夢の中か水中にほんわり浮かんでいるような気分のする和音の連続もある。しかしその日の曲の音は二つ三つ連続して出しただけで涙がにじみ出るような悲し気な短調の音階で出来たものだった。朝子はその悲し気な美しさに心を打たれ涙ぐむのをどうすることも出来なかった。母に追い出されお葬式の列をみたりして気分が滅入っていたせいも多分にあった。先生はそのことに気づかれたのか気づかれなかったのか、気付いたとしても女子生徒の扱いに慣れない未だ若かった先生はどうしてよいか分からなかったに違いない。

「この次はグリンカの「ひばり」にしよう」　先生はペンを取って又写譜を始めた。ピースものなのでそんなに手間どらずに書きあげたがクレセンドやフォルザンド、ピアニシモ等の強弱記号から運指記号やスラー等まで書き込むことはとても面倒なことなのだった。「ひばり」は南ヨーロッパの春の田園を想い浮べるような明かるい楽しい曲だった。先生の写譜の時間もプラスされたせいかその日のレッスンの終る時間はずっとおくれた。帰る時先生の奥さんがかけ出してきて

「何んだか生垣の外に中学生がさっきからいるけど……お兄さんかしら？」といって心配して外まで出て来た。みると夕焼を背景に兄がうす闇の中にいるのが朝子には分った。「えゝ、そうです。」　今にして思えば朝子はその時の兄の存在を空気の存在位にしか感じていなかった。しかしその兄も大学を出て総督府の役人になり第二次大戦で散った。長年経った今、朝子は「お兄さんありがとう」と過ぎし日の兄の姿に声をかける。

二長調の軽ろやかな曲を奏なでる。すると赤尾寅吉先生が朝子の思い出の画像に現われる。村橋先生は希望転勤で内地に帰ったので朝子は今度は赤尾先生に習うことになった。先生は五十才前後だったようだがローティーンの朝子にはおじいちゃんかおじちゃんのように思われた。もう一息おしつぶすとブルドックにいくらか似て来

るような顔、ずんぐりでいつもニコニコと優しく何んでも気楽に片づけていくような感じの先生だった。母親が何処からか聞いてきた噂に依ると上野音楽学校（今の芸大）の師範科を出て州立第三高女の先生を長い間やっているとのことだった。今日では考えられないことだがその先生はピアノもオルガンもヴアイオリンも歌も教えていた。本科卒だとピアノとかヴアイオリンとかを一つだけ専門にしたのだが師範科は浅く広くという傾向があったようだ。日曜日毎に朝子はヴアイオリンを提げて先生のお宅に通った。何時でも朝子は自分が教えて貰うまでに三四人の人達の練習が済むのを待っていたのでピアノ等随分沢山の練習曲を覚えてしまうという良い点もあった。女学生時代を赤尾先生の多分のあまやかしのある指導のもとで教則本だけは可成りのところまで進んだのだった。丁度刈込みをやらない植木がのびていくような具合に。

台湾という島にはその昔六、七世紀の隋朝の頃に中国大陸から渡って来た人達が定住したそうだ。その後スペイン人やオランダ人が部分的に領有する時代があった為かゼーランジャ城とかクルベー浜とかアジンコート等ヨーロッパ風の地名等が残っている。もっと沢山ヨーロッパ文化の足跡が残されていたら台湾ももっと面白い島になっていたことだろう。十七世紀に鄭成功（明の将軍と日本人の母との混血児）がスペイン人やオランダ人を追振って台湾は再び中国に復帰した。しかし一八九五年には日本の植民地となり一九四五年には又中国に復帰している。日本の占領した五十年間には皇民化ということが政治や教育面で強張され台湾人は非常に日本人らしくなり日本文化の影響を多分に受けたようだ。第二次大戦後日本人は台湾から追出され、後蔣介石がやって来て祖先は同じだが言葉も感覚も異民族のようになってしまっている台湾人を支配するようになったのだ。

台北市の三線道路には要所要所に支那風の城門が残っていた。東門（トウモン）と呼ばれる門の近くに赤尾先生の家があった。門の近くにはがじゅまるといわれる樹があって豊かな長いひげ（根のようなもの）を枝から垂らしていたし高々とのびた椰子の木は風にざわめいていた。或る日練習の帰途お祭の行列に出会った。行列の中で一きわ人目を奪うものはひょろひょろの背高（ヒイタカ）人形とそれとは対照的な背は低いが、がっちりした日本にもあるあの鍾馗さんのような人形であった。背高の方は高さ二米もあるかと思われる人形で人間が中に入っていて操作していた。大きな目玉をギョロギョロ動かし羽で出来た団扇であおぎながら大またで悠悠と歩く。みどりや桃色や水色の人絹で出来た支那服を着た人形は時折、傍にいる子供達を捉えようとする。子供達は恐がって叫び声をあげて逃げる。単純で賑やかな支那風の音楽は威勢よく鳴る爆竹の爆発音で一層景気づけられる。列の中には御馳走の屋台も加

わっていて焼豚など生きたまゝの姿で耳も口もそのまゝ、お腹の中味だけは出されて四肢はだらりと下がり鞍のような台にまたがせてあった。白くて大きなお饅頭はどぎつい食紅で色どられ「あれは豚の血がぬってあるのよ」などと云われるのを朝子は子供心に本気に信じていた。そして夜が来ると場末の商店街の亭子脚（ティキャク）（屋根のある歩道で又店先でもあるところ）に作られた小さな舞台で人形芝居が始まる。三、四十センチ位の背丈の人形が王様や将軍、お妃や家来など様々な服装で派手なゼスチャーで踊ったり喧嘩したり、たまには人形師の腕がニュッと現われたりする。そして台湾語で声高に時には早口、時にはゆっくりと男がかげで喋っている。会話の合間にはドラやシンバル又は胡弓の東洋的な音楽が一段とかしましく鳴り響く。アセチレンガスの臭い、ニンニクや焼肉の臭いがただよい被征服者なるが故に日本人より低い生活水準を強いられていたらしい台湾の庶民達の祭の夜は更けていく。

ベートウベンの交響曲第六は朝子の東京の学校の界隈をそのまゝ表わしているような感じだ。特に第二楽章のはじめにうたい出す第一ヴアイオリンのメロディーを聞くと朝子の心は何年か前のあの国分寺の奥の学校の辺りにさまよい出る。

女学校を卒えて東京の学校に進んだ朝子は一年ばかりして慣れて来た頃又好きなヴアイオリンの練習をはじめる。上野の音楽学校の蜂谷先生といって四十代も終りの女性のヴアイオリニストに師事した。

明治時代安藤幸子先生がヨーロッパに渡り当時のヴアイオリンの巨匠ヨアヒムに師事し非常な努力の末本格的な奏法を身につけて帰国した。そして揺籃期の上野音楽学校でそのドイツ式奏法を女性らしい忠実さと綿密さでこれこそ真のヴアイオリン奏法と信奉して生徒達にたたき込んだ。そのたたき込まれた生徒の一人であった蜂谷先生は安藤先生にまけずおとらず、綿密に忠実にドイツ式奏法で生徒達をきたえまくったのだった。台北の赤尾寅吉先生のあまやかしの指導で弾いていた朝子は彼女の本格的奏法の前では始めっからやり直しということになった。左手の運指はよいとして運弓は根本的にやり直さねばならなかった。乱暴とも思える位強く又ある時は早く弓を絃にこするので物すごく汚い音が出る。それでもバリバリと弾くというやり方を二三ケ月もやっているうちにその不快音はそのまゝのやり方をしていてもだんだんと力づよいがやわらかで美しい音に変化して来る。艶も出て来る。これこそ本式の音なのだ。左指の先には絃を強くおさえることに依りタコが出来る。首にも左耳の下辺りあごあてのあたる部分に紫色がかった丸いあざが出来る、右手も弓が一番強くあたる指にはたこが出来る。この位になるとどうにか奏法も本格的になって来る。

「あなたは絶対に裏切ったりしない私だけのお友達ね

」等とヴアイオリンに喋りかけヴアイオリンを提げて譜面台と楽譜をかゝえて寮を出る。当時国分寺駅からバスで十分という学校の所在地附近は雑木林と麦畑の一面の広ろがりで季節毎にそれぞれ美しい装いをしていた。寮の門から出て道路を横切るとすぐ雑木林になっていた。秋もいくらか深み葉を落した木々も多い。林の中にも何となく踏み分けられた小路がある。枯葉の音をカサコソたてながら深く深くは入ってゆく。もうこの辺りなら何処にも聞えないだろうと思う辺りで譜面台を組立てて楽譜を置き練習を始める。此処が朝子とヴアイオリンだけの知っている秘密の場所なのだった。晩秋の陽差しは心地よく木の間から洩れて来て充分な明るさと暖かさを与えて呉れる。あたり一面の静寂さと秋の澄んで乾燥した大気はヴアイオリンも朝子をも最高のコンディションにするように感じられた。ろうろうと響く音色は林の木々まで一緒に振動させて音を増幅していくようであった。林の小鳥達も鳴声を止めてヴアイオリンの音の語る物語を理解しようとした。あゝ人生の素晴らしい時よ！　この瞬間の満ち足りた幸せでずっと止どまっていることが出来たら・・・と朝子は思うのであった。

春の発表会が有楽町駅近くの小さなホールで開かれることになった。朝子はローデの協奏曲8番の第一楽章を弾くことになった。むずかしいばかりで華麗な曲ではないと思ったが弾きこなしていくうちにだんだん味わいが出て来た。その曲の一部に十六分音符に装飾音が着いたものが次から次に出て来るテンポの早い部分があった。サーカスで云えば至難な曲芸、体操ならウルトラCとでもいうような所かも知れない。一応練習はして来てあったが先生の家でレッスンを受ける時装飾音の為か指がモタつきどうしてもテンポが乱れた。先生は私に正しいテンポを分からせようとしてだんだん興奮して来て「そうぢゃあない」「そうじゃあない!!」という声がだんだん激しくなって来る。遂に弓で力一杯楽譜をパンパンと叩く。弓から松やにの粉がきりのようにパアッと吹き出て譜面がかすんで見える。それでも朝子は早いテンポに乗ることが出来なかった。というより上ってしまって自分が何をやっているのか分らなくなってしまった。先生は「呑気過ぎるじゃあない!!　発表会は五月なのよ」とヒステックに怒鳴り出すし朝子はどうしてよいか分かならく泣きだしたい気持を必死にこらえた。

練習が済んで帰る時とても淋しい顔をして朝子は「さようなら」と先生に挨拶した。先生は何時もなら次の生徒に教えるので玄関までは出て来ないのだがその日はサット立ち上って朝子を送って来てくれた。

「あなたはやれば出来るのよ。だからしっかり練習しなさいって云うのよ。」と先刻とは打って変って優しそうな顔をしてはっきりした口調でいった。そして情熱的な眼で朝子を見つめ朝子の肩を抱くようにして叩いた。その

時朝子はジッと先生の湖の様な感じのする眼を見つめていた。「何んて美しいひとなのだろう」と心でつぶやきながら。ヴアイオリンにすべてを捧げて来た独身の女性。世間一般のこの年令の女に見える図々しさの片鱗も見られない純粋さ。「先生好きよ、大好、大好!!」と朝子は心の中で叫ぶのだった。

先生の家を出て荻窪駅から電車に乗り新宿駅で降りてヴアイオリンをあずけて日比谷行のバスに乗る。二月から三月にかけての試験期間中、朝子はハーディーやメレディスの作品に取りくんで忙しく毎日寮にこもったきり外出もしないでいた。その日が久々の外出だったのだ。三月も終りに近く急に暖かになった為か家々の間に桜の花が咲いているのがバスの窓から見えた。歩いている人達の服装はすっかり変わり皆軽ろやかで明かるい色の服装の人達が楽しそうに幸せそうに往き来している。服装に無頓着な朝子もさすがに自分のひっかけて来た真冬に着るボテボテしたコートがあたり一面の華やかな雰囲気とかけ離れたものであることに気がついた。先刻の先生の所での醜態、そして又自分の能力に対する失望で先生の家を出てからずっと朝子は泣き出したいような気持を我慢しつづけて来たのだった。そして独りで映画劇場の中には入り二階の暗い座席に腰を降ろした時は本当にホッとしたのだ。もう大丈夫、いくら泣いても誰にも見られはしない。と思って非常に楽な気持になってドッとばかり涙を溢れ出させた。丁度「オーケストラの少女」を上映していた。ディアナ・ダービンの美しくて楽しい歌声、ストコフスキーの指揮で奏でられるハンガリヤンラプソディやトラヴィアータの曲が美しけれが美しい程楽しければ楽しい程涙腺は刺戟された。泣き泣き二回りも見て暗くなってから寮に帰った。泣き過ぎて頭が痛くなっていた。

朝子は英語を専門とする学校に入学し卒業しながら横道のヴアイオリンに情熱を傾けて過ごした四年間であったようだ。朝子はヴアイオリンを提げて東京から台北に戻った。南国育ちで色の黒かった少女は東京の生活ですっかり色白になり垢抜けして人生で一番美しく見える時期になっていた。或る日父の友人である台北高校のM教授が朝子の家を訪れた。彼は数学の先生であったがヴイオラが得意で又ヴアイオリンもセロも弾けた。そして高校と大学の学生達で小さな管絃楽団を組織していた。M教授は朝子が帰台していることを知って彼のオーケストラの第一ヴアイオリンを加勢してくれないかということであった。勿論朝子は喜んで参加させて貰うことにした。M教授のことは彼女の兄や兄の友人達からいろいろ聞いていたしそれに学生時代夏休みに帰省した折にヴアイオリンを持参して遊びに行ったりしたことがあった。上野出身のピアノの先生をしている奥さんの伴奏で彼がヴアイオリンを奏くのを聞かせて貰ったり又朝子も奥さんの

伴奏で弾いたりした。演奏の最中に男の子達が三輪車で室の中を乗りまわしていたが無頓着に平気で夫婦で仲よく合奏していたりした。

朝子はそんな家庭を何んとなく羨しくも思ったりした。彼はみるからに頭脳明拆といった感じで色白の額が広く眼鏡の奥で眼が鋭く光っていた。

文化祭も近づき学生オーケストラも忙しくなった。大学生はともかくとして高校生の方は皆真面目でガリ勉家の様な顔つきをしていて冗談一つ言わないような人達ばかりであった。二十才前後の未だ大人には成り切っていなく蛮カラーの身なりをしているが内に熱きものを秘めたといった感じの人達であった。モーツアルトのヴァイオリン協奏曲五番は難曲であるがそれを弾ける台湾人の学生がいた。朝子は彼は一体誰に教えて貰ってあれだけ弾けるようになったのかなと一寸ばかり感心した。彼が独奏して朝子をはじめ他のメムバーは伴奏のオーケストラを受持った。未完成交響楽の第二楽章とあとモーツアルトの絃楽四重奏曲も演奏することが決って練習が始った。

今までは専ら独奏用の曲ばかり練習して来てオーケストラのメムバーとして演奏するのは初めての経験であった朝子にとって合奏するということはとても素振らしいことに思えた。朝子達第一ヴアイオリンが高くて美しいメロディーを奏するとヴィオラやセロが太い男性的な音とリズムで助けてくれる。演奏を聞くことは楽しいことだが演奏するということの方が何倍も何倍も楽しいものだということを朝子は思うのだった。男子学生達は技術的にはさまざまな欠点もあることを朝子は気づいた。しかし、がむしゃらにでもやり抜いて弾きこなす男子学生達のファイトには感心した。むずかしい部分もまがりなりにもとにかくまとめていくことが出来た。練習した後先生は汗を拭き指揮棒をおいて「どうだね？感想は」とよく学生達にたずねた。皆批評がましいことは何も言えないで上気した面持でたゞ精一杯弾いただけだという表情で溜息をつき、かすかに笑って顔を見合わすだけであった。

合奏も確かに楽しいものであったが、朝子は練習の度にM教授に接することが出来ることも同じ位楽しく又朝子の心を幸せな気分で一杯にしてくれることを感じた。M教授も朝子が第一ヴアイオリンで他の学生達よりずぬけて美しい音色でうたってくれることがとても満足であった。音楽の美しさと魅力は知的で完成された男性であるM教授と完全に重なってしまった。朝子は合奏が楽しければ楽しい程M教授に対する憧れの思いはつのる一方であった。

合奏の練習は時として夜になることもあった。練習がすんで帰る時朝子は「バスで帰りますから……」と遠慮がちに云った。家までは二停留所位の距離しかなかった

が歩いて帰ると云えば教授は送らなければならないことを朝子は察していた。教授は「いいえ、歩いていきましょう。お送りしますから」と指揮棒を振った時の上気した顔はいつもの平静な顔になっている。口下手な数学の先生は「お送りしたいのですから」と思い切って付け加えた。バスに乗るなら正門の前に出るわけだが歩くとなると裏門の方に回って外に出て僅かに残っている田甫もある住宅地を通って行くのであった。夕立の去ったあとの涼しい夜風にあたりながら朝子はM教授と二人で歩くということにあふれるばかりの幸福感を感じた。朝子の家にゆくまがり角の昼光色の街灯の下にハイビスカスの花が開き切って南国の夜景にもどかし気に揺れていた。

丁度朝子のすべてを象徴するように。

連載

ハイラル挽歌（六）

第一章　海拉爾の白旗

金子正義

（七）

第一中隊の岩松軍曹は、非常召集の混成分隊を率いて兼てから命ぜられていた伊東台第五陣地に急行した。漸く地下陣地入口を発見して通過しようとすると、衛兵が確認するから待てと制した。

長い間陣外に待たされ焦々していると、地区隊長の山岡中尉が出て来て、

「お前達は此処の編成表に無いぞ、第二地区陣地だろう直ぐ所属部隊へ行け」

と言った。岩松軍曹は唖然とした。伊東台より第二陣地の河南台迄約二十粁もある。途中ソ連軍と接触したら最後である。どうしたものかと後に整列している兵隊達を見ると、余りのことに憤然した顔を一斉に向けている。中にはガックリと力を落している者や、どうしても此処に入り度いと切望する視線を向けている。

「隊長殿、何処でも良いですから自分達を入れて下さい自分達は此の陣地で死ぬ覚悟であります。陣の隅で戦かわせて下さい」

と岩松軍曹は分隊員の願望を汲み取って真剣な表情で訴えた。

「莫迦言え、他の部隊要員を入れる訳にはいかん、それに二地区陣地の方が堅牢だぞ、此処はソ連軍が攻撃して来たら一溜りも無いぞ。早く行け」

と山岡中尉は嗤い作ら言った。

言われて見れば確に第二地区陣地は旅団の戦闘司令部のある難攻不落の永久陣地と聞いている。編成の手落ちは返って幸いかも知れない。と気を取り直した岩松軍曹は、十三名の分隊員を見渡して、

「隊長殿の言われる通りだ、河南台へ行くぞ、さ、急ごう」

と分隊に伝え、元の斜面を駈け下りた。

一刻も早く第二地区陣地に行こうと、伊東台から河南

台への最短距離の三百二十一陸軍病院の裏手から、市街地を横切ろうと駈け進み、広大な旧軍司令部構内を突切って、軍用鉄道引込線を越え遙か彼方の市街を見渡すとハイラル市街は爆撃で黒煙が天に宙していた。とても通れそうもないと断念し、東山軍官舎から北に折れ、無人の兵器廠構内を駈け抜け、市街の北端に通ずる道路に出ると、道の両側に市内から脱出して来た邦人達が、疲れ果てて倒れていた。

岩松分隊が通過して行くと、蹲み込んでいた三、四人がバラバラと駈け寄って、

「兵隊さん、私達は何処へ行ったら良いのか」

と口々に叫んだ。

爆撃と火炎の市街から脱出して、内陸部へ避難しようとしたが、頼りにする軍隊が右往左往していて、何処が安全なのか見当がつかず、一日中、西に東に歩き廻って精魂も尽き果ててしまったのだった。

岩松軍曹は返答に窮した。自分達兵隊ですら所属部隊を求めて、北へ、南へと行ったり来たりしている始末である。

「鉄道線路を東に辿って早く後方へ退りなさい。自分達が必ずソ連軍を撃退しますから」

と強がりを言って邦人達を掻き分けて行くと、

「兵隊さん、頼むよ、頑張ってね」

と老人や女達が力の抜けた声援を掛ける。岩松軍曹は何にか切ない思いに駆られ、涙を堪えて避難民の間を駈け抜けた。同じ思いの兵隊達も目を俯せて走った。

漸く河南台への坂道を探し当てて登ると、数十頭の軍用犬の死骸が無惨に草叢に遺棄されてあった。要塞に入る通信隊が戦闘に不用と処分したのであろう。兵隊達は牙を露き出し、濁った目を睜いた死骸が自分達の運命を暗示するかのように思えた。難攻不落の要塞に辿り着き地下要塞に入ったが、暗い坑内と同じように彼等の心も暗く重かった。

野菜倉庫屋上の中谷軍曹分隊は、ハイラル市街の火煙を見守り乍ら対空監視を続けていた。望楼の下を慌しく各方面に駈けて行く将兵も次第に疎らとなり、軍施設地帯は無気味に静まり返って中谷分隊だけが取り残されたようであった。

午后になって時折り要塞に向う部隊や、他地区の監視哨隊が通過するが、退却命令が何処からも来ない。兵隊達は今にもソ連軍が進攻して来るのではないかと、焦々し乍ら監視哨に留まっていた。

「おい、何時迄残っているのか、零号作戦発動だ、早く第二地区陣地へ集結しろ！」

通過する隊列から指揮官が、屋上を見上げて叫んだ。中谷軍曹が見下すと、怒鳴っているのが顔見知りの第三機銃の藤野曹長なので、正規の命令でないがホッとした。

急いで監視哨を撤去し先行した藤野隊の後を追った。
藤野曹長は伊敏川の手前の窪地に停って追い着いて来る各隊を待っていた。一時間程で中谷分隊と同じように取り残されていた兵隊が二百名程集ったので、中隊編成をとって出発した。河南台地から突き出た山瘤にある東台分遣陣地の北を真直ぐに横切って河南台に登り第二陣地に入った。
要塞は既に防衛配置を完了しているので、遅参部隊は地下要塞に入れず、藤野隊は陣外部隊として再編成され要塞の外縁に構築されたトーチカや、砲座の防衛壕に配置された。杉山上等兵は中谷軍曹と別れ、第三機銃の近藤伍長の分隊に編入されて、十五サンチ加農砲の前衛壕に入った。絶えず編成替されるのは杉山上等兵ばかりでなく、ハイラル防衛の全将兵が毎日の天気のように所属が変るので、ソ連軍を喰い止めて一戦に及ぼうとする将兵の士気を甚しく阻喪させていた。
杉山上等兵は弾雨の中で助け合い骨を拾って貰う戦友の無い心細さで、せめて壕内を確かめて置こうと、縦横に掘った土龍状の新陣地を潜り廻っていると、急に中隊集合が掛けられた。
「やれやれ、また編成替か」
と駈けつけると、
「我が機関銃隊は、これより軍司令部の兵器廠に戻り、敵の進攻前に出来るだけの弾薬を運ぶことになった。徒手巻絆短剣のみ着用、身軽になって直ちに出動」
と藤野曹長が命じた。
兵隊達は河南台の急坂を滑り乍ら、
「軍隊と云う所は何時も斯うだ、今登った道をまた駈け下る、然かも朝から飲まず喰わずだ」
「何ん態こっちゃ、敵さんに爆撃されずに残った火薬庫を工兵隊が片端しから爆破しているかと思うと、今度は運び出せか！」
と交々に悪態を言い乍ら走った。無人の軍司令部構内に駈け込み、未だ爆破されてない弾薬庫に入ると、先頃の愚痴はどこえやら、いざ戦闘となれば頼りになるのは、食糧、弾薬である。誰もが真剣になって手当り次第に銃弾を担ぎ出し、幸い放置されてあった荷車や、馬力車に山積して再び河南台へ取って返した。
漸く伊敏川畔に達したが、先刻渡渉できた地点が、重い弾薬を積んだ車が渡れなかった。渡河点を探して南へ十粁程下り爆破寸前の橋を渡って、火煙に包まれた市街の南辺を迂回して河南台に達した。降りは一気に駈け下りた坂道は、重い弾薬を満積した荷車を押し上げるのが容易ではない、喘えぎ喘えぎ馬力車を引き上げ漸く要塞内の弾薬庫に搬入し終えると、兵隊達は疲れ切って口も利けず、大地に倒れて荒い息を吐いていた。暫くすると藤野曹長が来て、
「お前達、ご苦労だが未だ敵が入って無い模様なので、

再度弾薬を搬入せよとの命令だ、直ぐ出発する」
と流石に気の毒そうに言った。
兵隊達は黙々と陣地を出て何度も通る坂道を再び降った。もう誰も何にも言えず、唯、脚だけが動いていた。
漸く北ハイラル東台近く迄行くと、左手前方の三河街道をソ連軍戦車隊が轟々と進行して来た。杉山上等兵は暁にソ連空軍を最初に発見したが、此処でもソ連戦車隊を真先に発見して、
「曹長殿、ソ連軍です、日本軍にはあんな戦車は有りません」
と叫んだ。ソ連戦車隊はハイラル突入の前衛隊らしく、時々慎重に停止しては周囲の様子を窺っていた。先導の装甲車輛に原住民の満人か、潜入していたソ連スパイか、軍装でない者が伸び上っては声高に何にか叫んで手を振っている。藤野隊は大地に俯してソ連戦車隊の通過を待った。糧抹、弾薬庫の在る方向の台地では、引揚工作隊の自爆による猛烈な爆発音が上って、その都度火焔が天に宙していた。藤野曹長は、前方にソ連軍が来て仕舞ったので到底火薬庫に近づくことは出来ないのと断念して引揚げを命じた。兵隊達は落城の業火のように各所に上る火煙を背にして再び要塞への急坂を登って行った。
ソ連軍は溶鉱炉の真赤な洗鉄のように数条の鉄火の奔流となって国境を突破し、忽ち基幹道路に溢出して来た。藤野隊が遭遇したソ連戦車隊は、三河方面より街道を南下し日本軍の爆破が間に合わなかった上ハイラル橋を渡って満鉄線迄進出した部隊であった。その日、九日夜半十二時、他のソ連軍は河北山及び安堡山第一陣地の北十粁迄に接近していた。
旅団司令部の原参謀は、何度もソ連機甲部隊の進行速度を算定して、九日午后三時頃にはソ連軍主力が北ハイラルに進攻すると判断し、その詳細を知ろうと、何回も開嶺の師団司令部へ無電を打ったが応答が無かった。四時を過ぎても何処からもソ連軍の情報は入らなかった。
既に機甲部隊は各要塞の前面に出現すると判断した原参謀は将校斥候を出そうと考え、多田中尉を呼んで、
「零号作戦発動で、各軍、各部隊は独自な戦闘に入った。無線では傍受を恐れて師団から何の情報も得られない。ご苦労だがハイラル北辺より、伊敏川付近を探ってくれ」
と命じた。
多田中尉は銃剣道の達人で日本刀の外に一米程につめた古槍を持っていたが、命令を受けると、
「愈々、これが使えます」
と微笑んで、愛用の古槍を右手に下士官一名、兵二名と共に夕暮れの山野に消えた。
丁度、藤野隊が最初に要塞に到着した時で、その頃、ソ連軍の先遣隊はハイラル市の北辺に達し、伊敏川の上流に架る北ハイラル橋迄主力の戦車群が押し寄せていた。原参謀の推定はピタリと当っていたのである。

多田中尉はハイラル橋付近の敵情を探ろうと、川畔の湿地帯の夏草の中を潜行して行った。泥湿地の歩き難さと、闇で方向が定まらずいつしか三名の部下とも離ればなれとなってしまった。多田中尉は川瀬の音を頼りに漸く伊敏川に出て単身渡渉し、対岸に上って辺りを確かめた。未だ敵の進出が無いものと思い、三河街道に出ようと闇の中を進んだ。何度も演習や視察で来た方向なので気を緩めて歩いて行くと、突然強烈なライトを照射され、同時に銃弾が集中した。多田中尉は白熱の電光に眼が眩み十字砲火を浴びて倒れた。古槍は無念に握られたままであった。

三名の兵隊は草原に迷い出て餓えて斃れたか、敵戦車に遭遇して軌潰されたか、遂に一兵も戻らなかった。

開嶺方面への引揚げ部隊、殿隊長中野大尉は、焦々と時計ばかり見ていた。軍事施設爆破に行った特別工作隊の復帰がバラバラと遅いのである。殿隊の編成が、連隊行李の車輛隊や、騎馬隊、歩兵中隊等の混成なので、行軍速度に遅速があって長途の引揚げ行軍の統制が思い遣られる。その上殿隊は火薬庫、橋梁等の爆破をし乍ら引揚げるのである。

各隊は出発を今か今かと待っていて何度も伝令が尋ねに来ている。既に各方面の火薬庫や軍事施設は大爆発を起してハイラルの夜空に赫々と火柱をあげている。爆破は成功している筈であるのに第四火薬庫に向った座間軍曹の分隊が、引揚出発の二十三時になったが遂に戻らなかった。中野大尉は作業中爆死したものと判断して、不憐に思い乍ら出発の号令を発した。

ハイラル最後の引揚部隊六百余名の将兵は戦火に映える明るい夜空を背に、大興安嶺の開嶺への四百粁の途についた。

中野大尉は馬上よりハイラルの戦火の空を眺め、前方の闇を凝視して前途の多難を思った。興安街道を行けばソ連軍機甲兵団に追撃されて捕捉殲滅される危険が濃厚であった。むしろハイラル要塞に立て籠る将兵の方が安全で、殿隊六百余名はみすみすソ連軍の餌食となるのではないかと不安が次第に昂って来るのだった。

(八)

ソ連進攻前にハイラル、札蘭屯、開嶺方面より満州内陸部へ引揚げた在留邦人や、内陸部の開拓団の婦女子は幸であった。辛苦の末ではあるが、祖国の地を踏むことが出来た。だが、鉄道や主要幹線道路より奥に入った開拓団では情報も遅く、危機の迫った知らせを受けても、粒々辛苦の開拓地を離れるに忍びず、そのまま開拓地に留まっていた人々が多かった。大開拓団ではそれなりの自衛と秩序があったが、奥地の山間開拓団は規模も小さく、自衛力も無かったので悲惨であった。

亜州開拓団は山梨県人出身者が、昭和十四年入殖入来営々努力した開拓地で、始め三十名程の小部落であったが、若い三十を過ぎたばかりの井上団長の努力によって、入殖後三年目頃から漸く自活が出来るようになった。

井上団長は開拓者達を良くまとめ、五族協和の開拓の理想に燃えて付近の満・蒙人達とも親交を深め、治安の心配も無くなったので、内地から家族を呼び寄せたり、嫁を迎えたりして次第に開拓を拡げ、奥地開拓団の模範となる程になった。

戦況の逼迫と共に奥地の開拓団にも召集令状が来て、井上団長始め元気な男達の多くは応召してしまった。団長の父親は後から渡満して来た六十を半ば過ぎた老人であったが、息子の代りに団長を勤めていた。

八月九日夕刻、老団長の嫁女松子と、夫が出征している隣家の松戸安子が老団長より一足先に野良から戻ると、開拓部落の様子が平常と違っていた。部落中が広場に集まって暗い顔をしている。

「何か起きたのですか」

と松子が訊くと、

「ソ連軍が一斉に国境を越えて侵入して来たと言うのです」

と老団長の来るのを待っていた団員家族が二人を囲んで口々に叫び始めた。開拓団の人々は戦況の不利とアメリカ軍の本土上陸の噂さに不安を感じていたが、満洲は大丈夫と思い込んでいたので、急転した情況に急に騒ぎ出したのだった。

「怖いのはソ連軍じゃなくて満人よ、ソ連軍には日本軍が戦って呉れるわ、私達の怖いのは満人よ」

と松子が言ったので、集った人々の不安は一層渦を巻いて拡がった。

『ロシアが煙草二本持ち去ったのを理由に日本は一箱全部持って行った』と嘆いた袁世凱の言葉は満人全体の怨みを表わしていた。父祖伝来の土地を日本人に奪われ、表面は没法子と無気力にすら見える満人だが、いつ積年の怒りが爆発するか判らない。特に北満浜洲線以北は満洲事変以来匪族の根拠地と目されていた。朱房紅槍の昔乍らの匪族こそ姿を消したが、失地回復を民族の願望として、侵略者を殺すことこそ正義と信ずる勇敢な土匪は各所に姿を農民や樵に変えて住み込んでいた。元気な男が根こそぎ召集され、老人婦女子ばかりの開拓団の様子は彼等に筒抜けであった。

松子はそうした状況を直感して人々に訴えたが、彼女自身もどうしたら良いか判らなかった。広場に集まった人々と一緒に老団長の帰りを待って立ち竦んでいた。

老団長が老人達と野良から帰ると、

「仮令ソ連軍が入っても皇軍が直ぐ撃退してしまう、心配は無用じゃ、返って騒ぎ立てると土匪に気付かれる、平常通りせよ」

と強く言うので人々は不安のまま自分の家に戻った。
翌朝になっても情報は何処からも入って来なかった。部落の者は誰も畑に行かず、午后になると団長宅前の広場に集まって、あれこれと話し合ったが、不安は募るばかりであった。老団長が日本刀を携げて広場に現われ、駈け寄った者達に、
「柳を切って竹槍を作れ」
と命じた。付近には竹が無いので柳を切って竹槍にしようと考えたのである。人々は必死になって槍を作り、女も子供も銘々手に持って部落の出入を固めた。
緊張したまま三日目の朝となった。不安と緊張に耐え切れなくなった婦女子が、
「私達は村を捨てる。大きな開拓団へ合流した方が安全だと思う」
と言い出した。我慢し切れなくなった他の女達も一刻も早く鉄道迄出ようと叫び出した。昂奮した女達は家に駈け戻って荷物や食糧を持ち出し、馬車に乗り込んで部落を走り出た。脱出して行く彼女達は長年汗を流して開拓した部落に名残りを惜しみ乍ら振り返り振り返りして去って行った。一家族がやり出すと忽ち後から慌てて続く家族も出て、もう老団長の制止も利かなかった。
既に部落の入口には不審な満人が出没して、村の動静を探っていた。開拓団の団結が緩むか、脱出するかの機会を衝いて襲撃しようと窺っていた。脱出の馬車隊がいくらも部落を離れぬうちに、土匪は馬車隊に銃撃を浴びせて襲いかかり、一隊は「ホー・ホー・」と叫び声をあげ、開拓部落に乱入し手当り次第に家々を襲って掠奪を始めた。
老団長は土匪が掠奪に夢中になっている間に、一番近い隣の開拓団へ逃げろと命じた。人々は命辛々身一つで逃避して行った。老団長は一番最後に脱出して来た。開拓団家族は土匪の追撃を怖れ乍ら、必死になって歩き続け夕刻隣り開拓団に着いたが、既に無人であった。開拓団が脱出した後で土匪の略奪を受けたらしく、家々は半ば破壊され、主な家財や食糧は運び出されてゴーストタウンそのものであった。辿りついた人々は落胆してもう歩くことが出来なかった。
老団長は廃屋に子供や動けなくなった老人達を寝かせ、主だった者を焚火の廻りに集めて、これからどうしたら良いかと相談したが、誰も良い考えがなく、出るのは吐息ばかりであった。婦女子は疲労と空腹で虚ろな目を焚火に向けて蹲っているばかりであった。
「土匪がやって来た！大変です」
と見張りの者が息切って駈け込むと同時に土匪が殺倒して来た。頭目と見える大男が馬上から銃を構えて、
「全員焚火の廻りに集まれ！」
と金属的な大声で怒鳴り散らした。老団長は脅える人達を焚火を前にして集め、弱味を見せじと、日本刀を杖に

して昂然と胸を張って、
「武器を使うな、話をつけよう」
と大声で繰返したが通ぜず、土匪の頭目は息り立って発砲した。老団長は焚火の中に火の粉を飛び散らせて撃ち倒された。日本人達は悲鳴を上げて四方に散って逃げた、土匪は腰だめで追い撃ちを浴びせたり、馬で追い廻わして蹴散した。日本人はほとんど老人婦女子ばかりなので泣き叫び乍ら逃げ廻るだけであった。
井上松子は五才の長男の手を引き、生まれて間のない長女を背負って義父の老団長の傍らにいたが、銃声と共に老団長が火の中に撃ち倒されると、無我夢中で走った。唯、修羅場から脱出するだけしか念頭になかった。後から銃声が激しく鳴って長男が突然ヒーッと叫んで倒れた。撃たれた子供を抱き抱えて夢中に駈けた。ヒュン・ヒウンと後から弾が飛んで来て「ウウ」と背負った幼子が異様な動きをしたと思ううちに熱い血潮が松子の背に流れ込んだ。長男を抱えた腕にも滑る滑ると生血が伝わり、長男は腕から滑り落ちて、
「お母さん痛いよう」
と泣き叫ぶ。抱え起すと長男は太股を撃たれていた。松子は抱え込んで狂女のように走った。
漸く銃声も止んで開拓部落の火の手も見えなくなると、張りつめた気も緩んで大地に腰を落して息をつき、抱えた長男を見ると出血多量で息が絶えていた。背の子を下すと、既に死体であった。余りにも大きな衝撃に正気を失なって屍に縋り倒れていたが、無遊病者のように立ち上り死骸を草叢に棄てて歩き出した。二子を失なった錯乱と、追われる恐怖に唯、空中を漂うような足取であった。後から大声で松子を呼ぶ声に気付いて振返ると隣の母と嫁であった。松子は地獄に仏の心地で二人に縋りついて声をあげて泣いた。二人に慰められ一刻も早く大開拓団に行こうと励まされて、気を取り直して歩き出した。頼れる者と一緒になった心強さに三人は夜を徹して歩き続けてた。突然、闇から数名の満人が現われて、
「持物を全部出せ！」
と棍棒を構えた。松子は少しも怖くなかった、温順だった満人の強奪者への豹変に怒って、身を震るわせ大声で、
「着物だって、命だって何んでも呉れてやる、さあ殺せ！」
と眦を決して道の真中に座り込んだ。追剝満人は、表情も変えず三人を身ぐるみ剝ぎ取って闇に消えた。松子達はモンペだけの哀れな姿でトボトボと歩いた。松子はもう何にも怖れるものが無いと捨鉢な気持であった。家も親も子も何にもかも失なった自暴自棄な荒々しい感情だけが、むらむらと生じてくるのだった。
明るくなってから麻袋を拾い、首と両手を突出す穴をあけて身に着けると原始人か吃食のような姿であった。
何処の開拓団に行っても危険だと分ったので鉄道に出

ようと、三人は果て無い曠野を歩き続けた。松子は空腹と足の痛みに身の辛さがこみ上げて、

「私はどうして生き残ったのか、どうして二人の子供の身替りにならなかったのか」

「お母さん痛いよう、もう、苦しいよう」

と次第に弱まる声で訴え乍ら死んで行った子供の声が耳に残り、胸を締めつけ心を抉った。背にした乳飲子の生温い血塗りが膚に残って、自分の防壁となって死んだ子への悲痛な思いがこみ上げて来るのだった。彼女は拳で涙を振り払い乍ら南へ南へと歩き続けた。

浅草の子ら

柴田富佐子

司会者の紹介で団先生は立上り、壇上の人となった。

「みなさん、本日は誠におめでとうございます。こういう私も、実はみなさんより以上に嬉しくてたまらないのです。

あの日、みなさんと慌しく別れてから、もう二十六年の月日がたっているんですね。

二十六年と一口に言っても、決して短い年月ではなかった。家を失い、町を失い、肉親の方々を失った人も多かったでしょう。だれにとっても、大なり小なり、苦難に満ちた年月だったと思います。

長い教員生活の間に、数えきれない児童を送り出して来ましたが、私には今だにあなた達が忘れられない。つぎはぎだらけの服を着て瓦礫の中を引取りに来た父兄に手をとられ、一人一人と立去っていったあなた達の姿が今でも私の瞼には残っています。

今、この壇の上から、一人一人の顔をみるにつけ、よくぞまあ無事に生きのび、これまでに成人してくれた、と思わずにはいられません」

16ミリ撮影用のライトが、斜め前から団先生の上半身に当てられ、アイモの回転する音が静かな場内に流れ始めた。

団先生は、一段と胸を張った。

「昭和十九年の夏『帝都学童疎開実施要綱』が決定され、小学三年から六年までの児童は直ちに疎開するよう指令が出ました。それから一週間、たった一週間の間にですよ、縁故疎開、集団疎開、残留組の三つに児童を分け、集団疎開地に指定された宮城県のK温泉へ視察のため飛びました。Kでは丸二日、役場や旅館、村の有力者の家を馳けずり廻って受入れ態勢の強化に努めて帰って来ると、その翌日には子供を家内の実家に預け、家を人に貸して家内共々、学童六百名と教師・寮母十八名を引連れてKへ発ったのです」

小さな背に背負えるだけの荷を背負い、膨れ上った風呂敷包みを両手にした児童と、見送りの母親達が講堂を埋めつくしていた。黒い布を垂らした電燈が一つだけ壇上の天井についていたが、その光りは壇上の机だけを浮上らせているに過ぎない。両脇に並ぶ教師達も児童も闇の底に静かに坐りこんでいた。

午後十一時三十分上野発の臨時列車に乗るのに、幼い足を考慮して一団は十時に校門を出た。提灯を下げた母親達は、児童の列の横に一列に並び、幼い足元を照しながら黙々と従った。張りつめた胸は、一言でも言葉を出してしまうと、そこから我慢し抑えている不安が堤防を破って流出する濁水のように一度に溢れ出し、納まりがつかなくなるのを、母親達は知っていた。それに較べ児童達は、母親と離れ東京を去っていく事の意味を知るには、まだ幼なすぎた。ちょっぴり不安はあっても、六百人余の大部隊の中にいると、遠い所へ泊りがけの遠足に行くような楽しささえ感じて、その足どりは軽かった。提灯の流れは、ゆっくりと上野駅へ向っていった……

こうしてK分校主任としての団先生の活躍が始まる。一気にここまで話して来た団先生の脳裏に、一瞬ひっかかるものがあった。

『三分』

「なにぶん時間がないもんで、甲訳ありませんが、先生三分、三分でお願いします」

この二十六年目の卒業式の実行委員長をしている八木が、昨日最終的な打合せに顔を見せた時、言った言葉である。

「先生、三分」

今日受付で顔を合せた時も、八木は右手で拝むような恰好をしてそう念を押した。

これまでの経験で、団先生は話し始めてから、もう優に二十分は過ぎてしまっている事を知っていたが、まだ児童は上野駅を出発してKについたばかりである。話の核心はこれからなのだ。

長い教員生活の間でも、あれほど心血を注ぎ身を賭して事に当った体験は他にない。一日一日の二十四時間を、あれ程に張りつめて暮した時はない。三月に帰京するまでの、僅か八か月の生活の重みは、その密度が濃いだけに長い団先生の教員生活の中でも忘れ難いずっしりした手応えを残している。

五年前停年退職して教員生活を離れてから尚のこと、団先生の胸にはそこにだけぽっと陽が当っているような、活々とした、そして温かい懐しさが、喉の喝きを覚える程に切実に感じられてならないのだった。

初めての土地で、慣れない寒さと食糧不足との苦闘、六百人余の生活を背負った苦労は大きかったが、団先生にはそれらを撥ね返すだけの自信と体力があった。生甲斐ある生活とは、あの時期を指していうのだろう。

「現地では土地の小学校に入らず、K分校として二十四時間教育を実施しました」

団先生はK生活の追憶の中に、のめり込んでいった。

当日は十二時受付開始、一時から卒業式挙行。式は三時に終らせ、講堂の後半分に設営する謝恩会場で、世話になった先生、寮母さん達に記念品を贈呈し懇談に入る——それが実行委員会の決めた予定であった。Kからは旅館の主人二人と、青年団の団長だった人が招かれている。その人達は、上野発五時三十四分の急行に乗らねばならないので、車で上野まで送るにしても、五時には学校を出ねばならない。

ところが、予定の開始時間が遅れ、もうすでに三時を過ぎている。

八木はたまらなくなって、そっと席を立ち謝恩会場との仕切りになっている紅白幕をくぐった。会場は業者の手で大方設営されていた。続いて委員の新村・大室・西田・小野塚・三原も幕をくぐって入って来た。

「八木さん、よく言っといたんでしょうね。三分って」

新村は口をとがらせて言った。

「言ったよ、言ったよ。三分、三分って何度念を押したか知れやしない」

「困ったわね、いい気持に又始めちゃって」

「どうなってんのかなあ、あの人の頭」

「いま渋柿もぎって食べた話でしょ、シラミの話、まむしの話、お餅の話、まだまだ十分や二十分の話はたっぷりあるんだから……」

「例の調子でやられたら、あと一時間、四時までしゃべられちゃうよ」

「何とかしなくちゃ」

六人は交互に幕の間から顔を覗かせて団先生を見た。熱弁のせいで先生の左胸につけた黄色い菊の造花が、左に九十度傾いている。

「当時、江戸川に学校の農場がありましたから、農具はかなり沢山ありました。私はそれをみんな持っていった。集団疎開多しといえど、農具持参の学校は外にありますまい。村から借りた山地を開墾して畑にし、野菜を作りましたね。有力な父兄の方々が、純綿の衣類や日用品を持って来ては、部落の人々に配ってくれたりしたので、十分とはいえないまでもみなさんは毎日ちゃんと御飯を食べられた。その陰には、どれ程多くの人々の御尽力があったか、忘れてはならないのです」

「本当に十分じゃなかったよな。僕なんかいつも腹へってた記憶しかないもの」

「赤とんぼ食べたって話だって、団先生はそんなに空腹だった筈はないから、面白がって食べたんだろうって言うけど、みんな本当に食べてたわね」

「歯磨き粉を甜めてた子もいたわよ」

「団さんは、悪い事はみんな忘れちゃって、いい想い出

しか残っていないんだよ」
「そこが違うから困るのよ」
今日の卒業式が実現されるまでには、一年半の準備期間があった。
最初に石を投じたのは八木である。戦後すぐ元の場所に戻り、父親の跡を継いで医師となっていた彼に、町名も番地も戦前の古い宛名で九州から一通の手紙が届いた。
「八木さん、私のことを覚えていますか。一緒に集団疎開でKへ行った内藤和子です。
多分あなたならお父さんの跡をついで、元の場所にいらっしゃるのではないかと思い、着くか着かないか解りませんが、昔の番地でこの手紙を出してみます。
私の両親はまだ行方不明です。Kから帰ってすぐこちらの親戚に引取られ、心にかかりながら東京へ戻れなくて二十年以上が経ってしまいました。今となっては探しようもないでしょうが、何とか両親の消息を知りたいと、そればかり考えています。
最近体の調子が思わしくないのです。今の中なら上京して探す事が出来ると思います。
つきましては、地元に残っているみなさんにお願いします。是非同期会を開いて下さい。なるべく多くの人を集めた同期会をなるべく早く開いて下さい。その時に馳けつければ、或いは両親の最後の姿を見たという人――直接でなくても、その家族の人が私の両親を知っていたという人に会えるかも知れません。それだけが、今の私にとっては、唯一の頼みの綱なのです。
お願いします。八木さん」
この手紙を読んだ時、彼はどうでも第一回の同期会を開かねばならないと思った。それは地元に戻っている人間の義務だと思った。仕事の合間や休日に、住所の知れてる友人を尋ねて協力を頼み、手分けして地元に戻っている人数を確かめる事から始めた。下町の商家が多いせいで、元の場所で家業を継いでいる級友が予想以上にいた。酒屋・クリーニング屋など比較的広範囲に御用聞きに廻る級友が、地元に戻っていながら連絡のとれていなかった友を見つけ出す例が多かった。女子も実家が残っていれば嫁ぎ先は知れた。
八木の玄関には
「本日〇時から〇時まで休診」
という張紙が出される日が続くようになった。耳鼻科という命に直接かかわる専門でない事を口実に、八木は家を抜け出しては、古い記憶をたどって旧友の家の跡を尋ね歩いた。いつか彼は、義務感というものでなく、そうする事が楽しみになっていた。
二十六年の歳月は、小学生だった子供を成人させ種々の職業につかせ子の親にしている。額の禿げ上った老けた顔もあれば、眼鏡をかけ口髭を生やした分別臭い顔もある。だが、どの顔にも、どこかの一部分に、昔の六年

生の面影が残っている。それは、耳の脇の傷跡だったり、八時二十分と綽名された程の下り眉だったり、女のような細い声だったりする。彼の訪問をきかされて出て来て顔を見合せ、
「やあ」
「ああ」
と言っただけで、長かった筈の二十六年の空白が、まるで焼けた鉄板の上に落ちた水滴のように、一瞬の間に蒸発してしまう。互に小学生時代の相手をみる目で見つめ合い、それだけで昔、互に相手の心に占めていた位置にぴったり納ってしまう。はめ絵遊びのような楽しさであった。
「先生」と呼ばれつけていた彼は、「純チャン」という呼び声を初めて耳にした時、胸に強い衝撃をうけて身振いした。親からさえそう呼ばれなくなって久しい。長年探し求めていたものに出逢ったと思った。
三十九才という彼の年令が――これで三十台は終るという一区切りつける意識が潜在的にあるせいなのか、自分の子供が、当時の自分と同じ年頃になった姿を毎日見ているせいなのか、職業に於ても家庭生活の面でも一応安定して過去を振返る心のゆとりが出て来たせいなのか、そのいずれもがからみ合って作用するものなのかもしれないが、彼は「自分の生れ育った町」を求めていたのだと、気がついた。生まれ育った土地は、昔のままにある。だが、生まれ育った町はない。
今の浅草の町には、かっての潤いも豊かさもない。一番いい例が観音様だと彼は思う。彼の家から見て観音様の屋根に覆いかぶさるように繁っていた大銀杏が次々と姿を消し、今ではコンクリートの屋根が丸見えだ。こんな寒々しい観音様に、昔の町を感じられる訳がない。木をひっこ抜き、池を埋めて変てこな建物ばかりふえたせいで、埃っぽい殺風景なばかりの境内になってしまった。
町は町で、住人の半数以上が入れ変った。ちょっと露地に入ると三軒とか五軒とかの長屋が、同じ形の玄関口を揃えてそれなりの整いを見せていた町並は今は最小限度まで細分された土地に、思い思いの小さな家が我を張って建っているので、不揃いなよそよそしい表情をしている。
土地っ子でありながら、彼はこの土地への愛着など考えてもみなかった歳月であった。そんな時の「純チャン」は、彼に昔の町を思い出させた。誰れと何して遊んだ場所、何を買いに行った店、何を食べた食堂……一括りにして生活の壁の向うにしまいこんで忘れていた想い出が、手繰れば手繰る程数多い実をつけて引摺り出されて来る。
現実にはあの戦災で焼き払われて存在しない町が、旧い友と顔を合せている間だけ蜃気楼のように話に打興じている人々の頭に姿を見せた。帰るべきふるさとを持た

ない東京生まれにとって、それはふるさとと呼べるものかもしれないと、彼は思った。一度そのふるさとに遊んだ者は、その魅力にとりつかれて次々と友を誘いこまずにはいられないようである。消息の知れてる者が芋蔓式に手繰り寄せられて、半年後には六、七十名の名簿が出来上った。

そこから先は、手蔓が途切れている者ばかりなので、探し出すのは困難な仕事であった。区役所を訪ねて住民登録証から移転先を調べたり、以前の家の近くで消息を知ってる人を探したり、兄弟や親戚の線から聞き出したり、果ては電話帳を繰ったり、新聞の読者欄に投書したり、有志の根気よい努力が実って一年後には百名余の数が揃った。

そこでいよいよ第一回同期会開催の相談会が有志十五名を集めて開かれた。十五名もの顔が揃うと、部屋は忽ち生まれ育った町のたたずまいを装った。そこに二十六年という空白が入りこむ隙はない。何もしゃべらなくてもいい。その雰囲気の中で手足を拡げ、大きく息を吸いこむだけで集りの意義はあった。

「東京で生まれ育った僕には、ふるさとってものがないけど、こうやってみんなの顔を見てると、ふるさとって、こんなもんじゃないかな、って気がするよ」

八木の言葉に一同は深く頷いた。

「そこで提案なんだけど、第一回の同期会と一緒に、卒業式をしようじゃないか」

一斉に賛成の拍手が起った。

「去年、上の子の来業式に出席したんです。その時、ああたし達は、卒業式も出来なかったんだなあ、と思ったら、涙が出て仕方がありませんでした」

隣の女子が言った。

卒業式の実行委員会がその場で結成され、八木が委員長に推された。男女各三クラスずつ六クラスあったので、一クラスから一名が委員に選ばれた。

話が具体化してくるにつけ、同期会とは違い卒業式となると簡単には事が運ばない事が解って来た。同期会なら、同期生を集めるだけでいい。先生を呼ぶにしても、それは同期会の招待である。しかし、卒業式となると、卒業させる側と、卒業させて貰う側がでてくる。ここでは同期生は、卒業させて貰う受身の立場になるわけで、お膳立てから運営まで陰の仕事は全部同期会がやるにしても、表面上の主催者は学校側にしなくてはならない。講堂という挙式の場所から儀式の形式一切を借りなければならない学校側、特に現在の校長の強い協力がなくては、実現不可能である。更に卒業証書をくれるのは、区の教育委員会であり、そちらへの働きかけも必要である。

実行委員は学校側・区教育委員会との交渉に団先生の助力を請うた。定年退職後の暇を持て余していた感じの団先生は、喜んで協力を約束してくれた。

「もともと、卒業式というのは、区と学校にやらなきゃならない義務があるんだから、二十六年たったって、その義務を果すのが当然だ」

この団先生の一言に力を得て実行委員は、学校と区の間を往復した。区側も学校側も非常に好意的であった。現在授与しているのと同じ証書を希望者全員に授与してくれる事、式一切は学校側の負担で行う事、証書入れは現在のＰＴＡが寄贈してくれる事、その代りとして、同期会は学校に卒業記念品を贈呈し、式後の謝恩会に区・学校・ＰＴＡの代表者を招待する事、などが決定した。

所が、団先生と何度か話合っている中に、委員の中には団先生に対するはっきりした嫌悪を示す者が出て来た。「らっきょう」という綽名の由来となっているつるりとした感じの頭の形も、言葉の終りに口をきっと真一文字に結び相手をねめつけるような強い視線を向ける癖も、相手の言葉が終らぬ中に、右手で相手の肩を叩くようにしながら、自分の主張を覆いかぶせる態度は、往時とちっとも変らない。自信過剰のそれらの仕草の一つ一つが、大人になった委員達にはやりきれない押しつけがましさを感じさせた。

「あの時、私には区から教頭として出すから集団疎開にはついてゆくな、という話があった。だが、冗談じゃない、今現在子供達が危険にさらされようとしているのに、自分の出世なんか考えていられるか——そう私は啖呵をきった。実際あの時の校長は、病身で殆んど学校へ出て来られない状態だったし、教頭は年とってそんな元気はない。だから次席の私が、嫌でも張切って先頭に立たざるを得なかったんだ。そのお陰で、私は校長になるのが二、三年遅れたけどね、ちっとも後悔なんかしてないよ」

長い教員生活を了え、それを振り返る事にのみ生甲斐を感じているような団先生にとって、生涯の最大の難事であった集団疎開前後の追憶は、それが困難であればあったほど、甘美なものに裏返されているのだろう。確かに子供だった自分達には、うかがい知れない陰の苦労話の数々は、団先生に対する新たな懐しさと感謝を、だれの胸にも与えはした。が、それは初めの一、二回であった。毎度毎度同じ話を繰り返されていると、それは苦労話から自慢話に変身して受けとられてしまうという事に、団先生は少しも気づかない。従って、

「団が、団が、って、集団疎開の苦労を一人で背負って立ったような言い方は、私不愉快だわ。他の先生だって随分苦労して下さったの、私達はよく知っているもの。あれじゃ、直接細かい面倒をみて下さった担任の先生方が、可哀想よ」

帰り道に新村が言い出したのがきっかけで、団先生批判が盛んになった。果ては卒業式当日の来賓祝辞を団先生に頼むと、又団が、団がと一人で手柄顔をして外の先生方に気の毒だから、違う先生に頼んだ方がよくはない

か、という意見まで飛び出した。
「だけどね、団さんは矢張りK分校の主任として、形式的にも最高の責任者だったんだし、いろいろ苦労してくれたのは事実なんだから、団さんに頼むのが妥当だと思うよ」
八木は言った。
「そりゃ、そうだ」
小野塚と三原は同意した。何となく不満気なのは、女子の三人であった。
「あたしは昔っから、あの先生好きじゃなかったわ、ねえ、あの時だって」
西田が隣りの大室に同意を求めた。
「ああ、あの事」
大室は「ホラ」と新村を突ついた。
「そうそう、あれはひどかった」
大森事件は、女子寮で起った事件だったので、八木達は知らなかった。
西田の組に大森という区会議員の娘がいた。
大森の父は保護者会の会長もしていたし、この集団疎開の実施に当って、区側へ積極的に働きかけ、場所の選定、宿舎の割当、臨時列車の配分などで有利な立場に導いてくれたという。又疎開地へは、不足していたマッチ・ローソクなどの日用品や酒・煙草・菓子などを度々送りこんで地元へ配り、食糧や燃料の確保に尽力してくれたという。大森の父のそういう尽力を児童達は度々団先生にきかされていた。だが、それだからと言って、団先生の大森個人に対する特別な取扱いが、黙認されていいものではない。
大森だけが両親の顔を見に、秘かに上京した事を知った時、同じクラスの数人は激しく担任の教師に抗議した。帰りたいのは、だれも同じ筈ではないか。何故大森だけに許されて、私達には許されないのか。私達も帰りたい。涙さえ浮かべて訴える児童の前で、担任の教師は手をついて詫びた。
「私の力が足りないばかりに、みんなにこんな惨めな想いをさせて、本当に済まないと思います」
若いその教師も涙をこぼしていた。団先生から大森を帰してやってくれと言って来た時、教師はどんな事情があるにせよ、危険な東京へ子供一人を帰す事は出来ない、ましてや六百人の児童が懸命に小さな胸を押えて我慢しているというのに、大森一人に例外を認める事は出来ない、と即座に断った。
しかし団先生は言ったという。
「解ってくれ、大森さんにこれだけ世話になっている以上、頼まれれば駄目だとは言えないんだ、それが私の立場なんだ」
大森は一度ならず二度もこっそり帰京した。その二度目に帰って来た夜、担任の教師は女子の児童全員の前へ

大森を呼んだ。
「あなたのお父さんには、そりゃもう感謝しきれない程の世話にはなっています。だから私は団先生に、あなた一人をこっそり帰してやってくれと言われると、断れない立場なんです。団先生にしても、あなたのお父さんに、どうしても娘を帰してくれと頼みこまれると、いやとは言えない弱い立場なんです。
だけど、ここにいるだれだって、お父さんやお母さんの顔をみたいのは同じなんです。あなた一人が家を恋しがっているんじゃありません。だからあなた一人だけが家へ帰ったと知ったら、みんなはどんな気持になるでしょう。集団生活をしている以上、自分一人だけの欲は押えてくれなきゃ、バラバラになってしまうでしょう。帰ってもいいと団先生に言われても、私一人だけが帰るわけにはいきません、と断るのが当然なんじゃないかしら。私は弱い立場だから、あなたのお父さんに自分の娘だけ帰させるような事はしないで下さいとは言えません。でも、あなたは私の教え子です。私はあなたの担任です。だから、私はあなたには言えるから言うのです。
もし、私の言う事に不満があったら、お父さんにでも団先生にでも言いつけなさい。それで私がお叱りを受けるなら受けたって構いません」
普段から姿勢のいい教師だったが、この時の背筋をすっと伸し、両膝に手をかっきりおいた、お茶席に坐っているような若い教師の凛然とした姿は、一座の児童の心を圧した。
「私は今も、あの時の先生の姿こそ、本当の教育者の姿だと思っているわ。思い出しただけで、胸が熱くなるわ」
それに引替え、と西田はいいたかった。
「でもさ、団さんは団さんで、辛い立場だったんだよ」
八木の言葉に新村が、
「そりゃね、私も教師を十五、六年もやってるから、団先生の立場が解らない事もないけど、姿勢の問題よね、団先生は権威に弱いって感じが、子供なりにしてたもの」
「とにかく私は、団先生だけが手柄顔に集団疎開の話をするのは不満だわ」
「解った、解った。こうしよう。団さんに祝辞は頼むが、時間を三分に制限して貰おう」
八木が言った。
団先生の話は続いている。九十一名の卒業生の中で、初めて団先生の追憶談を聞く者は、やはりそれなりの感銘を受けて涙する者もいた。ハンカチをしきりに目に運ぶ何人かの女子の姿が、団先生の熱気を煽りたてているようであった。
「初めの中は、何かと口実を設けて子供を東京へ引戻そうとしていた母親達も、十九年の暮頃から急に激しくなった空襲で態度が一変し、何も言わなくなりました。子供だけでも安全な場所へ、それが親心でありましょう。

だからこそ私達は、初めての東北の冬、それは想像以上に寒さは厳しく辛い事ばかりでしたが、何とか頑張って正月を過し春を待っていたのです。

所が何という事です。二月に入ると『六年生は既定方針通り、上級学校入学のために帰京せしむべし』という当局からの通達が来たのです。空襲の被害が現実化し始めた東京へ帰れというのです。

一体何のための疎開だったんでしょう。

しかし、これは命令である以上、そうしなければならない。それで私は、自分の一存でなるべく遅く、一日でも遅く帰ろうと決心しました。どこの学校は二月の二十五日に決った、どこは二十六日に発つそうだ、という情報が次々と私の耳にも入ります。先生方の中には、早く帰った方がいいという意見を言う人もいましたが、私は断固としてぎりぎりまで腰を落着けていました。

そうして三月九日の午後、下級生達に見送られて、Kを後にしたのです。

忘れもしません、その数は一八二名でした」

大空襲を受けてから十時間とたたない上野駅に着いたあの日、烈風で灰は飛び、コンクリートの塊と焼トタンだけが累累と続く焼跡の道を、受験のため帰って来た六年生と教師の一団は、言葉もなく歩いていた。国際劇場の煤けた建物が、思いがけない近さにある事がまず最初の衝撃だった。すりへった運動靴の底は、大地の吸いこんだ熱をまともに足に伝えて、長くは一ところに立ち止っていられなかった。ただ驚きと困惑の続く道であった。

外部だけは残っている校舎の前に一同は着いたが、先に中に入っていった団先生は、校庭の夥しい死体の山に、咄嗟に子供達をここへ入れてはいけない、と判断し、近くの小学校へ向った。独断でそこに「疎開児童引揚本部」の看板を出し、出迎えの教師に区役所への報告を頼んだ。教師全員で手分けして、あちこちの焼跡に近くの小学校へ移った旨を書いた板切れを立てて歩いた。帰る日と大方の時間は前もって連絡してあったから、あの焼跡のどこからと不思議に思う程、次々と父兄が引取りに来た。団先生は、はっきりした立退先を控えてから一人一人を父兄に手渡した。

児童の控室にあてられた裁縫室で、新村育子も父母の迎えを待っていた。

「いっ子ちゃん」と呼ぶ母の声は、だが夕闇が窓の視界をすっかり奪う時になっても、彼女の耳には届かなかった。逃げていく先は、調布の伯父の家しかない。電車が動かないので、きっと歩いてくるので遅いのだろう。明日の朝までかかるかなあ。ここが解らなくて探しているんじゃないのかなあ。お母さんは近眼だから……

去った友の後を埋めようともせず、児童達は最初に坐った場所を動かなかった。暗い部屋に一人一人が蹲って、母親の声を、足音をひたすら待ち焦れた。その時、父母

が死んだのでは、という不安は湧かなかった。思いつかなかったといっていい。

八か月間、寝食を共にした友達との繋りが、あの時どうしてああ簡単に切れてしまったのか、今でも新村には判らない。慰め合う事も、励まし合う事も、体を寄せ合う事すらしないでじっと夜明けを待っていた。

翌朝、残った四十余名の児童と教師は、八木の父親に引連れられて、焼け出されてから八木の家族が住んでいる金町の別宅へ行った。教師は着くと早々に児童の親戚に電話したり手紙を出したりして引取り方を依頼した。

五十人近い客を引受けて、八木の家族はその食事作りに終日追われた。一つしかない一升炊きの釜は、食事の度毎に続けて四回も五回もへっついにかけられた。疎開してあった荷も食糧も、目に見えて姿を消していった。

三日目の夜に調布の伯母が引取りに来てくれるまでの間に、新村は数人の友達と一緒に団先生に連れられて家族探しに焼跡へ行った。顔見知りの近所の人に何人か逢って尋ねてみたが、妹の手を引いた母が言問橋の方へ逃げていくのを見た、という消息しか得る事は出来なかった。

いつからとはなしに、彼女は父母の死を感じるようになっていた。しかし、妹だけは、だれかに助けられて生きているような気がしてならなかった。伯父の手で大学まで出して貰い英語の教師となったのは、父親が教師だったから妹も生きていれば教師になっているのではないか、と思う気持が作用していたし、自分に似た娘がいると聞くと、飛んで行って確めたりもした。町を歩いている時も、電車に乗っている時も、妹と同じ年恰好の娘を求めて目を這廻わらせるのが、彼女の習性になっている。

「おい、本当に何とかしないと、Kへ帰る人達が汽車に乗り遅れちゃうよ」

八木が腕時計を見て言った。三時三十五分になっている。

「先生の気持ちも解らなくはないけどさ、場所と時間を弁えてくれなきゃね」

口ではそう言いながらも、小野塚昌夫は人差指で眼鏡の奥の目頭を押えた。

「まあちゃん。

東京はとてもまあちゃんのいられるような状態ではありません。淋しくても、我慢して待っていて下さい。先生の言う事をよくきき、お友達のみなさんと仲良くして、しっかり勉強していて下さい。戦争に勝ったら、お母さんはまあちゃんを真先に迎えに行きます。

片付けていたら、まあちゃんが大事にしていたお相撲の番付表が出て来たので送ります」

二十六年の間、温め続けて来た彼の体温で、手紙も番付表も黄色く変色し、折り目は殆んど擦り切れている。もう滅多に拡げて見る事もないが、今では体の一部分の

ような存在である。彼の肌着の内側には、自分で縫いつけた胸ポケットが必ずついている。

真先に迎えに来てくれる筈の母親は、とうとう現れなかった。焼跡に立っていた板切れで知った隣家の立退先を訪ねていった。

「言いにくい事だが」と前置きして、彼の家族、祖母と父母・姉二人は上野の方へ逃げたらしいが、どうも駄目だったらしい、そんな噂をきいた、と隣家の小母さんは話してくれた。

「だれがそう言ったんですか」

「あたしもね、夢中で逃げてく時だったから、いつ、だれにきいたって、確かな事は覚えてないんだけど……でもね、今だに何も連絡がないって事は、ね、まあちゃん」

小母さんは涙声であった。

「明日まあちゃんが帰って来るっていうんで、お母さんは前の晩から一生懸命小豆を煮ていたんだよ。あんた茹小豆が好きだったからね。八か月ぶりでまあちゃんが帰ってくるって、家中でそりゃ楽しみに待っていたのに、どうしてこんな事になっちゃったんだろう」

彼も立ったまま泣いた。小母さんは彼の肩を抱き寄せた。

「もし行く所がなかったら、小母さんとこへ来てもいいんだよ。力になるからね、気を落しちゃ駄目だよ。まあちゃんは男なんだから」

その足で彼は上野へ行った。

だがそこで彼が見たものは、老幼の区別さえできぬまでに焼け焦げて縮まった死体の列と、堆高く積上げられた半焦げの死体の山であった。半焦げと言っても、体のごく一部が焦げずに残っているという凄じさであった。

集って来た人々は、手の出しようもなく、死体の山を前に、ただおろおろとその周りを歩いていた。或る者は道端や焼跡に落ちている布切れを拾って、家族のものかどうか確めていた。が彼は、八か月前に別れたきりの家族が、どんな衣服を纏っていたか知る由もない。改めて思い出そうとしても、もどかしいほど衣服についての記憶はなかった。諦めるより外なかった。

雑列された死体と、山積みの死体の無言の威圧に、彼は次第に怖気づき、日が落ちて急に肌寒くなった通りを、後も見ずに馳け出した。

彼はまだ一度も逢った事のない母の弟を頼って茨城へ行った。何かの時には頼っていくんだよ、と最後になった母の手紙の端に、叔父の住所と名前が書いてあった。

叔父夫婦はいい人達で、彼を快く迎えてくれはしたが、貧しかった。同じ年頃の従兄弟達が小学校だけで済ませて働いているのに、居候の彼が中学へ行きたいとは、とても言い出せなかった。彼は小学校の六年間ずっと一、二を争う成績のいい子供だった。当然都立の中学へ進んでいたろう。一日中叔父や従兄弟達の後について、野良仕事や山仕事で過す生活に、彼はどうしてもなじめなかった。

都立の中学へ行ったであろう友達のだれかれを想い、どうして自分一人を残して死んでしまったのかと、父母をなじった。

それでも三年は辛抱した。たまに貰う小遣が東京行の切符代になったのを待って、彼は家出した。家はなくなっても、彼の行先は浅草しかなかった。その日の中に、新聞の募集広告を見て観音裏のラーメン屋に住込んだ。金を溜めるために、彼は少しでも条件のいい仕事を見つけては転々とし、今では裏通りながら小ざっぱりしたコーヒー屋を経営するまでになった。東京に戻った当初の何年間かは、彼は古い友達や知人に逢うのを極端に避けた。家族を失った事、中学へ行けなかった事の悲しみが、胸に直接響かなくなるまでに、何年かかったろうか。二十六年の歳月は、他人に淡々と家族の死を話せるだけに彼を成長させてくれた。そうなると反対に、古い友達や生活が恋しくてならなかった。古い友達に囲まれて古い話をしていると、家族が昔のまま自分の帰りを待っていてくれるような錯覚に陥る。悲しみが伴わなければ、その錯覚は、確かに魅惑的なものに違いなかった。

「私は空襲の惨状を聞いて知っていましたから、自分達も帰京して、いつそういう事態に直面するか解らない。どんな苦難にも耐えていけるように、私は出発の前々から、みなさんに『泣いてはいけない、沈着冷静に事を処理せよ』と教えましたね。

今の子供をみると、六年生というのは、本当に子供なんですね。こんな幼い子達に、私は何と苛酷な修業を強いたかと、今は思いますが、当時のあなた達は、ずっとずっとしっかりしてた。耐えるという事が、どんなに大事なことか、あなた達は身をもって知っていた」

話しながら団先生は、大室ひろ子の頬の豊かな愛くるしい顔を思い浮べていた。

金町の八木の別宅へ寄宿して六日目に、団先生は児童を連れて三度目の家族探しに行った。大室の家があった辺りを歩いていて、大室の母と姉の死体を隅田公園で見た、という近所の人に出逢った。団先生は小柄で心細げなひろ子を一人でやるにしのびず、その手を引いて公園の死体安置所へ行った。所が死体はすでに埋葬された後であった。ここの死体は溺死体であったから、胸の名札で判明した名前が、穴の前の板切れに書き連ねてあった。一人ずつになって、あっちの板、こっちの板を丹念に探した。二百に余る板のどこにも、大室タミ・大室妙子の名はなかった。

「もう一度探してみよう」

団先生はひろ子を元気づけて、今度は二人一緒に板を見直して歩いた。と、真中辺の板に、別々ではあったが、

「大富タヨ」「太田妙子」という名前を見つけた。
「先生、これ似てる」
団先生も間違いないと思った。
見廻すと、公園の入口近くに焼トタンで急造した小屋があって「臨時区役所出張所」の紙が下っている。そこには着ぶくれた老人が、机代りに木箱をひっくり返した上で、名簿らしいものを整理していた。
「わたしの生徒の母親と姉に間違いないと思うんです。確めたいんです」
「だから言ったでしょう。勝手に掘られたんじゃ、区役所の方で困るんです。役所が責任をもって川から引上げ、葬ったんです。二、三日中には焼場の方の支度も整いますから、そうしたらお骨にして間違いなくお引渡しします。名札ももう一度よく調べ直します。遺品もあります。必ず通知は出しますから、待ってて下さいよ」
何度か押問答したが、老人の答えは変らなかった。ひろ子のすすり泣きの声で、老人は初めて団先生の陰のひろ子に気付き、まじまじと見つめていたが、
「こんな小さな人には、見せない方がいいんじゃないでしょうか。もう一週間たっているんですよ。一週間も」
団先生を見上げた老人の目はうるんでいた。
「ね、そうなさい。そうして下さい」
団先生はひろ子の肩に手を置いた。
「帰ろう、な、今日はこのまま帰ろう」
「その方がいい。ね、いい子だからそうなさい。頼むからそうして下さい」
二人の大人に交互に宥められて、ひろ子はそれでも母に逢いたいとは言えなくなった。素直に頷いて母や姉から遠ざかっていく自分に腹を立てながら、一方では死んで一週間たった姿を見るのは、とても恐しいとも思い、その後から又、どんな姿だっていい、腐ってたって、融けてたって、八か月の間、毎日毎日逢いたい、逢いたいと思い続けていた母の顔を見なければ、諦めきれない気がした。しゃっくりあげながら、団先生に手をひかれて歩いた公園から学校までの道が、ひろ子には長く長く感じられた。
五日ほどして、区役所から通知があり、ひろ子は一人で区役所へ二人の遺骨と遺品を引取りに行った。小さな壺に納ってしまった二人を抱いて、翌日ひろ子は埼玉の父親の実家へ帰って行った。
その年の暮に団先生は、十一月に弟が集団疎開から帰り、まもなく父親も復員して来たと、元の明るさを取戻したような文面のひろ子の手紙を受取ったが、手紙の末尾には、追伸として
「あの時無理しても母や姉に逢った方がよかったのか、逢わずに帰ってよかったのか、今だに私には解りません」と書いてあった。
今日の卒業式には、正式には卒業生とは呼べない人数

も三分の一はいる。つまり縁故疎開した人達で、彼等はそれぞれの疎開先の小学校で卒業式を了えているし、卒業証書も受取っている。区の教育委員会との話合いの席で、最初に問題になったのは、その事だった。
六年生三百余人の中で集団疎開は半数強の一八二名であり、残留組は二十人余、残りの約百名が個々に全国に散った。しかし彼等は散りたくて散ったのではない。本来なら五年半を過したこの学校の卒業生となるべき所を、学校からの命令で転出したのである。だからこの学校の卒業生として扱ってもいいのではないか。
二十六年もたってしまった今、三月という卒業期の時点で、学籍がどこにあったかという事よりも、一人でも多くの同期生が集って卒業式を行う事の方が、意義深いのではなかろうか。委員達はそう主張し、区側もそれを認めてくれた。
卒業式というより、寧ろ第一回の同期会といった方が相応しい会にしたい、だから卒業式の席で、集団疎開の話ばかりをされては、折角集った縁故疎開組や残留組が疎外されてしまう。学童疎開の始った十九年八月に卒業の時点をおいて考えて欲しい、とこれも事前に何度か団先生に話してあったのだが……
「何しろみなさんはまだ小さかったから、随分辛い淋しい思いをしたでしょう。随分不満もあったでしょう。だけど、これだけは二十六年たった今も、私は胸を張って断言できます。あの疎開は大成功でありました。
何よりの証拠は、今ここにこうやって集っているみなさん、あなた方です。三月九日前に帰って来たために、半数近くの児童があの空襲の犠牲になった学校もあるのです。僅か十時間のずれが、一八二名の生命を、一人も欠ける事なく守り得たのです。そこに私は運命の神秘をみる気がします。みなさんが、今このように立派な社会人として成長された陰には、多くの偶然の幸運、多くの人々の善意、多くの犠牲があったのだという事をよく噛みしめて、これからも一層有意義な人生を送って貰いたいと心から願って、私の話を終ります」
団先生の話は、とうとう集団疎開の話に終始してしまった。
話したいだけ話して十分満足した顔付きで壇を下りる団先生の所へ馳けよって、
「成功でなかった例だってあります」
と叫びたいと西田良枝は思った。
「二月中に帰ってくれれば、父は死なずに済んだ」
これはあの日以来彼女の意識から一日として離れない後悔である。
彼女の家族は、あの空襲の二か月ほど前に、ようやく疎開先をみつけた。両親が東京生まれなため適当な疎開先もなく彼女を集団疎開に出したが、知人の親戚の紹介で千葉の農家の離れが借りられた。小学生の妹と就学前

の双子の弟を引きつれて父母は畑の中に点在する農家の一軒に引移った。駅までは三キロ近くあったが、駅についてしまえば乗り換えなしで東京へ行けた。父はそこから毎日東京の勤め先へ通った。

三月に入って、十日の早朝に彼女が帰京するというので、時間に間に合わないといけないと父親は前日から一人で空家になっている元の家に泊った。十日に彼女を迎えたら一緒に疎開地の家へ帰る積りであった。

そしてその晩からの空襲。

二日目に母が一人で八木の別宅を訪れた。

「お父さんもよっちゃんも、あんまり遅いもんだから、心配になって」

母は彼女の顔をみて、すぐ総てを悟った。

「どうしてもっと早く迎えに来てくれなかったのよ。ちゃんと帰る日は知らせてあったのに……」

二日間こらえていた不平を吐き出しかけて、彼女は縁側に崩れ折れる母を見た。

「大丈夫、大丈夫です」

と起上ろうとする母を教師達が無理矢理に部屋へ上げ寝かせた。手拭を目に当てたまま身じろぎもしない母に、彼女は大人びた口調で言った。何故か今ここで自分がしっかりしなきゃならないんだという気の張りがあった。

「それで、お父さんは九日の夜、確かに浅草の家に泊ったのね」

かすかに母の顎が引かれた。

「十日の朝あたしを迎えに行く事になってたのね。焼跡を歩いて近所の人にきいてみたの。お父さんを見た人はいなかったの、一緒に逃げたって人はいなかったの」

母の胸に手をかけ母の体を力一杯ゆすっていた。

「あたしが殺したようなもんだ」

彼女はそう思った。

「あたしの帰ってくるのが三月十日でなかったら、お父さんは死なないですんだ。それ以前に帰ってれば、お父さんは私を連れて無事に千葉の家へ帰れた筈だ」

それ以後に続く長い母子の苦難時代を考えると、今だに彼女は不幸な偶然と諦めきれないでいた。そして今日、三月九日の帰京を決定したのは団先生であり、その事を誇らしげに話している団先生を見ている中に、彼女は団先生に対する怒りがむらむらと燃え上ってくるのを、抑える事ができなくなった。体をこわばらせて急に立上った彼女の様子に不穏なものを感じて隣りにいた小野塚が並んで立ち肩を叩いた。

「どうしたの」

「私の父はね、今の私の年に死んだのよ。三十九才—私はまだこんなに若い。父だって若かった。その父を死なせたのは、団先生なんだわ」

西田の上ずった声に、外の四人も体を硬くした。

「私が三月十日に帰って来なければ、父は九日の夜東京

にいないで済んだのよ。今まで、私は私達が帰って来る日と、空襲の日が重なったのは、単なる偶然だけだと思ってた。だけど、そうじゃなかった。みんな団先生が決めた事だったのよ。人の不幸も知らないで、それを自慢顔してしゃべってるのが、私は口惜しいのよ」

西田は立ったまま泣きじゃくった。彼女とは対照的な静かな声で小野塚が言った。

「それは考えすぎだよ。団先生だって、まさか九日の夜にあんな大空襲があろうとは、夢にも思わなかったんだし、もし九日以前に僕等が帰っていたら、僕等の中の何人かは、あの空襲で死んでいたろう。君にとって、いや僕にとってもそうだけど、そのどっちがよかったかなんて事は、その人、その人の立場で違うものなんだ。みんな偶然なんだよ。だれが悪いんでもない。僕だって、どうせみんなに死なれるんなら、僕も早く帰ってて一緒に死にたかった—今でもそう思う時がある。だけど、偶然僕だけが生き残っちゃったんだから、生き残ったお陰で、少しは人間らしい幸福も味わえたんだから、これはこれでよかったんだと思うよ」

一年生の或る期間、二人は席を並べていた。女の姉妹の中で育った小野塚は、言葉も動作もやさしい子であった。ちびでやせっぽちで、ぴょんと両側に突出ているような耳ばかりが目立つ子だった小野塚の幼な顔が、彼女の激情を次第に萎えさせていった。元の席に坐った彼女は、唇を噛みうつむいたまま顔を上げようとしなかった。

父を失った母子五人が、どうやって暮していられたのか、今になっては不思議に思える位だ。収入といえば、母が近所の農家で分けて貰った米や野菜を東京へ運んで得る儲けと、東京の祖母や伯父が僅かずつ送ってくれる金だけである。足りない分は疎開してあった衣類を売った。体の華奢な母は、東京へ往復するだけで一日分の精力を使い果してしまうので、妹や弟達の世話と家事一切は彼女の手に託されていた。登校前に掃除と洗濯を済ませ、学校から自転車で飛ぶようにして帰ると、母に頼まれていた仕入れに走り、薄暗くなると夕飯の支度をして妹や弟達に食べさせお風呂へ入れて寝かせる。それから自分の勉強を始めるのだが、都会育ちの彼女にはきつすぎる一日の労働が、一時間と彼女の瞼を開けていてくれはしなかった。いつも睡眠不足と空腹を我慢していなければならない生活だった。それでも彼女は、笑顔を見せる事もなくなった代りに、泣き事一つ言わずに黙々とまだ明けきらない畑の中の道を、背中の籠に押し潰されそうになりながら家を出ていく母の姿を見ていると、しっかりしなきゃと涙ぐみながら自分にいいきかせた。

三年後に伯父がバラックを建て直して大衆食堂を開いたのを機会に、母子は東京へ帰った。二階の六帖一間を借り、母は終日食堂で働いた。今は、妹達もそれぞれに独立し、母は食堂の隣りに建てて貰った二間の小さな家

に一人で住んでいる。暇な時は、今でも食堂を手伝っているという。
「働かないでいると、何となく不安でね」
いつか母はそう言っていた。
人は、辛い想い出は時がたてば忘れ、楽しい想い出ばかりが残るものだ、という。しかし、田舎での三年間の生活は、時が忘れさせてくれるには余りに辛すぎた。西田も決して忘れはしないし、母もきっと忘れないに違いないと思う。
現PTA会長の祝辞が終り拍手が鳴った。
「まあちゃん、そろそろ答辞の用意。時間がないから少しピッチあげて頼むよ。僕達も席へ戻ろうか」
八木に促されて四人は各自の席へ戻った。
答辞の人選を決める時に、八木は最初から小野塚を強く推した。
「まあちゃんにとっては、一生に一度きりの卒業式なんだから」
だれに異議のある筈はなかった。
「それに、もしあの時卒業式をしたとしても、小野塚さんが選ばれていたかもしれないわ」
大室がつけ加えた。
答辞に続いて「仰げば尊し」「螢の光」の斉唱が行われたが、委員は打合せ通り中途で抜けて校庭へ集った。記念撮影の準備をしなければならない。時間は四時十五分。
手際よく撮影を済ませて謝恩会場に集らないと、五時までに記念品の贈呈が終らない。椅子を運びながら、三原はだれにとなく言った。
「ぬくぬくと早く疎開しちゃってさ、何だか僕は肩身が狭いよ」
「早く疎開して被害を受けなかったのも、残って被害を受けたのも、運だよ。みんな運なんだから、君が気にする事はないよ」
答えたのは小野塚だった。
謝恩会場では、恩師・疎開先で世話になった人達への記念品の贈呈のあと、立食パーティ式の懇談会になったが、Kへ帰る三人は乾杯をしただけで席を辞さねばならなかった。
六人はいつの間にか会場の片隅に集っていた。それぞれに旧師や寮母さんを囲み、或いは二十六年ぶりに顔を合せた仲良しがかたまって、二十六年間の積る話に打興じている様を横目で見ながら、新村が言った。
「こうやって、みんなが喜んでいるのを見てると、ああよかった、骨を折った甲斐があったと思うのよ。これでよかったんだって、ね、だけど、何かもう一つ物足りないのよねえ」
「そうなの、どうしてこう感激しなかったんだろうって。昨日まで、あたしきっと涙が出て涙が出て困っちゃうんじゃないかと思ってた。いろんな事があったんですものね。二十六年間のいろんな事が一ぺんに甦って来たら、あたしきっと胸が一杯になって、ワァーワァー泣き出しちゃうんじゃないかと、覚悟してたのに」
一杯飲んだだけのビールで喉元まで赤くした大室が言った。
「それがどうでしょう。泣くどころか、ちっとも胸にジーンと来ないのよね。これ一体どういう事なのかしら」
「団先生にぶちこわされたんだ」
如才なくみんなのコップにビールを注ぎ足していた三原が言った。平素が穏かな人柄なだけに、三原の吐き捨てるような言い方は五人の感情にそのまま突き刺った。
「そうなんだわ。初めから終りまで時計とにらめっこばかりしてたからなんだわ」
大室の言葉を吹き消すように西田が言った。
「そんな事、初めから解ってたじゃない」
その声の冷たさは一座の言葉を奪った。しばらく六人はそれぞれの感情に沈みこみ、ただコップを口に運んでいた。
八木はこの一年半の間、自分をこの同期会準備のために走らせ続けた内藤和子の事を想っていた。子供の頃、八木は夜店でよく色とりどりのセルロイドで出来た小さな船を買った。底板の後ろに、樟脳の粒をつけると、船は真しぐらに走り出す。洗面器の海を船は舳先をあっちへぶっつけ、こっちへぶっつけして、それでもひたすら走り続けた。八木にとって内藤は樟脳の粒だったと思う。
八木の出した同期会開催の通知に、家族からの返信がきのう届いた。
御通知有難うございました。楽しみに待って居りました本人は、昨年の暮に死亡いたしました。御出席のみなさまに呉々も宜敷くお伝え下さい。
(半年早かったら、彼女も出席できた)
その後悔が重りになって、八木は最初から浮き上れない気持ちでいた。
「ああ、そうだ。やっちゃおか」
「そうね」
会計担当の新村と大室が、傍の紙袋から祝儀袋の束や帳面などを取出した。
「なに、もう銭勘定かい。さすが」
その場の空気を柔げる気遣いを見せて小野塚が言った。小さな笑いが起った。
「そうよ。かみさん業を十五年もやってると、こうなるのよ。ねえ」
大室に笑いかけられて西田は仕方なく笑って頷いた。
「急いでたから受付けで貰うだけ貰って突込んじゃったから、どの位集ったか見当がつかないのよ。これ数えといて」
会費の分の札束を大室の方へ押しやってから、新村は

祝儀袋を一つずつ開いた。三千円、五千円というのが多い。一枚毎に氏名と金額を帳面に書き写していた新村が、
「ちょっと、ちょっと」
とみんなに手振りで近寄れという合図をした。
「ねえ、団先生いくらだと思う」
ぐるりとみんなの顔を見廻した。
「二千円よ。言いたかないけど、記念品代だけでも、先生方のは一人三千円かかってるっていうのに、いい気持ちで一時間もぶって、それで二千円ていうのは、少し安すぎると思わない」
だが、だれも返辞をしなかった。もう団先生の話は沢山だ、といった表情だった。
その団先生は謝恩会場でも来賓席の真中に陣どり、次々と挨拶に来る教え子のだれかれに派手なゼスチャーを混えて語りかけ、ビールを飲み、頷き、笑って体をゆすっている。
謝恩会の栄誉を一身に受けとめた態のその顔は、得意と満足で輝いていた。

脳軟化症候群

山本儀一

おれがなぜ一つ手前の駅で下車したかっていうことは……うまく言えないな。
おれはもともとこのせゝこましい私鉄の駅前は好きではないし、めったに通ったことはない。買出しのかみさん連中と電車からおりた勤め人と、おまけに一方交通だが車が入ってくるから、その時刻になるとこの狭い通りはえらい混雑だ。
丹内小六がこの辺に店を出していたことは知っていた。店といったって、相互銀行がひけてからその軒下に、リヤカで運んできた季節の鉢ものを二十鉢ばかり並べるだけのことだ。おそらく銀行と取引のある松籟園の口きゝだろう。おれは小六がもうこゝに店を出してるはずはないと思っていた。しかし、ひょっとしたらという期待がなかった〝といえばウソになる〟いやだねえ、こういう言い方。テレビなんかで、気取った顔してこんなセリフをほざいてる奴らの頭の程度はたかが知れてるわさ。
ところが、このイヤミなセリフがものを言ったような工合で……。
「やあ、旦那お久しぶりで」
目ざとくおれを見つけた小六の方から、声をかけて来たってわけだ。
「やっぱりこゝでやってたね。どうだ、元気かい」
おれは朝からクサクサする気分でいたところだから、そこらで一ぱいつき合わないかと、小六爺さんを誘ってみた。
「でもねえ、あと小一時間はひろげてないと」
「そう稼いだってしょうがねえだろう。コツコツためて、またストリップへでも行くつもりかね」
小六は大仰に、日にやけた逞しい腕を振って笑った。
「あたしゃ、そういう時期はとうの昔に卒業しましたよ」
「片づけるなら手伝ってやるぜ」

小六はおれの言葉に応えず、腕組したまゝ突立っていた。口の中で何かモグモグ呟いている。これがいわゆる小六の念仏だな。

ちょっと背丈は低いが、肩巾の広いがっしりした軀を薄汚れた作業衣に包み、職人風のだんぶくろズボンに半長靴をはいている。七十半ばの爺さんとは思えない。

「よし。片づけましょう。でも、そこらで金遣ってもしょうないもの、旦那、あたしんちへ来てもらえないかな。酒屋の隠居には申訳ないけど、上等な酒があるの。そりゃ貰いものだけどさ。それに是非きいてもらいたい話があるんです」

小六の語気にはどこか決然たる勢があって、おれもつい肯いてしまったのだ。

おれは小六の念仏が変ったようだな、と思った。

もう十何年、まてよ二十年にもなるかな。まだこの辺が村だった頃、いやもう町になっていたかな。何しろあっという間に、村から町になり市になってしまったので、まあそんなこたどうでもいゝさ。丹内小六はルンペンみたいな恰好して松山のところへ転がりこんだのだ。今でこそ、造園業「松籟園」なんて殊勝な名をつけてやがるが、中気で寝ている親父に代って勤めをやめ、大学まで出ていながら植木屋やっていた松山は「軍隊時代におれの従卒をしていたことのある男で、実直なヤツだし、人手のほしい時だから働いてもらってるんだよ」とおれに話した。当時は悴は植木屋を継ぎたくなかったようだし、松山も無理強いはしなかった。小六は復員してから女房子どもとはとうとう巡り会えず、いろいろな世すぎをして食いつないで来たが、コブつきの「戦争未亡人」とかいうのとくっついて、今様にいえばサラ金みたいな朝鮮人の高利貸の所で働いていた。おれも知ってるが、むかしのサラ金は質種のいらない質屋みたいなもので、三月ごとに九分の利子を払えばいいのだが、ウカウカしているといつまでたっても借金が済せない。客の品定めも厳しかったが、貸倒れの危険もある。証文もって取立てに行くのが小六の仕事だったそうだが、口下手でハッタリの利かせられないヤツにはどうも不得手な仕事だったらしい。どういうへまをやったか知らないが、女子どもを取り上げられて追ん出されたという。人質を取り戻す才覚もなく逃げ出したのか、生活の便宜でひっついた「戦争未亡人」に愛想づかしをしたのかされたのか、そこんところはよく分らないが、再び天涯孤独の風来坊に戻ったとき、運よく松山を尋ねあてたわけだ。松山にとっちゃそんなことはどうでもいゝ。安上りで忠実な労働力を得たわけで、前からいる若い職人といっしょに使っていた。小六には妙な癖があって、右か左か決めかねるような時には、口のなかでブツブツひとり言を呟く。肚がきまると、二つ三つ肯いてから動き出すという。これに気

づいた若い職人が面白半分にそっと後ろに忍びよって耳をすますと、それがなんと、ローズちゃんだかリリイちゃんだか、まるでストリップの踊子の名前みたいな名を呼んで、「ねえどうする」とか「うんそれがいゝな」など話しかけていたそうだ。小六って奴は体格もいゝせいか、年の割にや助平な爺さんで、小遣銭がたまるとよくあちこちのストリップ小屋をめぐり歩いていたらしい。とにかく、小六の念仏をおれが知ったのは、この話が最初だった。

松山は親父が死ぬと、その遺志だといって隠居所のあった二百坪ばかりの飛地を市に寄付した。折からの福祉ブームで、社会党の市長は市役所の隣りに福祉会館を建設したところだったが、さらに地区毎に「老人の家」を建てると、ブチ上げていたわけだから、大歓迎だ。浴室や広間や、共稼ぎ夫婦の学童保育の一廓までツギハギして、「老人の家」第一号が出来上った。昔は台風などの後にはよく床下浸水など起ったところだが、護岸工事が完成してからは、下水道のような流れになってしまった。すぐ隣にはゴミ焼却場までできて、風向きによってはいやな臭もするが、まあこれは仕方あるまい。

「老人の家」は午前九時に門をあけ十一時に風呂がわき、午後三時には湯を落し四時には門を閉じるという規定だから、仕事をもつ年寄りには縁のない場所だが、小六はちょくちょく足を運んでいたのだ。小六が建設の時庭木の植込みや中庭の花壇作りを手伝っていたこともあるし、松籟園からも近かった。松山も大目に見ていた。暇な時には、ひと風呂浴びてこいや、などと勧めさえした。当時は悴夫婦が孫をつれて戻って来ていて、「植木や」から「造園業」へ転換しようとする時だったし、松山自身も六十の坂を越えて見れば、七十近い小六を少しはいたわる気持もあったのだろう。他人の家の事をとやかく言うのも気がひけるが、これには多少松山のコンタンもあったのではないかと睨んでいる。

「老人の家」は地域の爺さん婆さんの憩いの場として設けられたものだが、まだ働ける年寄りはやってこないし、働かなくても優雅な生活を送れる老人も来はしない。

婆さん連中はちょっと息抜きに、昼間から薬湯に浸ってお喋りするのを楽しみにくるのだろうが、さっさと帰ってしまう。バスに乗って来ようが来まいが、バス券を二枚くれるので、これがこたえられなかったようだ。十枚たまれば千円の小遣いが稼げるのである。さすがに人気取りのこのやり方はやがて取止めになったが、当り前のことだ。

爺さん連中は休憩室の畳に坐って、碁を打ったり将棋を差したり、勝負事の嫌いな奴は色がついただけの番茶をすゝりながら、世間話をしたり躰の工合を愚痴り合ったりしている。カップラーメンでも持ってきて、受付のおばさんに声をかけておけば、時刻を見はからって、ヤ

カンをさげて来てくれる。

松山に勧められておれも何回か通ってみた。断って置くが、松山はおれの中学時代の三年後輩だ。中学時代の三年の差がどんなものか、経験者じゃなけりゃ分るまい。しかし今となっては、先輩面が出来るのは松籟園の盆栽棚の前で値切る時ぐらいなものさ。何回か通ってはみたが、丘を登ってまた降りる往復がちょっと遠いし、碁将棋をやらないおれには、誰でも知ってるニュースをむし返したり、それにはあの薬がきくとかあの病院がいゝとかいう話も辛気臭くなって、やがて足が向かなくなった。それでも少々変った爺さんたちの面影をいくつか思い出すことはできる。

葉山さんは黒っぽい背広に蝶ネクタイをつけ、シャレたお弁当ケースを携げてやってくる。いつも一番早く来るのはこの人だそうで、洋服やワイシャツをていねいに壁の衣紋掛にかけ、まるで勤めから帰った人のようにシャツとステテコ姿でくつろいで、新湯の沸くのを待っている。チョビ髭が似つかわしくないようだが、痩せ形の穏やかな老人である。常連は陣取る場所が大体極っているのだが、この人は濡縁近くの隅に坐る。使わない小机や灰皿を重ねて置く末座である。碁を打ってる連中を遠くから覗きこんで、時々うなづいたりするが決して自分は打たない。目立たずつゝましく時間のたつのを待っている。もし「老人の家」が夜十時まで開いていれば、やはり最後までこうして坐っているだろうと思われた。小六にきくと、どこかでバンドマンをやっていたという話だ。道理で並の勤め人上りとは見えないはずだ。

うるさい爺さんが一人いたな。小六を一まわり半大きくした体格だが、女のような白い肌を見せていた。碁は二段だというが、碁打ちの真中に坐っていて、傍から一々文句をつけるのだ。碁を覚えたての連中は、大先生の言う事を謹しんで承るより外ない。「あゝ、見ちゃいられないなあ」などと悪態を吐きながら、一生懸命眺めている。足腰が弱っているのか、どっかり坐ったらそのまま動かないのである。半月ばかり間を置いて顔を出した時、この爺さんが見えないので、いつも文句をつけられていたツルツルのおっさんに、二段の先生は今日はお休みですか、ときいたら、ついこないだ亡くなりました、といった。

丹内小六も変った口だろう。「証文爺さん」と呼ばれて、婆さん連中には評判がいい。湯けに当った婆さんを背負って家まで運んだことがあるそうだから、それは分るが、なにもサラ金の取立てに走り回っていたことまで調子にのって喋ることはあるまいに。

二部屋をぶち抜いたこの休憩室は、床の間や違い棚のある方がどうやら松山の親父の居間になっていたらしい。長い坐卓が置かれ、床の間の脇に二〇型のテレビも設けられて、碁打ちの連中と離れて茶飲話の場となっていた。

白い長髪の老人がいつもテレビと並んで床の間の前に坐っている。これが小六の先生だ。小六といっしょに坐卓の前に集る爺さんたちはテレビを見てるだけである。ボソボソ喋る白髪の先生の声はテレビの音声と混ってききとりにくいが、真前に坐った小六は首をつん出して話をきく。小六が「老人の家」へ通うのも、この話をきくためだったと思う。老先生の名前をきいたら、太田竜だといったそうだ。（註。太田竜は「アイヌシモリより出撃せよ」の著者でアイヌ解放論者）竜でも虎でもいいが、いつも上座に坐りつけていた人だろう、いやひょっとして、ウズウズしながらとうとう認められなかった人かもな。こんな場所にきて、小六みたいな爺さんに半可通の講釈でもすりゃ、まず気もはれようさ。

極楽爺さんは漢学者ということになっている。又の名を張出し爺さんと呼ばれている通り、自作の七言絶句をざっと月に一回ぐらいの割で、大判の模造紙いっぱいに太々と書いて、狭いうす暗い廊下に張出すのだ。なぜそんな場所にというと、茶の間には額に入ったり色紙や掛軸になったり、爺さんの「力作」が五六点も並べてあるので、ここより外にないのであろう。どれにも極楽人と署名してあるところから、極楽爺さんと呼ばれたらしいが、おれは会ったことはない。週に一度はやって来て、廊下に立って自分の筆跡を眺めていたという。風呂上りの婆さんでも通りかかって、お愛想の一つも言うと、荘重な顔をほころばしたそうである。

おれもはじめてビラにお目にかかった時はびっくりした。全学連がついに「老人の家」に進入したかと思った。こりゃ大げさだが、驚いて何べんも読み返したから今でも……いや、題はたしか「成功失敗」だったな。

奮起努力成功道
身体錬磨築健康

後ろの二行は忘れちまった。とにかくおれだって、旧制中学を出ているんだ。しかも府立だよ。こう言っちゃなんだが、一応は秀才扱いされたこともある。今じゃしがねえ酒屋の隠居だけどさ。漢詩の上っ面ぐらい撫でてみたことはあるんだ。有難そうなこたあ書いてあるが、これが「漢詩」だとはどうしても思えなかったよ。

極楽爺さんとは行違いになってとうとう会うこともなかったが、小六にきいてみると、みんな敬遠していたらしい。人品卑しからぬ物静かな老人だが、人をつかまえると重々しい口調で説教する癖がある。小六も一ぺんやられたことがあるといった。「論語読みの論語知らずになってはいけません。支那の聖人孔子様の訓誡は私の一生の勉強の基になりました。論語を知った、覚えた、身についた、とは何を基準に決めるのでしょうか。それは日常生活において実行実現しておるか否かに依るのです」まあこんな風な調子だったが、小六は論語にも孔子様にもまるっきり縁なき衆生だったから、畏こまって肯いて

みせているよりほかなかったという。とにかく、極楽爺さんが極楽往生できることは間違いない。

ところで、おれは小六みたいな植木屋の草むしり爺と話をしたいと思ったことはなかったのだ。それがこの時一ぱいやろうと誘ったのは、自分の気持が滅入っていたんだろうと思う。それというのも、事の起りは埼玉の山から掛けてきた婆さんの電話だ。やれ糖尿病だ神経痛だとうるさいので、医者の勧めもあり親戚がまだ何軒かある生れ在所に帰してあった。もう一年ばかりになるが、おれはせいせいしていた。いやこれは強がりじゃない。元来おれの家系というのは女が強い。祖父さんの顔はよく覚えていないが、祖母さんは家つきの化物みたいにいつまでもヒクヒク生きていた。親父の代となるともうカカア天下はよく分った。兄貴が戦死したお蔭で仕方なく家業をつぐことになったが、おれの代になってもやはり同じ事だった。女が強いという伝統は悴に嫁を貰っても、御時勢もあって一貫している。悴がまた、よくあの婆さんからこんな野郎が生れたものだと思われるお人好しで、嫁のいいなりである。それでも嫁は頭の切れる女で、家のために気を遣い近所の評判もいいんだから、文句も言えない。しかし隠居の身になったからといって、おれにロクに相談もしないで店を改造しちまった時は、さすがに腹も立った。店先を車が二三台駐められるほどひっこめて、化粧煉瓦を敷きつめ、間口いっぱい明かるいガラス張りにしてしまった。壁面にずらりと棚を作ってシャレた照明をコウコウとつけ、まるでデパートの洋酒売場だ。おれも親父の跡をいやいや継いだぐらいだから、商売熱心だったとはいえない。歩道もついてない古い街道沿いのひねた店のままだったが、風呂帰りの近所のオッサンだとか金もねえ癖していっぱいやらずにやいられねえという手合が気軽に寄って、電灯の蔭でコップ酒をひっかけて帰れる店だった。儲けにゃならなくてもそれが役割の一つだと思っていた。これじゃ横丁のアル中の先生も入りにくいだろう。「おじいちゃん、もうそういう時代じゃないの。不満らしいけどちょっと待って。そのうち客種が変ってくるわよ」とコンサルタントとかいうのに結構金をかけたらしい嫁は自信ありげに言った。なるほど近くに出来た団地の奥さん風なのも顔を見せ、季節の贈答品の売上げも伸びたらしい。おれが口を出す幕じゃなくなったようだ。

婆さんからの電話は嫁が受けた。

「おばあちゃんね、大分調子がいいようよ。おじいちゃんが心配だから、寒くなる前に帰ってくるって」

何が心配だ、と思ったがそこまではいい。

「こんなことを言っちゃなんだけど、あたし病気になったのがおばあちゃんでよかったと思うの。おじいちゃんだったら心配で、とても一人で転地させられやしないもの。子どもみたいに手がかかるからね。「老人

の家」へ行くといって出かけたって、どこへ行っていつ帰って来るんだか分りゃしないでしょう」

嫁が横目づかいで睨んだエクボが可愛いかったからおれは黙っていたが、おれを子ども扱いしようとするのが女どもの陰謀だとしても、別にどうってことはない。どうせ女上位の家系なんだから、黙って子どもになってりゃすむことだ。ただ心の中に萌していた妙な不安が、今朝のばあさんの電話をきっかけに、もやもやと湧き上ってきた感じなのだ。死生観というような高尚な問題じゃない。戦地じゃ再三生き死にの目にも会ってきたし、口にゃ出したくねえこともしてきた。だから戦後はおまけの人生だと自分に言いきかせてきたが、どうやらおまけの方が長くなってしまった。おまけを粗末にする気もないが格別の未練もない。こんな口叩けるのも、どうやらこうやら達者でいられるせいかもな。二人の孫たちも可愛いにゃ可愛いが、ありゃ嫁の子どもだ。おれのガキの頃を思い出しや、まるでお伽話の王子様や王女様だ。歯がゆい思いがしたって、とても口を挟む立場じゃない。

離れに一人でポツンとしていると、ふっとおれはこうしているけどマトモなんだろうかと考えてしまうことがある。年寄りになればだんだん頭も体も衰えて、もの忘れしたりヘマをやらかしたりするのは仕方ない。視野が狭くなり新しい物事が受入れられなくなるのも仕方ない。おれの脅えはそれとは違うようだ。長年連れ添ったばあさんや、悴や嫁や孫たちに囲まれていながら、ある日突然、異星人のように言葉も感情も通じなくなってしまうというような恐ろしさだ。

小六に出会ったのは、「老人の家」へ行くといって新宿へ出かけた帰りだった。砂嵐の吹き荒れる砂漠のような街を見てきた後だったから、妙な人恋しい気分から声をかけたのだが、小六の念仏にひっかかって狐窪の家までついて行くハメになった。酒屋の隠居が貰いものの安酒に釣られたっていう訳でもない。小六は銀行の駐車場の隅に大方の鉢を隠し、花が萎れかかった取替鉢だけを幾つかリヤカに積んだ。空車同然だが車の往来のはげしいバイパスをさけて、遠まわりをして住宅街をぬって行く。小六が狐窪に移ったときいてから何年かたつが、訪れたことはない。もっともガキの時分にはよく行って遊んだものだ。武蔵野台地の突端のいりくんだ一部で、今は森の茂った北側の台地と盛土して通したバイパスの土堤の間にはさまって摺鉢の底のようになっている。昔はこの段丘の上から靄でかすんだ川べりまで、果樹園や田畑が見渡せたものだった。崖際からはいく筋も清水が湧き柵で囲ったワサビ田もあった。荒れた田んぼも二三枚あってレンゲ草の色が目に残っている。小川には沢蟹や小鮒や、孫たちが見たこともないようないろいろな生き物がいた。代替りしてから松山はかなり土地を手放したらしいが、ここだけは残した。摺鉢の底では大した金に

はならないからだろう。

清水も涸れ小川もなくなり、丘の上の森の中にやたらと建ちはじめた住宅群の排水を集めた下水溝が端を流れるようになった頃、松山は古材を集めて二戸続きの平屋を建て、親父の後添えの婆さんを住まわせた。ヤツの母親は早く死んだので、親父は長い間男ヤモメでいた。松山は結婚してから自分といくらも年の違わない女を、籍を入れないまま今「老人の家」になっている隠居所に住まわせて置いた。だから家族となってからの年月もかなり長いはずで、中気の親父の最期をみとってから、婆さん自身がおかしくなってしまったが、そう粗末には出来ない。同居していた頃は小六が世話をしていたらしい。悴夫婦が孫を連れて戻ってくれば、この婆さんの運命は極っている。松山はその隣りに小六を住まわせて「松籟園」の仕事から解放した。小六は本家から縁日物の鉢をもってきて駅前の雑踏に店をひろげ、売上げは自分の小遣いになるという寸法だ。松山は最後まで小六を従卒として使うつもりらしいのだが、こういうのをほめていいものか、けなしていいものか、おれには分らない。当の小六が結構満足してやってるんだから、とやかく言うことはないわけだ。

生垣の道を歩いていると、急に暮れてきた。おれは小六と並んで把手につかまって行った。

「お前さんさっき、モゴモゴ念仏を唱えていたが、何て言ったんだい」

小六は「いやあ」と照れ笑いをした。

「昔はなんか女の名前を呼んでいたそうだが、変ったのかい」

「旦那そんなことまで知ってるの。じゃあしょうがねえな。〃オレはジョウモンジンだ〃と三回くり返したんですよ」

「なんだそりゃ」とおれがきき返すと、「ほら、縄文時代てのがあったでしょう。その縄文人ですよ」この野郎生意気にそんな言葉を知ってるのか、と思ったが、おれはすぐ太田先生を思いうかべた。だが念仏にどんな意味があるのか分らない。婆さん連中が小六を「証文爺さん」と呼ぶ由来はこんなところだろうと想像した。

「太田先生の話をきいているうちに、もう女々しく娘の名を呼ぶのは……」

小六は砂粒でも噛みあてたように、顔をゆがめて口を閉じた。その言葉の切れはしはおれにもちょっとショックだったが、きこえないふりをした。ローズだかリリーだか知らねえが、小六の娘だったとしたら、もう五十近くにはなってるだろう。

「相変らず先生の話をききに出かけてるんだろ。昼間は空いてるいい身分だものな」

「昼間だって結構仕事があるんですよ。食事洗濯もあ

るし、前栽の手入れもしなきゃならねえし。それに、あの先生半年ばかり前から来なくなっちゃたんで」

「病気でもしてるのか」

「それが旦那、話にもならねえことで。極楽爺さんてのがいたでしょう。やたら漢字書いて来て貼紙したがるのが、あの人が太田先生を灰皿で殴っちゃったんですよ」

極楽爺さんと太田竜先生では反りが合うはずもないが、刃傷沙汰とは驚いた。小六がその場に居合せたらそんな仕儀にはさせまいものを、おれは歩きながら小六からまた聞きの話をきいた。

その日極楽爺さんは大きな丸い色紙掛をもってやってきた。床の間にも違い棚にも壁面にも、すでに爺さんの力作は掲げられている。どこかうまい場所はないかとウロウロしているうち、常の如く上坐に腰落ちつけていた太田先生との間にやりとりがあったらしい。静かな低い言葉で、居合せた連中も険悪な様相に気づかなかったという。それから急に極楽爺さんの甲高い声がした。それが、「国賊ッ」といったか「売国奴」といったか、証言が二つに分れた。いずれにしても極楽爺さんのドナリ声をきいて一斉にふり返った時は、太田先生は背後の壁にもたれかかって目を回していたし、爺さんは摑んでいた灰皿を投げすてて姿を消すところだった。近寄ってみると頭から血が垂れ続けているので大騒ぎになった。この部屋の灰皿はみんな軽いアルミの打抜きだったのに、どういうわけか太田先生の前に一つだけ大きな陶皿が置いてあったのである。受付の若い吏員とおばさんが救急箱をもって駆けつけてとり敢えず鉢巻みたいに包帯をし、救急車を呼ぼうとすると、どうかそれだけはやめてくれと頼むのでやめた。「頭の打傷は出血した方が安心なのです」といって顔をしかめて笑って見せたそうである。太田先生はしばらく横になって休んでから、若い吏員に付添われて帰宅したが、わりと元気だったという。小六が後で受付のおばさんからきいた話によると、「誤解されるような言葉を吐いた自分が悪いのです」といって先生は別に極楽爺さんを恨まなかったという。おばさんは先生の言葉に感動していたそうだが、小六とて同じ思いだったろう。事件のきっかけとなった色紙の七言絶句は「忠君愛国」と題したものだったが、極楽爺さんの逆鱗にふれた言葉は判明しない。その後二人の老人は姿を見せなくなった。受付のおばさんの話では、二三日して中年の奥様風の婦人が詫びにきて、太田先生の住所をきき、作品をすべて持帰ったそうである。「出掛けるのはおやめなさい」と言ってあったのだが、周囲の者が思いやりでほめるものだから、つい作品の展示をはじめてしまったらしい。小六が次に行った時には、「みんな仲良し楽しい老後」とマジックインキで書いたワラ半紙が壁に貼ってあったそうだ。話をきいていると、本当に傷ついた

のは極楽爺さんの方らしい。家人の暖かい思いやりでやがて元気になるのだろう。おれの身に較べりゃ何とも倖せな人だ。「老人の家」になんか来ることはなかったのだ。

狐窪への細道はいくつかあるが、こちら側からはみな急坂である。「旦那滑らないように気をつけてよ」小六はおれに注意して、リヤカにもたれかかるようにしておりた。土堤の上のバイパスを走る車が、ぽつぽつ灯を点けはじめている。大きな木立があって、この低地は早く暮れるらしい。真中にぽつんと立つ一棟の片側の窓だけが黄色く明かるんでいた。

小六は灯りの窓に声をかけてから、隣りの戸口に入った。六畳と三畳の粗末な建付の部屋だが、ロクに家具がないからガランとして片づいている。小六は「隣りへ行きゃあるんですが」と言って、薄汚れたセンベみたいな座布団を勧めて、急いで台所へ立った。小さなチャブ台を展げて有り合わせの品を並べると、「わざわざこんな所へお呼びしちゃって」と畏まって頭をさげた。

「隣りのばあさんの加減はどう」

「世話はかからねえです。たまに坐ったままお洩らしするぐれえなもんで。足が弱ってるから、天気のいい日にや、この家の周りをそろりそろりと手をとって歩かせてやります。たまには家の回り草をムシったりもできるんですよ」

老人ホームになんかやられないでよかったと喜んでいるという。小六って奴は最後まで人に仕えて喜ばれて終る運命らしい。

ひとつ変ったことと言えば、ばあさんの夜伽をすることだという。玄関は別々についているが、板の間の境の板戸を押すと同じ板の間に出る。はじめ見回りがてらにばあさんの枕もとで世間話をしていると、うとうとしかけたばあさんがしきりと手探りするので、小六がなだめるように手を添えているとその手を摑んだままスヤスヤ睡ってしまった。それが癖になった。はじめのうちは皺だらけの指の力がほぐれるのを待っていたが、そのうち小六の方も疲れて畳の上に横になってしまう。陽気のいいうちはそれでもいいが、結局小六はばあさんの隣りに床を展べるようになってしまった。寒くなると電気アンカよりは小六の肌の温みをほしがる。小六はそれを別に辛い勤めだとは思っていない。戦争のために一家離散してしまった小六にしてみれば、同様に人生のコースが狂ってしまった育ちのよいばあさんがふびんなのだろう。頭は少々ボケてもの忘れはするが、折目正しい人で、小六の知らない昔語りなどきかせてくれるのが、小六にしても楽しみだという。

「あたしゃお袋の世話もロクに出来なかった不孝者だから、お袋に仕えるような気分なんですが、ふと考えて

みると、あたしより一つ年上なだけなんですね」

「松山の親父も悴とそう年の違わない女を家に入れたんだから、おっかさんとは呼べなかったろうな」

「それでも松山の旦那もおかみさんも、この人にゃずいぶん気を遣っていたようですよ。それだけにこの人は何もかも胸の内に押えこんで来たと思います。人間みんな末路は同じだし、「不自由な躰を丹内さんにお世話して頂いて、この年になってやっと倖せにめぐり逢えたような気がします」なんて言われると、あたしも何だかグッときちゃってね」

「お前さんだっていい死に目に会えるだろうさ。なんだか話がしめっぽくなっちゃったな。お前さんがきいて貰いたいっていうのはどんな話だい」

小六はニヤニヤして、もうすこしやってからじゃないと、と酒を勧めた。小六は元来いい酒呑みで、毎晩酒がなくてはもたないという訳でもなく、仕事柄大酒呑む機会があっても乱れないときいていた。おれと反対だ。酒屋のオヤジは酒の味は分らなきゃならないが、大酒呑みじゃ身代がもたない。近頃は質のいい地酒の二級酒を二本もあければトロンとしてしまう。小六の貰い物という酒はあまり聞いたことのない地酒だが、結構いけた。松山が洋酒党だから、貰い物をこっちへ回したんだろう。

「ところで、例の〝おれはジョウモンジンだ〟ていう念仏はどういう意味なんだね。いくら考えても分らねえ」

沢庵をポリポリ嚙んでいる小六をうんざり眺めて、おれは訊いた。おれなんか沢庵はしゃぶるほかない。

「それは、ちょっと話が長くなるんですがね」

「太田先生の講釈を全部話すこたないよ」

小六が先生と近づきになったのは、丹内という姓をきいて、これは珍しいお名前だ」と白髪の老人が声をかけたのがキッカケだそうだ。「内(ナイ)」というのはアイヌ語で「小さな川」を意味するといい、「あなたがアイヌだというつもりはないが、長い長い縄文時代の日本の主人公の血を伝えていることは確かです」と老人は言った。小さい時にガキ仲間から、「足(たん)ない小六」とからかわれた記憶をもつ小六は、老人の話にひどく興味をもった。「老人の家」へ行くと個人教授を受ける生徒のように先生の前に坐って講釈をきいた。雑談風な先生の話を小六は自分なりにまとめたつもりだろうが、きく方でもうまく脈絡をつけてきいてやらなけりゃならない。古代日本は朝鮮の植民地だったというのが太田先生の学説のようである。おれだって精しいことは知らないが、「騎馬民族征服王朝説」なんてのを小耳に挟んだことがあるもの、たいして驚きはしなかったが、話はあっちこっち飛んだり短絡したりで、おれをまごつかせた。

優秀な技術と文化をもった朝鮮渡来部族は政治経済の実権を握ると、次々に東国へ移民して先住民を征服し、

西から東へと進出した。先住民は辺境防衛の兵士として、都城佛塔創建の労働者としてドレイの如く徴用され、之を恐れるものは東北に逃れた。朝鮮系の日本征服が完了したのが明治維新であった。なおこの時も東北北海道は蛮地であった。二千年の日本の歴史は朝鮮系民族の執拗な東征行の歴史である。

朝鮮系は知能優秀万事に積極的であり、権力に心服し忍耐強く努力する。戦争中時勢に乗じてわが世を謳歌したA級戦犯が戦後は総理大臣に返り咲いて威勢を張っても、誰も咎めることが出来ないのは、日本の政治経済文化の中枢を朝鮮系が抑えているからである。現在の日本を齎したのは朝鮮系であるが、その陰に、温和で従順な被征服民がギセイになっていることが忘れられている。

まあざっとこんな工合の単純明快な史観となるが、小六の話を綴り合わせながらきいているうちに、おれは酔いがまわってきた。

「お前、アメリカインデアンみたいな被害妄想をもってるな。世間には朝鮮人と縄文人てのしかいねえみたいだ。お前が縄文人ならさしづめおれは朝鮮人か。」

小六は小面憎い微笑をうかべた。

「旦那は土着の人らしいからそうなりますな。大昔この多摩川べりは、朝鮮移民がたくさん入りこんだところだそうだから。でも、あたしゃ別に朝鮮人を憎んじゃいませんや。恐いとは思うけどね。日本の朝鮮系がこんどは何をオッ始めることかと」

「二千年も同じ土地に住んでりゃ、何もかも混り合って一緒くただ。今さらそんなことほじくり返して何になるんだ」

「太田先生も言ってましたよ。日本人の単一民族という思い込みが、平安と繁栄を支えているけれど、それは明治以来の徹底した教育のおかげであるって」

ああいえばこういうだ。おれはもうこんなバカげた話をしてる気がなくなってきた。

「それでお前、太田先生の講義を受けて、どんな功徳があったっていうんだ」

「先生の話は、これからという所で尻切れトンボになったんですが、やはり〝おれはジョウモンジンだ〟という〝念仏〟です。これを唱えていると、自分こそこの島国の大昔からの主人公だったという自信みたいなものが湧いて来るんです」

「お前にだって朝鮮人の血が混ってないという保証はないんだ」

「そりゃ分らないが、でもそれはあたしが納得するかどうかって問題でさ。旦那、もうひとつ誰にも言わない念仏があるんですが言っちゃいましょう。〝テンノウヘイカはチョウセンジンだ〟というやつ。これを唱えると、胸のつかえがサラッと消えてとてもいい気分になります」

〝貴様、何てこというんだ〟と怒鳴るべきだという思いが、タイミングを失って流れ去り、「そんな事を口走ったら、昔なら手が後ろへ回るところだ」とたしなめたが、不意に、喋っている小六もそれをきいているおれも、なんとも哀れな惨めなものに思われてきた。擦りむけた肌に荒塩をもみこむように、小六は自分を虐げていやがるんだ。

「日本の学者はヤッキになって、それを隠そうとしてるけど、向うの学者にはそんなことは常識だそうです。バカにしたり差別したり、憎み合ったりさせときながら、陰では互に甘い汁を吸い合ってるから、本家と分家は縁が切れないということで」

「お前そんな下らない話をきかせようと思って、おれを招んだのか」

「いやもうやめます。あたしゃ頭の造作が簡単にできてるから、すっきり割切った話でないと納得できないもんで。話てのはこれからです。実はあたしが「老人の家」へ行かなくなってから、いろんな人がここへ尋ねてくるようになりましてね」

空きっ腹に沢庵をしゃぶりながら飲んだせいか、おれはもうウツラウツラして小六の声をきいていたらしい。小六はやって来た連中の名刺でも読み上げていたのか、「政治老害追放期成会」「福祉亡国阻止連盟」「日本の未来を憂う会」「安楽死普及会」「日本自殺協会老年部」そんな風にいろいろきこえた。

「なんだってそんな連中がお前んとこへやってくるんだ」

ロレツが回らなくなった声で、おれはどなった。

「あたしに一肌ぬいでくれって言ってくるんですよ。あたしも頼まれればなかなかイヤとは言えない気の弱い男だけど、日本自殺協会の勧誘だけは断ったね。仕事というのが、年金たよりに細々と一人暮ししている年寄りが銀行から下げて来た金のひったくりですよ。方法は話が極ってから精しく指導するが、収益は五分と五分でわけて、被害者の年寄りが絶望して自殺したら残りの半額もボーナスとして進呈するというんだ。自殺協会というから自殺を勧めに来たのかと思ったらそうじゃないんだね。勧誘に来た男は〝自分はもう十五人ばかり手掛けましたが自殺したのは三人だけです。日本の社会は後れているから新聞種にでもなるとすぐに同情が集ってしまうのでやりにくいです〟と言ってやがった。そういう仕事は、一生年を取らないと思ってる若い奴の所へ持ちこんでくれって断っちまったね。

それから、実はこの酒は政治老害追放期成会というのが置いてったんです。若いきれいな女が来ました。〝わたくしたちはかの兇暴な赤軍派のごとき、幻想に憑かれてムコの民衆をサツリクするような連中とは全く異なります。わたくしたちは一党一派に偏せず、い

ささかも権力を求める意図はございません。権力は常に新鮮ハツラツでなければならないという信念に基いて行動する奉仕団体であります。前世紀の遺物の如き、時代感覚を喪失した老政治家には引退して頂かなければなりません。引退基準は必ずしも機械的に暦年令に置くのではなく、幹部会で引退候補を厳正に選定いたします。引退とは即ち死であります。わたくしたちはあえて暗殺者の汚名を甘受し、もはや無意味な存在となったオイボレ政治家を抹殺いたします。これによって無能な死者も過大に美化された栄誉ある名を歴史にとどめ、国民は新しい権力に新鮮な期待を托して、各々の業務に努力することが出来ます。無能な為政者に名誉ある死を！　これこそ、わたくしたちのモットーでございます〃その女はひと息にこんな演説をぶってから、あなたの仕事というのは、胴巻にダイナマイトを巻きつけて指定された人物にだきつけばいいのですと教えた。付添の幹部がリモートスイッチを入れれば爆発する仕掛けになっていますといった。なんだか昔の事を思い出させるけど、用なしの年寄りを使うところがミソらしい。各党の若い代議士などからも秘密の援助を受けていて資金は豊富だそうです。多少の訓練は必要だが、出撃前には若い美女たちが心ゆくまでおもてなしいたしますと言っていた。あたしも少しは気が動いたが、場合によっては無関係な人々も死なせることもあるだろうし、やっぱり断りました。

一番気持が動いたのは安楽死普及会の話だったな。これは六ケ月と一年と二種類あるんだが、契約すれば期間内に最も楽な死に方で殺してくれるというのです。普通にいう安楽死と違って安楽殺とでもいうのかな。報酬は前払いで価格によって多少殺し方は違うが、安楽に死ねる点では大差はないといってました。このセールスマンは大へん腰の低い男でして、家中をひと渡り見回してから、〃預貯金はどの位ございますか〃ときくから、その日暮しで貯金なんかないよといったら、〃まさかそんなことはございませんでしょう〃と笑ったが、どうやら見当外れの面持で帰って行きました。おそらくあたしの方で頼んでもパスするかどうか分らないなと思ったけど。この男の話でおもしろいのは途中解約を半金返しで認めるということです。〃会の方と致しましてもなるべくは気が変って解約して頂けるようにと、契約期限ぎりぎりまでお待ちしてるんでございます。人の命というものはかけがえのないものでございますからね。でも中には解約もしないで自殺してしまう方もございますです。どういうお気持なのでしょうか、もちろんこの場合は返金はいたしかねますが〃こんなことを言ってたけれど……」

おれはうつらうつらと小六の話をきいていたが、いきなり肩を揺すられてびっくりした。

「旦那、睡っちゃだめだよ。まだあたしの話をきいてくれねえじゃないか」

「睡っちゃいない。ずいぶん長いこと妙な話をしてたじゃないか。まあ言ってみろ」

「あたしゃね、何べんも念仏を唱えてとうとう決めたんだけど、隣りのばあさんとケッコンしようと思うんだ」

「なに、ケッコン。誰が誰と……」

「あたしが、お隣りのおばあさんと、ケッコン、するの」

「なんだ、いい仲になっちゃったんか」

「やだなあ、すぐへんに気を回すから。あたしゃ今までに、あんなに立派なけなげな婦人に出会ったことはないです。あたしゃあの人のために、残った一生をぜんぶつくしてあげたい。遠慮したり気兼したりするあの人を安心させるために、ケッコンしようと決心したんだ。達者な亭主が病気の女房のために、下の世話ぐらいしてやったって、何も遠慮も気兼もいらねえでしょうが」

「うん、バカに惚れこんでしまったんだな。そういう考えなら結構だと思うよ」

「つまりね、籍がどうだ財産がどうだってことじゃないんです。二人が夫婦だってことを公認してもらえりゃいいんです」

「分った。分った。ところでおれはもう帰らなくちゃ。悴の嫁がうるせえからな。おれは嫁に叱られるのが一番こたえるんだ。それに隣りでお前の花嫁さんも待ちかねているだろうし」

「送っていきますよ、そこらまで」

「冗談言うな。おれはお前より若いんだ。この位の酒で酔っぱらうかね」

小六は立ち上ろうとするおれを引きとめた。

「旦那、今の話なんだけど、とにかくあの人は松山の大旦那の親父さんの女だった人だ。大旦那だって、まかりまちがえば、おっかさんと呼ばなきゃなんねえ人だった。旦那から口をきいて頂けなければほかに方便がないんですよ」

「うん、こりゃ爺い婆あの年甲斐もない色恋じゃない。美談だよ。おれは喜んで月下氷人の役を引き受けるぞ」

おれは軀を引きしめて玄関に立った。そうだ、小六て奴はこういう野郎なのだ。太田先生の空理空論よりは、極楽爺さんのお説教の方が体質に合ってる奴なんだ。なんとなく楽しくなって、深々と頭を下げている小六を見ながら、おれは玄関の戸をピシャリとしめた。とたんに足もとがふらついたが、気を取り直した。そろそろと庇伝いに歩くと窓格子があった。腰高窓のくもりガラスに人影が映っている。ふと顔を上げると、逆光の中に二つの光る眼がおれを見つめていた。総身に冷水を浴びた気

分というのは、こういう時に使う文句だろう。おれは一瞬目を閉じて軀を固くしたが、二三歩ゆっくり歩いた。それから夢中で駈け出した。といっても傍から見りゃ阿波踊りを踊ってるようだったかもな。何度も転んだ。

「まさか」と呟いたが後ろを振返る勇気はなかった。あの眼の妖しい光、あれは人間のものではない。旧街道沿いのおれの家までは、普通に歩いて十五分とかからないはずだが、どこをどう通って来たか覚えはない。自分の店のキラキラ看板が見える所まで来てやっと落ちついた。おれは家の奴らのいうようにまだボケちゃいねえ。ただ空きっ腹に安酒を呑んだ揚句の、あれが幻覚というやつだろう。横の路地から裏木戸をあけ、とにかくノドがカラカラだったから台所へ上って水道の栓をひねると、嫁が現れた。呆れはてたように目を丸くして、

「おじいちゃん、どうしたのよ、その恰好は」

おれは黙ってたて続けにコップの水を飲んだ。着ものの裾のあたりが、いや腹前まで泥まみれだ。ヒリヒリすると思ったら、汚れた掌の端が擦りむけていた。あわてて手を洗った。やがて悴まで出て来やがって、二人してお説教だ。「家の者に心配かけて、どこを今までほっつき歩いてたんだ」ということだ。あんまり煩いから言ってやった。

「狐窪の小六の所へよって昔話をしているうちに、つい長居しちまったんだ。あそこは街灯もついていないで暗いから、転んじまった」

悴と嫁は今まで見たこともない何とも奇妙な顔付で頷き合っていた。

「こりゃ、もうだめだ。おばあちゃんが帰ってくるまで外へは出せないな」

何をぬかす。おれには足があるんだ。

「おじいちゃん、忘れちゃったの。狐窪の小六さんの家は、この暮に火事を出して、小六さんも、一緒にいたおばあちゃんも亡くなったのよ。おじいちゃんもお葬式に行ったじゃない。まだ半年ばかりしか経ってないのに、もうけろりと忘れちゃったの」

嫁はおれの手をひいて部屋へ上げた。

「さあ、早く着換えしなけりゃ、あら、膝を擦りむいてるわ。おとうさん薬箱とってちょうだい」

おれは操り人形のように為すに委せていたが、この気分もまんざらではない。

朝はいつものように早く目がさめたが、節々が痛い感じで、床の中でグズグズしていた。たしかに小六の葬式に出かけたことは思いだしたが、昨夜のことを狐に化かされたとは思えない。いくら狐窪だって今どき狐がウロウロしているはずがない。もっとも狸ならちょいちょい人家の近くに出没してニュース種になるが。年を取り親も死に知人もポツポツ欠けてくると、住んでる世界の次

元がだんだんかしいで来るんじゃないか。うまいこと言えないが、飯を食ったり糞をひったりするのは、家の奴らと同じでも、心の景色が変ってくる。時間の巾のひろがる方角が違ってくるんだ。昨夜小六と話したことも、おれは本当のことだと思うのだ。棺桶に片足つっこんでいると、生き死にの区別なんかあいまいなものだ。死んだヤツとつき合いがあるから、自分てものがあるようなもんだ。しかし、小六とあのばあさんの墓がどうなっているのか、いっぺん松山のところへ行ってきいてみよう。二人ともしっかり抱き合って死んでいたとかで、心中説も出たが、松山は一笑に付していたっけ。墓ぐらいは一緒にさせてやりたいな。大体女どもは業が深いから、やれ進学だやれ結婚だとはしゃいで生きているが、おれに言わせりゃそんなものは幻想だ。うちのばあさんだって地球の終りまで生きるつもりだろう。何だかだと取越苦労をして世話をやきたがる。おれがちょっとソソウをしたり思い違いしたりすると、嫁と一緒になって、〝脳軟化〟の気味があるのかしら、などとぬかす。昔はそんな言葉は使わなかったもんだ。こないだ何かで見た〝二度童子〟なんてのは、まあまあだ。小六に言わせりゃ〝ジヨウモンジン〟の言葉だろう。

寝床の中でいつまでもグチを空回ししていても仕方がないので、おれは顔を洗って縁側に出た。梅雨も上って初夏のいい日和だ。棚の盆栽どももみんな活々してる。

この中には小六から買ってやったものは一つもない。安鉢の一つも買ってやればよかったと思うが、もうおそい。こうしていると、母屋から嫁が、「おじいちゃんごはんよう」と呼ぶか、幼稚園に行ってるテルヒコが、トコトコ歩いてやってくる。なんで役者みたいな名をつけやがったか分らないが、こいつもわが家の伝統に従う運命かと思うと、多少ふびんである。

ところが昨日の今朝だからだろう。けさは嫁がテルヒコと一緒に迎えにきた。木戸のところで、「おじいちゃんごはんよ」といったかと思うと、嫁はつかつかとおれの脇へきて、耳もとで言った。

「おじいちゃん、その萎びた種茄子みたいなものを、ちゃんと納っといてちょうだい。マサコだってもう三年生なんだから、気をつけてもらわなけりゃ」

おれにはそのジャケンな口調よりも、朝化粧のあとの女の匂が、故里の香りのように胸に泌みた。

李朝の壺

大和禎人

彼によればそれは李朝の壺であって、言いだしたからにはどうあっても必ずそうでなければならない経緯をたどるはめになった。

李朝は朝鮮の李氏である。よく考えてみると中国の陶器とは無縁ぐらいのところはそれを言ってしまってから気づいたが、いまさら取消しはできないのだ。臍をかむ内心をそ知らぬ顔で通すほかはない成行きだった。

済南に近く石家荘へ向う作戦中、彼等はその部落に駐屯することになっていた。割当てられた民家はこれまでにない豊かさを感じさせるもので、くだんの壺も卑しからぬその雰囲気にすっかり訓染んで、よほど高貴なものという印象を与えた。夜陰、土間の隅に何気なく置かれていた極彩色のもので、高さ四、五十センチ、口径は割合に広くこれは二十センチもあろうか。何気なく置かれたところにかえって由緒を思わせる、異彩の品物だった。李朝の壺という発想はこの壺ばかりでなく、日本流に言えば床の間にあたる大壁の前にこちらは三彩馬と思えるものが飾られていたりしたからだ。日本軍の侵略前に辛じては住民たちは逃れて、家財もそのままの状態であった。

「こちらは李朝の壺だ、あれはどうやら三彩馬らしいな」

彼は得意気に知識を披歴した。

「唐三彩と言って、鉛を媒溶剤として銅や酸化鉄を使って色出しをする、緑、褐色、白の三色を流しがけ、ろう抜きで文様を描いたものらしく、唐の盛期長安や洛陽で焼かれていたものだ」

「……」

学のあるところ、蘊蓄を傾けこの際少しく饒舌の気味であった。

「サンサイバねぇ、なるほど馬に違いない……、そうか、そうかい、はいなぁ」

とおどける兵士もいた。軽率さを免れない相槌にいくぶんかは鼻白んだが、それくらいでは閉口しない。

「定説ではまだ窯跡は発見されていない、…… 形態は馬だけではない、神王像、牛、馬などのこうした陶像のたぐいと、竜耳瓶、大盤などの器ものがあるが、これは一種の葬具だったらしい……」

「装具ねぇ、飾りものではない」

「間違ってくれるなよ、葬具たぁ、葬いの道具だぁな」

ここで彼の語調が「はてな」という部分を露呈する。古兵の教えるところによれば、彼はもと軍曹まで進級しながら何かの科をうけて降等、降等と、つまり階級を二度まで下げられ、下士官の列をはずされた上等兵の身分であった。戦場往来の中に死地を見出せないでいる、罪障消滅は戦死以外にない兵隊だった。召集解除を夢に見ることすら望みを絶たれることがどんなに惨いことか、それを知らされて見るとあるふてぶてしさが眼に映り、一目おかれる存在になっていた。やくざっぽい口調の端に自棄がある。ニヒルの無気味さが漂う。

だが、

「唐の三彩はその影響が大きい、渤海三彩、奈良三彩ペルシャ三彩が生まれ、宋三彩、元三彩が中国北部に流行したというから、さしずめこれは、そのへんのところかも知れんな、古び加減が相当なものよ、下るとしても明代には法花、清代では素三彩となるのだが、悪くしても時代ものには間違いねぇ……」

戦闘が熄んで、危険のひとまず遠ざかった状態の中ではしきりに頷く顔が何人かあった。上等兵という階級は身近な階級である。下士官との間に兵長があるが、兵長に進むと下士官適任章のマークが右袖に欲しくなり、兵隊の心から離れる。とくに彼はいまはそうしたことに無縁の男だけに、なおさらふしぎな説得力をもった。しかもこの上等兵にはなぜか（学）があった。その（学）が彼を不逞の兵士にしたという筋みちを兵隊たちは何とはなく読んでいたようだ。

そんなわけでかの李朝の壺は無事に（李朝の壺）になり了せたもののようだ。

明くる日の朝
珍らしく起床ラッパが鳴った。忘れていたあの
兵隊さんも下士さんもみな起きろ
起きないと隊長さんに叱られる
急調子で、せき立てるようなメロディーである。まだまだ日本陸軍の健在を知らせる管楽器音だ。吹鳴を終って喇叭手が二音だけプー、プーとつけ加えたのはド音で彼等の隊の符牒だ。

（起床っ）
（起床ぉ　——）

と、こだまを返えし、仮寝から覚める。わずかな平和

の充足感をたちまちはぎとられる。
と、どうだろう。
「飯上げっ」
と聞えるではないか、
「飯上げっ――」
と異口同音に唱える。歓喜の声だ。まるで内地で営舎の朝を迎えたようだ。覚えずもそうなったのは献立が伝えられたからだ。
「飯上げっ、本日はとくに生野菜の味噌汁の給与がある、各班は容器を準備の上、炊事班の舎前集合」
飯上げ上等兵はひときわ声高に献立内容を伝え触れ廻った。野戦では例でない起床喇叭も乙な先触れであったようだ。飯上げの指揮と配分を上等兵の任務とする不文律から（飯上げ上等兵）の名があるのだが、同じ上等兵でも懲罰降等の彼についてはその当番さえ免じられていた。
「ちぇー、くそぉ、おれは寝るぞぉー」
不具寝の姿勢を固くするようすであった。心情的にもこの騒きには同調しかねる。気にいらなければ班内にどろ寝の意地を通すことがこれまでもしばしばあった。
（味噌汁）と触れるからには間違いなくあの母国の味なのだ。気障に言うならおふくろの味覚なのだ。生野菜にも飢えていた。どお――っと一瞬のどよめきもふしぎではない。携帯口糧としての粉味噌に飽き、軍用罐詰の不味さにも飽きて久しいからであった。
私たちの班では例の（李朝の壺）がこの際の役に立った。
「上等兵どのよくありますか」
「勝手にせいよ」
撫然としてつき放すように言った。
「だ、大事に扱います」
当番の兵はペコリと愛嬌のいい礼をした。
「食罐と違うきに、気いつけぇよ」
壊れもの要注意という頭が誰にもあった。とくに李朝の名器なのだ。
久し振りの味噌の香りが快よかった。どの胸にも、生きのびる喜びが湧いた。勇気が生れた。飯盒のフタにうけた貴重な液体に励まされた。いみじくもいじらしい朝の食事をやがて終えた。
「お主ら、可愛いいのう、味噌汁がそんなに美味かったか」
不貞寝していたはずの彼、上等兵もいつの間にか仲間入りをしていた。
「これは越後味噌だな」
「いやぁ、塩加減から言えば信州だ」
「違うな、東北産だろうて」
駐屯となればかくべつの業務はない。味噌汁談義が食

後の話題を賑わすあんばいであった。
「お前ぇさんたちよ、犬死するなや」
突然、上等兵の彼がポツンと言った。昨夜の饒舌は彼の本来のものではない。どちらかといえば黙々としているのが彼の常態だから、たまたま口をきくと妙にドスが利く。兵隊の生命とかかわりのないところで昨夜のような饒舌をくりひろげたことがまるで嘘のようである。
（犬死をするな）は彼の口癖であったが、この場合は味噌汁と関連して妙な実感をともなって兵士たちの胸に響くものがあった。
珍しく命令回報を伝える日夕点呼があった。班長召集が本部にあって、命令受領が行われたらしい。その不在時間が長かった。どうやらここでの駐屯は長くなるらしい、兵隊たちの勘はいちはやくそう情況を読んでいた。
「そのまま聞け、週番士官どのの伝えた命令を復唱、補足する、一つ、部隊はしばらく当地に駐屯する、二つ、別命あるまで所在において十分の休養をとるように、三つ、兵站は十二分につき給与の心配はない、生野菜以外徴発をしてはならぬ、四つ、駐屯中といえども四囲の状況については細心の注意を払うこと、……」
等々のことが伝えられ、いよいよの最後に割当の民家における起居についても細かな注意が加えられた。
「家屋により各部屋に便器を備えるものがある、当地では壺が常用する便器のもようである、豚に尻を舐められる便所とは違う、承知しておくように、ええな……」
豚に尻というところで笑った者があったが、さきの駐屯では丸太を二本渡した後架の下に豚が飼われていて、足を踏まえ、用を足すと豚どもが群がってきた経験をしている。この場はしかし、笑いごとではあろうはずがない。
「げぇ――」
と奇妙な声を急に発したものがあり、それを制するように口へ人差指をあてるものがあった。
「何か」
班長はちらと怪訝な面持をしたが、兵隊たちはそれきり沈黙を守った。明らかに味噌汁の容器に使われたあの李朝の壺は便器に該当したのだ。
「その壺は極彩色であるとのことだ……」
班長は駄目を押すようにさらに説明を加えた。部屋の隅、右翼に列んでいる彼、上等兵がこの時顔をしかめ、片目をつぶるしぐさをした。
夕餉の飯盒水炊のための米を異臭の漂うクリークに磨ぎ、明けの朝には無数の屍が浮ぶのを見てきた兵隊たちだ。上等兵のしぐさを真似て片目をつぶるより術はない。
「没法子（めいふぁーず）」
と、どの胸にも思いが上り、ある者は滑稽さに笑いをこらえていた。
（五七・九・三〇）

別の世界

三戸岡道夫

一

おとぎ話かSF小説の中でもない限り、廊下を歩いている人間が突然消えてしまうというようなことは、まずない。ところがそれが現実にあったのである。森山はっきりその眼で見たのだから。

その日森山は二階からエレベーターに乗った。エレベーターの中は彼一人であった。五階のボタンを押す。ドアが閉まる。エレベーターは上昇気流のように昇りはじめた。途中からも誰も乗ってこない。だからエレベーターのかすかな震動に身を任せていると、まるで無人のビルの中を上昇しているようで、不安な感じさえするのだった。よく広いビルの中でまったく人に出逢わなかったりすると、ひょっとして無人のビルにいるのではないかという錯覚に陥ることがあるが、いま森山が感じている気持ちがそれであった。

エレベーターは五階でとまった。

エレベーターを降りる。そこにも誰もいない。廊下は右と左に分かれていた。天井の高くないその廊下は螢光灯に白っぽく照らされ、無気力にのびている。森山は廊下を右に曲った。そしてしばらくすると、また右へ曲った。

曲った瞬間、その男が、森山の少し前を歩いていたのであった。だが、あまり突然に男の後姿が眼の前に現われたので、男があたかも廊下の壁の中から突然湧き出て、森山の前に立ちはだかったのではないかとさえ思われた。だが壁の中から人間が現われるなんてことがあろう筈がない。

するとこの男はいったい何処から来たのだろうか。

エレベーターは三台並んでいたから、森山が乗ったのとは別のエレベーターから降りたのかもしれない。森山が降りる少し前にエレベーターから降り、廊下を曲った

時に森山が追いついたのにちがいない。だが考えてみれば必ずしもエレベーターから降りたとも限らないのである。廊下の両側にはびっしりと事務室が並んでいるのだから、男は事務室から出てきたとも考えられるのだ。とすれば、この男はどこから来たのだろうか、などと考えたことの方がかえっておかしかったのかもしれない。エレベーターに乗る前も一人、エレベーターの中でも一人、エレベーターを降りた時も一人、そして廊下を歩いている時も一人で、無人のビルを歩いているような錯覚に陥っていたので、突如男の姿が現われると、まるで魔法の力で男がそこに湧き出たような幻覚に襲われたのだった。

しかしこの八階建てのビルは無人ビルでもなんでもなかった。八階の各フロワーでは、刻々と流れこんでくる仕事の洪水を紡績工場の自動織機のように正確に神経質に処理している、大東銀行の本部であった。ドアの内側ではワイシャツ姿のおびただしい人間が、話したり、書いたり、電話をかけたりして働いているのであって、ドアを開ければそのけたたましい仕事振りの熱気が、廊下に向って乱気流のように溢れ出てくるのであった。それは森山がこれから書類を届けに行こうとしている外国部でも例外ではなく、そこでも電話とタイプライターと、テレックスとが、互にわめき合いながら仕事をしている筈だった。

それなのにビルの廊下というものは、どうしてこうも静かなのであろうか。廊下の静寂さは、その壁の内側にそのような仕事の喧噪が渦巻いていようとはとても思えない。壁一つ隔てているだけで、不気味なくらいにひっそりとしていた。

森山はその男をまるで尾行するような恰好で、少し距離をおいて歩いていた。廊下を三分の二ぐらいまで来たときだった。男は左手にある室へつと入ってしまった。

『やっぱりあの室の男だった……』

黒い背広をいつも着て、痩せ型で、背が高いのでいくぶん猫背に見える。足早やに歩くその男を森山は知っていた。調査部の次長だった。もちろん知っているといっても二人の所属する部は違っていたし、また次長の年令は森山より十才以上も上であったから、個人的な面識があるわけではなく、たんに森山の方で知っているというにすぎなかった。

調査部次長がその室へ入るのを森山はこれまでに数回見たことがある。調査部の室は六階なのに、何の用事でわざわざ五階のその室へ入って行くのであろうか。もちろん調査部の次長が調査部以外の室へ入ってはいけないということはない。用件によっては融資部へも経理部へも、また重役室へも行くだろう。本部の中ではいつも何処かで会議が開かれていたから、それへ出席することもあるだろう。調査部次長がどこを歩いていようと、どの室に入ろうと、別に不思議なことではない。

だがいま調査部次長が入っていった室に森山が特別関心を持っていたのは、それが森山にとって謎の室であったからである。その室のドアには表示が何もない。表示がないということは空室を意味する。だがその室は空室ではなかったのである。空室を装った室の中で、調査部次長を中心とした何人かの人間が秘かに何事かをやっているのを森山は知っていた。

部屋への入り方が、すーっ、といった感じであったので、調査部次長の姿はまるでドアの中に吸いこまれたように見えたのであった。廊下の中央を歩いていた黒い背広の後姿が急に影のように、ぼーっ、となったかと思うと、左の壁の方へ煙のように揺れながら流れ、影が移動するようにドアの中へ消えたのである。

森山はドアの前まで歩いていった。だがどうしたことか、いつもはそこにある「表示のないドア」が今日はなくて、代りにあるのは「融資部企画課」と書かれたドアではないか。

「おかしいな。ドアを一つ間違えたか？」

森山は自分の迂闊さに焦立ちながら、その先のドアへと進んだ。しかし次に現われたのも「表示のないドア」ではなくて、「外国部総務課」と書いたドアであった。

「おかしいな……」

不意に歯車が狂ったような混乱が森山を襲った。

「表示のない室」は、「融資部企画課」と「外国部総務課」の間にある筈である。だからドアの表示は

融資部企画課
表示なし
外国部総務課

という順序で並んでいなくてはならないのである。それなのに「表示なしのドア」が現われないで、いきなり外国部総務課のドアになってしまったのである。

森山はうろたえた。これでは室が一つ消えてしまったことになる。だが室がなくなってしまうなんて馬鹿なことはありえない。すると自分の眼が突然狂ってしまったのだろうか。それともそんな室はもともと在りはしないのに、彼一人が勝手に在るのだと思いこんでいたのだろうか。だがしばらくして、森山の眼が狂ったのでも、気が狂ったのでもなくて、単純な思い違いであることにやっと気がついた。「表示のない室」は融資部企画課と外国部総務課の間にあると思っていたのだが、実は外国部総務課のその先にあったのだ。

そこで外国部総務課の次のドアを調べてみたのだが、だが期待に反して次は外国部渉外課、そしてその次に外国部事務課のドアが続いて、「表示のないドア」はついに見つからぬままに正面の壁に突き当ってしまったのであった。

「おかしいな…。外国部総務課の先ではなくて、手前だったのか……」

森山は廊下を走るようにして融資部の方へと戻った。しかし現れたドアは

融資部企画課
融資部第一課
融資部第二課
融資部第三課
融資部第四課
融資部第五課

と順序よく並び、そして最後に

とくると、そこは既にエレベーターの方角へ折れる廊下の曲り角であった。

「やっぱり無い！」

森山の頭は混乱してしまった。そして眼の前にまっすぐに伸びる廊下をぼんやりと眺めて呟いた。

「あの室が消えてしまった……」

しかしビルの中から突然室が消えてしまうなんてことは実際ありえない……。

落着けと、森山は自分に言いきかせた。

考えられることは融資部と外国部とが最近室の模様がえを行って、現在どちらかの部が、あの「表示のない室」を使用しているのではないか、ということであった。そうだ、絶対そうに違いない。すると森山が一番最初に立ち止った室のドアには融資部企画課とは書いてあったが、実をいえばそれがあの「表示のない室」だったのだ。

「なんだ、馬鹿馬鹿しい。俺はすこし頭がどうかしているぞ。こんな簡単なことに今まで気がつかなかったなんて……」

しかし「表示のない室」が塞がってしまったということは、どこかに代りの課が一つふえたはずである。それはどの課なのか。森山はもう一度廊下を戻りながら、ドアの表示を再確認してみた。

融資部第五課
融資部第四課
融資部第三課
融資部第二課
融資部第一課
融資部企画課

その次が

外国部総務課
外国部渉外課
外国部事務課

そこで終って壁に突き当った。依然として従来通りの九課である。新しい課は増えていない。ということは、やはり「表示のない室」が消えてしまったことになるのだ。こうしてビルの中から室が一つ消えてしまうという、考えられないことが実際に起きたのである。

森山は混乱というよりも、むしろ茫然となった。そし

て部屋を呑みこんでしまった長い廊下を、あたかも巨大な蛙をのみこんだ蛇の腹のように眺めた。

さて室が消えてしまったということになると、その中へ入っていった調査部次長はどうなったのか。

調査部次長はいつまでたっても融資部企画課の室からは出てこなかった。森山は思いきって融資部企画課のドアを押してみた。そして室の中を隅から隅まで丁寧に見渡した。だが調査部次長は見えなかった。彼は入口近くに坐っている受付の女子行員に

「調査部の次長さんがいま入って来ませんでしたか?」

「いいえ」

「たしかにこの部屋へ入ったと思ったのですが……」

「いいえ、さっきから誰も来ません。私はずっとここに坐っておりましたから間違いありません」

森山はあわてて廊下に出た。

やっぱり調査部次長はあの「表示のない室」に入り、室といっしょに消えてしまったのであった。

二

昼食のあと、森山はきまってコーヒーを飲む。

一日のうちで食後のコーヒーが一番たのしみである。そのために午前中はできるだけコーヒーを飲まないようにしている。昼食後のコーヒーをより美味にするためである。だから午前中我慢に我慢を重ねていた胃の中へ流れこむ食後のコーヒーの味は、胃の隅々に滲み通って甘くしびれ、森山の身体は広々とした光の海へ吸いこまれたように恍惚となった。

八階の行員食堂の隣は、ソファーや植木、カラーテレビなどが置いてある休憩室になっていて、その一角にコーヒーショップが出店していた。銀行で補助金を出しているので、行員には一杯百円でコーヒーを飲ませた。しかしいくら補助があるとはいえ百円では、辛うじてコーヒーと名のつく程度のものでしかなかったが、しかし値段が安い上に勤務時間中でも自由にそこに飲みに来られるという便利さから、結構コーヒーショップは繁昌していた。

昼食後のコーヒーを森山はこのコーヒーショップで飲むときもあれば、友達をさそって外の喫茶店へ足を伸ばすこともあった。しかし昼食時のオフィス街の喫茶店はどこへ行っても満員で、席を探すのに一苦労だったから、よほど気の合った友達とでもない限り、だいたいこのコーヒーショップを利用していた。だが特に最近、意識的にここを利用するようにしていたのは、あの「表示のない室」についての情報をコーヒーショップのボーイから探ろうとしていたからであった。

これ以上はうすく焼けないだろうと思われる玉子焼のオムライスを平げると、森山はコーヒーショップの方へ

歩いていった。カウンターの中で白い帽子をかぶったボーイがコーヒーを注いでいるのが遠くから見えた。だが、カウンターに近づくと、おやっと思った。そこにいるのは昨日までのボーイではなくて、森山の知らない別のボーイだったからである。遠くから見た時には気がつかなかったのだが、近くでよく見ると、痩せ型で背が高く、白いワイシャツに蝶ネクタイ、頭には白い帽子、その帽子の下から首筋に長髪が流れ出ている…、そこまではまったく同じなのであるが、正面に廻って顔を見ると、それはまったく別の人間なのであった。昨日までのボーイは蒼白な面長の顔に、一重瞼が走るように切れ上っていたが、今日のボーイは赤い頬に、二重瞼の丸い眼がキョトンとしたまるで子供の顔であった。

森山はテレビの前でコーヒーを飲みながら、カウンターの前の人混みが消えるのをしばらく待っていた。やがて人の群が消えると森山は立上った。ここはセルフサービスなので空のカップをカウンターまで運んだ。

「ありがとうございました……」

「ボーイさんが変ったんだね」

「はあ……」

一瞬ボーイは戸惑ったが、しかしすぐ商売用の笑顔になって

「引きつづきよろしくお願いします」

「前のボーイさん、どうしたの…?」

「はあ…、昨日で……」

と曖昧な言葉になり

「やめたの……?」

「ええ、実は……」

ボーイはちょっと声を落して

「居なくなったのです。昨日、急に居なくなったのです。やめるともなんとも言っていなかったんですが、行方不明……、最近流行の蒸発かもしれないって僕達は言っているんですが……。それとも急におふくろの顔でも見たくなって田舎へ帰ったのかなあ。とにかく誰か代わりに来なければというので僕が来ているのです……」

「へーっ、蒸発ねえ……」

居なくなったと聞いたとき、とっさに森山は消えた「表示のない室」のことを連想した。「表示のない室」が消えたので、ボーイもいっしょに消えてしまったのではないか。たしかにあのボーイは、あの室の秘密を知りすぎていた。

そう言えば森山が「表示のない室」に関心を持ち始めたのは、あのボーイがコーヒーショップに勤めるようになった頃と一致しているような気がする。ここのコーヒーショップのボーイは不思議とよく変った。給料が安いのか、それとも夕方だけ集金に顔を見せるマスターの人使いが荒いためか、すこし顔見知りになるとすぐボーイは変ってしまって、新顔のボーイがコーヒーを沸したり

茶碗を洗っているのであった。だからあのボーイが来たときにも森山は

「ああ、またボーイが変ったな」

という程度の関心しかなかったが、ただ凄いように蒼白な顔が印象に残った。

森山があの「表示のない室」を気にし出したのが、ちょうどそんな頃であった。だがそれも最初から特別の関心を持っていたわけではない。このビルの中に一つや二つの空室があったとしても別に不思議はないからだった。室の配置替えが行われれば臨時に空室が出ることは始終あった。また別館が出来てビルの一部がそちらへ引越した直後などには、余裕のできたスペースはしばらく空室として放置されていた。だがいつのまにか、またどこかの部が使い始めて埋ってしまい、そうした室の干満現象はビルの中ではいつも起きていた。

だが森山が何回その前を通っても、いつまでもその室が空室なのが次第に不自然に思われはじめてきたのであった。『ビルが狭くなった、室がない』と言いながら、なぜあの室だけがいつまでも空室でいるのだろう、そんな疑問が森山を捉え始めていた。

しかしあの室が空室らしく見えながら、本当は空室でないことが次第にわかってきたのであった。室の中で、何かが秘かに行われていた。それである日、あの室の前をわざとゆっくり歩いて室の中を伺ってみると、たしかに曇りガラスの内側に黒い人影が二人ばかり坐っているのが見えたのであった。そしてその後も気をつけていると、ときどき人影がすっと吸いこまれるようにその室へ入り、また出てきては足早やに廊下の角を曲るのを見かけるのであった。

だが出入りする人間によく気をつけていると、その顔ぶれの尋常でないのが問題だった。まず部長以上でなくては出入りしなかった。融資部長や経理部長ばかりでなく、人事部長までが顔を出すこともある。また常務取締役や専務取締役が出入りし、時には頭取や副頭取が現われることもあった。しかしどんな用件があるにしろ頭取や副頭取がそんな一般の事務室へ出向くのは異例であった。用事があれば電話で呼びつければよい。どう考えても只事ではない。

誰にも知られてはならないことが、そこで秘かに行われているにちがいない。銀行の秘密。経営の秘密。それはいったい何なのだろう。そしてもしその秘密が実現したとすれば、いったいこの銀行に何が起るのだろうか。銀行で働いている何千人という行員はどうなるのだろう。森山は不安になった。

そんなある日。森山は廊下で、盆にのせたコーヒーを運んでいる顔の蒼白なボーイにすれ違ったのである。（もこんな朝早くから（その時はまだ朝の九時半だった）コーヒーを注文するなんてどこの部だろうと、振返って

ボーイの行先を見ていると、あの「表示のない室」へと入っていったのであった。森山は一つの発見をした。誰もが近づけないあの室に、近づける人間が一人いた。それはあのボーイである。

翌日から森山はボーイに意識的に接近していった。昼休みのコーヒーは欠かさずコーヒーショップで飲むだけでなく、午後の四時前後になるとそっと洗面所に立つふりをしてコーヒーショップにあがっていった。勤務時間中のその時間はさすがに人影もまばらで、ボーイとゆっくり話すチャンスも時にはあった。

ボーイもそう内部の様子をくわしく知っているわけではなかったが、それでも森山はボーイの口から室の様子をだいぶ知ることができた。室に入るとすぐ三枚の衝立が眼隠しのために置かれているという。だから内部は見えない。もちろん衝立から中に入ることもできない。ボーイがドアを開けるとそれを合図のように、衝立の向うでの話し声はピタリと止まる。だから何が話されていたのかはわからない。一度ノックをせずにドアをあけて、ひどく叱られたことがあった。だからボーイはドアをあける時、必ず

「コーヒーをお持ちいたしました」

と声をかけることにしていた。すると中から出てきた一人が衝立と衝立の間から両手を差出し、ボーイはその上にお盆ごとコーヒーを渡すのであった。

そんな工合なので室の中には果して何人いるのか見当がつかないのだったが、しかしコーヒーの注文がいつも五つなので、常駐しているのは多分五人ではないか、そしてその五人のメンバーのリーダーが調査部次長であるらしい、というのがボーイの推測なのであった。

コーヒーの注文はいつも電話でかかってきた。しかしある日、注文を受けたあとコーヒーを入れる段になって、注文が五つだったか七つだったか、数を忘れてしまったことがあった。というのはいつも注文は五つなので、その日もそのつもりで電話を切ってしまったのだが、後から考えてみると、その日はどうも七つと言われたような気がしてならないのだった。そこで確認の電話をしてみようとボーイは行内電話帳を調べたのだが、どこを探してもあの室の電話番号が見当らないのであった。電話交換手を呼び出して聞いてみても

『あの部屋には電話はありません』

という返事。おかしいな。本当にあの室に電話がないのなら、さっきの注文の電話はどこからかけてよこしたのだろうか。

そこである日、思いきって衝立と衝立の間から室の内部を覗いてみると、正面のスチール机の上には電話器がちゃんと載っているではないか。とするとそれは行内電話帳にのっていない、特定の人間だけが使える隠し電話にちがいない。

そんなことから次第にボーイもこの室の秘密めいた雰囲気に関心を深めていった。コーヒーを運ぶたびに少しずつ室の様子を探り、その断片的な知識をつなぎ合わせていくと、さして広くない室のことであるから凡その見当はついていった。机は五つ並んでいた。毎回運ぶコーヒーと同じ数である。その横には会議用のテーブルがあり、衝立の裏側にあたる所には紺色の応接セットが置かれていた。ボーイがコーヒーを運んでいくとき、彼等はだいたい応接セットに思い思いの姿勢で腰掛けてタバコを吸っていた。だからいつ行っても室の中には朦々とタバコの煙がたちこめ、机の上や応接セットの灰皿は吸殻の山であった。時には机の上に書類が山積みになっていることもあったが、ほとんど何も載っていない場合が多かった。室の隅には鍵のかかる大きなロッカーが二つあり、あるいはその中に秘密の書類がつまっているのかもしれない。

以上があの室について森山がボーイを通して摑んだ概略であった。

さて森山が最後にこのボーイと逢ったのは昨日の午後であった。その時ボーイは森山に変な話をした。

その日もボーイはいつものようにコーヒーを五つ持っていった。だがその日彼等はよほど興奮していたとみえて、ボーイが衝立の間からコーヒーを差入れようとしても、話をやめなかった。

「……すると、このプロジェクトが終れば我々は消されてしまうというのか……」

そんなカン高い声が聞えてきた。

「そうだ。よく昔の築城の秘話にあるじゃないか。殿様が城の中に秘密の仕掛けを作る。城が出来上る。秘密を守るために、大工達はバッサリ打首。それと同じ……」

「よせよ、わるい冗談。そんなこと絶対あってたまるか……」

するとボーイの居るのに気がついて

「おい、話をやめて。コーヒーだ、コーヒー……」

話声はそこでおびえたようにぴたりと止った。

ボーイは聞いてはならないことを聞いてしまったような気がする、と森山に語ると、いま洗ったばかりのコーヒーの受皿を両手の中でくるくると手品師のように廻して拭き始めた。それは見えない恐怖を一生懸命に振り拂っているかのように見えた。

そのボーイが突然居なくなったのである。

たしかにボーイは秘密を知りすぎたきらいがある。こうして大東銀行の本部から、「表示のない室」といっしょに、調査部次長が消え、コーヒーショップのボーイも消えてしまったのであった。

三

消えた室のことが森山の中で病後の微熱のように尾を引いていた。ときどき五階まで行って確認してみるのだったが、やはり一旦消えた室はそこには無かった。

すると森山は、あの室は本当にそこに在ったのだろうか、とときどき思うことがあった。もともとそんな室はなかったのではなかろうか。森山の頭が一時おかしくなって、在りもしないものを在ると、信じていたのではなかろうか。だから彼の頭が平常に戻ると同時にあの室もなくなってしまった、森山だけが銀行の中で勝手に夢を見ていたのかもしれない。

とすると、あの室といっしょに消えてしまった調査部次長はどこへ行ってしまったのだろうか。でも案外森山の知らないうちに調査部の室に戻ってきているのかもしれないとも思えた。

そこで森山はある日六階の調査部の室まで確めに出掛けていった。エレベーターの中では探検に出掛けて行くような気持になった。調査部次長の室はすぐ見つかった。その中に部長と次長は並んで坐っているはずだった。だがその室へどうやって入ったらいいのだろう。森山は調査部長に対してはまったく面識がないし、また特別の用事もないのである。調査部長が留守であってくれればいいと思った。だが不幸にして調査部長が室に居て、視線がばったり逢ったらどうしよう。しかしそれはその時のことである。『すみません、部屋を間違えました』とかなんとか言って誤魔化してしまえばいい。

彼は覚悟をきめてドアを押した。幸い調査部長は居なかった。その横には次長の机が並んでいた。しかしその机も空席で、森山が期待していた黒い背広の調査部次長は坐ってはいなかった。机の上に黒い電話器がポツンと載っているだけで、他には何も載っていない。それはすでに長い間その机が仕事に使われていないことを物語っていた。

森山はそろそろとドアを閉めた。

やっぱり調査部次長は消えてしまった。何処へ行ったのだろう。だが本当に消えてしまったのなら、銀行の中で蒸発とかなんとか騒ぐはずである。しかしそんなニュースは聞かない。ということは、やはりどこかに居るということになる。『天国への階段』という言葉を森山は思い出した。天国への階段。そうだ、天国への階段。五階の廊下のあの場所から、きっと『表示のない室』への階段があるのにちがいない。その見えない階段を登っていくと、そこにきっと、あの『表示のない室』があるのだ。そしてそこに黒い背広の調査部次長がいる。そうに違いないと森山は思った。

それにしても調査部次長が消えたということをもっと確実に知る方法はないものか。彼の自宅を張り込んでみ

たらどうだろう。夜は自宅へ帰るだろうか。しかし張り込むといってもスパイのように朝夕家の周囲をうろついているわけにもいかないであろう。

電話で探りを入れてみたらどうだろう。これはうまい考えだと森山は思った。電話口へはまず奥さんが出るだろう。こちらはデタラメの名前を言えばいい。もし調査部次長が家に帰っていなければ『後ほどまたお電話します』といって切ってしまえばいい。また帰宅していれば、奥さんが次長を呼びに行っている間に切ってしまう。次長が電話口に出ておかしいと思っても、いたずら電話かな、ぐらいでそのままになってしまうだろう。いずれにしても調査部次長が家に帰っているかどうかは確認できるわけである。

森山は庶務係から行員名簿を借りてくると、調査部次長の自宅の電話番号を素早くメモした。腕時計を見ると五時三十分であった。電話をかけるにはまだ少し早い。喫茶店で時間を潰そうと森山は帰り支度をして銀行を出た。

コーヒーを注文し、タバコを二、三本吸って時計を見ると、もう六時をだいぶ廻っていた。森山は赤電話に十円玉を入れるとダイヤルを廻した。

「……はい、若松でございます」

次長の奥さんの声が答えた。

「夜ぶんにお電話して申しわけありませんが、次長さんはもうお帰りでしょうか……」

「はい、帰っておりますが……、失礼ですがどちら様で……」

「杉野と申します……」

偽の名前を言う心の抵抗を押し切って森山は一気に言った。

「いつも主人がお世話になっておりまして……」

銀行員の妻は知らない人間に対しても如才なく挨拶をのべると

「ちょっとお待ちくださいませ。すぐ呼んでまいりますから」

奥さんが電話口を離れると、受話器の奥は急に音がなくなって真空状態のようになった。

夕餉の仕度の匂いと熱気が台所から気流のように廊下や居間の方に流れている次長の家の内部を、受話器を耳に当てながら森山は想像した。気流の末端は見えない触手のように電灯の笠やテレビにまつわりつく。そのテレビの前で次長は夕刊に眼を通している。

「あなた、お電話……」

「電話？　どこから」

「杉野さんといっておりますが……」

「杉野？　どこの人？　銀行の人かな」

「あら、銀行の方ではないんですか、私、てっきり銀行の方だと思って……、とにかくお電話口へ出てくださいな」

次長は首をかしげる。しかし立上って居間を出る。電話口へ歩いてくる。やがてその近づいてくる気配のあわただしさが受話器ごしに森山に伝ってくる。森山は急に息苦しくなって電話を切ってしまおうかと思った。次長は家に帰っている。それがわかったから、もうこれでいい。早くしないと次長が電話口に出てしまう。廊下を歩く足音と、あわただしい人の声が入り乱れて電話口に近づき、突然衝激音とともに次長が電話口に出た。

「もしもし、もしもし……」

電話の声は意外に明瞭で、向いあった次長から声をかけられているようで、ギクリとした。まるで受話器の奥から次長に見られているような気がする。

「もしもし、もしもし……」

引つづき次長の声。

もう早く逃げ出すほか手がなかった。森山は拋り出すように受話器を置いた。偽の電話をした後の重苦しさが、森山の身体をぐったりさせた。席に戻ると、カップの底に残った冷くなったコーヒーを一気に飲んだ。『おかしな電話だな』と不気嫌な顔で電話口に立っている調査部次長の姿が、瞼の裏にあざやかに見えた。

四

ある日森山は不思議なことを発見した。

昼休み。

気晴らしに日光浴でもしようかと戸外に出た。ビルから一歩外に出ると健康な空気の匂いが嵐のように襲い、日光がビルの壁面を駈け下りて、高層建築の谷間できらめき泡だっていた。一日じゅう厚いコンクリートの中に入っていると、戸外にこんな素晴らしい光と空気が充満していることに気がつかない。空の高みから落ちてくる太陽の光線はビルの群の影を正確に地上に投影し、道路に日蔭の部分と日当りの部分の明暗を描きわけていた。赤と黄色の花が歩道に植えられ、そこだけが春のスポットライトを浴びたように華やかに光っていた。

森山は日当りのよい部分を拾うようにして歩いた。広場と名づけるには形ばかりの広場の一角にくると、三色菫が植えこまれた花壇の縁に腰をおろした。

タバコに火をつけ、眼の前のビルの洪水をぼんやり眺めていた。正面にガラス張りのビルが見えた。どこかで見たことがあるビルだなと思った。しかしそのビルを見るために広場まで来たわけではなかったから、強いてその名前を思い出す必要もなかった。ぼんやりと視線を前方にむけたまま、タバコの甘い刺激が脳の奥にこもっていくのを楽しんでいた。

だが、そのビルが森山の銀行のビルなのであった。見たことがある筈だった。毎日自分がその中で働いているビルなのだから。森山は自分の間抜けさ加減に驚いた。

それが最初自分の銀行のビルだと気がつかなかったのは、この広場からは銀行のビルは見えないという先入観が森山の頭の中にあったからだった。それが予想もしていない角度から見えた。どこからも絶対に見られていないと思い、部屋の中で裸の大胆なポーズをとっている女性が、実はまったく気付かない方角から誰かに覗き見されていたように、銀行のビルも森山が気ずかない方角から、いつも見えていたのである。

自分がいつも入っているビルをそんな工合に眺めるのは、まるで自分の肉体を遠くから客観的に観察するような気持であった。森山は毎日あのビルの中をかけずり廻っているのだから、階段の隅々、食堂、トイレ、水呑み場、非常口、一階から二階、二階から三階への迷路のような近道など、ビルの内部のことなら知らないことはないと思っている。それはまるで自分の内臓のことは自分が一番よく知っていると思いこんでいるのと同じだった。しかし考えてみると自分では自分の本当のことなどちっともわかってはいないのであって、ちょうど自分の内臓の写真を見てはじめて本当の姿を知るように、ビルの本当の構造もこうして遠くから全体の断面図を眺めてはじめて明らかになったような気がした。

ビルの室の中に入っていると頭上はコンクリートの天井で、それ以外の何物でもない。天井はがっしりした柱で支えられ、天井が落ちてくる心配もなかったし、水が洩れてくる心配もなかった。足の下はビニタイルの床で、それは森山の体重を支え、さらに机を、椅子を、書類ケースをがっしり支える信頼できる床であった。森山は毎日地球の上に直接立っているのと同じ安心感で、ビルの中の床の上で、立ったり坐ったり歩いたりしている。まさか床の反対側は階下の天井であり、森山の足の下には階下の空間が拡り、そこで別の人間が忙しそうに仕事をしているなんて思ってみたこともない。しかしここから見るとそれがはっきりとわかるのである。

森山の机の真上で経理部の女子行員が伝票にソロバンを入れているというのは、新しい発見であった。森山はまさか自分の頭上で女子行員が足を開いて坐っていようなどとはこれまで考えてみたこともなかったし、その女子行員の更に頭上の階では業務部の課長が書類に判を押していた。今度は視線を下げて下の方はどうかと見ると、森山の机の下は営業部の応接コーナーになっていて、貸付担当係が来客になにかを説明しているのが見えた。そんな観察はあたかも自分の身体の皮膚が突然透明になったために、グロテスクな内臓の諸機能の位置、働き、相互の関連などを、突如として自分自身の眼で観察しだしたのに似ていた。

森山はそうしてしばらくビルの内臓断面図の観察をたのしんでいたが、そのとき五階のある室が他の室と違って深々とカーテンを下ろしているのに気づいたのであった。だが窓にカーテンが引いてあることは別に不思議なことではない。しかしどの室も全部カーテンを開け放ち、室いっぱいに春の光を受けいれている中で、厚手のカーテンをたっぷり下しているのはちょっと異例だった。

森山はもう一度ビル全体を見直してみた。カーテンを下した室は二つあり、日光に輝いたビルの壁面のなかで、二つの部屋だけが黒く凹んだ眼窩のように見えた。一つの窓は三階の東南の角。それは頭取室である。年老いた頭取の身体には、この春の陽ざしさえ強すぎるのであろう。秘書役が布地の厚いカーテンを下して、南側からの直射日光を遮ったのにちがいない。東側の窓だけから入ってくる明るみの中で、昼食後の一刻、白髪の頭取が静かに茶を飲んでいる姿を森山は想像した。

もう一つが五階の室だった。

あれはいったいどこの室だろう。五階は融資部と外国部のフロアーであり、直射日光を避けなくてはならない室はないはずだった。左の端から四つ目のその室は

外国部事務課
外国部渉外課
外国部総務課
融資部企画課

となる。それは融資部企画課の室であった。

しかし今度は右の端からもう一度室の名前を言ってみた。

融資部第五課
融資部第四課
融資部第三課
融資部第二課
融資部第一課
融資部企画課
外国部総務課

となる。外国部総務課がカーテンの室になるのである。おかしい。左から数えると融資部企画課の室であるのに、右から数えると同じ室が外国部総務課になるのである。森山はもう一度右と左から言い直してみた。しかし間違いない。間違いなく一つだけ喰い違うのである。喰い違うということは、森山が数えている室の名前よりも、室の数の方が一つ多いということである。

一つ多い室。

黒い眼窩のような余分な室。

カーテンを深く下した名前のない室。

それはもしかしたら、あの消えた室ではないのだろうか。

その通り、消えた「表示のない室」が深々とカーテンを下ろし、春の光を避けてそこに立っていたのである。

やっぱりあの室はあったのだ。

ビルの内側から調べたかぎり、たしかにあの室は消えてしまっていた。森山は何回も五階の廊下を歩いてそれ

を確めていたが、しかし消えたはずのあの室が、カーテンを顔に垂らして現に眼の前に立っているではないか。

森山は「表示のない室」と、なんだかかくれんぼうをしているような気がした。「表示のない室」は本当は存在しているのだが、森山が五階に行くと隠れてしまい、森山という鬼がいなくなるとたちどころに廊下に顔を現してくる。だから森山がビルの外に出てこうして広場に坐っている時は、「表示のない室」は五階に姿を現わしているのである。それが本当か嘘か確めるためには、森山の身体が二つに割れてこの広場と五階の廊下の両方を同時に確かめるより外に方法がないのだが、しかしそんなことが出来ない以上、このかくれんぼうを認める以外仕方がないであろう。ビルの五階の廊下はアコーデオンのように伸びたり縮んだりするのかもしれない。森山が五階に足をふみ入れるとスーッと縮って、「表示のない室」を壁の中に畳みこんでしまい、森山がビルの外に出るやいなや、ビルの蛇腹は伸びて「表示のない室」はまた廊下に復元するのである。

森山には眼の前のビルが急に巨大な軟体動物のように思えてきた。伸縮自在なその軟体動物は春の陽ざしを浴びながら、ものうげに巨体を伸ばしたり縮めたりしており、その緩慢なリズムにあわせて「表示のない室」が体内で現われたり消えたりしているのだ。

そのとき森山の頭上を黒い影がよ切った。それは地上を流れる鳥の影のようだった。だがそれは影ではなくて、黒い背広の男だった。

顔をあげると、そこには調査部次長が立っていた。森山は遠くのビルを眺めていた眼で急に眼前の人間を見上げたので、瞬間焦点がぼけて、調査部次長は空気中から湧き出た黒い影のように思えた。次長は無表情な顔で視線を森山の顔に落して

「先日の電話は何の用事だったのかね……」

と言った。

「……」

森山は魔法使いを眺めるように調査部次長を見ていた。どうしてあの電話をかけたのが森山だということを知っているのだろう…。

だが知っているのが当然のようにも思えた。あの夜、きっと調査部次長は受話器の奥から森山を眺めていたのだ。今じっと森山を見下しているこの眼つきと同じ眼差しで、電話の奥から森山を見ていたのに違いない。

調査部次長はそのまま近くのホテルのレストランへ入っていった。

五

夜おそく都心のビル街を車で走るなどということは滅多にないのだが、しかし一度あると不思議に続くもので、どうしたことか森山にはこのところ二、三回それが重な

った。

その夜も送別会の二次会が麻雀になって遅くなり、やっとタクシーをつかまえたのはもう十二時を廻っていた。

夜のビル街は湖の底のように見えた。人と車の雑踏は蒸発したように消え去り、灯の消えたビルは石塔のように静まっていた。ビルの梢に見えるほの明るい夜空は、ちょうど湖底から仰ぎ見た夕暮れの水面に似ていた。フロントガラスの前に広い舗道が運河のように拡がり、車はあたかも水面を走る舟のようで、ビルの群は次々に舟を取りかこむように現われては、左右に消えていった。

麻雀の後の、疲れてはいるのだが頭の芯は妙に冴えている甘い疲労に身を任せながら、ぼんやり窓外のビル街を眺めていた。同じ所を走っていても、昼間と夜とではまったく違った感じになることがある。いま走っている所が、いつか森山が昼休みに散歩した広場の一角だということを、そのとき森山は気づいていなかった。しかし見なれたビルの形が次々に現われ、その中に大東銀行の本部ビルを発見したとき、いま車の走っている位置がはっきり森山にはわかった。どうしてこんな所を通るのだろう。もっと他に近道がある筈なのに……、森山は灯の消えた銀行のビルを眺めながらぼんやり考えた。

そのとき銀行のビルの五階から、なにか黒いものが吊下っているのを森山は見たのである。ビルは夜空にほの白い姿を浮かべ、窓はビルの内部の暗闇を臓して規則正しく並んでいたが、近寄るとその五階の窓の一つから奇妙な形のものがぶら下って、風にふらふら揺れているではないか。窓から一本の紐が垂れさがり、その先に大きな笊が結びつけられているのであった。笊の中には黒い大きな塊が押しこめられ、五階の窓から地上に吊り下げられているところであった。

「こんな夜更けに何をしているのだろう」

ビルの窓から吊さがっている笊は、ふと森山にビルの谷間を徘徊する「石焼きいも」の車を連想させた。この都心のビル街にも午後になるときまって石焼きいもの車がやってきた。それはゆっくりとビルの間を移動し

石やきいーも

おいも

おいも

おーいーもー……

と語尾の長い哀調をおびた声がマイクを通してビルの谷間に流れるのであった。ビル街に不釣合いな石焼きいもの呼声は、仕事に疲れた午後の職場に突如として生ま生ましい生理感覚を呼び起こす。OLなどを中心に結構売上げがあるようであった。ある日、石焼きいものマイクで森が机から眼をあげると、隣のビルの窓から二、三人のOLが小型の笊を紐で歩道まで吊さげ、石焼きいもを引っぱり上げているところであった。ビルの窓から笊を吊さげて石焼きいもを買うなんてことはマンガの中に

しかないと思っていたので、それは新鮮な印象で森山の中に残っていた。

五階の窓から黒い笊が垂れさがっているのを見たとき、森山はその石焼きいもを連想したのだが、しかし午前零時を廻ったこんな時刻にもちろん石焼きいもであろう筈はない。何かの異変とみなければならない。笊はビルの壁に沿った中空でふらふら揺れているように見えたが、実際はかなり早いスピードで下降しているのであった。

泥棒？

最初にひらめいたのはそれだった。しかし笊の中の麻袋には何かが無理やりに詰めこまれているのだ。それはぶよぶよしながら、同時にずしりと重そうだった。袋の中味はどうやら人間らしい。

笊が地上に着くと、路上で待っていた車から二人の男がとび出して、笊から麻袋をひきずり出した。そして投げこむように車の中に押しこんだ。

「助けてくれ！」

「助けてくれ……」

麻袋は二回ほど叫んだ。

しかし車のドアは手荒く閉められ、車は麻袋をのせて闇の中へ走り去ってしまった。『助けてくれ！』という叫び声はどこかで聞いたことのある声だった。誰の声だったろう？

森山は路上に投げすてられた笊と、ビルの壁面に揺れている黒い紐を見上げた。紐は五階の窓から垂れさがっている。そして五階のその窓は、あの「表示のない室」だったのである。

数日すると、調査部次長が蒸発したというニュースが本部の中を流れた。

「どうして……？」

「何処へいったのだろう……」

食堂で、廊下で、コーヒーショップの前で、不安と好奇心にかられて人々は囁いた。

森山は『助けてくれ！』という麻袋の叫び声を思い出した。

森山は行きつけの喫茶店へ行った。隣のビルの地下にある小さな店で、一人になりたい時はいつもそこへ行った。銀行の出入口とは逆の方向にあったので、そこへ入ってしまえばほとんど銀行の人間と顔を合わせなくてすむのが助った。

今日は電話をかけるのが目的だった。

コーヒーを半分ほど飲むと、すぐ赤電話の前に立った。ポケットから手帳を出し、調査部次長の自宅の電話番号を探した。ダイヤルを廻す。呼出しの発信音が鳴り始めたが、しかししばらく続いたかと思うと、突然

ポ、ポ、ポ、ポン、ポーン

という柔らかな音楽に変った。

「ただいま、この電話番号は使用されておりません」

テープレコーダーに吹きこまれた女性アナウンサーの声が機械的に聞えてきた。

六

それから暫くしたある日、森山は残業でおそくなった。机の上を片付け、帰り支度をして部屋を出た時は十時を廻っていた。おそくなっても無人エレベーターだけは動いている。森山はエレベーターで地下まで降りた。

夜の八時までは一階の裏口が開いているのだが、それがすぎると閉ってしまう。あとは地下室の迷路のような通路をくぐって、地下の出口から帰るしかない。森山は曲りくねった地下道や、地下駐車場、そして冷暖房の太い配管が天井を這いまわっているビルの内臓のような廊下を通った。人々はほとんど帰ってしまい、今頃そんな所を歩いている人は一人もいない。森山は廊下にひびく自分の足音を、ビルの夜の鼓動のように聞いた。

出口の少し手前に小さな部屋があって、宿直の警備員が二人、出入りの人間をチェックしていた。その窓口に森山は所属の部と氏名を申告した。それからちょっと歩いて廊下を曲れば、そこに重い鉄の扉があった。それを潜ればもう外だった。

この鉄の扉にはある伝説があった。だから夜おそくこの扉を手前に引くたびに、森山はそれを思い出して、蠱惑的な幻想にかられた。何時のことなのかわからない、そして誰がそれを見たのかもわからないのだが、とにかくある夏の夜、残業で遅くなった行員がこの扉を手前に引くと、扉といっしょに抱きあった男女が内側へ倒れてきたという事件であった。ビルの外側から見るとこの出口は地面から一段低くなり、またビルの壁面からも引っこんでいたので、アベックが人目を避けるのには恰好の場所であった。そこを扉とも知らずにもたれてキスをしていたのを、扉を内側から急に開けられて、男女は扉とともに内側へ倒れこんできたというわけであった。しかしこれはあまりに話がうますぎて、誰か悪戯好きな人間の作り話ではないかということになったが、しかしたとえ作り話だとしても夜更けてこの鉄の扉の前に立つと、扉の外側の刺激的な光景が想像されて、もしかしたら今夜もという淡い期待が森山の中をかすめるのであった。

森山は扉をあけた。

するとそこに二人の人影が立っていた。

しかしそれは期待していたアベックではなかった。二人の男女が倒れてくる代わりに、黒い人間が飛鳥のように森山に襲いかかってきた。森山は黒い布のようなもので全身を包まれ、あっという間にその上を紐でぐるぐる巻きに縛られると

「助けてくれ！」

哀れな声を残したまま、車に積まれてどこかへ運び去られてしまった。

七

気がついたとき森山は汽車の中に一人で腰掛けていた。窓外を畑や山の緑が晴れやかに流れ去った。汽車は古びた形式で、クッションが悪く、どこかのローカル線にちがいないと思った。

それにしてもここはいったい何処だろう。

森山は明るい陽ざしを見た。見慣れない田舎の風景だった。畑や田圃のまぶしい緑、躍るような空の輝き、農家の庭先に咲いている鮮烈な花の色などからして、東京からずっと離れた南方の田舎のような気がした。ここへ来るまでにはたしか海を渡ってきたように思う。どこの海なのかわからないのだが、きらきらした水面の記憶が残っている。そうしてみると大阪か神戸あたりまでは汽車で来て、それから船に乗ったのにちがいない。そうするといま走っている所は四国か九州ということになる。でもそんなことは森山にとってどうでもよかった。彼はただ銀行から命ぜられた所へ行けばそれでいいのだから。

森山は膝の上にのっている茶色の事務封筒を手にとってみた。そして中から少し厚手の紙を取り出してもう一度読む。

『橋端支店勤務を命ず』

それは転勤の辞令であった。

汽車は見知らぬ田舎をひたすら走り続けている。

『橋場支店勤務を命ず』

橋端支店なんて聞いたこともない名前だった。そんな支店が果してあっただろうか。森山はポケットから銀行の小型手帳を取り出して、銀行店舗一覧表を片端から調べてみた。しかし橋端支店というのは無い。しかし辞令には橋端支店と書いてあった。これはどういうことなのか。

辞令に間違いがないとすれば、森山は、存在しない支店、無い支店、への転勤ということになる。

それにしても橋端という町はいったいどこにあるのだろう。森山は四国、九州の地図を頭の中に描いてみた。しかしそんな町の名前は聞いたこともなかった。きっと地図にはのっていない。小ちゃな町なのだろう。この汽車に乗っていれば、いつかはその町に着くだろうと森山はのんきに考えた。

汽車が駅へ着くたびに、乗客は二人三人と降りていった。しかし逆に乗ってくる客はない。そこで乗客は次第に減る一方で、やがて車の中はがらんとなってしまった。それはローカル線が終点に近づいていることを示していた。

やがて汽車はとある駅で停り、そしてそのまま動かなくなった。明らかにそこが終点だった。森山は窓越しに

ホームを見た。ホームの真中に白いサインボードがあって

『はしはし』

と書いてあった。

『はしはし？』

森山は首をかしげた。しかしすぐ横の『名刹橋端観音へ！』と書いた大きな名所旧蹟案内の看板を見たとき、森山ははじめて「橋端」は「はしば」と読むのではなくて、「はしはし」と読むのだと知り、汽車から降りた。

八

駅は町のはずれにあるらしく、駅の付近は家がまばらであった。

駅の前を東西に道が一本走っていた。その道をしばらく歩いていくうちに沿道の家は次第にふえはじめ、家並がぎっしり並んできたなと思うと、そこがもう、この小さな町の中心であった。町の真中には四つ辻があり、そこを中心に四方に商店街が拡がっていた。しかし人通りがさして激しいというわけではなく、典型的な田舎の平凡な町であった。

森山は四つ辻に立ちどまって周囲を見廻した。この町に銀行があるとすれば、この辺にしかない筈である。しかしそれらしい建物も看板も見えなかった。森山は通行人に聞いてみた。こんな小さな町のことだから誰に聞いてもすぐわかるだろう。だが

「大東銀行？」

としばらく首をかしげてから

「知りませんね。この町にある銀行といえば橋端銀行と橋端信用金庫だけですぜ」

森山は続けて二、三人の人に聞いた。しかし答えはいずれも同じだった。通行人に聞いたのでは駄目だと判断すると、森山は近くの酒屋に入ってその主人に聞いた。しかし酒屋の返事も同じだった。森山は上衣の内ポケットから転勤辞令を取り出すと、そこに細かい字で書かれた橋端支店の住所を見て

「橋端町刈田二三七番地というのですが」

「刈田ならこの道をまっすぐに行った所なんだがね」

と酒屋の主人は東の方を指さしながら

「ところで、二三七番地というとどの辺かいな」

壁に貼られた橋端町の地図を眺め

「この道をまっすぐ行きますと小さな橋がありますわ、その橋渡って一丁ほど行った右側ですね。でもお客さん、そんな所に銀行はありませんよ」

酒屋の主人は怪訝そうな視線を森山の方に送りながらも、そう教えてくれた。

森山は教えられた道を、南国らしい陽ざしの町並みを観賞しながら、ゆっくり歩いた。小川が道を横切っていた。水がきれいだった。石の橋がかかっていた。森山は

『この橋だな』

と思った。橋から一丁ほど先の右側、と酒屋の主人は教えてくれた。森山は橋の上から前方を眺めた。しかしそれらしい建物は見えなかった。だが、そばまで行けばわかるだろう。

橋を渡ると家並の感じが急に変った。橋を渡るまではどうやら商店街の延長といった感じの家が続いていたが、橋を渡ると急に仕舞屋風の家がふえ、板塀をめぐらした家も混るようになった。これはどうみても銀行の建物があるような場所ではなかった。しかしいま森山が歩いている場所は、まさに銀行の所在地である刈田二三七番地にちがいなかった。

白く乾いた道路に面して、個性のない家が入口の戸をぴったり閉して、平凡に軒を連ねて並んでいた。人通りはない。空があまりに晴れて明るいので、家並はかえって眠っているように見えた。ここに銀行がある…？　この家の中の一軒が銀行…？　そんなことを言ったら気が狂ったと思われるだろう。

この森閑とした真昼の家並の前で、始めて森山は途方にくれた。

電話をかけてみたらどうだろうか。さっきの橋のほとりにたしかタバコ屋があった。そこへ行けば電話があるだろう。森山は橋まで戻った。タバコ屋でセブンスターを買い、電話を借りた。ダイヤルを廻すと電話は通じた。やっぱり銀行はあったのである。

「もしもし、私は今度転勤してまいりました森山ですが……」

「はい、ちょっとお待ちください。支店長に代わります」

電話は交代されて

「はい、私が支店長です。お待ちしておりました」

それはどこかで聞き覚えのある声だった。

「銀行の場所を探しているのですが」

「いま、どこから電話を？」

「四つ角から来た石橋の所で……」

「それなら、もうすぐです。その橋から一丁ほど先の右側ですから……」

支店長もさっきの酒屋の主人と同じことを言った。

「ええ、そう教わったものですから、そこまで行ってみたのですが、見つからない……」

「そんなことはありません。すぐわかりますよ、わかりやすい場所ですから。ではお待ちしております」

電話は先方からガチャンと切れた。

「ああ、待ってください……」

言いかけたが間にあわなかった。もう一度電話をかけるわけにもいくまい。森山は眠っているようなさっきの家並を思い出した。もう一度そこまで行ってみるより外に仕方がないだろう。

森山は再び歩き始めた。歩きながら一つの奇蹟を期待していた。それはこうしている間にあの眠ったような家並の中の一軒が、突然銀行の建物に変身していることであった。しかしそんな都合のいい奇蹟は無理だった。やはり家並はその平凡な姿をいささかも変えてはいなかった。

森山はふたたび道路の中央に立って、さっきと同じように困惑し、しばらく家並を眺めていた。この中のどれかが銀行なのだ。森山は無理やりに自分にそう言いきかせてみた。銀行もこんな田舎町ともなれば、なにも入口を自動ドアにしたり、大きなショーウインドを飾ったり、遠くから眼につく看板などをかかげる必要はないのかもしれない。森山は思いきってその中の一番構えの大きそうな家を選ぶと、入口の引戸をそろそろと開けてみた。

「いらっしゃいませ」

明るい声がはね返ってきた。

やはり銀行の建物だったのだ。中に入るとロビーがあり、カウンターがあり、ポスターが貼られ、花が飾られ、カウンターには女子行員が本店の女子行員と同じデザインの洋服を着て坐っていた。しかし客は一人もいなかった。

「森山さんですね。どうぞお上りください。支店長がお待ちしております」

森山は応接室に通された。壁には見慣れた大東銀行のカレンダーが貼ってあった。

やがて支店長が現れた。

森山は反射的に立上って挨拶をした。それは蒸発した調査部次長ではないか。さっきの電話の声に聞き覚えがある筈だった。支店長は森山を営業室に案内した。

行員が支店長の前へ集合し、森山は紹介された。支店のメンバーは、支店長を入れて男子が五人、女子が五人の合計十人だった。男子の五人はあの本部五階の「表示のない室」に居たメンバーにちがいない。女子行員たちは化粧はしていても、その健康な頬の血色や、隠れたところに漂っている野暮ったさなどからして、この地元で採用した人間らしかった。

森山は普通預金係に配置された。しかし銀行へは客が一人も来なかったから、仕事はまったくない。だが周囲を見ると十人の男女は結構忙しそうに、なにかを盛んにやっている。

森山はすこし退屈になった。

「洗面所はどこですか」

隣の女子行員に聞いてみた。彼女はソロバンの手も止めず、顔だけを森山の方につと上げて

「裏の方です、あのドアのところ」

そんなこと聞くまでもないわ、と言わんばかりの口調でそう教えてくれた。

森山はドアをあけて裏の廊下に出た。銀行の建物と隣

の家とは裏側では一つに結合されていた。だから二つの建物の裏口は、裏で同じ廊下に連っているのだった。

トイレも隣と共同になっていた。

トイレの窓から外を見ると、裏庭の先には広い畑が拡っていた。そして菜の花が黄色い海のように咲き狂っていた。町とはいっても幅のない町であったから、道路に沿って一列に並んだ家並の裏は、もうすぐ一面の畑であった。トイレの暗がりの外に拡る菜の花の海は、空気までが黄色に光っていた。

森山が用を足していると、隣の家から若い男が出てきて横に立った。横顔を見ると、それは蒸発したコーヒーショップのボーイであった。相変らず蒼白な顔に、白いワイシャツに蝶ネクタイをしめ、白い帽子を頭にのせていた。その白さが菜の花の反映で染ったように見える。

「僕、ここでコーヒーショップをやっているんです」

さっき道路から見たとき、そんなコーヒーショップはなかったのに……。しかし銀行の建物が銀行とわからないように、コーヒーショップも外観ではコーヒーショップとわからなくてもいいのかもしれない。

森山はボーイの後について、コーヒーショップへ裏口から入った。ひなびた田舎の光景とはちぐはぐな強いコーヒーの匂りが味覚神経をぞくぞくさせた。

「一杯いれましょうか……」

ボーイは舌の焼けそうな熱いコーヒーを森山にすすめた。

店の中には客も居なかった。

森山はコーヒーを飲みながら、狭い裏庭の向うに、菜の花が狂ったように、どこまでもどこまでも咲いているのを眺めた。開けたままの裏口からその菜の花の刺すような匂ひが、春の乱気流のようになだれこんでくるのがわかった。

さいたま屋風土記

山口健二

スキオは女用の化粧品二三種類、髪にすりこむゼリー状の整髪剤とを、石鹸、シャンプ—といっしょに桃色のポリ桶に入れてちどりの湯に出かける。内風呂はあるが兄夫婦の子供で、毎日泥だらけになる育ち盛りが三人いる家の中では、せまい風呂場で、そうゆっくり思う存分入浴と化粧に専念するわけにはゆかない。かれが店に立てこんでいる立ち飲み客の間をぬって通りへ出るほんの三間（六米弱）の間に、立ち飲み客の中から冷やかしが飛ぶ。

「スキちゃん、その化粧品どこにぬるんだい」

スキオは、これは自分が人気があるからだと思うから苦にしない。ニャリとして

「アソコにもぬるよ」

とまぜっかえして、そそくさと店を出る。

このさいたま屋酒店は十五年前に先代の岩吉が六十出たところで死んでから長男の弁一がやっている。弁一は東京六大学のうち、いつも野球の成績が一番いい大学の商業科を出たのだから学歴はあることになる。伜を大学というところの商業科へやったのは、岩吉と女房のカメは昔の尋常小学校も満足におえていなかったので、大学というところを出せば、店をどんどんはやらせる魔術を勉強するにちがいないと思ったのである。スキオは同じ野球のグル—プ分けでいくと、東都五大学のひとつの芸術科を卒業したことになっている。芸術科というところへやったのはカメの願いが籠っている。というのは、スキオが未だ四・五才の頃から、近所の石屋の娘といっしょに児童演劇研究所と称するところへかよわされたことでわかる。この子役養成所の方は、スキオは体育の基礎訓練についてゆけずに、ベソをかいて挫折した。石屋の娘の方は、ベソをかかずに歯を食いしばってつづけたことと、その時分から世間の景気がよくなって、墓を改造したり、修復したり、新造する客足がふえて、商売の方

がトントン拍子になって、金廻りがよくなったことも手伝って、その方面への贈り物もとどこおりなく、今では一人前の女優になり、時に映画やテレビに出ている。このことは、スキオの心の中にはさして大したかげりを残していないが、カメは石屋の自分より年下の女主人の前で敗北感めいた重さを感じている。その感じを巻きかえそうと、スキオを大学というところの芸術科に入れることになったのであろう。

スキオはもう四年前に三十を越えてしまったが、何をやっているのか、これからどうしようとしているのか、母親のカメにも、兄の弁一にもわからない。もう七十を越して太い猪首と、厚い胸と、大きく後ろにつき出た尻の重みで、ひどく弱ってしまった足を引きづりながら、弁一が食事のために店からあがり、嫁のぜに子も子供らの食事の世話をする間、カメは店に降りて客の相手をする。そんな折にカメは自分に一番年の近そうな立ち飲み常連の一人である井中加和寿に零すことがある。

「大学なんかにやらずに奉公にでも出しゃよかったと思うこともありますよ」

井中加和寿は尤もらしく「一番末だから可愛がり過ぎたんだろ」と月並な批評を加えるとカメは

「そんな覚えはありませんよ、みんな同じに育てたんですよ。でも死んだコレが」と親指を立てて「よく言ってましたっけ。スキオは弁一の手伝いするよりほかにあるまいって……」

スキオは母親のカメに、自分が一流のキャバレーのディスクジョッキーをやっていると漏らし、何とか長と肩がきのついた名刺をちらつかせたことがあるが、なが年、酒屋の内儀をやって来たカメが一片の名刺を信用する筈がない。その上、カメにはディスクジョッキーとは何やらわからないばかりか、決して堅気な商売とは思えないのであった。

スキオは店の手伝いをする時は金銭登録器の前にだけ立って、達者な酒落や世辞をとばして客をよろこばせはするが、注文の酒、ビールの配達となると、何かと口実をつくって出しぶる。そこで兄嫁のぜに子がきつい目つきになってカメに当ることになる。かれが配達をしぶる口実は、雨の日は「雨にぬれるから」であり、晴れの日には、「ちょっと便所へ行き度い」と言う。便所には小一時間立てこもるのであるから当座の役に立たぬことになる。立ち飲み常連の一人である「ギンナガシ」ことぎンさんがこの便所の籠城についてぜに子に言った。

「そんなに長く便所で何してるんだい、アレでもシゴイてるんかい」

「・・・・・」

またある時は常連の一人である「クラタテンゼン」がぜに子に言った。

「ヨメ持たせたらどう、何なら世話しましょう、それ

ともアソコに欠陥でもあるんかや」

今度はぜに子のいたずらっぽい答えがかえって来た。

「嫁の話なんてテンデ受けつけないワよ、どういうわけかね。でも一度見たことあるけど、アソコは普通の男の人と同じだったワよ」

配達をきらうのは体裁と容姿をひどくきづつけると考えるためである。そして週に三回位、夕方から上衣もズボンも銀色に光るフロックコート型の服や、真赤な色で統一をつけた背広姿で店から出て行く。その頃、立てこみがちの立ち飲み客の中を押し分けて店から出るのだから、ちどりの湯へ桃色のポリ桶抱えて出る時のように、酒の入った客の口から冷やかしが飛ぶ。

「イヨウ色男！アレの手入れは出来てるかい」

これは小銭入れから勘定しながら十円、五十円、百円と前金で小銭出しだし、冷や酒を立ち飲みする客の一種の羨望の声のようでもあり、店に立ったカメは

「何しろ衣裳道楽で：」とスキオや店のために言い訳けを張る気持になる。

井中加和寿は、ここの所一寸長老面してセンセイと皆に呼ばれている。尤も立ち飲み常連の中で、坊主、易者は「センセイ」であり、背広、ネクタイ組は「シャチョウ」でありセンセイにもシャチョウにも当てはまらない者は「　—　チャン」とか「　—　さん」とか渾名や略称で呼び合う。そしてお互に深く生活身上に立ち入ることをはばかり合う空気がある。これは飲んだ気嫌でほらを吹き合うのに便利である。ほらを吹くと一ッ時人間は爽快な幸せな気分になるものである。さいたま屋酒店の常連のこの種類の渾名略称を並べると、「クリチャン」「ナリチャン」はトビ職で、「マッチャン」「ヤマチャン」は極東組員でヤマの方は目下新聞拡張員をやり、マツの方は、二十才位年上の女がラブホテルの仲居をやってめしを食わせてくれている。「ノーさん」は室内装飾屋で芸術家風にあごに鬚をたくわえている。「オクチャン」は記念品、賞碑賞杯屋の外交で「タゴ作」は国鉄下受けの廃物処理会社の社員であり、「ガリヤ」は理髪屋の店員、「カサヤ」はこうもり傘店の番頭であり「ニシさん」は保険外交である、ギンナガシこと「ギンさん」は昔戦争中に陸軍の大尉であったが、今では魚河岸のそと店の手伝いをしていて時々高い魚をうりつけたりする。「クラタテンゼン」は本名が倉田で背広組であり、自分は弁護士であると口走ったことがあってセンセイと呼ばれたこともあったが、弁護士はかれの女房の父親が生前やっていたことがあるのを借用して貫目をつけようとしたことが段々にわかって、目下「クラタテンゼン」が定着している。その他「カシラ」「デメ」「ハゲタカ」「ウミボウズ」「カマさん」「タマさん」「オヒゲ」など、中には「箱根の旅館の便所の下駄」なんてジゲムジゲム式の長い渾名の持ち主もいる。この渾名、略称は苗字、

職業から来ているものと、容貌姿勢から来ているものに大別出来る。こういう人々は、それぞれ勝手な時間をえらんで、主として夕方、うす緑色の螢光街灯が町の藍色に染った空にともり始める頃に店にあらわれる。そして短かいもので小一時、長いものになると三時間も、その日の競輪競馬の出来栄え、パチンコ屋の玉の出具合、週刊誌や新聞に出た事件、野球の話、自分の身辺の出来事や手柄話を話題にしてあきることがない。この人々の心境を支那国の昔の詩人の詩で上品に言い表わすと〝返昭入閭巷〟〝憂来誰共語〟〝古道少人行〟〝秋風動禾黍〟

―巷の空にはまつかな夕陽、今夕アソコで呑むよりほかに、知った人とて少ないからに、この秋佗をどうしよう―と云った按配になる。ヒト恋しく、サケ恋しいのである。

かれらが囲む四角い黒々とよごれたきずだらけの一枚板らしい卓子の上には、干のり、ピーナツ、らっきょう、干からびた梅干し、いわしの干物、のしいか、のし鱈、蛸酢、ソーセージ、ゆで卵などが布巾をかけないから紛をふいたポリエチレンの入れ物に入って雑然と並んでいる。ろくろく洗わずに、水の中をくぐらすだけの生ぐさい匂いがのこっているコップで平然と酒やビールを飲む客の空きっぱらでないと食慾をそそられる肴ではない。少しおごる客は、イワシの罐詰、イカ、クジラの罐詰をあける。帆立貝、蟹罐には滅多に手が届かない。その残物は、のら猫出身の弁一の愛猫クロがニャーゴロとのどを鳴らして頂くことになる。

さいたま屋酒店の内儀ぜに子は、いかり肩ではあるが色白で、雀班がいろっぽくちらばって、甘たるい舌足らずな物の言い方が結構酒呑みのこのみにむくとみえて、嫁に来て十六年近く、すっかり立ち飲み連中をのんでかかる呼吸も心得て、常連はママとかママさんと呼んで、普通の呑み屋で飲んでいる気分になるのであった。これは嫁のぜに子にしてみれば、〝店はアタシでもってるんだワ〟と云う錯覚を持たせられるもとになり、旦那の弁一は配達に使われ、役に立たないスキオや、カメが冷たく取り扱われる。

ある日、井中加和寿が尤もらしい顔になってぜに子に言った。

「おふくろサマにもう少しやさしくしてやれよ、もうじきアノ世へ行くんだぜ」

これは井中加和寿にしてみれば、自分が一番カメに年が近いし、自分もかせぎが少ないから女房子供に大事にされていないので、かなり痛切な提案というべきものである。するとぜに子はあからさまに言った。

「だってシャクにさわるんだもの、あれで、これから十年も生きられちゃ、アタシ、五十になっちゃうよ」

こう云うあからさまな言い方に井中加和寿は感動する癖がある。「そりゃわかるよ、世の中にゃ、性が合わな

い仲ってあるもんだ」

だがかれは腹の中では、何んでシャクにさわるのかさぐる気分になっている。かれは、はやらない易者をやっているので兎角人間の心の奥底をのぞくのがすきなのである。その上シャクにさわる中味については、いつぞや店の行末や、スキオの将来を占って欲しいと、カメが煙草三ツ持ってかれの住居を訪ねて来たとき、直かにカメから聞いたところもあるから察しのつッているところもある。

カメはさいたま屋酒店で小僧をしていて、二番目の養子におさまった岩吉のところへ、奉行先の日本橋の大店をさがって、十八才で嫁に来た。子供の頃から大店の奥で古風な女中の躾けをうけたのだから、岩吉の義母につかえるやり方も忠実であった。毎日、義母の髪をすいて結うことから、足腰をもみ、配達に買物に、店の仕切りに、五十近くなるまでうごきつづけに働いた実績がある。そして義母が死んで、子供のヨシ子、弁一、イガ子、スキオも、それぞれ段々大人の領域に入って来てからは、日本橋の大店にいた時分、たまにオカミさんのおともをしたことのある歌舞伎、音曲のようなものにそそられる気分が出た。役者の名前や芝居の出物のことを口にしたり、小唄の方で、そこら近辺で〝師匠〟と呼ばれている芸者あがりの老女の恩習会に出たりしている。歌舞伎などテレビ以外では観たこともなく役者の名前などトント縁のなかったぜに子にはこれも余計な物いりぜいたくであり、シャクの種にもなる。

このカメの義母というひとは、カメが嫁に来た時は最初の養子が怠け者で性根がわるいと追い出して、遠縁に当る小僧の岩吉を二人目の養子になおし、若死にした亭主のあとを、女手一人でやっていたのだから気性も強く、経済もしっかりしていた。

「あたしが買物に出るときは、しゅうとめさんがチャンと品物をきめて、十銭とか十五銭とか直かに出して貰って、お釣りはちゃんとしゅとめさんに渡したもんですよ。なにしろ、一日中帳場にきちんと髪を結って座っている人でしたからね」とカメは〝このごろ、壱万円の使いでがない〟と零しながら自分がつかえた姑に引きくらべて、自分とぜに子の間柄を口惜しがるのであった。

「弁一にもセンセイ、いくらでもいい嫁の話はあったんですよ。ホントですよ。それをずい分ことわって、アレがいいって弁一が言ったんだから、これも運ていう頂きものだと思うより仕方がないよネ」

「……」

「あたしや弁一に言ってやったんですよ。あんまりひどいじゃないかって、でも弁一が〝かあさん子供が出来ちゃしようがない〟って言いますよ。わかっちゃいると思うんだけど、ああまで嫁になめられりゃ男のモノが泣きゃしないかねえ、センセイ」

「……」

井中加和寿はカメに肩入れする答えをしぶっている。それは軽々しい発言は易者の本分に反するし、大体人間は発作的にわめいたり、口走ったりするものだと商売柄心得ているからである。

弁一の兄弟姉妹は、このあいだまで姉のヨシ子、妹のイガ子が家にいた。イガ子が一番初めに肉屋の伜と恋愛の気分で結婚して、男の子一人出来たが、姑が意地わるく、若夫婦の寝室にまで干渉すると言って、イガ子がその子を置いて出た。その時分カメは困った顔に、勝ちほこった表情を見せながら井中加和寿にもらしたのである。

「一人身の姑ってそんなものかね、若夫婦のネル音にまで耳すませているんだって……、不仲になって出て来たからアタシャ〃イ〃なんて言うのかね、イシャリョウかね、六十万円取ってやりましたよ」

「あんたも一人身の姑につき合っただろう、ネル音にまで耳すまされたんじゃないかな」井中加和寿はちょっと中腹で切り返してみた。かれの年甲斐もない好奇心も作用した。

「あのヒトはその方はあっさりしていたようですよ、商売商売で打込んでいたし、これが」と例によって親指を立てて岩吉に見立てて「よくあのヒトに気を使っていましたからネ」

その時分は、岩吉は末だ達者だった。だからカメは〃一人身の姑〃ではなかった。そして弁一に嫁が来た。イガ子は暫らくの間、月に一回何日か身体中から強烈な女の匂いを発散させながら家の手伝いをしていたが、いつの間にか男っぷりのいい自動車の運転手をつかまえて、万事略式でいっしよになって家を出た。井中加和寿が、いつぞやおせっかいにも

「イガ子さんの二度目の亭主は感じのいい色男だな。イガ子さんメンクイなんだな」と嫁のぜに子に探りを入れたら、ぜに子は、ほっぺたに敵意をちらつかせて言った。

「とてもヒドイ家のようョ、オフクロさんだけでね。一時は食べるのが精一杯ってところらしかったワ。それにイガ子さんパパに金貸せって来ることがあるんだワ」

だがカメに言わせると、ぜに子の性質は、子供の頃余程貧乏育ちのせいだと言うのである。と言うのは

「よめに来る時だって何ひとつ持って来たわけじゃなし、あたしがみんな買ってやってるんですよ。自分の下着入れた行季の底に、預金通帳がかくしてあるんですよ、多分店の金を少しずつあそこへ入れるんだね」

「……」

ぜに子は信州の農家の四女で高校を出るとき算盤が三級だったので食品工場の会計係をやっているうち、世話する人があって弁一と夫婦になった。今時ちゃんとした店を持って酒屋をやり、家作も四、五軒あるとすれば、

弁一に嫁の来手もかなりあったであろうし、シュウト、シュウトメ、小ジュウト都合五人あっても、嫁方のぜに子が七人兄弟姉妹の末子の方で、早ばや始末したい気持でいた農家の家督とりや、年とった母親にしてみればカメの言う通りオンの字の縁であったろう。その上弁一が何人かの見合をすてて、とうとうぜに子がいいと言ったのだから、これ又カメの言う通り、運と云う頂きものともなろう。弁一は岩吉が死ぬと間もなくぜに子の実家のある信州の産〃大信州〃という銘酒を、灘や東北の銘柄の通った酒を押しのけて取り扱うようになったところにも、かれがぜに子に打込む心意気がのぞかれる。

ある日、易者の井中加和寿がぜに子にきいたのである。

「ぜに子さん、旦那と新婚旅行はどこだったね」

「九州別府へ行ったァ」

「よかったなァーそれでホラ、最初のアレさ、俺が若い頃女からきいたところじゃ、二三日は股倉へ徳利ぶちこまれた感じだそうだが、やっぱりそうだったかな」

「……忘れちゃったなァ」

「……最初の晩はかかって来なかったよ、カンジ……」

こういう会話は、いくら相手が老人の井中加和寿でも、大正の中頃に日本橋の大店で女中の躾をうけたカメからすれば、ずい分畑のこやしの匂いがするのであった。

義姉のヨシ子は年頃になると春には帯をうしろに引きづって街を歩く程あたまが少しゆるんでいたが、四十近くなって、その方の癖は少しおさまって、店の手伝いをしたり、台所をやったり、ぜに子の双生児を乳母車にのせて守をせっせとしている姿を見かけたが、盲腸炎から腹膜炎をおこして十年前に岩吉につづいて死んだ。カメはそのことについて嘆いたのである。

「アレも可愛そうでしたよ。痛い腹を我慢してふたごの世話させられてサ、おわり頃、床についたら、その枕をぜに子が蹴ったんですよ、起きて子供の守しろって、……早く医者にかかりたいとも言えなかったんでしょうよ。何しろ嫁は〃ぜに子〃って呼ぶと返事しませんからね、ママって呼ばなきゃこっち向かないですよ。いつぞやなんて……あたしのほっぺたへ手出ししたのよ。……その時だけは、あたしや嫁の口きいたひとの所へ行って相談しようと思いましたよ」カメの目の隅に白くにごった口惜し涙がにじんで出た。

「……ヤな話だね」

井中加和寿もさすがにイヤな感じにおち入ったのであった。

さいたま屋酒店では、常連立ち飲み連が干潮のように退いたあと、十時近くまでばらばら客があったりする。大学という所を出た弁一も、飽きないで商売することは、死んだ岩吉のうしろ姿から習っていた。だから弁一が店の鎧戸をおろし、冷蔵庫の中味をととのえなおし、売り上げを金銭登録器から、明日の釣銭をのこして勘定して、

店から上り、仏壇の隣りにある袋戸棚の中のボールの小箱に収めて、さて台所に下りる。自分の寝酒の用意をするのである。弁一は岩吉が生きている頃は酒類は頭痛がするので手を出さなかったが、昼間一杯、配達に、酒呑みの相手にと働くと、いつの頃からかビールにウイスキーをたらして薬のようになめる癖がついた。ぜに子は早やばやと二階へ上がり子供の寝床のはしからもぐり込み、小学三年の双生児に絵入りの物語り本を読んでやっているうちに昼間の疲れでいつか口をあけた貝になっていた。スキオはその晩は、いつものケバケバしい服装で〝おそ番だ〟と云って家を出たからまだ帰らない。老母のカメも床についたのか音もない。弁一は商売の不愉快な思いからのがれる気分でテレビをつけて〝まげ物〟の番組をさがし当て、食卓に自分で並べた二三品をつつきながらウイスキービールをなめている。何時の間にか音も立てずに夜の浮気から忍び足で帰った野良猫上りのクロが膝に来て、ニャーゴロとのどをならして食い物をねだった。弁一は、このクロ猫だけが自分の味方であると云う感傷におち入って、口うつしにソーセージをあたえるのであった。時計が十一時を打った。今時十一の数だけ音を立てる古時計を弁一は少しうるさいなと感じてはいるが、かれが階下の灯を消して、二階へ上る時刻を示すのである。そのようにして、その夜の戸張りはすっかり下りた。犬の遠吠えがながながと尾を引いていた。

その翌朝、町の信用金庫の集金係が預金を集めに立ち寄る十一時までの間に、ぜに子が袋戸棚の中のボールの小箱の中味がすっかりなくなっているのを発見したのである。ボールの小箱は、ちゃんと蓋がかけられていて、その上に重ねられた古座布団、古蚊帳、古行季の下にちん座している姿勢は正しく、その戸棚の戸も、表の鎧戸も、金銭登録器の中の釣銭も、店の商品の並び具合にも変ったところはみられなかった。だがぜに子の声は異状に甲高かった。

「パパ、パパ、パパ、此処にある筈のお金ないよ。ゆうべ此処にしまわなかったの」

「いやぁそこに入れたよ」

「何もないよ」

「そんな筈があるかよ」

弁一もぜに子のうしろから首をのばし、小箱の中をのぞいている。小箱の中の金を、ぜに子が信用金庫の来る前になぜ今朝にかぎって点検したのかな、と云う感想がちらりと弁一のあたまの隅をかすめた。子供たちは、それぞれ学校へ出てしまって、カメは老人特有の早起きをして、あさめし後、もう一度二階に上って横になっていた。スキオは昨夜の帰りは十二時を過ぎて、台所口の鍵をあけて帰ったので、まだ床の中であった。

昨日一日の売上金だけだし、店の商品や、金銭登録器にも、他のものにも手がかけられていないのだから、み

んなに相談してから云う弁一の意見を突っぱねて、どうしても警察へ言うのが筋だと言い張ってるぜに子のあたまの中には、常連の中で、店のたてこんだ時など、店の奥まで入って来る誰れかれの顔や、スキオのことがある様子であった。表の鎧戸は、静かに持ち上げれば、音を立てずに入れる程はあけられるんだとぜに子は主張した。さすがに年寄りのカメのことは口に出さなかった。カメが一日の売上げなどに手をかけることのないのは弁一がよく知っている。四、五軒ある家作の家賃の上りは全部カメがおさえて離さない。そのことについてカメは以前井中加和寿に口説いたことがある。

「アタシのお金を店の支払いに一時貸せってぜに子が言うんですよ。夫婦そろって言うんですよ。そうすりゃもっとふやして返えすって、でもね、これだけ商売があって、問屋の支払いに困るなんてアタシや、ザルに水を入れてるもんだと思うよ、ねえセンセ、ぜに子は二千円もする寿司を子供の夜食にとってやって、自分もたべてるんですよ。スキオだってまだどうなるかわからないし、イガ子だってアパート暮しだし、死んだオヤジからそっくり貰っている二人が、この上アタシからふんだくるなんて……アタシややりませんよ、やりませんとも、やりませんからね」

まるで井中加和寿がふんだくる相手のような剣幕で言った。年のせいで鮫肌気味に黒光りしているはだけた厚い胸のあたりに汗をかいている。

「……」

弁一は、こんな出来事を、いきなり警察沙汰にすることは〝気が向かないな〟と思ったが、結局ぜに子の主張に押し切られて折れた。普段、立ち飲み連の喧嘩口論や、前科のある立ち飲み客のことで縁が近くなっている警察は、すぐに窃盗専門の刑事をおくってよこした。かれは入口の鎧戸を上げたり、下げたりしたり、コンクリートの床や、店から部屋への上り口を鼻まで使って点検したあげく、いろいろ訊問調の質問を加え、家族のものと、ちがう指紋を検出するためにと言って、弁一、カメ、ぜに子、スキオから子供三人まで指紋をとった。指紋をとる作業をしながらかれは、自分がいかに有能な刑事であるかといいたいのだろう、デパートの便所に逃げこんだ賊をだましにかけておびき出し逮捕した手柄話をした。だがその話は、刑事が有能であることの証明になるよりは、むしろ、今時、まぬけたドロボーもいるもんだと云う印象を聞手にあたえるほどの話であった。ぜに子は、表の鎧戸は、音を立てずにあけることが出来ること、当夜スキオは弁一が二階へ上ったあと一時間以上して帰宅したこと、店がたてこむと部屋の上り口まで客がつめこんだりすること、その客たちの中には釣銭が足らぬときに、金の出し入れを袋戸棚からするんだと知っている者もいるということ、自分は十時前に子供の寝床にもぐっ

て寝てしまったことなど、くり返し刑事に言った。有能な刑事は、カンで何をつかんだのか、帰りがけに靴をはきながら

「こりゃむずかしいや」と人にきこえない程の独りごとを言った。

犯人は捕まらなかった。有能な刑事が犯人を捕まえるつもりになったのか、ならなかったのか、それさえ不明であった。その数日後カメが、井中加和寿の家に現われて言った。

「センセイ、占いで見て下さいよ、ありゃぜに子ですよ。スキオはアタシの子で、アタシはあの子のたちを知ってますからね、三十何年そんなことやったタメシがないよ。あの子は、子供の頃から目の前に金があったって自分のモノにする子じゃござんせんでしたよ」

「……」

秋に入ったある日、常連の一人、保険外交の「ニシさん」が、パチンコに三千円もとられて、ヤケ酒のあげく、常連の仲間に自分のふしあわせを嘆いたのである。

「ボクはね、女房と離婚しようかと思うんだ」

室内装飾家の「ノーさん」が言った。

「いい年してリコンだのレンコンだの何のことだい、こっちはリコンする相手もいねんだよ」かれは今年になって二人目の女房に死なれている。

「ニシさん」はひとつの癖なのであろうが、酒のコップを口に持ってゆくとき、小指をピンと離して立てる。これは田舎芸者が、気取って猪口をあける時の指つきである。又しじゆう、片手をズボンのポケットにしまいこんで、その方の腰を「く」の字にまげて、くねくねと身をよじらせながら、そばに立っているぜに子に「ママは美人で可愛いいョ」と云った。それは序いでに言った趣きであった。弁一はちょっといやな顔を、去り気なくそらして、他の客のコップに酒をつぐ。カメが、ぜに子に夕食の用意が出来たよと、家の中の暗黙の約束ごとであろう、丁度店へ下りて来て「ニシさん、このヒトは」に言った。

「だめだよ、ニシさん、このヒトは」とぜに子を指さして、「若い人がすきなんだから」

弁一の顔が更にひとしおにがっぽくなった。

「イヤーね、ノーさんよ、ゴメンナサイ、年甲斐もない、その通りだ、だがね、俺が停年までエイエイと働いてさ、退職金六百万円うちへ持って帰ったんだよ、〃ご苦労さまでした〃ぐらい女房に言って貰いたかったよ、それがね、二、三日したら箪笥の中にしまった金が五百万円しかなくて、百万円ぬすまれたらしいって女房が言い出して、警察へまっすぐ知らせたんよ」

「それで、どうなった」ノーさんは顎鬚をしごいて冷静である。

「さんざっぱら刑事にいろいろ聞かれたよ、そのあとで刑事の親分みたいなのが〃あんたの家の中うまくいってるかね、奥さんと仲よくやってるかね〃なんて嫌味言われてな……」

「それで金の方はどうなったの」

「ウン、三日程して、〃出て来たって女房いいやがった……どうもボクにはわからん、それに近頃浮気していやがるのよ」

「オイ、オイ、ニシさん、お前さんの女房、浮気出来るツラしてんかよ、酒まずくなるグチやめなよ」鳶のクリちゃんは若いし、「ニシさん」のくねくね曲る腰のかたちを好かぬらしい。

「ボクは事実を言ってるんだ、ボクはいつも真実を語るのに誰にも遠慮はいらないちゆうシンネンを持っているんだ」「ニシさん」は酒のせいで真実だのシンネンなどと云うむずかしい言葉を使ってトビの若者に威勢を張ろうとした。その時

「うちでも同じような事件あったのよ」

ぜに子が横合いから口を入れた。衝動的とも云えそうな唐突さであったが、それっきり口をつぐんだ。

スキオは秋が深くなる頃、金銭登録器の前に立っても浮かぬ顔で考えこむ目つきになったり、近処の不動産屋のガラス戸に張り出された間貸しの広告をながめて立っていることがあるようになった。ぜに子が、子供三人だんだん育ってうちん中がせまくなったと、しっこくカメに言うのであった。

よくキャバレーに行くこともあると豪語しているトビの「ナリちゃん」が言った。

「あの方の商売は三十越しちゃ、金のあるいい女のお客はつかんそうだ。スキオ君もそろそろ首なんだろ」

「俺がいつぞや〃便所に籠城して、あればっかりシゴクなよ〃て言ったら、スキオのやつ、〃色男にゃシゴイてくれる女が多くて忙しくて困るんだ〃とぬかしたぜ。いい気なもんだ。」

「ギンナガシ」こと〃ギンさん〃が〃今時の若い者は〃といった慨嘆口調で「ナリちゃん」に合槌を打った。

もう冬が、すぐそこまで来ている。

暗黒時代の虹色のプレゼント

山根　三枝子

"Good evening everybody. This is the Taikoku Broadcasting Sation in Formosa, presenting to you again our Dōmei news……"

こういった前口上で始まる海外向けの英語ニュース。何年も前のことだが朝子はいまだにふとした折にこういった言葉が口をついて出て来ることがある。

昭和十四年頃、未だ日米戦争は始っていなかったが満洲事変以来戦争は拡大して中国大陸では長期に戦争状態が続いていた頃であった。台北放送局では海外向けの宣伝に英語ニュースを放送していた。グレイス・ジェイムズ夫人がアナウンスを担当していたが彼女は時々休んだりさぼったりした。そんな時には朝子が代りにアナウンスをした。普通夜の九時から九時半位までにニュースが出来てきて十時から数分間の放送であった。慌てて辞書を引いて発音を確かめねばならぬ語があったりでニュースの出来て来るのが遅れたりすると気を揉んだりで可成り緊張した時間を過ごした。朝子の声は電波に乗って宇宙の彼方に空しく飛去ったかも知れないし又以外と敵軍がキャッチしていたのかも知れないということは知る由もなかった。只何処からも反応が返って来なかったので少し位下手な英語でもという気安さもあった。放送が済んで帰る時はちゃんと車で送って呉れた。

ほっとした気分で椰子並木の三線道路や麗正門わきの道路を通ったのだが大きなゴムの木やがじゆまるの繁みが青みを帯びた明るい街灯で照らし出されていた植民地の夜景は朝子の青春時代のバックスクリーンの一つとして脳裡に美しく焼付けられている。

朝子は東京を引きあげて台北に帰ってからの身の振り方など自分では少しも考えていなかった。女学校の先生にでもなろうかなと漠然と考えたこともあったが、彼女の父の言に依ると「今頃女学校の先生になっても勉強し

て来たことは何んにも役に立たないよ。殊に英語の授業時間など皆勤労奉仕に振替えられるからそれこそ真黒になって土掘りやモッコ担ぎでもするのが関の山なんだから……」

ということで先生になることは許されなかった。しかし知人である台北帝大の理農学部の山田教授が少し手伝ってくれということで暫らくの間大学で働くことになった。当時時局柄かと思うが東亜研究所というものが出来ていた。そして南方資源に関する調査がこの食品化学教室の山田教授に依頼されて来ていた。朝子は名義上その東亜研究所の職員ということであったが仕事はのんびりしたものであった。文献の整理、タイプ打ち、少しばかりの翻訳等をし "Chemical Abstracts" なんていう学生時代とは大分異った分野の本もかなりめくったりした。

山田教授は別名「お茶博士」ともいわれていた。インドやセイロン産の紅茶に負けないものをいくらか気候風土の異なる台湾で生産出来るよう研究した人で戦前の日本の紅茶の生産に大いに貢献した人であった。教室の一隅の戸棚にはアッサムやダーヂリンをはじめ沢山の地名別に分類された紅茶のサンプルがあってこれ等は研究の材料に役立つ他教室の人達の三時のおやつ時によく使われた。

助教授の大山氏はタンニンの研究で学位をとった人でタンニンの構造式を決めた人とかいうことであった。明治製糖から原田という若い研究員が派遣されて来ていた。彼はヴイタミンCの結晶を作る為パイナップルジュースを使って研究していた。当時は未だCの結晶を作ることは出来ていなかったのだった。大山氏の研究室はタンニンで皮なめしをやっていて臭かったしパイナップルの室は甘酸っぱい臭いで一杯だった。

教室には助手や更にその人達を手伝う人達がいて朝子と同年輩の家政科出身の女性もいて朝子は親しくしていた。

或日のことお茶のあと皆で雑談している時石井助手が言った。「もうすぐダンスホールが閉鎖されるんだって。なくならないうちに皆でやりにいかないか」「うん、いこういこう」と皆賛成した。台北市の北西部の大稲埕(ダイトウテイ)にあるダンスホールに或る晩教授助教授を除いた皆で出掛けた。一時はホール一杯の人達が踊っていたこともあるのにさすが時節柄かホールは閑散としていてガラス戸や窓には黒幕さえ取付けられやがて来る空襲に備えていたがそれから先どんなに暗くて惨めな戦争の世の中になっていくのかは誰も想像出来なかった。陳さんという助手一人だけが踊れなくて残念そうに皆が踊るのを見ていた。彼はその後教室の隅などで休みの時などステップの練習などしたりしてたが皆でダンスホールに出掛けるチャンスはもう来なかった。戦局はジリジリ逼迫していった。

海軍の渡洋爆撃隊が台北から中支の爆撃に飛び立つのを見かけるようになったのも此の頃で、何機飛び立ったかを数え又帰って来る時は何機だろうかと悲痛な気持で夜空を眺めたりした。

台湾にはよく何何の宮様という皇族が来台（台湾に来ること）した。その度に小学生中学生女学生が駅から宿舎の総督官邸までの沿道に並ばされ歓迎の意を表するお出迎えをしたものだった。宮様の車が近づいて来ると、「気をつけい！」の号令がかかりいよいよ目の前をお通りという時には「最敬礼ー」という号令がかかり「なおれー」の号令がかかった時は車は過ぎていたので誰も宮様の顔を見ることは出来なかった。

そんな時代の或日のこと宮様が大学に足を運ばれることになり山田教授の食品化学教室が宮様にお茶のサービスをすることが決った。そして朝子がお茶を運ぶことになった。

上からのお達しでお茶のサービスをする人達は訪問着を着てということで、朝子の母は娘のため自分が用意した着物や帯が早速晴れがましいことに役立つことが嬉しかった。当日母は一人で張り切り、着物を着なれない娘、そしてこんなことに対して大して興味も持っていない娘に「それ、そっち向いて」とか帯をしめた上からたたいたり、ひとりで張切って着付をするのであった。お茶に使う水は蒸溜水で、ということで水を沸騰させたり冷却したりして家庭持の石井助手がお茶を入れた。宮様はだだっ広い殺風景な教室の一隅におかれた机を前に腰掛けていた。学内の見学を済ませたところだったようだ。朝子は今まで頭を下げてばかりで顔を見ることの出来なかった天皇家の親族の顔を初めて間近かで見ることが出来た。黄土色の陸軍の軍服に軍刀まで付けていて極く普通の日本人の顔をして無表情でいくらか堅い感じで腰かけていた。宮様方の旅行は当時あまり楽しいものではなかったように思われた。

朝子は陰でいろいろ助けてくれる母親もいたし又女中もいたので大学で働いたり時々管弦楽の合奏を楽しんだり、たまにはアナウンサーの仕事をしたり、その上あらましのことだけでもと華道も茶道も洋裁もやることが出来た。そして日米戦争の始まる前に結婚することになった。「あーら　いいじゃないの、結婚早々から高等官夫人で……」等と親戚の者が言った。相手の男壮夫（たけお）は二十七才の逓信省航空局の技師であった。急速な発展途上にあった航空の世界のことを考えても先ずは人生すごろくの幸せな振り出しぶりではあった。しかしそんな「いいじゃあないの」なんて言われたものはあっという間に消えてしまうのであった。やがて誰もが想像し得なかったような悲惨な戦争の時代が来るのであった。

結婚して間もなく迎える冬頃から物資は不足して来た。借家払底でやっと見付けた家は見かけだおしの家で住んでみるとボロ屋でうす汚なかった。台北の家には水道の蛇口が沢山あったのにこの家には何をするにも台所の流し台の上の蛇口一つだけ、つい洗濯や掃除が億劫になる。それに南国育ちで寒さに慣れていないので真冬になるとこたつから中々出られない。夫の壮男は雪国育ちで全然寒がり屋ではなく朝になるとよく「あーさは再びーこゝーにあーり……」なんて歌いながらさっさと起きて裸になって下着に着替えていた。朝子は引っぱられるように仕方なしに起きるのであった。壮男は誠実でおとなしい性格であったが無口で面白味のない人間、朝子は退屈して淋しくもあった。自分の結婚は失敗だったのかなと考えることもあった。

朝子が台北で大学に勤めている時に三十才そこそこだのにもう子供が四人もいる助手がいた。彼は朝子を見ない振りしては見て「君、結婚したらすーぐ子供出来るから」等と、からかい半分に言った。朝子は「何言ってんの」と怒ってやり返していたがその助手の言ったことは当っていた。少しは遊びに出かけたりの新婚生活なんていうものは殆んどなくすぐ姙娠してしまった朝子はやがてつわりに苦しみ始めた。「結婚なんてしなきゃあよかった。何んにも面白いことなんてなくてこんな不快な気持いつまで続くのかしら」等と思ったりした。

或る夕方食事の仕度の為買物に出かけた。

朝子の家のある太子堂町の方から三軒茶屋の電車通りに出る途中に肉屋魚屋から八百屋酒屋お菓子屋や風呂屋と殆んどの店が揃っていた。そしてどぶ川の様な小川が流れていて小さなコンクリートの橋がかかっていた。

その橋のたもとに肉屋があった。何を買ったらいいんだろうと考えていると揚げ物の臭いがして来た。途端にぐっと吐き気がする。慌てて橋の上の欄干から川の上に首を出す。むかむかするのに一向胃からは何も出て来ないので一層苦しい。丁度その時近くの店の二階からラジオの音楽が流れて来た。それは忘れもしないあのモーツアルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」ト長調の弦楽五重奏のなつかしい曲であった。

嬉しいなつかしい又かなしくもある音の流れ。台北の学生合奏グループで演奏したり又放送もしたあの曲。あの時以来一度も聞かなかったこの曲。朝子は思い出すのであった。淡いピンクのドレス、ウエストのまわりを巾広くシャーリングで締め広めに明けた胸元には両わきに小さな蝶結びのリボンを着け、他のメンバーの黒一色の学生服の中では朝子の姿は美しく見えた。あんなに華やかで楽しい時を過ごしたのにあれから一年そこそこしか経たない今、手入れも怠ったボサボサ頭で汚いどぶ川の上で苦しんでいる自分自身。誰一人声をかけてくれる人もなく、汚れた川の流れを見ながら川の水とは正反対の美しい曲の流れを聞きながら生理的の涙か感傷的な涙か分からないのだが視界が曇るのであった。

朝子は結婚して四、五年たつかたたぬかの内に三人の子持ちになっていた。昭和二十年の敗戦前後の数年間にはいろいろな出来ごとがあった。壮夫は南方航空路開拓の為陸軍技師としてシンガポールに行った。朝子達は沼津に疎開し更に鳥取まで疎開した。終戦の年の三月の空襲ではシンガポールから帰って一人で在京していた壮夫は焼け出されてしまった。しかしプロペラ飛行機でペラペラ音を出して、はるかシンガポール迄行ったり又帰国する船では敵の魚雷攻撃を受けたり又東京では焼夷弾を消そうと奮闘したりだったのに命を長らえることが出来たのは本当に幸せなことであった。

昭和二十一年壮夫の勤務先は鉄道省に変っていた。航空局は進駐軍の命令で極端に縮小された為鉄道省に廻わされたのだった。そして当時大宮工機部といっていた鉄道工場が職場であった。壮夫は疎開先から家族を連れて戻り大宮市の官舎に住んでいた。割に広い家だったが戦中戦後と何んの手入れもしていない古い家であった。

食べるものも殆んど無くなった或日のこと壮夫はおいもの買出しに出かけた。東京より幾分食糧事情はよかったようで、自転車に乗ってあちこち頭を下げて廻われば少し位のおいもは入手出来た。買出しに出掛けた壮夫が中々帰って来ず心配していた所彼は左腕をしばった手拭から血をにじませ少しびっこを引きながら帰って来た。

「どーしたのよ」「いやあ、坂道でひっくり返ったんだ」という返事。大急ぎで消毒したりして手当をした。後ろの荷台の木箱に一杯おいもを入れてゆるやかな坂道を下って来た所、下の方からトラックが来てそれをよけ損ねて土手からおいも諸共転がり落ちたということだった。そしてそのおいもを妻や三人の小さな子供達はやむにやまれぬ食慾でむさぼり食べるのであった。その時の怪我は思ったよりひどいもので今だにケロイドのようになって残っている。

廿三年の春壮夫と朝子の長男が小学校に入学した。当時は皆下駄ばきで学校にいき雨降りの日など傘がない為に欠席者が増えたりしたものだった。新制中学校が小学校の中に出来て教室が足りないので二部授業となり給食も始まった。まるで家畜の飼料のような脱脂粉乳が放出物資といわれて配給されて来た。母親達が当番で午前中、学校にいきコチコチに固まっているのに水を入れ長い棒を使ってかき廻わしてミルクを作った。朝子も学校に行ってミルク作りをやりコップ一杯のおだちんミルクを貰ったりした。

朝子はPTAって何なのだろうと思い伝手をたよってアメリカでのPTA活動の資料を手に入れた。それはイリノイ州のとある田舎町の公立小のものであり親子達で自転車ハイキングをしている写真等も入っていた。

土田夫人は朝子の家から十分程の所に住んでいた。彼女は小学校のP.T.A.の文化部長をやっていた。上二人の

子供は少し遠いが自由学園に通わせ三人目の女の児はピアノを練習する時間を作るため近くの公立小、つまり朝子の所の長男と同じ双葉小に通わせていた。朝子もP.T.A.で文化部の委員だったので顔を合わせる機会も多く何んとなく土田夫人と親しい間柄になっていった。土田夫人は朝子の家を訪ねたりすると朝子が三人の子供達の世話で大童なのを見たり又朝子が物物交換所の話や着物を売る話、そして又「お豆腐一つに玉子三つ、それにおりんごを買うともう百円になっちゃうでしょ。どう考えたって六千円のお給料ぢゃ足りないわ」などと話すのを聞いた。土田夫人は正直で明かるい朝子に好感が持てた。

或る日のこと土田夫人は朝子の家を訪ねた。玄関に入って朝子とお話を始めると三人の子供達もぞろぞろと玄関に姿を現わしてお土産にと差し出したお手製のビスケットを寄ってたかってお行儀悪く食べ始めさすがの朝子も少し恥ずかしく思った。

「うちの四年と五年の子供に英語を教えて下さらない？」と土田夫人が言った。

「もうあたし結婚以来英語どころではないでしょ。ほーらこの有様を見て頂戴。それに小学生ってどんなに教えたらよいのかやったこともないし……」

終戦前後からの困難な生活、荒れた環境や子沢山や貧乏、こんな生活の連続の中で、朝子は娘時代に自分に与えられた教育すべてに対して懐疑的になっていた。自分が娘時代にやっていたことは荒唐無稽な役に立たぬものに思われ、もの事の価値判断の基準になるものも変わりかけていたが未だ確かなものはつかめないでいた。

その上女というものは意識するとしないとにかかわらず育児というものには何にもまして夢中になり夢中になっている間は他のものは疎んじてしまう傾向がある。朝子も例外ではなかった。英語など忘れた状態になっていた。今急に英語のレッスンをやってくれと頼まれても躊躇せざるを得なかった。

「未だこんな小さいのがチョロチョロしているでしょ。ちゃんとすわって落付いて勉強をなんていう状態では全然ないもの。とても駄目よ」と尻込みした。その時土田夫人は言った。

「そんなことはないわ。出来ますよ。思い出します（英語を）。うちの子供に教えて下さいよ」断固とした言い方だった。土田夫人は朝子に暖い愛情も持っていたし信頼もしていた。その時の土田夫人の朝子に対する気持ちは、曖昧な気持ちや貧して鈍しかかっていた朝子を立ち直らせる充分な力も持っていた。

朝子は土田家の三人の子供達に英語を教えることになった。壮夫の通勤距離も短く帰宅が早いので夕食も早めに済ませることが出来た。子供達を寝かせるばかりにして土田宅に出張教授をするようになった。

小学校のPTA文化部の企画で「新しい教育」という

題で羽仁説子女史に来て貰って講演会が開かれた。土田夫人は羽仁先生と知己であったので講演を頼むのに好都合であった。戦前戦中と個性を無視する教育や出世主義教育、軍国主義の教育などが一般に行われていて戦後急に民主主義教育をと言っても本物の民主主義の文化に浴したことに依って培われるところの真に民主的である教育者は何処にでも沢山いるというわけではなかった。個性を尊重して展ばすという教育のお話は皆に喜んで聞いて貰えた。

やはり文化部の企画で夏休みに生徒達の為に図工教室を開いた。終戦後の食べるのに困った時代であったので浦和あたりに住んでいる立派な画家達でもアルバイトになるので来てくれた。夏休みの終りには展覧会も開くことが出来た。

土田夫人は図工教室の時の先生の中で近づきになれた川田先生にお願いして秋から自宅で美術鑑賞の勉強会を開くことにした。希望者達五六人が集まり、月二回程先生に来て貰うことになり朝子も仲間に入れて貰った。先生は色々な絵の写真を持って来て時代別や画家別に絵の説明をして下さり絵の美しさに眼を開くよう指導して下さった。或る時は先生の師である小林古径氏から借りて来た信貴山縁起の絵巻物（模写と思う）を持って来て見せてくれた。先生のお宅に皆で出掛けて大きな大きな先生の描いた絵も見せて貰ったりした。或時、川田先生は絵筆を持って来て実際に描くところを皆に見せてくれた。其の時は黒白の墨絵であった。筆に墨をつけて白い紙にサアッーと棒を引いたり力をいれたり抜いたり又はねてみたり――初めのうちは何を描いているのかさっぱり分からないが急にそれはものの形を成して顕われるのであった。先生の手や指の動きは人間業とは思えぬ魔物か何かの動きのようであった。朝子達は息を呑んで心を奪われて感嘆するのであった。

其の頃の壮夫達、大宮工場勤務の人達の給料日は月二回で八日と二十三日だった。

お給料だけではどうしても足りない毎日、着物を売ったり着物を豆や小麦粉に換えたりして其の日その日をおくった。隣近所の官舎の奥さん達と「あと何年我慢すればお腹一ぱいの御飯が食べられるのかしら」と切実な思いで話し合ったりする毎日で近所の人達同志の間でよくお金やお米の貸し借りをやっていたし給料日前になると皆魚屋のオッサンに「二、三日つけにしてね」と頼むのであった。

こんな折生活状態の悪さからか壮夫は病気になり二ケ月の休養命令が出た。朝子はとても心配して壮夫の健康状態をよくする為には最善を尽くして頑張らねばと強く思うのであった。家族揃って健康に暮らせることが何をさしおいても一番大事なことなのだ、誰一人でもどうかあっては絶対いけないのであった。お風呂を焚く薪も朝

子が鋸で引いたり鉈で割ったりした。工場の物資部で買った薪は配達はしてくれたが長くて太かった。鋸がよく切れるとか切れないとかいうことを考えることは及びもつかないことであったので多分切れ味のよくない鋸であったのだろう。やっとの思いで薪を半分に切る。鉈で割るのは鋸でひくより面白味があった。「やあ、くたびれた、もうこれでよそう」と思っても朝子の割り方が少なければ少し位無理してでも壮夫が割ることになる。「元気だせ、もう少し割ろう」ともう一本もう一本と薪割をする。そしてこの時よくヴァイオリンのことを考えた。指が一本でも切り落されたら……、この大事に育てた動きをする指がすっとんだらどんなに残念に思うか分からない。それで「この指切ったら大変だ」「この指切ったら弾けないぞ」「三本指でも弾けるかな?」「この指とんだら大変だ」とリズミカルに称えながら一本一本注意深く割っていった。夕方になって一週間ぶり位でやっと入浴することが出来る。ふざけ廻る子供達を怒鳴ったりして入浴させた。

そして結婚以来一度も手入れをしない布団、しかしよく陽に干した布団を敷き清潔なねまきに着替えさせて安らかな眠りに就いた子供達の寝姿を眺めて安らかな気持を味うのであった。

朝子のアマテウスのヴァイオリンは幸運であった。戦争も敗色いよいよ濃くなった頃学生であった朝子の弟がたまたま朝子の家に遊びに来た。そして「一寸借りてくよ」と持帰った。その後彼が時々出かけていた静岡の田舎にある父の実家に行った時ヴァイオリンも預けて来たのであった。おかげで壮夫が持物をあらかた焼いた時焼失をまぬがれたのであった。

朝子は終戦後二、三年した頃何んとなくヴァイオリンが恋しくなった。「知ちゃん、ヴァイオリン取って来てくれない」と頼んだところ几帳面な彼はすぐ東京から静岡へそして又大宮へと運んでくれた。いつ爆弾が落ちてきて生命さえどうなるか分からぬ戦時中ヴァイオリンの事など考える余裕も無かったがこうして無事焼失をまぬかれたことは無意識の行為ながら弟のお手柄だったと思うのである。

土田夫人の子供達に教え始めた英語は不馴れな新米先生である朝子のことではあったが順調に進んだ。何時も子供の横に坐ってじっと子供のレッスンを聞いていた土田夫人はやがて自分も英語をやりたいと言い出し他二三の希望者もあって週一度勉強することになった。テキストに使う適当な本がなく母校の購買部に問合せたところ教科書用の残りで比較的易しいものが少しあるということであった。朝子は或る日曜日、わざわざ大宮から国分寺の母校まで買いに出かけた。卒業以来一度も訪れず殆んど十年ぶりの訪問であった。のんびり過ごした娘時代から大きな変化を体験し三人もの母親となり色々な苦労

を重ね心まで何んとなく汚れたりゆがめられたりもしていた朝子ではあったが母校は昔のままの姿で澄み渡った武蔵野の蒼空を背景にして清らかな感じで輝いてさえ見えた。休日なので人影はなく刈込んだ芝生に陽光が踊っていた。ただ驚く程に伸びている樹木の高さが年月を物語っていた。

Oh! ALMA MATER,……
おお　わが母校よ

- - - - - - - - - - - - - - - - - -

Thou turnst our faces to the light,
なれは　わが面を光の方に向けさせ
Thou pointest us the way,
なれは　ゆくべき道を我に示し

- - - - - - - - - - - - - - - - - -

若い女声のコーラスで歌われたなつかしい校歌があちらの窓こちらの窓から流れて来るような気がして懐しさがこみあげてくるのであった。

クリスマスが来た。土田夫人宅でパーティーが開かれた。英語クラスや美術鑑賞教室の大人達が皆子供連れで集まり画家の川田先生も出席した。土田夫人が「友の会」から借用して来た人形を使い「赤づきんちゃん」や「マッチ売りの少女」等の人形芝居をした。

川田先生も手助けして即興の芝居を作ってやったので皆おなかをかかえて大笑いした。

朝子も土田家の四年生の女の子のピアノに合わせてヴァイオリンを鳴らし人形芝居の効果をあげた。物資不足の世ながら持ち寄りのお菓子や果物を食べたりして子供達にとってはとても楽しい半日であった。何日か後のこと

「いやあー、一寸こっちの方に用事があって来てね。ヴァイオリンの音って随分遠くまでひびくねえ。三号の一戸の角のところまで来たら何んだかヴァイオリンの音らしきものが聞えて来るでしょ。音を伝わって来たら君のうちが分かったんだ」と川田先生はニコニコしながら玄関に立っていた。「どうぞおあがり下さい」　朝子は畳表が大きく破れた所に坐布団をおいて先生を座敷に通した。「何弾いてたの?」「これよ」と朝子は楽譜を指す。テーブルの上に辞書や本を積んで洗濯ばさみではさんで倒れないようにした楽譜であった。「もう一度弾いて聞かせて」と先生。「はいはい」朝子は先生の来訪の前、しばらくの間ヴァイオリンを弾いていたので手指はすっかりウォーミングアップが出来ていて好調子であった。楽器をとりあげて弾きはじめた。ベリオの「セーヌドゥバレ」華やかな踊の場面の曲だ。朝子はもう空っぽに近い米びつのこともお金の無いことも売る着物の減ったことも自分や家族の着るものさえ「明日のことわずらう勿れ」という聖書の言葉を聞かなくても一切のことを少しもわずらうことはなかった。美しいメロディーや軽ろ

やかなピチカート、おごそかで力強い二重三重の和音、踊れない自分が音でだけは踊っているように弾いた。

「もうこれで終り。これから先一寸弾けなくなっちゃったの」と楽器を肩から下ろした。そして「フウッー」と息をついた。「そうか」と口には出さず目でうなずいた先生。先生は画家らしい何でも見通すような目をしている。いつだったか美術鑑賞教室で先生はこう言った。

「僕の目は女の人の洋服の上からでも下着まですっかり見える位の目なんだよ。それ位よくなければ絵など描けないんだから」皆は自分の着ている下着に思いをめぐらし真面目な顔になった。こんなことがあったのだが先生はその目を一寸うるませて「きれいだ」と一言だけ言った。そしてかるく朝子を抱きしめて額に接吻をした。それはA線上にフラジオレットで出すピアニッシモの音色、そして先生の魔法の指が描き出す線の美しさ。

「先生の接吻って素晴らしいのね」朝子は口には出さず眼でそう語った。「もうこれだけでおしまいだよ。これ以上のことがあったら君はぼくから離れられなくなるから……」と川田先生。

朝子の人生の中でこのことは虹色のプレゼントであった。何故ってそれは暗黒時代の暗くて汚い色合のすべての物を一瞬にして虹色に輝かせる力のあるものであったから。

壮夫は転任が決っていて近く大宮を離れるという事は先生も知っていた。だから朝子にお餞別のつもりでキッスのプレゼントをくれたのかなと朝子は思った。しかし間もなくお餞別をわざわざ持参して下さった。「これ古道具屋で見つけたから」といって少し古いけれども立派な譜面台、そして「これいい絵だから大事にしてね」と一枚のぼたんの花の描かれた色紙であった。

連載

ハイラル挽歌（七）

第一章　海拉爾の白旗

金子正義

（九）

安堡山の東側、ハイラル河に突き出た山瘤に河北山監視哨陣地が在った。其処からは遠く彼方の国境迄見渡せたが、八月十日の朝はミルクの様な濃い霧が一面に籠って、直ぐ下のハイラル河も、向う側のカンパ山も見えず全て深い雲霧の中にあった。

立哨中の兵隊が異様な音を聞いた。初めは蚊の鳴く幽かな音で何にか分らなかったが、次第に耳鳴りのような圧迫音となり、忽ち飛行機の爆音のように大きくなった。車輛群の轟音と気付いた時には、朝霧の切れ目に忽然とソ連軍戦車が出現し、後続する車輛部隊が地響を立てて三河街道を南下していた。

守衛隊長の木本見習士官は、地下ケーブルで河南台旅団戦闘司令部へ『敵戦車群発見、続々ト街道ヲ南下中』と第一報を入れ、直ちに攻撃を命じようとしたが、監視哨なので隊長以下僅かに三十名で野砲も無い。歯軋りして目下を進行する戦車群を見下していた木本見習士官は、日本軍に気付かず通過する敵をその儘見逃すのは無念と、迫撃砲、重機だけで攻撃を命じた。

迫撃砲は高所からの狙い撃ちで良く命中したが、戦車を破壊するに至らない。ソ連軍は装甲七五ミリの重戦車に対して、玩具のような迫撃砲を撃ってくる小癪な日本軍は何処かと、炸裂する迫撃砲弾を意に介せず、悠然と停止して日本軍陣地を確かめ、監視哨を発見すると一斉に向きを変えて釣瓶落しに砲弾を撃ち込み、戦車砲を直撃し乍ら真向から河北山陣地に驀進して来た。急斜面を登る戦車の減速の好機を狙って、肉迫攻撃をかけようと、大木見習官を先頭に全員爆雷を抱えて跳び出したが、忽ち、戦車砲、機関銃の掃射を浴びて薙ぎ倒された。

ソ連軍戦車は、陣内に殺倒して瞬く間に陣地を蹂躙し、監視哨を潰滅させると、何事も無かったように河北山を降って行った。

河北山を陥したソ連軍は真直ぐ南下してハイラル河左

岸迄行くと進行を止め、安堡山要塞攻撃の準備を始め、河北山南東の射機山に砲兵陣地を展開した。後続の主力部隊は続々と旧三河街道を南下してハイラル市中央に向った。一部は前夜の内にハイラル市北辺に侵入した先遣部隊に続いて鉄道線路を越え、伊敏川に達した。此れに依って日本軍は河南台第二地区陣地と、安堡山第一地区陣地との連絡を切断されて仕舞った。

日本軍は悉く要塞陣地に入って市街周辺は無防備であった、ソ連軍は更に機動力を駆って河南台の北側と、東側迄溢出して河南台陣地とハイラル市街をも遮断した。

余燼の燻る無人の市街に入ったソ連軍車輛部隊は、縦横に市内を走り廻っていた。時々崩れた建物や路傍の窪みから逃げ遅れた邦人が叫び声を上げて飛び出しては撃れた。

崩れ残った赤煉瓦の壁際に男女の区別もつかぬ燻んだ顔の一群が潜んでいたが、通過するソ連軍にハンカチーフ振って男が飛び出した。商社の若者らしく頻りにハンカチーフを振って、

「非戦闘員だ、射つな！射つな！」

と大声をあげてソ連軍車輛に向って駈けた。四、五名のソ連兵が車輛から降りて、銃剣を突き付け若者を取り囲むと、物珍らし気に微笑を浮かべて

「ジャポネヽヽジャポネ？」

と問いかけた。

「ダー、ダー兵隊じゃない！」

と脅えて両手を挙げて震えていた若物は、後から装甲自動車から降りて来た長身の将校を見ると、

「非戦闘員だ、助けて呉れ」

と必死になって叫んだ。将校は黙って若者を凝視していたが、兵士に拿捕せよと命じた、厳しい顔になったソ連兵は若者を縛り上げ、大声で叫び続けるのを構わず引揑って行った。壁際に潜んで様子を窺っていた女達が、撃たれないと思って怖る怖る出て来た。ソ連兵は喚声をあげて女達を取り囲んだ。女達は金切声をあげてソ連兵を突き除け、連行される若者の後によろめき付いて、ぞろぞろと後に続いていった。

市内に入ったソ連戦車隊の先頭指揮車輛には、白系露人や、道案内の満人が乗り込んでいた。満人はハイラル要塞や、付近の軍事基地建築に使役に駆り出されていたので、ハイラル市街は勿論軍事機密個処を良く知っていた。彼等は昨日迄の屈辱を晴らすのは此の時とばかりに胸を張り腕を右に左に振り廻わして、得意になってソ連軍を誘導していた。

ソ連軍は数隊に分かれて市内の重要地点を押え。伊東台山麓の広大な軍事基地攻略に向った。別動隊は河南台東山裾の東台兵站所を急襲した。

河南台への登り口にある東台地は、ハイラル駅に近く軍事物資の集積に便利なので、河南台要塞の兵站部とな

っていて、地下倉庫には糧株、兵器弾薬が秘匿されていた。日本軍のハイラル防衛の主力は市を囲む山々の外側にあるので、内懐にある東台地兵站部には僅かの憲兵隊が在駐しているのみであった。然かも隊長は地下倉庫の重要性を知らず、敵戦車の出現に慌てて河南台要塞に引揚げてしまった。ソ連軍は戦かわずして厖大な軍事物資を押えた。開戦直前、河南台強化の為に苦労して伊東台兵器廠より運んで来た野砲二門も捕獲されて仕舞った。

ソ連軍は無線連絡を巧みに取り乍ら、能率的に行動して日没迄にハイラル駅を占領し、興安衛道より浜洲線の要所を押え、一気に開嶺を抜いて内陸部へ侵攻する態勢を執った。市街を囲む要塞が如何に強固であっても、籠城しているのみの日本軍は、中味の抜けた栄蝟同様となった。マリノフスキー隷下第三方面軍の主力は、ハイラル防衛の日本軍を尻目に続々と南下し、要塞攻略部隊は悠々と栄蝟潰しに取りかかった。

（十）

第一地区陣地は標高七百三十米の安堡山を中心に東西南北共に約一、五粁の陣地であった。山の中腹に地下要塞の入口があり、六ケ所の砲塔は地下道で結ばれていた。地表に出ている砲塔とトーチカの周辺は、戦車壕、鉄条網を幾重にも張り巡らせ、砲塔と鉄条網の間は内迫攻撃隊の蛸壺壕や、連絡壕が蟻の巣のように掘ってあった。地下要塞は竹中虎臣少佐の指揮する大隊砲七百六十名が守り、零号作焼で駆けつけた二百五十五連隊の残留歩兵二百名が、砲塔周辺の肉迫壕に配置されていた。

射機山、ハイラル河畔の砲兵陣地の整備を終えたソ連軍は、十一日午後になると観測弾を散発的に安堡山一帯に撃ち込んで、悠々と状況を確かめ夕刻七時一斉に総攻撃を開始した。次々と来襲する飛行機から投下する照明弾は中空に浮いて、青白く透明な光を大きく拡げた。その巨大な円光の下にソ連軍戦車は横一列になって攻め登って来た。観測塔から望見する将兵には、夜空に展開した光景が、美しいパノラマか映画の場面のように幻想的にすら見えた。

それも一瞬であった。忽ちソ連軍野砲の援護射撃に夢幻の世界は吹き飛んだ。砲弾は砲塔や鉄条網に作裂し、防壁や土砂を吹き飛ばした。濛々と地を這う硝煙は要塞を包んだ。攻め登る戦車は急な斜面にも少しも速度を落さず、前後に巨体を揺り動かしては、長い砲身の七五ミリ戦車砲を休み無く撃ち込み、砲塔から悪魔のように火焔を吹きつけた。

陣外郭の蛸壺に潜んでいた日本軍肉迫攻撃隊が、爆雷を抱えて戦車の斜め前方から肉迫して行ったが、戦車の寸前で一兵また一兵と倒れた。日本軍砲塔の砲撃は、照明弾下に忽然と出現した戦車に照準を合せる暇も無く、忽ち陣内に侵入した戦車には、一帯に潜む肉迫攻撃隊が

邪魔で撃つことが出来なかった。

流石の重戦車も、陣内深く入ると幾重にも張り巡ぐらせた鉄条網や戦車壕に速度が鈍った。待ち狙っていた肉迫攻撃隊が必死の攻撃をかけ、何台かを擱坐したが、ソ連軍は痛痒をも感ぜず、縦横に陣内を走って蛸壺壕に火焔を吹きつけ、トーチカの銃眼に戦車砲を射ち込んだ。

暴れ狂うM戦車も厚い要塞ベトンに攻め捲んでいる内に、照明弾が次第に消えて闇となった。ソ連軍は攻略を諦めてか、退潮のように一斉に消え去っていった。

日本軍将兵はホッと息をついたが、再度の夜襲に備えて各部署にへばり付いたまま、まんじりともせず暁を迎えた。空が白み朝霧が消えると、浅くなった戦車壕や倒れる鉄条網が現われ、処々に擱坐した敵戦車が焼け爛れて転っていた。燃えるものも無くなった焦土に未だ煙が揺めて、将兵は昨夜の攻防戦の凄じさを思い起した。

日が昇ると彼方此方の哨壺から生き残った肉迫攻撃兵が頭を出し始め、要塞から出た将兵と負傷兵の収容や壕の補強に忙しく動き出した。

十二日午后二時。ソ連軍は新手を加えてやって来た。野砲の援護下、前夜より一層苛烈に攻め登って来た。

第四砲塔の古谷伍長は、昨夜は一発も射てず残念であったので、今日は白日下に攻撃して来る戦車を充分引き付け、瞬発雷管で射ち込んでやろうと狙っていた。

だが、砂塵をあげて驀進するM4戦車の速度が疾く、仲々捉えられぬ内に防塁を砕いて陣内に殺倒して来た。傍若無人に戦車砲をぐるぐる回転させては銃眼を狙い撃ちするので、古谷伍長は手の出しようも無かった。

蛸壺から跳び出して肉迫する日本兵の姿は痛ましくも無惨であった。戦車に追い着かずにバタバタと胸に爆雷を抱いたまま倒れた。正に蟷螂の斧であった。蛸壺から頭を抬げた瞬間砲弾を浴びて散華する兵も多かった。要塞の将兵は砲塔から迫撃砲の砲身を出すことも出来ず、無惨な破壊と殺戮の修羅場を銃眼から見守っているだけであった。

ソ連戦車隊は一時間程悪魔のように殺戮と破壊を繰返したが、要塞内の日本軍に止めを刺さず悠々と引揚げて行った。

十三日午後四時、ソ連軍は作戦を変え、戦車攻撃の前に猛烈な砲撃を浴びせて来た。前二回の総攻撃で確認した日本軍のトーチカや砲塔、要塞入口を狙い撃ちに砲弾を叩き込んだ。六ヶ所の砲塔は破壊され、トーチカは撃ち崩され、要塞内の将兵の大半は斃れた。完膚なき迄に破壊した後で戦車が轟々と総攻撃して来た。日本軍の火砲は全て沈黙し、肉迫攻撃隊は前二回の総攻撃で全滅してしまった。要塞内に生き残っていた将兵が爆雷を抱いて跳び出したが、徒らに戦車の前に屍を築くのみだった。

ソ連戦車は一名の日本兵も残さずとばかり、全ての壕や、崩れ残ったトーチカを虱潰しに轢き潰し火焔を吹き

付けて廻った。ソ連軍が引揚げた安堡山の山膚は悪魔に掻き抉られたように、一木一草も残さぬ無惨な姿に変って仕舞った。

夜も更けて死の山は静寂となった。防塁の石崩れに埋って意識を喪っていた古谷伍長は、夜寒に蘇生し、爆雷を抱いて砲塔から跳び出した瞬間、砲弾が砲塔に命中し崩れ落ちる防壁の下に埋没したのを思い出した。

瓦礫の中から漸く這い出て辺りを見廻し、ソ連兵を確かめ、破壊されて形も無い要塞入口を漸く探し当て、僅かに崩れ残った坑道を這って暗闇の要塞内に入った。迷路のような要塞内は硝煙が充満し、手探りで突き当るのは屍ばかりであった。彼はもう誰も生存者は居ないと諦めて、要塞から再び這い出た。暗闇に馴れた目に、無惨に破壊された光景が一層凄惨に見えた。瓦礫の山に倒れ残った鉄条網の下に人の影が動いた。影絵のように動いては倒れるシルエットは日本兵であった。古谷伍長は生存者を発見した嬉しさに大声で呼び、転び寄って抱え起すと、重機の佐野準尉であった。

重傷の佐野準尉を扶けて安堡山を降り、ソ連兵の目を掠めて伊敏川畔に達した。渡河点を探し歩く間に古谷伍長と前后して安堡山を脱出して来た生存者五名と合流した。彼等は暁になって漸く第二地区河南台陣地に辿り着いた。佐野準尉は、原参謀の前に立って、

「第一地区陣地全員玉砕」

と報告すると崩れ倒れて息が絶えた。

（十一）

伊東台第五地区陣地は、西側山麓の広大な軍事基地防衛の位置にあった。既に軍司令部、師団本部、病院、兵器廠、倉庫等は建物ばかり残して大興安嶺へ移って仕舞ったので、当初の防衛戦略の価値は薄くなったが、ハイラル防衛の搦手に当るので、守備隊は山岡中尉率いる独立歩兵五百八十六大隊の第一中隊を中心に、迫撃砲、機関銃、通信隊等の混成大隊六百五十名を擁していた。

八月十日にソ連軍の偵察隊と小戦闘があったが、ソ連軍はガラ空きの軍事基地など歯牙にもかけず、安堡山、河南台方面攻略軍を残して主力は機動力を駆使して、続続と満洲内陸部へ向っていた。

伊東台陣地西方のハイラル市街は、九日の爆撃後の火災で未だ余燼をあげ、市の西側や北方の各要塞はソ連軍の猛攻を受けて爆煙が頻りに動いていた。

毎日、他地区要塞の激戦を望見している伊東台の将兵は、直接ソ連軍の攻撃を受けないだけに不安が次第に募って来た。師団司令部は元より、旅団戦闘司令部との交信も跡絶え、他の要塞との電話線も切断されると孤立感が一層深くなって来るのだった。

観測塔から見ると、ハイラル市街を走り廻るのはソ連軍車輛だけであり、陸続と興安街道を東に進むソ連軍は

日毎に増えていた。四囲を包囲された他の要塞は孤立し脱出不可能に見えた。伊東台に取り残された様に籠っているのは次第に耐えられなくなって来た。

山岡中尉は、師団長から陣地守備を命ぜられた時、

「各防衛陣地は、可能な限り敵の進行を喰い留め、内陸部への進行を遅滞させると共に、肉迫攻撃によって敵勢力を最大限に減少させ、情況真に己む無きに至れば機を見て脱出し、主要陣地である大興安嶺の師団陣地に帰属して、その左翼に着陣すべし」

と命ぜられていたので、重包囲に陥ちて脱出不可能な他の要塞では最后迄戦い抜く以外に無いが、敵の正面攻撃を受けない五地区としては、便々と要塞に籠っているより、脱出して開嶺に展開する師団主力に合流すべきであると考えたり、出撃してソ連軍の砲兵陣地に夜襲をかけようかと思ったりしたが、遂に脱出を決意して各隊に、

「十二日夜半十二時を期して伊東台を脱出し開嶺陣地に帰属する。各隊は重火機及び食糧弾薬を残さず車輛に積んで出発すべし」

と命じた。午后十一時各隊はそれぞれの守備陣地前に集結して出発を待った。何処かの要塞攻防の砲声が殷殷と響き、激しい銃声がしていた。日本軍は攻撃は勇敢であるが守備には弱く、退却は苦手である。まして伊東台守備隊は寄せ集めの部隊であった。いざ脱出となると、戦いを怖れての逃亡でないのに浮足立っていた。

山岡中尉は、中央要塞陣前に各隊長を集めて出発序列を確認し、

「前途は一望千里の広漠たる原野である。所々に湿地帯はあるが身を隠すものが無い、日中は敵機甲部隊に発見される懐れがある。行動は全て夜間の隠密行進とせよ」

と厳命した。

斯くして伊東台守備隊六百五十名は、数挺団となって枚を銜み薄氷を踏む思いで脱出して行った。

ハイラルより開嶺に至る興安街道沿いの要点には、兼てから遊撃拠点が構築されてあった。小規模乍らペトンで固め、地下壕には食糧弾薬が備蓄され、炊飯竈もあって煙は地を潜って遠くに出るように工夫されていた。ハイラルより十五粁程離れた四地区陣地丘陵続きにある、梅ヶ丘拠点もその一つであった。夜を徹して歩き続けた須藤少尉の挺団が辿り着いて大休止を取り、朝食の準備をしていると、近くをソ連軍機甲隊が進行して来た。須藤隊は急いで炊煙を消し、壕に潜って息を詰めて通過を待った。轟々と直ぐ傍らを行くソ連大部隊に緊張した初年兵が、思わず握った小銃を暴発させた。

ソ連軍は車輛を止め辺りを捜索して日本軍の拠点を発見すると、戦車を中心とする強力な兵力で陣地を包囲し戦車砲を撃ち込んで攻撃して来た。拠点陣地は潜伏に適しているが、戦闘に不利なので須藤隊は陣外に展開して克く応戦したが、軽機のみの火力では太刀打ちが出来ず

集中砲火の中で全滅した。
山岡中尉以下の数挺団も曠野に戦って殲滅され、或いは飢えて草原に潰え大興安嶺の師団陣地に辿り着いた者は数名に過ぎなかった。
開戦直後、師団司令部より伊東台陣地に入った益子軍曹は曠野放浪の運命を辿るのであった。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。
同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。
雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。
年齢、職業を超えた同志の集団です。
あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。
維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。
＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。